

奇譚クラス

新しい風俗文獻誌

1964・11



11月号

奇譚クラス

11月号

定価三〇〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



11月号

¥300

臨月腹妊婦フォト

田中弘氏特別提供
モデル 田中美佐子

六月号の読者通信にて便りを寄せられた福岡市の田中弘氏の特別の御厚意によって、ここに妊婦フォトの方々のために、貴重な資料を提供して頂きました。
モデルの田中美佐子夫人は、本年満二十才の初産婦で、このフォトの撮影は予定日の十日程前で文字通り出産寸前の臨月腹の写真ということがいえます。

臨月妊婦緊縛

大手札印刷紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号(にち)

産み月のお腹は、只でさえ動くのにも苦しいのに、後手高小手に縛りあげられて、その身を力メラの前に晒した可憐な初産婦。診察を受ける妊婦

大手札印刷紙焼付
四枚一組 五〇〇円
略号(にし)

もっとも普通の状態の臨月腹を、ごらんになりたいという方々のために、べんべんと膨れ上がったお腹を衣服をめぐって突き出したところを、いろいろなポーズでもって、お目にかけます。オーソドックスな妊婦の生態写真。

臨月腹開陳(座位)

大手札印刷紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号(にわ)

臨月のヌード

これは珍しい、床柱に後手の縛りつけられたフォトです。妊婦嗜好ばかりでなく、女体緊縛マニヤの方々にも、一見をおすすめしたいコレクションです。

柱縛りの妊婦

張り切ったお腹の中央に、むく上ったお臍が、出産を目前にした腹部の膨大さを物語っているのです。立ち上った妊婦のお腹だけが異様に目立ちます。いろいろな角度からごらん下さい。

臨月腹開陳(立位)

臨月の大きなお腹を大いばりでぐいと突き出して、皆さまの目の前に、その全貌をあからさまに、ごらんになれるフォト。

妊婦の裸身立像

妊娠は女性を最も動物的な姿態に変えさせるといいます。着衣の上から見てさえ、異常に大きな腹部には、何か奇異な連想を起させるのですが、ここに全裸ヌードのフォトによって、妊婦の神秘的なペイルを剥いてみせます。

大手札印刷紙焼付
二枚一組 三〇〇円
略号(にた)

縛られた妊婦

神々しいばかりに美しい臨月妊婦の裸身。初めて妊娠した二十才の女性の身体的変化は、ヌードの立像によって、ごらんになる皆様の目の前に、かくすところなく提供されるのです。はちきれんばかりの若さが、健康的な妊婦の特徴を内包して、輝くような美しさを発揮しています。

大手札印刷紙焼付
二枚一組 三〇〇円
略号(にる)

臨月の裸身像 立位

臨月腹をつき出して、後手に縛られた妊婦。両手の自由がきかないので、膨れた腹部がこれみよがしにさらけ出され、一片の布さえ纏わしてもらえぬ裸身が、美しい妊婦のペーソスを、しみじみと醸しだしている。

三枚一組 四〇〇円
略号(にお)

このように若々しい臨月腹を手にとるように、近々と眺めることが出来るだろうか。妊婦線もあざやかな西瓜のような腹部が、触って下さいといわんばかりに、鮮鋭なレンズの目によって、はつきりとキャッチされています。

臨月の裸身像 座位

大手札印刷紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号(にぬ)

自由ののびのびと、自然のままのポーズで腰をおろした妊婦のヌードが、気どらない普通の状態でカメラに全身を晒しています。愛らしい妊婦の表情です。

突き出た臨月腹

大手札印刷紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号(にい)

出産を旬日に控えて、もうこれ以上は大きくならないという位、突き出た腹部をもて余して、中腰になって、休息したところをシャッター・チャンスと狙ってキャッチしました。

○提供者の御希望により、口絵にのみの方にのみお分けします。○お申込みは略号にて、お願います。勝手ながら一枚宛の分割はいたしかねます。

最新Mフォトシリーズ決定版分譲

読者通信をはじめとして、投稿原稿や編集部に送る通信などによって、Mフォト分譲について熱心な要望がありました。もとよりSフォトとは違い、注文の多きは期待してはおりませんが、少数とはいえ、Mフォトを要望されるファンのために、ここに最新撮影の分譲品を発表いたします。

太男の訓練風景

大手札十枚一組 二〇〇〇円
略号(みら)

M嗜好の畜化のなかでも、馬化と大化は、その代表的なもので、男が首輪をつけられ、くさりでつながれて、女主人様への奉仕を、とどろきなく果せるよう訓練される有様で、Mファンの待望する女主人のきびしい中にも美しい顔がはつきりと写っています。

男を刺し殺す美女

大手札十枚一組 二〇〇〇円
略号(みむ)

晒のフンドシ一丁という凄々しい白痴の美女が、ときどきと人の男を刺し殺そうとしている。哀れな男は、麻縄で後手高小手に厳重に括られているので自由

男を尻の下に敷く

大手札十枚一組 二〇〇〇円
略号(みう)

な足をばたばたさせるだけで何の抵抗を示すこともできない。捕えた鼠を弄ぶ猫のように惨忍な女は男をいたぶり尽した上で、短刀でなぶり殺しにするのだ。非情な女が美しいが、身動きならぬ哀れな男が幸せなのか……

足下にうぐめく顔

大手札六枚一組 一四〇〇円
略号(みれ)

男の一枚看板である顔、その大切な顔が若い女の足で踏みつけられ、べったりと脂足の裏が顔面いっぱい押しつけられる。塩から

汚物を受ける男

大手札六枚一組 一四〇〇円
略号(みわ)

若くて美しい女性の唾液、嘔吐、うがい水などの汚物なら、この上ない珍味として頂戴するという汚物愛好の青年が、口を大きく開いて、御主人さまの御用を謹んでお受けする人間排水。

男を馬にする女性

大手札五枚一組 一二〇〇円
略号(みか)

男を馬にして乗りまわす快味は女上位時代の貴婦人の常識であるが、反面馬化狂の男の夢でもあるわけだ。首の上に乗せた女の言われるままに手綱一本で自由に操られる男と得意気に男を尻の下に顎で使う女とのコントラストが妙。

人間椅子の御褒美

大手札五枚一組 一二〇〇円
略号(みお)

うやうやしく女主人の人間椅子として長時間御奉仕したこと、御褒美として、今度は女主人の

飼犬に餌を与える

大手札四枚一組 一〇〇〇円
略号(みた)

飼犬に餌を与えるのは、素足の指の間に食物を挟んでやるのが、丁度恰好の与え方である。しかし飼犬を飼主に早くつかせるのには、一度口の中で唾液を混ぜて噛みくだいてやった方がよい。

浣腸器で遊ぶ女

大手札三枚一組 八〇〇円
略号(みつ)

馬乗りになって押さえた汚男の顔面へ、浣腸器で吸い上げた汚水を注ぐ女。その汚水は何？

股に絞められる首

大手札三枚一組 八〇〇円
略号(みね)

仰向けになって椅子の上に長々と伸びた男の首根っこに、どっかりと跨って堂々と股で締め、男の目を白黒させた顔を見下す。

芳香を嗅がす尻

大手札二枚一組 六〇〇円
略号(みな)

馬乗りになって、尻を鼻の上に据えれば、芳香はいやでも男の全身にしみわたる。ここで放屁一発すれば男は頓死してしまう。

四馬 孝秘蔵版画面集

大中判 (13×18 匁) 印画紙焼付↓コレクシヨン専用

口絵の制約によって十分その腕を揮うことができない脾肉の嘆をかこっていた四馬孝氏が、登場の女主人公をすべて全裸に描いて、美しく目ざましい秘蔵版をものしました。

△責められる美女波津子の痴態▽

大中判五枚一組 一〇〇〇円

略号 (しお)

一、恐怖の浣腸責め

ベッドの上には、白く輝くやうな肌にとす黒い繩が無惨にも喰い込んでいた。波津子は、後手しぼりに身動きもできない波津子、伸びやかな脚を逆エビに持ちあげられし猿ぐつわの下で苦痛にあえいでいる。男の手にした30ccのガラスシリンダーは、今まさにアヌスに迫るとしている恐怖。

二、柱抱きの責め

斜めに立てかけられた五寸柱をアグラに組んだ足で抱くようにしてあらもなく縛られた波津子。豊かに肉のついた胸や腹が、じかに柱に密着して、大きく開ききつた両方の太腿のアグラ縛りも恥しい妙齡の女性にとつても、最もむごたらしい責めである。それだけにS肉ムード満点である。

三、庭のハダカ責め

夏草の生い茂る庭の椿杭に、両手をひろげ、左足を高く頭の位置まで挙げて縛られた奇妙な晒しものポーズ。蚊や蟻が白い

肌を這ってくるが、波津子は只、白布の猿ぐつわの下で、うろうう、呻めくだけである。最大限に左右に開けきつた四肢は、哀れにも自由にはできないのである。

四、イルリガートル

皮紐で高小手に縛られた波津子は、両足首に鉄の足輪をはめられ、その両足を高く持ち上げられてチェンブロッツのフックに掛けられようとしている。一リットルの石鹼液をなみなみと入れられたイルリガートルは、逆立ちのポーズをとらされた波津子の腸内へ、ドクドクと注入されてゆく。

五、荒縄の股間縛り

均整のとれたグラマの美しい肢体の波津子の腰部には、トゲトゲとした太い荒縄で渾が締められている。鼻孔には火のついた巻煙草が挿し込まれ、荷造用のロープで両手は背後で揃えて括られていて、そのうだ、波津子の女体が、一つの物体として、非情な男の手になぶられるのだ。

△可憐な少女加奈子の羞恥責め▽

大中判五枚一組 一〇〇〇円

略号 (しる)

一、ロウソク責め

可憐な美少女加奈子が、この屋敷に囚われの身となつて、すでに幾日経つてあろうか。なよなよとした青い実の裸身には、麻縄がむごたらしく肌を締めつけ、火のついた百処ロウソクの焰が、テレビの前で足挙げポーズで縛られた加奈子の頬を襲ってくる。嗜虐的な男の眼が恐ろしい。

二、アンヨは上手

加奈子は男の可愛いベッドにある。全裸に剥かれて、後手高小手に縛られた上、首と膝頭とを革紐で繋がれ、ヨチヨチと部屋の巾を歩かされる。ピンク色に染った繊細な足の指先に力をこめて、転ろげないようと、懸命に歩こうとするが、縛られた身体は遅々として前へ進もうとはしない。

三、逆エビ柱吊り

夜の縁側の柱に、加奈子の白い身体が逆エビ縛りにされて、柱に宙吊りになっている。スタンドの

スポット・ライトが蠟のように白く加奈子の全身を、闇の中で浮彫りのように照らしだしている。肌を喰い込む縄の痛さに、思わず、ああッとして挙げる悲鳴を、心地よげに聞く怪しい男のシルエツト。

四、被虐の絶叫

後手高小手縛りの上に、革のベルトの股間縛りで締めつけられて囁く加奈子の右足を無理矢理に挙げて固定しようとする、いやらしい禿頭の暴虐。可憐な加奈子は、あまりのこと悲鳴をあげて絶叫すれば、一瞬の被虐の念が全身を戦慄させる。そして男には快い音楽と聞えただろう。

五、美しき犠の鑑賞

美しい宜石のような加奈子の身動きも出来ない全身を、それこそ足の爪先から髪の一毛一本一本にまで、刻明に観察しようといふ野卑な男の欲望は、彼女をして部屋に柱に晒しもののような恰好で括りあげてしまったのである。好むじろじろとナメクジのような目で全身を眺められる気味悪さ。



奇譚クラブ 11月号 目次

第一 グラビヤ

答のある座敷の女 大塚啓子
可憐な乙女の風情 大塚啓子
縛られた青木順子 青木順子
足吊りによる表情の変化 大塚啓子
狭越しに見る隣室 大塚啓子
うごめく芋虫 梨花悠紀
夏の陽に白肌は映えて 絹川文代
首縄と足縄のポーズ 大塚啓子
椅子に晒されて 東浦ひかる

巻頭口絵

アイデア画 鼻孔で吸わず煙草 四馬孝・画
四馬孝画集 恐怖の浣腸器 四馬孝・画
M画 女強盗札を数えるの図 春川ナミオ・画
女相撲 乙女対戦 雪崎京人・提供
女体切腹 女忍者の最期 四馬孝・画
未知への脅え「こっちへ来な」 四馬孝・画

第二 グラビヤ

喘ぐピキニ・スタイル 大塚啓子
皮手袋に可愛がられる 大塚啓子
擦ぐり責めにあう美女 梨花悠紀
大人しき「白日夢」 五月亜紀子
轉がる後手しぼり 大塚啓子
破れた下首の悦楽ポーズ 梨花悠紀
魅惑のバック・スタイル 大塚啓子
赤いシ・ミーズと縄 梨花悠紀
竹の棒のデクセント 大塚啓子

◆奇クサロン◆

（49）「山田久仁子」 編集部編（49）
（50）「山田久仁子」 編集部編（49）
（51）「山田久仁子」 編集部編（49）
（52）「山田久仁子」 編集部編（49）
（53）「山田久仁子」 編集部編（49）
（54）「山田久仁子」 編集部編（49）
（55）「山田久仁子」 編集部編（49）
（56）「山田久仁子」 編集部編（49）
（57）「山田久仁子」 編集部編（49）
（58）「山田久仁子」 編集部編（49）
（59）「山田久仁子」 編集部編（49）
（60）「山田久仁子」 編集部編（49）
（61）「山田久仁子」 編集部編（49）
（62）「山田久仁子」 編集部編（49）
（63）「山田久仁子」 編集部編（49）
（64）「山田久仁子」 編集部編（49）

連載小説 花と蛇（続編）第一回

あるサジスチンの告白 虹のあじさい 東 雪枝（74）

青木順子シヨウ見聞記

フェチシストの告白 千り紙の魔力 津田 信也（85）

サド・サスベンス・シリーズ 深夜の市長

娘相撲復活 「ある山村の娘相撲物語」 海野美津男（94）

贗作・悩ましのサディズム

女体切腹歴史物語 白鳥城散華 山田久仁子（111）

「奇譚三十九夜」物語（第三十九夜）

ふんどし愛陀羅 衣 軍一（111）

映画に現れた「殺し」の場面

「告白」 クリスタ・マニアの体験 北沢 操（111）

「夢の浣腸情景集」川柳でつづる

S Mカメラ・ハント 宇都奈緒美（111）

マゾ願望 青木順子を縛る

青い時代（悦庵絵灯籠その十） 辻村 隆（111）

連載小説 心傷たむ遍歴

読者通信 西条 操（111）

四馬 孝秘蔵版画集

大中判 (13×18 厘米) 印画紙焼付→コレクシヨン専用

口絵の制約によって十分その腕を揮うことのできない髀肉の噴をこらえていた四馬孝氏が、登場の女主人公をすべて全裸に創り、美しく目ざましい秘蔵版画をものしりました。

責められる美女波津子の痴態

大中判五枚一組 一〇〇〇円

略号 (しお)

一、恐怖の浣腸責め

ベッドの上には、白く輝くやうな肌にとす黒い細い無惨にも喰い込んでいく。激しい後手しほりに身動きもできない波津子、伸びやかな脚を逆エビに持ちあげられし猿ぐつわの下で苦痛にあえいでいる。男の手にした30ccのガラスシリンダーは、今まさにアヌスに迫るとしている恐怖。

二、柱抱きの責め

斜めに立てかけられた五寸柱をアグラに組んだ足で抱くようにしてあらもなく縛られた波津子。豊かに肉のついた胸や腹が、じかに柱に密着して、大きく開ききつた両方の太腿のアグラ縛りも恥しい妙齡の女性にとっても、最もむごたらしい責めである。それだけにS的ムード満点である。

三、庭のハダカ責め

夏草の生い茂る庭の椿杭に、両手をひろげ、左足を高く頭の位置まで挙げて縛られた奇妙な晒しものポーズ。葎から蚊や蟻が白い

肌を這ってくるが、波津子は只、白布の猿ぐつわの下で、うろうう、呻めくだけである。最大限に左右に開けきつた四肢は、震れにも自由にはできないのである。

四、イルリガートル

皮紐で高手小手に縛られた波津子は、両足首に鉄の足輪をはめられ、その両足を高く持ち上げられてチエンブロッタのフックに掛けられようとしている。一リットルの石鹼液をなみなみと入れられたイルリガートルは、逆立ちのポーズをとらされた波津子の腸内へ、ドクドクと注入されてゆく。

五、荒縄の股間縛り

均整のとれたグラマラーの美しい肢体の波津子の腰部には、トゲトゲとした太い荒縄で渾が締められ、鼻孔には火のついた巻煙草が挿し込まれ、荷造用のロープで両手は背後で揃えて括られていく。そう、波津子の女体が、一つの物体として、非情な男の手になぶられるのだ。

可憐な少女加奈子の羞恥責め

大中判五枚一組 一〇〇〇円

略号 (しる)

一、ロウソク責め

可憐な美少女加奈子が、この屋敷に囚われの身となつて、すて幾日経つてあろうか。なよなよとした青い実の裸身には、麻紐がむごたらしく肌を痛めつけ、火のついた百処ロウソクの焰が、テレビの前で足挙げポーズで縛られた加奈子の頬を襲ってくる。嗜虐的な男の眼が恐ろしい。

二、アンヨは上手

加奈子は男の可愛いベッドにある。全裸に剥かれて、後手高手小手に縛られた上、首と膝頭とを革紐で繋がれ、ヨチヨチと部屋の中を歩かされる。ピンク色に染った繊細な足の指先に力をこめて、転ろげないようと、懸命に歩こうとするが、縛られた身体は遅々として前へ進もうとはしない。

三、逆エビ柱吊り

夜の縁側の柱に、加奈子の白い身体が逆エビ縛りにされて、柱に宙吊りになっている。スタンドの

スポット・ライトが蟻のようになり、加奈子の全身を、闇の中で浮彫りのように照らした。肌を喰い込む細い痛さに、思わず、ああと挙げる悲鳴を、心地よげに聞く怪しい男のシルエット。

四、被虐の絶叫

後手高手縛りの上に、革のベルトの股間縛りで締めつけられて喘ぐ加奈子の右足を無理矢理に挙げて固定しようとする、いやらしい禿頭の暴虐。可憐な加奈子は、あまりのこと悲鳴をあげて絶叫すれば、一層の被虐の念が全身を戦慄させる。そして男には快い音楽と聞えただろう。

五、美しき儀の鑑賞

美しい宝有のような加奈子の身動も爪先から髪の一毛一本にまで至るまで、刻明に観察しようという野卑な男の欲望は、彼女を好む部屋に柱に晒しものように好むで括りあげてしまったのである。じろじろとナメクジのような目で全身を眺められる気味悪さ。





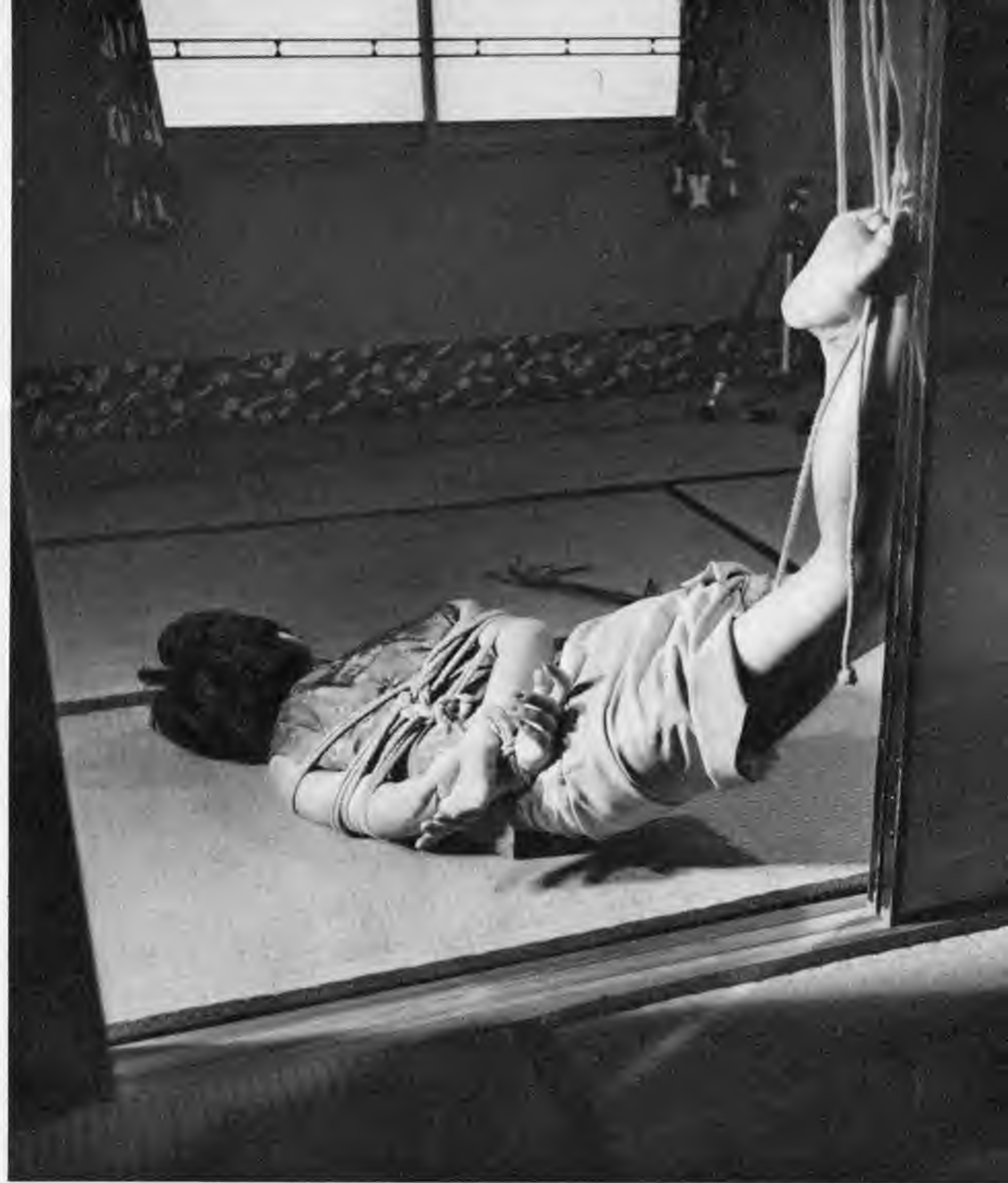




























鼻孔で吸わす煙草

四馬孝・画





恐怖の浣腸器

四馬孝・画

テレビ局スタジオ風景

四馬孝・画



女強盗札を数うるの図

春川ナミオ・画



夕涼み、よくぞ女に生れける

春川ナミオ・画





女相撲

乙女の対戦





女体切腹

女忍者の最期

四馬孝・画

未知への脅え

四馬孝・画





































先月号のこの欄で、東京都青少年健全育成条例が十月一日から施行されることに関連して、更に編集面での自粛徹底を計るべきことを述べ、読者の建設的な意見を求めたところ、期せずして多数の通信を頂いた。その中には読者通信には掲載しないでくれと但書きした手紙で辛辣な意見を述べてくれた読者もあった。

映画や単行本、或は婦人雑誌の附録など、具体的に例をあげて本誌なんかより尚数等どきついものを上映したり、発行したりしている実際を示して来られた方もあった。グラビアで乳房やお臍、臀部をかくすなどという姑息的な自粛手段はナンセンスであり、無意味でさえあると極言される向きもあった。たしかに、最近の映画には本誌なんかの遠く及ばない程の急進的なものが多くなっているし、

婦人雑誌の附録に至っては、全く売らんかなの商業方針で貫いている。一回の新聞広告すら出したことのない本誌なんか、その発行部数からしても、その影響力たるや微々たるものに違いない。

しかし、考えてみるに、他に本誌よりヒドイものが映画や単行本雑誌の附録などにあるからといって、本誌が自粛しなくてもよいという理由にはならない。本月号の口絵とグラビア写真を全廃しようか、どうかという点について締切間際まで考えぬいた。折柄、四馬孝氏が四十枚ばかりの口絵を描いて持って来られたが、私はそのすべてについて、露出部分の多いこ

とと、責めの強烈なことで採用しないことに決定した。又、辻村隆氏の撮影した数十種の緊縛フォトについても、掲載は見合すことにした。挿絵についても一々細部に亘ってタブーの個所を指示したところ、そんなことを言っただけ、もう挿絵は描けないというお叱りを受けた。

読者の方々からは、そんなに堅くばかりしたんじや、もう買っちゃらないゾと脅やかされるし、お前のところのような悪書は、絶対に書店の店頭には並べさせないゾという声が巷に満ちてくる。そして果ては、編集スタッフからも、そんなに自粛自粛でビクビクするんなら協力してやらないゾと威かされる。カット・ノイローゼ寄稿家は、もうペンでハッスルすることもないに違いない。

「四面楚歌」というのは、このことをいうのだらう。しかし、奇くはやはり、嵐にもまれながらも自粛の茨の道を歩んで、ささやかな灯をつけ続けてゆきたい。読者の

皆様に愛され、そして一般の人達からも指弾されないものが、必ず作りだされると信じている。それは一鳥一石にはできないだらうし又、安易の中には生れでて来ないだらうが、試練をかさね、答うたれ弱い者いじめされている間に、次第次第に逞ましく生長してゆくのではないだらうか。

私は「悪書追放運動」が線香花火式ではなく、継続的に根強く推進されることについては賛成であるが、只何が悪書であるかという定義を明確にして、例えば戦争とか暴力を是認礼讃するようなものを第一番に挙げなければならぬと思う。エロよりも何十倍か恐ろしい暴力をよくよく考えていただきたい。しかし、条例を読んでみると、暴力排撃についての項目はないようだから、これも空頼みに過ぎないだらう。

とにかく本誌は、一部愛読者の意志に反して自粛をかさねてきたが、今後も勇足があるようだったら、勇気をもってどんどん改めてゆくつもりだ。そして、よし部数は僅少であっても、文献誌として残してゆきたく思う。いずれその声価は、後世がきめてくれるだらうから――。

四面楚歌をうたう

編集子

（臨月腹妊婦フォトモデル）

「出産後のわたくし」

福岡市 田中美佐子

（編集部にて前略）………さいわい安産で五月十日、無事女児（三、一〇〇グラム）を分娩致し私のオッパイもよく出まして、弘美はスクスクと成長致しております。主人は御存知の通り筆不精で滅多にペンを握りません。私の臨月のフォトを送ったきり、その後編集部の方から度々御手紙いただきながら、ついぞ返事も出さず失礼ばかり致しております。て、見るに見かねました私が、主人にせめて御返事なり出すよう申しますと、「美佐子—お前が書いて出してくれ」などと申します。そして、このフォトもついでに二三枚送っておけると申します。本当に申し訳ないことです。同封の写真は六月三日の夜、出産後始めて、主人が私を縛ったもので御座います。醜い妊婦ポーズしか御存知

ない箕田様に、思い切って私の元の儘の姿を知って戴きたい気持ちもひそかに御座います。はしたないとは存じましたが同封させていただったので御座います。以前から主人に隠れて時々奇巧を拾い読みし、羽村京子さんの書かれたものなど特に興味をもって読まして頂いておりました。「蛙腹」になるまで浣腸したらどうなるだろう——高圧浣腸をしたり、空気を送ったから私のおなかにはポンポンに膨れるかしらなど、いろいろ愉しい空想は働かせましたが、矢張り羽村さんの様に実験して見る勇氣はなく、そのうち私自身、妊娠によりまして「蛙腹」になってしまいました。臨月が近づくとお小水も頻繁になり、足や腰にむくみが出たり、あざの様なものが現われて皮膚が随分汚くなりました。そ

んな私のフォトを、瀬沼四郎さまは、九月号で「メロンのヴィーナス」だと讃辞していただき羞かしような嬉しいような気持ちで一抔で御座います。実を申しますと、六月号の読者通信に、主人の便りがのつている事は存じませんでした。その後の奇巧の巻頭で、私のフォトが分譲になった事を知り、改めて読者通信を読ませて頂きましたが、あれは主人のこじつけで、本当は私自身から初産の腹部の撮影と頼んだのではなく、主人が拝む様にして

頼みましたので仕方なく承知致したので御座います。どうして初産の私が、羞かしくもそんな頼みをするでしょうか——常識で考えて戴いても分ると存じます。この事だけは私の為にも、一言申し上げたかったので御座います。主人だから撤したものの、若し第三者の方なれば、例え福岡までわざわざ来られようとも、奇巧の方であらうとも、きっと私は承知しなかつたでしょう。既に妊娠前にも主人は冗談めかして、私を数度縛った事があります。（写真は未だそ



女性の脚線美

目黒恒夫



○足、脚、脛、腓、とあるように「あし」といっても、女性の足の美しさは、人によって、その好むところは異なるようだ。

○桜貝のような指先、と形容されるように、足の指、爪先に関心を持っている男性も案外多い。足の

指には表情がある。といわれているが、殊に拇指の爪には、その女性の容貌以上に、表情を持っているものである。

○昔は女性の脚線美といえば、ストッキングを穿いた、すらりとした脛の線をいったようだ。大根足で形容される太いのは一般的には敬遠され、脚線美というと、カモシカの脚のように細いのがいいようだ。もっとも、人はすきずきで

太いのを好む人もあるにはある。

○最近の若い女性は、下半身の発育がすばらしいので、立派な脚線美の持主が多い。脛や腓は、外部から眺めているだけでも、結構たのしいものである。

○足の指から足の甲、そして踝、踵、そして脛、と女性のアシの魅力もつきることがない。白い素足といえは、なんとなくエロチックな響きがある。

○だが、美しい女の足の鑑賞、魅力的な足の耽美も、いろいろと方法がある。直接手にとって、しげしげと眺めるといえるのは、いかにも無粋である。チラリチラリと瞥見する、その見えかくれが足の鑑賞法の第一であろう。

○白い素足が見えたり、かくれたり、脛がスカートの裾から、白く光っているといった風情がたのしい。

の当時とりまんでした。夫の愛情を信じて、私はそれが夫の喜ぶ最大の方法なれば、妻として我慢すべきだと夫のなすが儘に縛られました。内攻的マゾ性は潜在していたかもしれませんが。しかし、今日に到るも、私より進んで縛ったり、プレイしてくれと持ちかけた事はなく、これはSMのプレイをなさる御夫婦のどの奥様も、同様ではないかと思われるので

す。主人の好みには努めて合せて行くのが妻の役目だと、私は古い考えかも知れませんが、そんな気持ちから主人にだけは、どんな無理でも服従して参りました。

奇クを拾い読みする様になって以来、主人の性向も何か分る気持ちが、私自身もプレイに対してさして嫌でなくなったのは事実で御座います。いや、むしろそんな夜は、反って主人の愛情を確かめ得て、仄々とした気持ちにさえなります。私がフोटを同封しましたのも、ひよっとすると、そんな気持ちのあらわれであったかも知れませんが。

主人は私の妊娠のフोटを撮るのを契機に凄くカメラマニアにな

りまして、これからもドシドシ美佐子の緊縛をとりたいたいなど申して居ります。それもいいでしょう。それで夫婦の愛情が、より一層濃やかになれば、私自身決して嫌う気は御座いません。

最近羽村京子さんのものがないのは淋しく思います。代って瀬沼四郎様のような妊娠に特別興味をもっておられる方がお書きになり始めましたけど……。でもやはり私は女性同志の親しさをこめて、羽村さんにこれからも書いて戴きたいと思います。

とりとめない拙ない便りになりました。又気がむくか、主人が私の新しいフोटでもとりました時はお便りさせていただきます。

サロシ楽我記

(第五回)

辻村 隆

暫らく御無沙汰してしまった。
「奇譚三十九夜物語」の最終回で何か特別の趣好を凝らそうとあれこれ奔走するうち、日時が容赦なく流れ、遂々二カ月抜けてしまった。ホッと一息ついたところで、次回よりはカメラ探訪式の「S Mカメラ・ハント」を逐次掲載したいと思っております。既に第一回は近頃のストリップ界の異色スターマゾの女王「青木順子」の会見緊縛談を別掲の如くとりました。有名無名とりまぜて、どしどし撮りまくって行きたいと思っております。

× × ×
過日編集部より回送されて来た滋賀の安田さんと会った。家族連れで琵琶湖ヘルセンターへ行つての帰り、私だけ皆と別れて、湖畔のK館で待ったら、これが女性——。女性名の手紙で来て、事実は男性であることが過去の通り相場なのに、男性名(手紙には安田生とあって、男性とはしるしてい

ないが、てっきり男性とこちらで考えていた)で、きた手紙の主が女性であることは珍らしい現象だった。彼女は年令は云わなかったが、大体三十六、七才推定の、子供二人の未亡人だと自己紹介した。カメラは困るけれど、S Mプレイを行ないたい——。故あって夫と生別したが、夫から相当強烈な縛りや責めをうけたらしい口吻りであった。面長の品のよさ、手指の綺麗さからして、余り生活にくたびれていない中流以上の婦人の様に思えた。

× × ×
カメラを使えないのは何としても残念であったが、兎も角私達はK館の湖の見える見晴しのよい冷房のきいた一室で縄のプレイを数時間行なった。最後まで彼女は素姓を明かさなかったが、若し秘密を守る同好の方が居れば紹介して戴いてもいいといった。但しプレイの主導権は自分の方に持ちたいと判っきり云い切った。(彼女はマゾである)。彼女の謂

う主導権とは、日時や方法を自分の方で、きめたいということらしい。K館支払三千円なにがしは彼女すっかり負担して、尚鮎のつくだ煮のお土産まで頂戴した。彼女の身長一五八cm、体重五二kg、肌は稍浅黒いが均整のとれたTVスター加藤治子に似た美人である。彼女の名は分らない。滋賀県堅田の安田生であるが——御希望あれば御紹介させていただきます。プレイの程度は最高十六として

から七程度です。好みは乳房責めです。

× × ×
テレビも気をつけて見ていると時々面白いのにお目にかかる。火曜日の午後八時の四チャンネル「戦友」から「ショック」に移り現在「特命謀報二〇七」をやっているが、内容は戦時中の特務機関のスパイ活動を描いたもの——。「戦友」の生井健夫を始め、田口計、竹田公房、梅若正二等の出演



だが、第一回から第四回までは、必ずと云ってよい程緊縛や責めや拷問が出てきた。第一回は突っぱなから逆吊りシーンでギョツとし、続いて特務機関の超強訓練でさまざまな拷問の試練に堪えるシーンが出てくる。火あぶり、はりつけ等々——第二回は満州の馬賊

に捕まった生井健夫の吊り責めで、これが又長々とつづく——。第三回はスパイ活動で捕まって敵味方、互に歯には歯で、拷問の責め合い、で、どちらも椅子縛りの鞭責めである。第四回も姑娘に化けた女スパイにあやつられての椅子責めの焼ごて拷問シーンであ

る。第五回以後ちよつと責めはとだえていて面白くなってきたが、いつ責めがあるかも知れないと、午後八時には、ついチャンネルをひねる。原作は川内康範——再映する事あれば一見してもいいテレビアクションものである。

映画「白日夢」に刺激されたわけでもないが、画家の四馬孝氏が、五百万円の出資者があれば素晴らしいSM映画をつくるんだがと熱望しておられる。誰か御寄特な方はおられませんか——。そうなれば、私も及ばずながら応援させて貰いますが。



大塚啓子さんへ

腹部愛好者

の夢

高野原美

毎月の奇ク誌上のグラビヤ頁を飾っている大塚啓子さんの鮮明なフオートは、私の楽しみの一つです。

しています。

私は、女性の豊満な腹部に憧れぼつてりと豊かに隆起して深い窪みをつくった丸い臍をもったお腹が明瞭に写し出されてない時には深く失望を覚えます。特に皮下脂肪がよく発達し豊かに弾力性を秘めて丸く膨れ上り、その中心部を引締めるように丸い大きい影をつくって窪んでいる臍の美しさ、私は豊かな皮下脂肪の曲線を描く大塚さんの腹部フオートを特に愛好

この私が最も愛する腹部が荒縄で締め付けられ、その弾力性のあつて柔らかなさを細目の間の隆起で示しつつ、脂肪質の腹壁が大きく影をつくって凹んでいる状態は垂涎のまです。最近では、大塚さんの腹部緊縛フオートがよく見られ喜んでいます。

昔、フランスで女性の肉体の中で、丸く大きく突出している乳房が尊重され、現在物議をかもししているトップレス同様、衣裳から乳房をまる出しにして堂々舞踏会に出席した時代がありました。その

頃の貴公子がその愛する女性の乳房を石膏を直接肌にあてて型どりその乳房の器で酒を呑んだと聞いています。私はこの話のある書物だ読んで羨しく感じたのです。臍を出したモード、某女性雑誌に発表されており、私は非常に期待していたのですが一向に流行しそうでありません。大塚さんのこの臍を出したモードのフオートを発表して戴けたらどれほど楽しいだろうと思うのです。また、もし許されるならば大塚さんの、あの豊かな魅惑的な腹部を石膏で型どりそれをビールコップ程にしてトルソーを作り、ビールを飲むことが出来れば……私は大塚さんの豊かなお腹と、それにまっちゃんとした美しい丸い臍をこよなく愛しつつ空想に耽るのです。

大塚さんは、その手記で「もし私が妊娠したら妊娠腹のフオートを発表しそのうえ妊娠腹切りもやってみたい」と云っておられた。しかし妊娠しなくても羽村京子さんや東浦ひかるさんのように、大量のぬるま湯で浣腸するか、高圧空気浣腸によって、豊かな腹部を妊婦同様により大きく膨らますことは可能だと思えます。蛙腹ということとは大変な苦痛があることだと思いますが、大塚さんなれば絶対できると思います。私達、大塚さんのマニアとして蛙腹での切腹擬態プレーのフオートや生体解剖のフオートが発表されるのを望みます。

私は大塚啓子さんをマゾ女性として愛するため空想の世界で、私なりに種々と豊かな美しい腹を虐めて満足しています。是非蛙腹を実演して下さい。



お色気と

SMを売物の

「独立映画」作品

について

東山映史

武智鉄二演出の「白日夢」の大ヒットに刺激されて、いわゆる邦画五社の大手筋とは別に、お色気映画だけを専門に製作している独立系製作業者は、国映をはじめエロ、グロ映画製作に大童である。

大手業者は全国配給網をもって、いる国映、日本シネマ、新東宝興業の三社で、これから、これまでの作品や今後の企画作品をさぐってみよう。

国映は教育映画を配給していたというから、まさに百八十度の転向。二年前に転向以来、社業は順調。その間話題になった学習院出のグラマ女優、松竹におり顔が山本富士子に似ている松井康子改め

牧和子の「妾」それに女ターザンの吊し責めや縛りで評判を呼んだ「情欲の谷間」「情欲の洞窟」それに「激しい女」など。

最近作った「独立グラマ部隊」がお色気と縛りシーンを大いに見せてくれた。そのヒロインは新東宝からの扇町京子が主演。それに瀬川恵美、山下千鶴子、橘桂、桂鶴子らグラマ連。支那戦線の独立部隊へ慰問にいった売春婦たちがその三〇一部隊へやっとなどついた時は部隊は全滅。そして支那軍に包囲攻撃される。そこでシナ語の出来る扇町京子がシナ服の上からガンジガラメに縛られ、日本軍から脱走してきた態でシナの司令部へ「助けてくれ」と逃げ込む。無理に破ったシナ服の上から後手縛りで平原を走り、川の中を進む。そしてシナ軍の陣地で味方に合図している所を発見され、スパイということがばれ、日本軍の状況を白状せよ、とシナ軍の将校にゴウ問される。

半裸にむかれ荒縄で乳房の上から緊縛され、ムチ打たれころげ回る。仲々迫力のあるシーンで、さすがというところ。そして柱に緊縛された上に乳房をまさぐられたり、太股をさぐられる責めにもあう。一方残された女子部隊には一人のシナ兵の捕虜がいる。彼ににじりよった女は、捕虜の縄をほどこいたために逆に彼女は、サルグツツをかまされ手足を縛られる。一人の日本兵を争う女達の女斗など、お色気シーンもふんだんにある。瀬戸内海に起きた強姦による処女の悲劇とうたう若松孝二監督の「網の中の女」「情欲の渦」など、扇町京子の主演作品で、三原葉子以上のグラマー振りを発揮している。

同社の新企画作品というのは、十月「裸虫」十一月「情事の履歴書」「続妾」などあるが、オリンピックにひっかけて、「売春オリ

ンピック」を製作する予定だという。これは、東京オリンピックを目当てに香港など各国から売春婦が日本にやってきていたところから、企画されたものだが、公開はオリンピックの精神から終了後になる見込みである。

次に日本シネマであるが、このスターは「白日夢」で大ヒットした日伊混血児の路加奈子である。今年の二月に「不倫の償い」五月に「赤い反抗」に主演している。この「赤い反抗」の彼女ベッドシーンに目をつけた武智鉄二が抜擢して「白日夢」に主演させたという。いま撮影中のものに、「蒼い肌」がある。これには、山下敬二郎との離婚で話題をまいた未亡人が三井由紀子の芸名で主演しているのが印象的である。

新東宝興業は、かつての新東宝の配給関係者が集まり独立したのが同社だが、もっぱら外部プロに委託製作している。その題名ズバリの痴漢の生態を描いた「痴漢」など大いに話題をまいている。

いま企画作品で、映倫で問題になっているのが、小森プロの「日本拷問刑罰史」である。江戸時代の女性に加えた拷問を描こうというもの、これで石抱き、海老しば

り、それに手足をしばつて吊り下げる駿河責めなど、本誌の読者は垂涎のシーンを見せてくれるだろう。大体一作の製作費は三百万円

程度だが、これには一千万円かけると、小森白監督はハリ切っている。できれば五社の配給ルートにのせたいと同社ではいつている。

独立プロでは、女優の不足に悩んでいるが、いま人気スターは、前述の扇町京子、松井康子、路加奈子、黒岩三代子、それにビアン

カ・マンツで各社共演の主役として大いに起用され、その肉体美と官能美を大いに発揮している。



溺れる心

やすふじひさんど
保藤久人

奇譚クラブという文字は、私にとっては、実になつかしい名前だが、反面私には貴誌の存在が恐ろしかった。余りにも真正面から自分の心の中へ入り込んでくる貴誌の内容が恐怖だった。併し、それでも、貴誌の存在を忘れる事は出来ない。唯、単に「性に合っている」というだけでは、すまされない。貴誌の様な特殊雑誌に対しての執着は、年も共に深まり増大し

そして、そこに蠢めく妖しい雰囲気からは到底逃れそうもない。免もすれば、貴誌に投稿し自分の心を露呈して、そして求め……。そういう風に移り変ってゆ

くであろうと思われる自己の性の進展への予感に脅え、その脅えが私を消極的にしていた様だ。

溺れ込みそうな気持と、それを阻止しようとする心とが、随分長い間、争ってきた。子供のときから読書好きで探求心も人一倍強く貴誌に親しむ傍ら、私は各種文献資料をも読み漁ったものである。

SMの心理を理解し、消化しようとして努力し、自分の心をその中に埋めて当てはめてみては、その対象を見出そうとする。考えてみれば、無駄なばかり抵抗だったがそれでも、年と共に精神的には大人になれたといえそうである。

そうして、どうやら、このように通信を書く事が出来る程、気持ちの上でも余裕が出来てきた。と、いうのも、私自身、過去に多少は異様な体験もあり（そういうものが私の性に結びついたのだろう）元来が女性崇拜症（F乃至M）でありながら、空想の世界では、それを裏返えしにしたS的場面さえ追求している。という心理的なSMマニヤである事に思い至った為でもある。

加えて平凡なサラリーマンながら、一応社会的常識も備え得た、ということも心も支えになっていたのだろう。一度こうした通信を出せば、今後はきっと更に深く強く、貴誌に接近して行くことだろうが、今なら逸脱しないように思える。そして、貴誌の中へ入り込むために、自分の体験などを発表する気にさえなった。

小説「花と蛙」は近來になく私の琴線に触れるものがあつた。七月号の掲載分の中で、特に終り近く、夫人と京子のサイズを計る辺

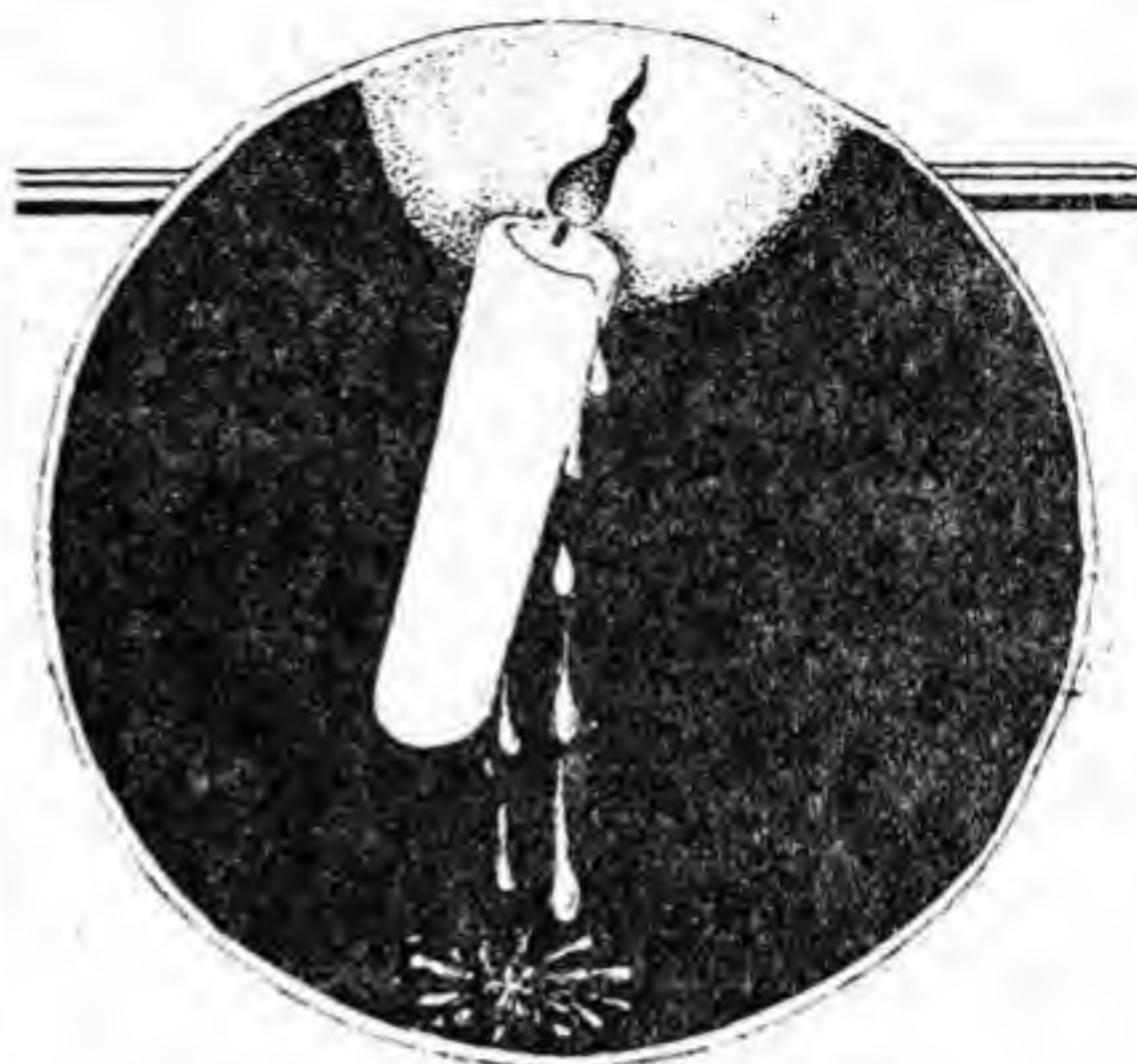
りを読みながら、私はふと過去の小説を思い出したものである。

昭和28年か29年頃、確か作者は松井頼子のもので（題名は忘却）主人公の夫人と別の一女が秘密シヨイで責められる時代妖美。その中で使用される「両頭コケシ」は全く圧巻で（この部分は復刊後のS小説特集号では、カットされていた）、その部分を「花と蛇」の二婦人に当てはめて連想し、空想の中であれこれ、その場面を自分なりに現出して、思わず身ぶるいしたものだ。

又、「明日、顔から下は全部剃り取られる……」という銀子のシヨッキングな発言。どういいうわけか、私は女体のそこに何の贅りもないことに奇妙な憧れを感じる。

古川裕子、松井頼子、吾妻新、岡田咲子、飛田良二、二俣志津子何れも懐しい方ばかりである。

作品としては「囚衣」「蜘蛛と蝶々」「美容学校」古くは「甘美なるアリスの告白」等々、何れも忘れないものばかりである。



映画・事件・映画

今は昔の物語り

多山 皓

「悪女」という映画を見た。
「この映画は、小川真由美と緑魔子のハダカを、いかにして見せるかというために作られたような映画だ。」
という批評が、ある新聞にのっていたがもつともだと思つた。
閑話休題―それはさておき―私はこの映画を見ながらある一つの昔話を思い出した。

小川真由美のお手伝さんが、緑

魔子の家にやとわれる。そしてその家のドラ息子に乱暴されて、妊娠させられる。
それで大さわぎになって、魔子は、真由美を産婦人科へ連れて行って中絶させようとするし、ドラ息子は、真由美と結婚するとイッワッて日光にさそい出し、中禅寺の真中で湖の中に突き落す。
見事に始末をつけたと思つて家へ電話しているドラ息子の前に幽霊のような真由美があらわれて、逃げまわるドラ息子を鉄砲でうち

殺す。

栃木刑務所に收容された真由美は、そこで無事に女の子をうみ落す。はじめて彼女に幸せが来る――。

という映画であるが――。

私が思い出したのは、お夏のことである。

お夏といつても、これは有名な例の「お夏狂乱」のお夏ではない。岡本綺堂の戯曲「階級」に出てくるお夏である。

庄屋の家へ行儀見習いに奉公に出たお夏は、やがて腹ボテにされて帰されて来る。相手は庄屋のドラ息子である。しかも庄屋は知らぬ存せぬの一点張り、世間が少しやかましくなつてくると、「人のうわさも七十五日」そのうわさの静まるまで、息子を江戸へ出そうとする。

折から村の秋祭り、お夏は祭り見物にも行かずにふさぎ込んでいたが、庄屋のドラ息子が間もなく江戸へ行くこと、今、秋祭りの見物に來ていることを聞き、鎌をつかんで出かけて行く。そして村社の境内で、そのドラ息子を捕えて

なぐるが、つれなく突き放されるので、怒り心頭に発して、手に持った鎌で切りつける。しかし、ちょうど太鼓をたたいていたお夏の許婚の茂作が飛んで来て、梶川与惣兵衛をつとめる。

半狂乱で家に帰つて来たお夏をみなが取りしめて、
「まあ、相手を殺さなくてよかった。」

などと言っていると、お夏の母がそれに反対して、
「なぜ殺させなかったか。」と茂作にせまる。

というのは、その当時の法律に従えば、主人を殺してもハリツケちよつと傷を負わせただけでもハリツケになるのであるから、どうせ殺されるなら、相手を殺してしまつてからハリツケになる方が、ズツと寝ざめがよいのである。

さん／＼娘をもてあそんだドラ息子は、ミミズ服れ程度で、腹ボテにされたあげく、お夏はハリツケになる。これこそ階級制度の悲劇なのである。

母は娘に、むごたらしくハリツケにされるよりも、いっそ、川へでも身を投げるとすすめる。しかしお夏は、誰の子でもよい、自分の身を貸した赤ん坊を生まずに殺

すのはかわいそうだ、ハラミ女には、お上のお慈悲があつて、身二つになるまでは刑をのばしてくれそうだから、自首して出て子を生んでから死にたいという。その母性愛たるや、まことにけなげである。

天保年間、江戸に近い村での出来事としてある。

ところが、この実話は、寛保年間、駿河国竹原村の出来事なのである。

天保年間ならば、ハラミ女は、子を生んでから死刑にするという規則があつたが、寛保年間にはまだきまつていなかった。その為、代官は、江戸へ指図を仰いでいる。その結果主を傷つけた重罪人であるというので、分娩を待たず獄門という指図が来ている。お上

奇クサロン向原稿募集

○皆さまの共通の広場としてのこのサロンは、どなたでも叩けば開かれる、楽しくて身近かな集いにしたいと思ひます。マンガ通信、短信、文通、呼びかけ写真、絵など、何んでも結構です。お上、お下、お寄せ下さるようお待ちしております。○採用篇には、編集部保有の特写真あるいは、雑誌を贈呈いたします。奮て御投稿をお願い致します。

にお慈悲はなかったのである。

これを映画にして、小川真由美主演でやらせたら、きつと面白いものができらるだろう。

但し、最後は獄門ではなく、ハチ切れそうな腹のまま、三尺高い木の空に一命を終えることにしなければ面白くない。

最後までお上のお慈悲をねがいながら、満々と張り切った腹を血に染めて、刑架上に呻吟する小川真由美の演技に、さぞかし我々の幻想を満足させてくれることであらう。

二

お手伝いさんといえば、この映画を見た直後、高島忠夫、寿美花代夫妻の家屋で赤ちゃん殺人事件があつた。ビックリした。

その犯人が、十七才のお手伝いさんだというのでまたビックリした。

この事件から思い出したのは、この奇クサの昭和三十年五月号に出ていた「呪い埋」の物語りである。

主人の家の赤ん坊を殺したという疑をうけた女中のおちかは、石責め、もぐさ責め、逆吊り、水責め、鉄板責めの拷問にあわされて

前に無実の罪を白状させられる。

そして、オシメ一枚のスッパダカにされて村中を引きまわされ、村外れの晒し場に生き晒しにされた上、穴の中に立てた棒にしばらく。赤ん坊を肥溜にほうりこんで殺した罰として、頭からこやしをかけられるのである。そしてこやしがあごまでたまつた時、彼女の父母や姉妹が連れてこられ、その穴のふちで首を斬られる。こやしの分量がふえて、彼の鼻と口をふさぎ、ついに窒息して死んでしまふのである。

今度の事件は、無実どころか、本当にお手伝いさんが殺したらしい。まさか拷問の結果白状させられたのではあるまい。

もしこのおちかと同じ時代だったら恐らく水責めか湯責めにされて殺されるであらう。

裸にされて、世田谷中を引きまわされ、世田谷区役所の前かどこかに三日ぐらい晒されて、熱い湯を入れたドラム罐の中に頭から入れられて、無惨な最期をとげたにちがいない。そうでなくても、ハリッケである。どちらがいいかわからないが、とにかく昔なら命にかかる大罪である。

現在は未成年者に、非常に甘い世の中だから、恐らく鑑別所送りぐらいが関の山であらう。

三

「悪女」といっしょに「死」を見た。

若尾文子と、船越英二が心中をし、いっしょに死ぬはずだった岸田今日子だけが生きかえってしまった。

江戸時代も心中はたくさんあつたが三人心中というのはめずらしいであらう。

心中した死骸はまっ裸されて日本橋に晒された。

若尾の死体がハダカで晒されたら、それこそ東京中の男という男が見に行くであらう。それどころか、大阪からも、夢の超特急で、日帰りで見に来るかも知れない。

そうなら、上野の山のピーナスの行列どころではなく少くとも見られるまでに十二時間は並ばなければならぬ。

そのそばには生き返った岸田今日子が、生き晒しにされている。そして彼女は非人になって一生を送らなければならぬのである。

ああ、今は昔——、あじけない世の中とぞなりにける。

「妻よ奴隷のように」

芥川一夫



それぞれ真新しいものを用材店より購入（四百円前後）してマッサージ用に利用するといひ。ハガキ用のローラーを二つ使うと丹念に身体の間々までグリグリとマッサージ出来るし、西の内版だと、足の爪先から頭まで、体の起伏の曲線に沿って冷たいローラーが這いまわるのが全面的である。こうしたプレイを更に美と健康の維持に役立てる為には、カーテン用、テールクロス用の巾物のビニール

を敷いた上に俯仰若しくは腹這になつて、薬用オリーブ油をローラーにつけて万遍なく肌にすり込むとよいだろう。全身油だらけになつた体は暫時の間ビニール布に丸めて閉じ籠らせ、モスラの幼虫のように、うじ虫のように転がしておく。

最後に、絶縁用ビニールテープやセロテープを使つてのプレイ。絶縁ビニールテープを目かくし、亦是猿轡に用いた例は本誌の観賞

用モデル梨花嬢によって演じられたが、今回ののは鞭打ちに似た感じを与える方法である。

それは、肌に長目に切つたテープをびったり粘着させ、一気に剥ぐのである。うぶ毛がテープの巾なりに引き抜かれるのであるから皮膚面にかなり強烈な深味のあつた痛みが走る。乳房に対してテープを貼つた時は、乳首や乳隈の粘膜性皮膚には浮かして貼る注意が必要である。

このテープ責めを行う場合、肌はタオルなどでよく拭いておき、汗ばない内にプレイを開始しないと効果がない。従つてこのプレイのあとに、前述のゴムローラーのプレイと、モスラの幼虫責めがあるとよいと思う。

貴女のプログラムによるプレイと、私のアイディアによるプログラムとを併せて、有名ホテルの快適なる一室で拘囚のひとときを過してみたいものである。

○妻の肌、三日経ても縄目は消えず
○妻の悲鳴、夜にこだまし、鞭の手ゆるむ

- 「白日夢」ともに見し夜の妻吾が手をひく
- 新刊の「奇ク」に妻の眼、あらたになる
- 逆吊りの努力に、妻の笑い顔
- 逆吊りの妻の苦悶に時計見る
- 「奴隷妻」と書きし妻の背、いと端麗
- 「奴隷妻」と書きしマジック未だ消えず
- 後手の妻の縄尻に、猫たわむる
- 土曜日の、夕餉の妻の早い風呂
- 土曜日の妻、三条の縄をそつと出し
- 土曜日を待ちかねるように、妻はなり
- 土曜日のプレイ続いて、早や二年
- 縛りより、妻は刺す蚊に氣をとられ
- 雷の閃光、妻の素裸を照らす庭
- 立木縛り、線香焚いて夜もすがら
- みごもつた妻にいたわる、縄目の腹
- 奴隷の子、可愛がつてと妻笑い
- 腹少し、膨れ加減に縄ゆるめ

○臨月の逆吊り今から約束し
○晴雨の臨月逆吊り、見せて妻を納得させ

妻妙子と結婚後、徐々に奴隷妻として飼育して来ました過程、折ふし思いつくままに書きとめたものです。独りよがりもありますが御批判下されば幸甚です。家内は現在妊娠六カ月になります。最近カメラをいじり始めましたが、臨月まで順序を追ってゆくつもりですが、写真技術が未だ上手ありませんので早く上達していいものを撮りたいと念願しております。既に句にもあります通り、妻に臨月の逆吊りを納得させましたので、伊藤晴雨氏の如き、逆吊り妊婦をとりたいたいと思つています。辻村隆氏や専門の方により御指導願えれば幸甚と存じます。小生三十一才、妻は二十四才であります。

「私の提案」

畑藤 三人

続『花と蛇』に関して



続篇が登場するという朗報に改めて第一章から通読して見て、この設定も無理でない様な気がする

ので、是非、団先生にと、一つの提案を申述べます。私の様なのは奇想に過ぎず或は邪道かも知れないが、前篇の中に流れる瑞々しい人間模様や女性感情が、この作品を高度のものとし、読者の共鳴を得ている様にも思えますので、多少無理でも、「毒婦の恋」を織込んで貰い度いのです。（銀子が静子夫人に魅了されるという事。）

【設定】 銀子の四女に対する暴虐行為の遠因として、①自分達と違う世界に住む同性に対してのひがみ。②美しい同性「美」に対する反逆。③桂子の裏切り。以上三

つの中で最も自然に結びつくのが③である事から想起する。

銀子が桂子を葉桜団のボスと認めていたのは、その資金源を大切にす意味と同時に、桂子を自分のペット的存在として憧憬感情さえ加えて大事にして来た。併し桂子は銀子の倒錯的な感情を嫌い、規則を破って飛び出そうとした。桂子を手離す事が資金中絶となり不利になる事は判っていた。乍ら銀子は、自分を拒絶した桂子を私刑する事により、自己の内部の感情を憎悪に転化しようとし、嗜虐をむき出しにして対処し前篇の発端となった。

【課程】 静子夫人と京子の華麗な凄絶ともいう可き予行が密室内

で、観客の哄笑と昂奮と歓声の中で終了するが、始めは、川田と共に嘲笑し続けていた銀子が、次第に青ざめて黙り込んでしまう。艶麗な貴婦人静子が、人間の想念を捨てた観念し切った姿で没入する妖美に、銀子の内面に潜んでいる特殊感情が挑発され、毒婦は夫人の豊満な肢態に魅了されてしまったのである。そして終了後、ショー開演についての打合せの席上、すっかり元気のなくなった様子を川田に問い詰められ、柄になく頬を染め乍ら夫人に対しての慕情を告白し、あの貴婦人とコンビになれるなら自らもスターになると宣言する。

【構成】 ①残忍な嗜虐感情を持つ銀子の行為も、裏返せば自己の持つ倒錯的な感情に対する慾求不満であった事。②自らの宣言により「お前の様なズベ公は少々ではこたえない」と、今迄、四女に加えられなかった凄ましい事も甘受し苦慮に喘ぐ。③妹マリ迄道連れにする結果となり、ショー人員が増えた川田達を喜ばせる。④昨日までボスとして仲間をこきつけた罰として丸坊主に剃られ、青道心スターとされる。⑤女として目覚めた様な静子夫人に対する銀

子の妖しい情感は燃え上るばかりで、その為には総べてを甘受し、夫人に謝罪し、献身的な奉仕を誓う。⑥謝罪と、先輩スターに対する挨拶として、静子夫人の排泄物を口にすること。⑦昨日までの暴虐者が生れ変わった様な姿で、眼前で、思いもかけぬ行為をするのを見た静子夫人の驚愕と羞恥。及び心理（夫人と銀子の）の推移。（この場合、夫人はかえって新しい恥しさと屈辱感さえ感じるのじゃないか、と思えますが）⑧銀子の積極性はとうとう夫人とコンビになる事に成功し、その調教中の鬼気迫る実感。⑨夫人も次第に青道心とのショウに惹かれて行く。⑩新コンビ誕生により、京子は美津子と姉妹ショウを強要され、この組合せは、更に川田達を狂奔させる。桂子はマリと組まされる。

【その他】 ①ショウ及び調教等による四女の受難は既定通り。②静子夫人の妊婦ショウ。③新コンビにされた京子と美津子の狂乱と姉妹愛。④鬼源の調教。⑤川田とズベ公の新ボスになった女の淫らな責め。等々。

現今の制約の許では、これは団先生にとって正に難事業といえますが、我々読者は何時もこの様な

夫婦のSMプレイから

水野 弘

「斬り落された生首」



勝手な事を、心の中で画き、連想に次ぐ連想となつて尽きる処がありません。これも前篇が近年になり傑作であつた証拠で、私の様な

異端奇想を産む結果ともなっています。勝手な提案ですが、若し賛同者があれば幸甚です。

モデル通信

関谷富佐子へのラヴ・レター

美津田 栄

私が初めてあなたにお会いしたのは、横浜の伊勢佐木町裏にある古本屋の店頭であつた。何気なく取り上げた雑誌を何気なくべらべらとめくつていくうち、あなたにお会い出来たのである。その時、あなたは、蒲団の上に全裸で海老縛りにされ、大きなお尻を高高と横顔は悲痛に泣きゆがんでいた。ムチ打たれる、まさにその瞬間のポーズであつた。

あなたの名は関谷富佐子――。

私はそれが恐らく仮の名である事に、絹川文代、大塚啓子、梨花悠紀子……等の場合より、一層満たされなかつた。関谷富佐子は、あなたではない。という事がわかつていながら、関谷富佐子に対して恋情を訴えるのは、もどかしくて悲しい事である。しかし、私は訴えずにはいられない、この胸のう

ちを――。
私はあなたのマゾをたしかめた
い、私のサドをあなたに爆発させ

たい。かつて絹川嬢にも大塚嬢にも思わなかつた事を、私はあなたと現実にそうしたいと思うのである。何故だろう。それは卒直に言って、あなたがしとやかであるらしいからである。あなたのお尻が見事に大きいからである。
私はあなたがいるからこそK誌の愛読者であり、あなたがいる限り、これからもK誌の愛読者である。

私とあなたを結ぶものは『悪書追放』の嵐にまさに消えなんとして、K誌が消えてしまえば、私のあなたに対する残酷な恋情も消えてしまふのだろうか。私の性向が矯正されるというのだろうか。

私はこの通信が、あなたに対する最後のものでない事を祈りたい。最初のものである事を願いたい。私は性向を矯正されてまで生きて生きたいとは思わない。それは偽りに生きる事であるのだから――。



世相診断室

木戸川 健

公示

神奈川県青少年保護育成条例（昭和三十年神奈川県条例第一号）第五条第一項の規定により青少年の福祉を阻害するおそれのある図書として次の通り指定しました。

これらの図書については青少年に対し販売、頒布、交換、贈与、貸付けその他これに準ずる行為が禁止されます。

昭和三十九年七月二十四日

神奈川知事 内山岩太郎

裏窓八月号

あまとりあ社

風俗奇譚八月号

文献資料刑行会

奇譚クラブ八月号

天星社

一〇〇万人のカメラ七月号

新風社

一〇〇万人のよる七月号

委節風書店

以上の公示は八月四日付の、朝日、毎日、読売、サンケイ、東京、等神奈川県に広い販売網を持つ中央紙の京浜版（神奈川版）及び神奈川新聞に公告されたものの全文である。

神奈川県では毎月（四日か五日に）このような公告を通じて行っており、県民にはすっかりおなじみになっている。なにしろ同条例を全国に先がけて施行した昭和三十年以来の事であり、その広告料もばかにならず、公告しても果してどれ程の効果があるのか、返って逆効果ではないのか、との声ある声もある。新聞の投書や、又県議会でも問題にされた事がある。もっとも、同条例を施行している他県においても事情は同じである。公示を公告するには、新聞広告が最も適当であり、効果と逆効果は、常に相伴うものであり、言論の自由な国においては、半ばす

るものである。

神奈川県では又、県知事内山岩太郎の名において、指定された図書の発行所に対して、厳重な警告を行なっている。この事は、すでに本誌においても再三取り上げられた事である。

以上の事から、自由人であるK誌の読者はきつと、神奈川県はうるさい県である、野暮な県であるとの印象を強く抱かれることだろう。そして、神奈川県のK誌の読者に、さぞかし雑誌の入手が困難であろうと、同情を禁じ得ない事であろう。

が、しかし、そんな事はない、というのが神奈川県民である私の卒直な印象であり、解答である。その一例としてストリップ興行を上げる事は、ストリップが余り好きでない、むしろといえば嫌悪を感じる私には、余りいい感じのものではない。が、しかし、現在横浜市内には常設の小屋が二館あり、中区真金町にある「横浜セン」トラル「鶴見区鶴見町にある「別世界」というのがそれであるが、ここでは全ストが公然と行なわれている。そのヒドサは一部週刊誌でも紹介済みであるが、そのため地元民が反対運動に立ち上がると

か警察当局が断固取締りに動くという兆しはない。ストリップファアンにとってはハマは自由の八別世界Vなのである。ましてや、他の諸諸の同条例違反？においておやである。

神奈川県は決して野暮な県ではない。むしろ、東京、大阪などよりはずっと粋である。内山岩太郎は、話せない頑固な爺さんではない。全国知事の中でも、指折りの文化人であり、酸いも甘いもかみわけた苦勞人である。多少筆を遊ばせれば、K誌が健在である事を広告してくれるなんて粋ではないか。神奈川県のK誌の読者には、その点の心配が、全くないのである。九月号が出れば、又、県が知らせてくれる事だろう。私は安心している。

ところで、ある地元紙の記者がいつている言葉は甚だ興味深い。「横浜にストリップ小屋が二館しかないというのは意外だった、しかも、この二館とも全ストが公然と行なわれているというのは、なお意外だった。法の粋というのはこういう事だね。」

私も全く同感である。右手で取締りながら、左手で許している、それが神奈川県の行き方ではない



私が浣腸するとき

好 浣 涙

のか。私にはそう思える。現に住んでいる者が、そう思うのだから間違いはない。

K誌に対して、どこかで許されている部分がある。具体的にそれが何処であるかは指摘出来ないが、もしかしたら、ストップ小屋を二館だけにおさえて、しかも全国的に悪名の高い全ストを黙認しているようなムードではなからうか。といって、決して甘えてはならない。又、厳重な再三の勧告に

対して冷笑的であったり不従順であつたりしてはならない。法と人の関係は大変微妙である。

だから、K誌の今後に関しても具体的な解決策は何一つない。あるべきはずが、ないのである。いくらグラビアを自重しても、又抜いても、「指定箇所、全部」と勧告をうけるだろう。事は具象的な問題ではなく全体的な問題なのである。では廃刊か続刊かという事になるうが意見はそこで分れる。

その全体な問題の中に、どこかで許されている部分がある。その発見はK誌の発行者の叡智に期待したいのである。

何だか禪問答めくが、実はその通り禪問答なのである。

人間には誰しも秘密の部分がある。影がある。二重、三重人格が普通である。影のない人間はバケ物というほかはない。然して、法を行う者は、人でありバケ物ではないはずである。

法はK誌の存在を許さないだろう。しかしそれを行う者が人である限り、バケ物でない限り、人はK誌を許すのである。そこに入政治Vがある事は申すまでもない。

(八月三日)

(横浜市鶴見区八木戸川健V)

お腹が張って苦しい時、私は空気が浣腸をする。エネマシリンジのゴム球を握る事六度。空気がたっぷり注入される。二・三分してお腹を押え、入れた空気が高らかな音と共に放出される。それに誘導され溜っていたガスが気持ちよく音を響かせる。そして、さわやかになる。

× × ×

酔って苦しい時、私はグリセリン浣腸をする。愛用の五〇ccのガラスシリンダーのピストンが往復する事六度、三〇〇ccのグリセリン溶液がたっぷり注入される。酔

っているだけに辛抱するのが苦しい。五分の我慢の末、便と共にアルコール分も放出される。同時に多量の小便も出る。そして、さわやかな気分になる。

× × ×

夜中にお腹の空いた時、私は牛乳浣腸をする。一〇〇ccのガラス浣腸器で少し温つた牛乳を軽く二本、一気に注入すると便意を催すので、ゆっくりと時間をかけて注入する。腸に牛乳が吸収されるのが分る様だ。三十分程して便所に立ったら、ほんの僅かの凝結した牛乳の固りが出た。そして、

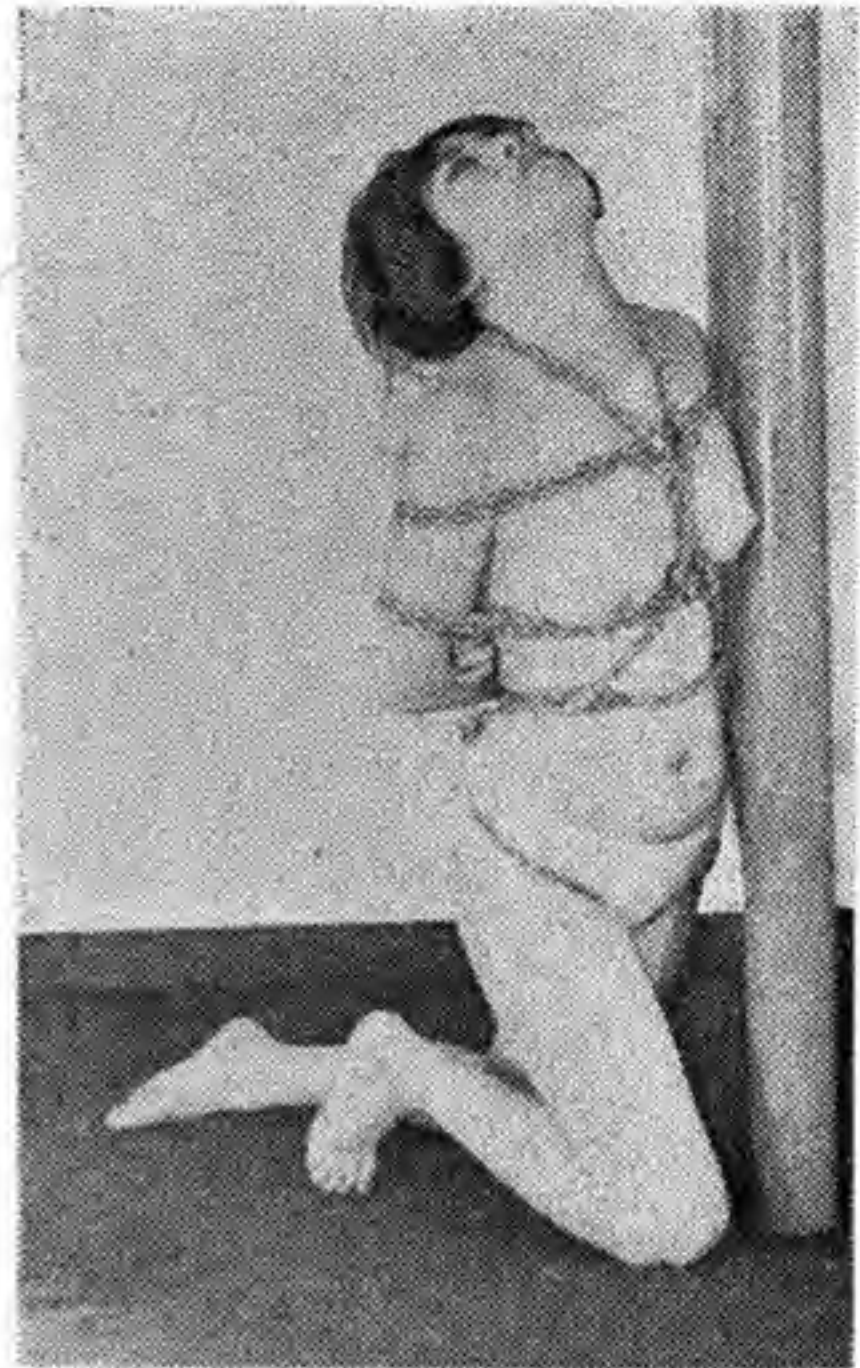
さわやかな気分になった。

× × ×

一人で淋しく眠られぬ時、私はビール浣腸をする。天井より吊下げられたイルリガトールにビールを一瓶ゆっくりと注ぐ。嘴管を奥深く挿入して、あぐらをかき独りで淋しく飲むビール。口で飲むより吸収が早いのか、半分位で酔つて来る。結婚の為別れたKの事が想い出される。残り半分のビールを注ぎながら、私の持つ浣腸器は白い液を放出する。そして、さわやかな気分では眠りに入る。

るまで

「奇クファン」に



星野達夫

SM愛好者がこの世にあるということは、ずっと以前から知って居たのですが、専門誌が多く発行されて売られている事は昨年まで知りませんでした。新聞広告にも書店にも見当たらないので、田舎者の私等、一生知らずに終ったかも知れなかったのですが、蛇の道は何とかで人並でなかった私は、奇クを知り、何時か奇クファンになって居りました。

他人には言えない事です、パンティや寝室水着なるもののカタログを注文したのです。ところが色とりどり形様々の女性用下着を

満載した末尾に——奇譚クラブ・風俗奇譚の愛読者には、責め衣装のカタログを送ります——という一文があったのです。

この一文で両誌の内容を覚った私は近くの書店を調べましたが、田舎の小さな店等に有るわけがありません。無いとなると益々読みたくなるのが人情で、家の者には何とか理由を言って未知の雑誌を求めてA市へ行きました。何でも有りそうな大きな書店はいくらでも有ったのですが、美しい女店員ばかりの一流書店では、「奇譚クラブを下さい。」

と、どうしても言う事が出来ないで、あきらめて帰ろうと思つた時に小さな古本屋を見付けて入りました。入口に近い所に奇ク七月号(六三年)が無難作に並べて有りました。しばらくためらった後で他の雑誌の間に入れて、無愛想な店主の前に行きました……。

最後に私を呼んだものは一年前に買った奇クでした。こんなもの馬鹿々々しいと思つて見たり読んだりする内に、何時の間にか不思議な魅力に引かれて居ました。良く考えて見れば私も小学生の頃だったか、SMプレイらしきものを行つた覚えがあります。家に誰も居ない時、屋根の上に乗って身体を縄で縛って、両手は後ろの縄の間にに入れて瓦の凸凹した所へ、身体を横たえました。束縛感と瓦の痛さが何か快感になった様に覚えて居ます。

私は二五才、小さな農家の長男で病気の父や弟妹達を、母と二人で面倒見ねばならない身です。ガール・フレンドや恋人のはしい年頃なのですが、貧しい農家の長男となると、まるで美しい女性とは無縁です。人並の結婚等出来るのか出来ないのか、予想もつかない淋しい人生です。こんな事は忘れてしまおうと趣味の世界に若さをハッスルしました。

こんなことから今まではもうスッカリ奇クファンになり、奇クも「花と蛇」特集号を入れて六冊になりました。中でも毎号グラビアで妖しい美体を見せてくれる、絹川文代さんは、私の恋人にしました。そうです。ペーパー・ダーリ

ー・ペーパー・ハムでがまんしま

る。



愛読者の みなさまへ おねがい

私ども三誌では、この数年間の世情にかんがみ、かねてから編集面の自粛刷新を計ってまいりました。

元来、私どもの雑誌は、けっして単なる性雑誌ではなく、特殊な専門誌を自負して発行してきたのですが、青少年保護育成に関する論議が、とみに高まりつつある現今の情勢に対処すべく、いっそうの自主規制を、このたび申し合えました。

愛読者の各位におかれましては、いろいろとご不満もございましたしょうが、なにとぞ、事情おくみとりの上、今後ともご愛読のほど、ここに、改めてお願い申し上げます。

「裏窓」発行所 あまとりあ社
「風俗奇譚」発行所 文献資料刊行会
「奇譚クラブ」発行所 天星社

奇譚クラブ

昭和39年11月号



〔続 編〕
(第一回)

プロローグ

田代の屋敷の庭は、かなりの広さである。

三方は、赤松が斜めに生えている人工の小山が連なり、頑丈な塀は、その向うにそびえているといった念の入ったもの。その広大な庭園の一方は、竹藪の茂みがあり、その一番奥まったところに密室、つまり、秘密会員達が、時折出入りする古めかしい土蔵が建っているのである。

その日は、夕方頃より、この土蔵の内部には、こうこうと電気がともされていて、ぴっ

たり閉ざされた木窓の隙間から光線がもれ、時々、大勢のどっと笑う声が流れてくる。

森田組、愚進隊二十数人、葉桜団、ズベ公十数人が一堂に会し、盛大な酒宴をはっているのである。何のための、どのような酒宴であるかは前篇において述べた通りであるが、このまま、この場面を足音を忍ばせて通過してしまうのも、いささか臆病に思われる。よろしい。ちよっと、のぞいてみよう。

狼の批評会

十坪ばかりの密室の中を埋めつくすばかり

に立てこんだ野卑な男女の哄笑と嘲笑。

コップになみなみと注がれたビール。煙草の煙り。むしゃむしゃとスルメを噛じる大きな口。むっとするような熱気が、この狭い室内に一樣にたれこめている。

川田の提案で、台の上に並び、人の字の恰好に縛りつけられている静子夫人と京子の、若返った肉体に対する批評会が始まっているのだ。

やくざやズベ公の一人一人が、二人の美女の、そうなった個所を見くらべるようにしながら、何かいう毎、酒を飲む野卑な男女は、

キヤツキヤツと笑い合う。

その都度、静子夫人と京子の、横に伏せている美しい顔に、さっと血がのぼり、たまたまなくなったように、更に深く首を垂れてしまふのだった。

酒の酔いがまわるにつれ、やくざもズベ公も、露骨極まる言葉を笠にかかって美女に投げつけ出す。

川田が、ウイスキーびんをラッパ飲みしながら立上り、司会者もどきで、夫人と京子をうしろに、埋めつくすやくざとズベ公を前にしてしゃべり出した。

「さて、皆さん。今夜は、森田組のショー開催を、あと一週間後にひかえた、その前祝いがあります。ここにおられる御婦人、お二人は、今夜は充分、皆さん方の御機嫌をとりたいたと、はりきっておられます。間もなく、美しく花嫁化粧をすませた美津子嬢と桂子嬢もここへ応援に、かけつけて参ることを思います。何卒ごゆっくり、今夜のショーを楽しんで下さい」

川田がそういうと、一せいに拍手、なかなか司会者うめえぞ、という声が見物人の間でわきあがる。

川田は悦に入った顔つきで、銀子に眼くば

せして、テープレコーダーを持って来させると、それを静子夫人の足もとにおいた。

「色々と餘興に入る前、先程、奥さんに録音させた、このテープをちょっと聞いてみようじゃありませんか。これだけ、吹きこませるのに、ずいふんと苦労しましたぜ。酒の餘興の一つにもなると思いますよ」

川田は、田代と森田の顔を見ながら、そういうのだった。

がっくり首を垂れていた静子夫人は、ハッとしたように顔をあげ、川田に操作されているレコーダーを悲しげに見つめるのだったが、どうしようもないよう再び首を落し、小刻みに肩を震わせるのだった。

レコーダーは、ゆっくりと回転し始め、静子夫人の涙でのどをつまらせたような声が、途切れ途切れに聞こえ始めた。時々、びしゃりと肉をぶつ音が聞こえるのは、静子夫人が声の吹込みをためらい、それを怒った川田が夫人の横顔をひっぱいたものらしかった。テープに録音された言葉は、大体、次のようなことをいっていた。

「——貴方、私、静子でございます。本当に長い間、御無沙汰致し、申訳ございません。実は、私現在、とても幸な、夢のような日々

を送っているでございます。貴方にはお詫びのしようもございませんが、私には、心から愛する人、名前は申し上げられませぬ故Kと致しておきますが、その方と、夢のように楽しい愛情生活に、浸っているのでございます。静子は、もう完全にKのもの、だってKは私に女としての本当の喜びを充分に与えてくれたのでございますもの。静子は、もう身も心もKに捧げて、この桃源境のような、すばらしい世界で、一生、Kにお仕えする事に決心致しました。もう私には身につける衣裳とて不用ですから、下着からお湯文字まで一切を貴方に送り返したのでございます。静子は、生まれたままの姿となって、日夜、Kにお仕えし、Kの愛を受けいれております。桂子も、今ではすっかり女らしくなり、Yというお方と晴れて夫婦となる事にきまり、私も喜んでゐる次第でございます。これからは、桂子も私も、KやYの御指導のもとに色々な芸当を覚え、秘密ショーのヌードスターの道を歩むのでございますが、それが愛するKのためになる事なものですもの、少しも苦痛ではございません。早く、一人前の稼ぎが出来るようになり、Kに楽をさせてあげたい。静子は一生懸命働くつもりでございます。それか

ら、今まで色々とお世話になった貴方のお誕生日に静子は、何のプレゼントもせず、心苦しく思っていたのですが、今日、Kと相談し、私の一番大切にしていた部分の髪の毛を剃りとして、今までのお礼に貴方にお送り致します。ホ、ホ、ホ、そんなに変な顔をなさっちゃ嫌。だって、今の静子、一銭のお金もなく、それに丸裸なのでも、自分の体のものを剃りとしてプレゼントするより方法がございませんわ。Kにお願いして、愛する彼の手で、一本残さず剃って頂きました。Kったら、『静子、その方がずっと可愛いよ』などとおっしゃって、優しく、荒れどめのクリームをたっぷりぬって下さりキッスまでして下さるのです。このようにして、お送りしました静子の心からのプレゼント——出来る事なら、額にでも入れ、貴方と私が愛を語り合ったあの豪華な寝室の壁へ飾って頂ければ、静子も嬉しく思います。まだ色々お話ししたく思いますが、ショーのお稽古の時間が参りました。今日のお稽古は、立ったまま便器を——ホ、ホ、ホ、ごめんなさい。近頃の静子、この生活になれて参りました故か、こんなはしたない事も口に出していえるようになってしまいました。では、最後に

たった一つのお願ひ。どうか貴方、私の行方を探そうなどとはなさらないで。もし、貴方がその筋の手をかりたりして、この天国の幸せに浸っている静子を地上へ引き降ろそうとされるのなら、静子、自殺してしまうかも知れません。そして貴方、どうか静子の事は忘れになつて、新しい奥様をもらつて下さいませ。私の願ひはただ一つ、貴方との過去をすっかり忘れ、Kの赤ちゃんを一日も早く体に宿したいという事なのでございます。」

以上でテープの声は途だえた。

ニヤニヤしながら聞いていた、やくざとズベ公達は、ほっと息をつき次には一せいに拍手をして、

「立派な心がけだ。見直したぜ。遠山夫人」と口々に叫び、笑い合うのだった。

川田も得意顔で一座を見廻し、

「へっへ、これだけの事を吹きこますには俺もずいぶんと苦労しましたぜ」

といいレコーダーよりテープを外して袋につめる。

「奥さん。こいつは明日早速遠山家に送りとどけてやるからな。そら、これも一緒によ」川田はズベ公達の手で、ビニールの小袋につめられた艶のある黒い短かい髪の毛を静子

夫人の鼻先に近づけるのだった。

夫人は、鼻先へつきつけられたものから眼をそらし、耳たぶまで朱に染めて、唇を噛みしめている。

「京子嬢の方も、山崎氏に送るものの用意はちゃんと出来ているからな」

と、朱美は別のビニールの小袋を京子の鼻先へ持つていった。

京子もハッと頬を染めて視線をそらし、怒りと屈辱に白い肩をふるふる震わせるのであった。

そんな二人の美女を煙草をすいながら、楽しそうに眺めていた川田は、のっそりと静子夫人の傍に寄る。

「奥さん。ただそうやって、電信柱みてえに突っ立っているだけじゃ、面白くねえじゃないか。ショーのスターならスターらしくしてここに詰めかけていなさる人々に何か色っぽく話しかけ、御機嫌をとってくれなきゃ困るぜ。さて、まず社長と親分に、若返った体にしてもらったお礼をいいな」

川田は、くすくす笑いながら、夫人の耳もとに口を寄せ、こんな風にいうのだ、と何かささやき始めた。

ああ、と静子夫人は切なげに首をのけぞら

せ、嫌々と駄々っ子のように首を振る。

「何でい。さっきは馬鹿に女らしく素直になったものだと言こんでいたのに、ありや全部嘘だったのかい」

川田は蛇のような冷酷な眼つきをして、いきなり静子夫人の横面を、ピシヤリと平手打ちするのだった。

「甘く出りやつけ上りやがって。これから、まだ色々としなきゃならねえことが、あるじやねえか。勿体ぶらずに教えられた通りのことをいって、社長と親分にお礼を申し上げるんだ」

川田に頭からそう浴びせられた夫人は、もう人間的感情を捨てたよう観念しきって妖艶なばかりの美しい容貌を正面に向け、小さく口を開くのだった。

「田代社長様、そして森田様、遠山静子はおかげ様で、このように可愛い女の子にして頂きました。心よりお礼を申しあげます。お二人様に、特別に御批評して頂きとう存じます。ど、どうか、もっと静子の傍にお寄りになって、くわしく、お調べになって下さいませ」

室内のちょうど中程に坐って、酒をくみかわしていた田代と森田は、それを聞くと、舌

なめずりして互いに顔を見合わせ、のっそりと立上る。

やくざ達に、わいわい冷やかされながら、

夫人を立縛りにしている台の上にまで上った二人は、どっこいしょ、と夫人の足もとに身をかがめ、ギラギラした眼で観察し始める。

血も凍るばかりのいまわしい屈辱を、齒をカチカチ噛み鳴らして耐えている静子夫人の耳もとに、川田は笑いをこらえながら、再び口を近づける。

「へっへ、奥さん、今度は、うんと色っぽく鼻を鳴らしながら、こういういな」

川田に耳うちをされた静子夫人は、ひきつったように美しい顔を硬張らせ、すすり泣きを始めたが、

「泣けといったんじゃねえ。色っぽく鼻を鳴らして、社長と親分に甘えるんだ」

川田は、ニヤニヤしながら、夫人の耳に幾度も次の科白^{せりふ}を吹きこみ、と同時に、葉桜団の悦子の手で、初々しくセツトされた夫人の黒髪の油の香り、ふくよかな乳白色の肩のあたりから、豊満な乳房のあたりにまで、ぬりこめられている香水の甘ずっぱい香りを、くくん鼻をならして、嗅ぎ廻っているのだ。

静子夫人は、川田に抗し切れず、遂に決心

し、涙にうるむ切長の美しい瞳を、自分の足の下に身を沈めている田代と森田に向けるのだった。そして、川田にしつこく教示された齒の浮くような言葉を、甘い調子で二人にいう。

「うん、意地悪。もっと、よく調べてくれなきゃ嫌。ねえ、ただそうして御覧になっていただけで御満足なの。静子、手も足も、こんなに固く縛られているんですもの、遠慮なさなくてもいいのよ。ねえ、くわしく調べて静子にも聞かせて頂戴。ねえ、早くしたら」

わあーと見物しているやくざ、ズベ公達が嬌声をあげる。じゃ、お言葉にあまえて、と田代と森田が、顔中しわだらけにして、モソモソ動き始めたので、密室内は、再び、大爆笑になった。

「あとの楽しみが薄くなっちゃ、面白くありません。社長、それぐらいにしてやっておくんなさい」

川田が、田代と森田の背をうしろからたたいたので、やっと二人は手を離し、立上る。静子夫人は、失心したように、がっくり首を落し、肩で大きく息をしていた。

「さて、次は京子嬢だ。奥さんも、こうしてちゃんと社長にお礼をいったんだ。おめえ

は、若桜団の団長、副団長にお礼をいいな」
川田は、次に、京子にはこ先を向けるのだ
った。

洗面器

酔っぱらって、ふらふらする足を踏みしめ
るようにして、台の上へ上って来た銀子と朱
美は立縛りにされている京子の前に立った。
そんな二人のズベ公に、京子は、涙でキラ
キラ光る美しい黒眼を向けて、川田に教示さ
れた言葉を口にする。

「銀子お姉さま、朱美お姉さま、ごらんにな
って下さいまし。京子は、このように可愛い
い女の子に仕上げて頂きました。ど、どうぞ
お気のすむまで、くわしく、お調べ下さいま
し——」

銀子と朱美は、顔を見合わせ、声をたてて
笑う。

「ふふふ、京子嬢、唐手を使って大暴れした
時は、全く、恐ろしい女だったが、そうされた
姿を見ると、可愛いものだね。どう、さっ
ぱりした気持だろ」

つづいて、朱美が、

「でも、ちよっと妹なんかには見せられない
恰好だわね。なによ、それ」

朱美は指さしながら、銀子の肩にもたれか
かるようにして、キツキツ笑う。

「とにかく、調べてくれというのだから、調
べてやろうじゃないか」

銀子と朱美が、身をかめ始めると、その
途端に京子は激しく身悶えしてわめき出す。

「やめて！ お願ひ、嫌っ、嫌よ」

そんな狂乱状態になった京子を、川田はニ
ヤニヤして見つめていたが、

「自分で頼んでおきながら、今更、やめて、
はねえだろう」

といい、銀子と朱美のする事をしばらく眺
め、頃を見て、それ位で、かんべんしてやん
な、と二人を引き起す。

京子は白い肩や豊かな胸の隆起を屈辱の嵐
に大きく波打たせて、狂気したように首を振
り、嗚咽している。

さて、と川田は、静子夫人と京子の間に立
った。身体全部を火柱のように燃えたたせて
歯ぎしりして泣く立縛りの美女の横顔を見な
がら、

「お集り願った皆さんの批評の言葉も出つく
したようだし、社長や親分の御検分もすんだ
ようだから、へっへ、先程、約束した事を
そろそろ始めて頂きたいんだがね。どうでい

別嬪さん方」

川田は、美女の足下にある洗面器を足の先
で突いていう。

静子夫人は、妖艶なばかりの美しい顔を静
かに正面へ向け、眼を固く閉じるのだった。

如何に泣き、哀願したとて、すべて無駄で
ある。思った事は、どうしても、実行させる
川田の恐しさを、夫人も京子も骨身にこたえ
るほど知っているのだ。

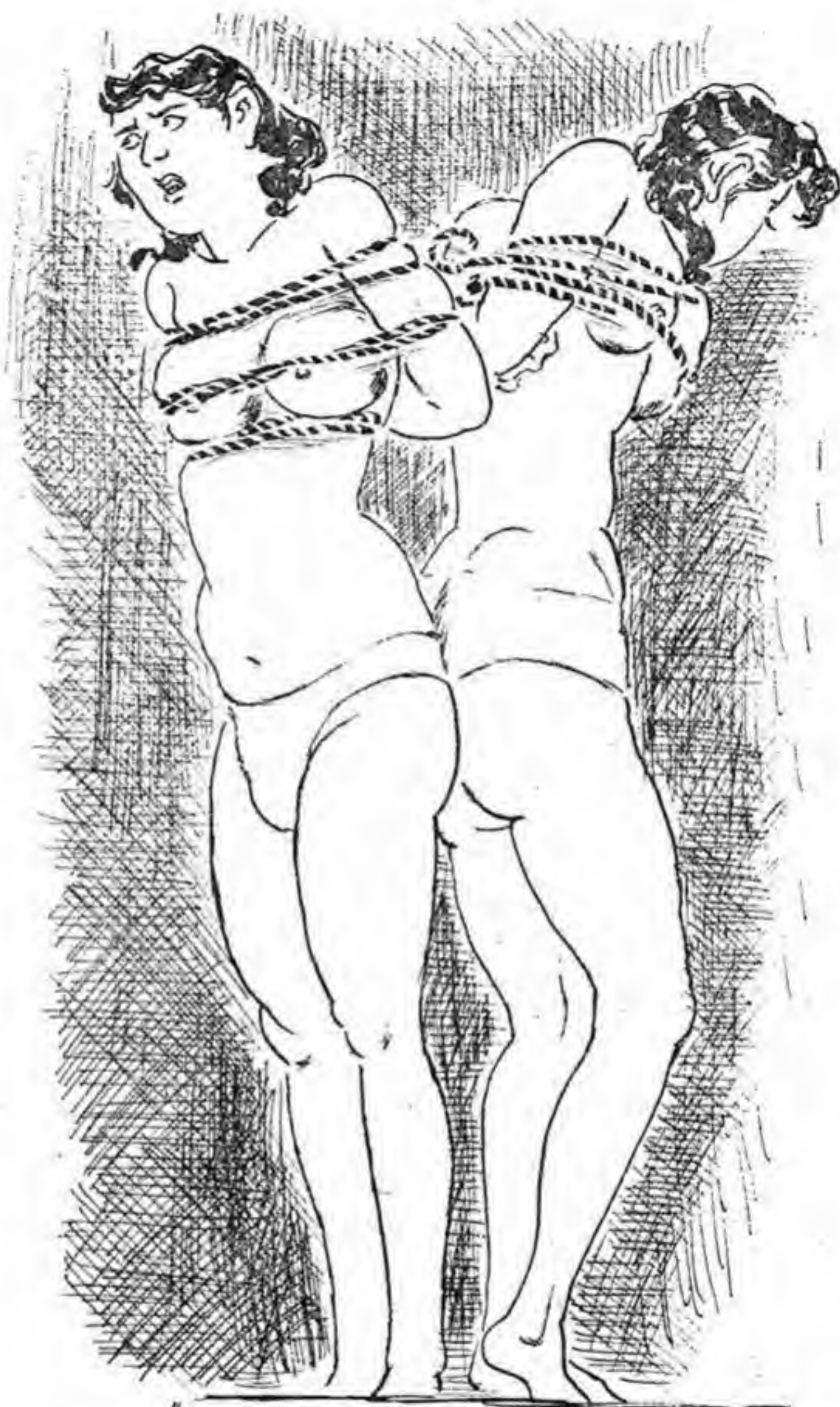
しかし、何という破廉恥な狼共であろう。
心臓もはりさけるばかりの恥しい断髪を二
人に行ったあと、そんな姿のまま、衆人環境
の中で——もはや、女に加えられる羞恥責め
を超越した責めである。

静子夫人と京子は、もう人間的な感情を一
切、捨て切った心地で、のど元までこみあが
って来た火の塊のようなものを呑みこみ、観
念の眼を閉じているのだ。

川田は、静子夫人のほりの深い、気品のあ
る容貌を舌なめずりするように眺めている。

「へっへ、奥さん。そうなった身体で、洗
面器を使うのは、いい気持だろうな。見る方
も見ごたえがあるがね」

静子夫人は眼を開き、すべてを諦めきった
というような澄みきった美しい黒瞳を川田に



注ぐ。

「川田さん、お酒、お酒を飲ませて頂戴」
酒の力でも借りて、神経を麻痺させねば、
とうてい演じられぬ事なのだ。

「よかろう。酒は好きなだけ飲ませてやるが
そのかわり、ちゃんと口上をのべて、元、遠
山財閥の令夫人として恥ずかしくないよう、

堂々と演じなきゃ駄目だぜ」

川田に、そういわれた静子夫人は、悲しげ
に眼をしばたいて、小さくうなずき、川田か
ら羞しげに視線をそらせた。

「京子嬢もどうだい。おめえも元気づけに一
杯やるかね」

川田に頬をつかれた京子、

「飲、飲ませて頂戴。私にも—
」
と、捨鉢になったように叫ん
だ。

静子夫人も京子も、飲める筈
のない酒であるが、それを無理
に飲む事によって、この息も止
まるばかりの屈辱感から少しで
も逃れようと思ったのである。

「じゃ、社長は静子令夫人に、
親分は京子嬢に、それぞれ酒を
飲ませてやっておくんなさい」

田代と森田は、川田に頼まれ
ると、承知致した、と笑いなが
ら、コップになみなみと日本酒
を注ぎ、それを手にして、それ
ぞれ二人の美女の前に立った。

銀子と朱美が、ふらふら、そ

の中へ割って入って、

「あんた達の要求を聞きとどけて、社長と親
分がわざわざ運んで下さったのじゃないか。
二人とも感謝して、最初の一杯は、口うつし
で飲ませてもらうんだよ」

静子夫人も、京子も、口惜しげに唇を噛み
顔を横へ伏せてしまふ。だが、田代は、すで

にコップ酒を一息口に含んで、夫人の艶やかな首筋に手を巻きつけ、彼女の顔に自分の顔を押しつけていこうとする。

静子夫人は、遂に抗し切れず、田代のいやらしくつき出して来る唇に唇を合わす。苦しげに眉を八の字に寄せた夫人は、田代の吹き出す口中の酒を、ごくごくりと音をさせて飲むのであった。

「ああ——」

京子も、遂に、森田の唇を我が唇で受け、切なげに眼を閉じ、ごくごくりとのを喝らしている。合わせた唇と唇の間から、酒の滴と唾液がからまって流れ落ち、そうした光景は、美しい蝶をとらえた毒グモが、蝶の口に毒汁を注入しているものに似ていた。

「どうだい。もう一杯、飲むかい」

ようやく、体を離れた田代と森田は、眼の前の美女の顔をのぞきこむように言う。

夫人も京子も、激しく首を横に振った。

「そうかい。もう充分だというんだな。じゃ始めて頂く事にしようじゃないか」

川田が乗りこんで来て、じゃ、奥さん、口上をいって頂こうか、と再び、夫人の耳に口を寄せ、何かささやくのであった。

ギラギラしたやくざ達の眼、ニヤニヤした

ズベ公達の口もと。静子夫人は、口うつしに田代から飲まされたコップ一杯の酒で、ほんのり染まってきた、妙になまめかしい眼元を上へあげ、死んだような気持になって、口を開く。

「皆様、色々と御批評の言葉を頂き、有難うございました。そのお礼の意味で、只今からこのままの姿で演じさせて頂きます。ど、どうか、もっと、傍にお寄りになって一部始終くわしく御覧になって下さいまし」

それを聞くと、野卑な男女は、わっと歓声をあげて、二人の美女がさらされている台の上へかけ上って来て、夫人と京子の周囲に蟻のように寄りたかる。

朱美は、京子の足下の洗面器をとって、

「さあ、京子嬢、これは、どのへんに置くんさい。ちゃんと計算して場所をきめな。この前は、大目に見てやったが、ここは、舞台の上だ。一滴でも外へ洩らしちゃ承知しないからね。ふっふふ、すばらしいお仕置が用意してあるのよ」

朱美はそんな事をいい、

「さ、どのあたりに置くの。返事しないと、二米も離れた所に置いちゃうわよ」

京子は、耳たぶまで真っ赤になった顔を肩

にすりつけるようにし、眼を固く閉ざしたまま、蚊の鳴くような声を震わせて

「あ、足の、足の間に——置いて下さい」

それを聞くと、マリが口を歪めて、

「あら、京子のお姐さん。足の間なんかでいいの。障碍物がなくなっただから、もっと遠くへ飛ばせるんじゃないの」

などといったので、ズベ公達は、どっと笑い出した。

「ね、このへんにしなよ。遠慮することはないわよ」

マリは、洗面器を一米ばかり離れた所へ置く。

京子は、たまらなくなったように肩を震わせて泣き出す。

「さて、次は、奥様だけど——」

銀子は、夫人の足下にある洗面器を手にする、京子の容器が置かれてある所よりも更に離れた所へ、それを配置するのだった。

「奥様は、小唄、踊り、お花、とどのような芸事にも秀れていらっしゃる遠山財閥の令夫人でいらっしゃるもの。ホホホホ、これ位、飛ばす事など何んでもないでしょう」

銀子は、そんな事をいって、声をたてて笑うのだった。

川田も吹き出して、

「ふっふふ、奥さん、ま、そんな情ない顔せず、遠山家の名誉のためだと思って、がんばってみるんだな。いっとくけど、一しずくでも、外へ洩らしたりすりゃ、こたえられねえほどの羞しい目に合わされるんだぜ。そのつもりでしっかりやんな」

静子夫人は、こらえきれなくなり、わっと

本誌予約購読者を募る

予約申込者月毎激増中です

毎月確実二十五日発売!

○現在本誌はいろいろの事情で全国末端まで円滑に配本できませんので、所により非常に入手困難だと思えます。毎月確実に御入手されるためには、是非直接予約お申込み下さるようお願い致します。

○予約御購読なさるには、予約購読料を天星社(大阪阿倍野局私書箱第十四号)宛お払込み下さい。よろしいのです。

○本誌の送料、包装代などは、すべて当社にて負担いたしますから、読代のみ御送金下さい。予約購読料は一月分一冊三〇〇円三月分三冊九〇〇円、半年分六冊一八〇〇円、一年分十二冊三六〇〇円です。

声をあげて泣き出した。

「か、川田さん、あんまりです。あんまりですわ」

あとは言葉にならず、泣きじゃくる静子夫人であつたがズベ公達は、そんな哀願など屁とも思わず二人の美女の周囲によりたかる。

「いいかい。よいいどん、で、お尻を思いきりぶってあげるから、そしたら、二人同時に

○予約お申込みの方には、毎月二十日頃、印刷完成と同時に、外部から見えないよう厳重包装の上確実に発送いたします。

○予約お申込みの際は、新規、継続にかかわらず、何年何月号から何カ月分予約とはっきりお書き願います。

○予約金が切れました節は、封筒の上に、「本号にて前金切」の判を捺印いたしますから継続お払込み願います。その際でも何月号からと、お書き添え願います。

○送り先は、心ず楷書で、肩書(何々方又は何々社内)などがあればお忘れなくお書き願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになりたい御方は、お受けとりに行かれる局を指定下されば、その局留として発送いたしますから毎月二十五日過ぎに局へお出向きの上、お受けとり下さい。局での留置期間は十日間です。その月中においでになれば、いつでもお受けとりになれます。

始めるのよ」

銀子が、そういい、京子の方に寄りそっている朱美と眼で合図し合いながら、手を振りあげた。

「お尻をぶたれても、いわれた事を始めなきゃ——わかってるわね。もうすぐ、ここへやって来る桂子と美津子が、あんだ達の目の前で、ひどい目に合うのよ」

静子夫人と京子は、激しく、すすりあげながら、悲痛な決心をし、前方の洗面器に眼を向けた。

「さあ、奥様も、京子嬢も、前の洗面器をよく狙って」

マリがくすくす笑いながらいい、銀子と朱美が、再び、大きく手をあげて、

「よいい」

その掛声も打ち消されるほどの哄笑と爆笑とが、狭い室中に充満して脂ぎった熱気がむんむんと立ちこめるのだった。

そんな室内の乱痴気さわぎにひきかえ、この土蔵の外では、次第に夜は更けわたり、竹藪の茂みでは、さやさやと吹く風が葉ずれを起させていた。

(つづく)

△あるサジスチンの告白▽

虹のあじさい

東

雪 枝

指定したレストランは日比谷公園の近くでした。ドアボーイにさそい込まれる様に中へ入った私の耳に、タイミング良く程よいポリウムのタンゴの曲がきこえてきました。私はタンゴの曲が大好きなのです。この店は、私の氣にいらいます。うるさい位のサービスマンも見せず、それでいて気がきいて静かで、一寸ばかり貴族的な飾りつけ、ゆったりとした椅子、テーブル、いつ来てもあきません。

今日は、この「エステル」へ一人の男と逢うつもりで来ました。読者通信で知りあっただけの顔も知らないマゾ男。大阪からわざわざ責められたという一心で、のこのこと現れた哀れな男は、一体どこにいるのかしら。私は席が氣にいらぬ振りをして、辺りを見回しました。私が命令した目印をして坐っている男を探したのです。左中指にホータイをして、その手にピースの箱を握っている男……。それは一番限の席にいました。私は深く息を吸い込んで満足しました。顔はきっとニヤツとしていたかもしれません。

いつけました。約束の時間は十三時二十分から三十分間、今は二十五分です。タバコの煙りは快く白紫の線をひいています。

十三時三十二分。男は腕時計を見えています。料理を注文した様子も飲物を飲んだ様子もありません。オーダーもせず、つくねんを見知らぬ人を待つ男の気持は、どういふのでしょう。

十三時四十分。私の前にスーパがきましたので、私はゆっくりスプーンを動かしながら尚も男から目を離しません。男は不安そうなおどおどした態度に変わり、又時計に目をやっ

ています。そして初めて自分の周りを見まわしました。彼から目を離さない私の目と当然視線が合いました。探る様な問い掛けたい様な不安そうな瞳を、その視線の中から掴み得た私はとても愉快になりました。

そして、さりげなく視線をはずして二本目の火をつけたのです。タンゴの曲は終り、ゆるやかなブルースの曲が、ほの暗い室内に流れて、私の優越感を高める様でした。

十四時。男は軽く目を閉じ、深いタメ息を吐いています。目をあいて時計を見てから、ボーイを手招きしています。「待ち合せの人が見えないので食事にするから、メニューをたのむ」と言っています。割り合いにいい声です。この渋い声を持つ男が、私の前で打ちのめされた時、どんな声に変わるかと思うと、楽しみです。

その時、皿を持ったボーイが私のテーブルに近づいてきました。ボーイが皿を並べようとした時、私は言いました。「ボーイさん、すみませんが、食事はあの方のテーブルでとりますから、あそこへ運んで下さい」ボーイは瞬間とまどっていました。すぐ事務的に「ハイ、かしこまりました」と返事をして彼のテーブルへ行きました。

「あちらの御婦人が、こちらでお食事とこのとでございます。」と丁寧に言い彼と向い合う様に料理を並べました。その時の男の顔は一寸私の拙いペンでは形容できません。

ビックリしたと云う言葉がピッタリ。そして、みるみる赤くなり組んでいた足を下し、坐り直しました。私はニコリ笑いかけて乍ら彼の前に坐りました。そして何も云わずナイフをとりフォークを手にして食事を始めました。ボーイがメニューを持って、彼のそばへ来ました。

「御注文は？」

「あゝ……」

男は舌がひきつゝている様な、声にならない声を出し、又あわてゝ咳ばらいし乍ら、私の方をチラッと見ました。私は知らん顔して食事中。彼は「ビールとチーズ、サラダも」と云い終って、ボーイが去るとポケットから真っ白なハンカチを出して額の汗を拭いています。「クスン！」と私は思わず笑ってしまいました。六月始めとは云え、汗などかく程ではない様に、適当な温度調整がしてあるこの室内です。おかしくなりました。私が笑った時、男はビクン！として私を見ました。何か云いかけてましたが止めた様です。私は又

無言。

ビールが運ばれ、ボーイが私に「どうなさいますか」と聞くので「少しだけ」と云って注いで貰いました。次に、別のグラスを彼の前に置き「どうぞ」とすすめています。彼は「あとで」と短かく云い、ボーイが去るのを待つて居ります。やがて、男は我慢が出来かねたのか

「東さんでしょうか」と問いかけました。私は、「そうよ」と答えて、食事を中止しました。ボーイを呼んで片付けさせてから、

「私は貴方の横で三十分も貴方を見ていました」と話し出したのです。

「そりゃあ、ひどい。私は十三時にこゝへ来て、失礼があつてはならないと気を使い、何も注文しないでバツの悪いのを我慢して一時間も貴女を待つていたのに、あんまりでしょう」

一生懸命、声を殺して私に訴える彼から受ける印象は生一本な好青年として私の目にうつり、私の心証をよくしましたが、奴隷としてこれから仕える私に云うべき言葉ではありません。私は、むずかしい顔を作り乍ら、さも不愉快だと云う調子で「何云つてゐるの、それがどうしたの、当り前

でしょう、いゝ？ 私は貴方とどう云うおつき合いがあったの？ 恋人でも知り合いでもない、始めて会う貴方がどんな人か、見て判断していたのが何故悪いの。十三時から来ていたと云うけど、それはそちらの勝手でしょう。約束は十三時二十分からだったもの。何も食わず、飲まないでいたのも、そちらの勝手、私がそうしなさいと命令したわけではないもの」

矢つぎ早やにこれだけ云つてから、私は伝票を持って立ち上りました。男は青ざめて、そしてあわてゝ

「待って下さい。私が云い過ぎました。そうです、私の勝手でした。あやまりますから帰らないで下さい」と、腕をつかまなばかりです。ボーイ達が知らぬ振りをして、それでいてチラリチラリと見ています。私は又、腰を下し

「そんな大きな声、出してはイヤよ。恥ずかしいでしょう。判ったの？ 本当？ でも云って置くけど、いゝ？ 犬屋へ犬を買いに行つて第一印象だけで買う人がいる？ いろいろ観察して、それから買うでしょう。私の今の立場はそれよ。一時間位待たされたからって文句を云う犬は駄犬よ。お前は今、私に飼

つて貰えるか貰えないかの大切な時なのよ。忠実で忍耐強くて、しかも可愛らしい雰囲気、の犬が私の好みなの。お前は不適當な様ね」
静かに私は云つたのです。男は、三十才とは思えぬ、若々しい顔を青ざめて、形のよい唇を震わせて居りましたが

「許して下さい。私は貴女のような方にお目にかゝった事がないのです。私の切ない毎日の空想の中には、貴方のような方がいつも存在していたのに現実となった事に、戸惑つて普通の人間らしい言葉を云つてしまいました。忠誠を誓いますからお機嫌を直して下さい。お願いです」

必死に頼む、この身だしなみのよい青年紳士を飼育するこれからが楽しみです。私はニコリして

「私は気が短いからクドクドしているのはイヤです。お前が改めて私に忠誠を誓うなら、許して上げます。さあ右手を出して腕時計を外しなさい」

男はキョトンとした顔つきになりましたが又私が怒り出すのを恐れる様に、云われた通りにしました。三本目のタバコの煙を吸いこんで、私は出された男の手の丁度時計の丸い跡の所へ火を近づけました。男はおびえた様

な目つきをし、かすかに手をずらしました。
「さあ、今迄の言葉が本当かどうか、又、これから私の下僕となつて奉仕出来る犬となれるかどうかテストします。テストは三つありますが、これはその第一番目です。いやと云うなら今のうちよ」

私の言葉を男はどんな気持で聞いているのでしょうか、やがて決心した様に無言で手を出して来ました。幸い、この席は一番隅の、カウンタから目立たない所にあります。ボーイ達も先程からの私達の様子で、少し変だなあとは思つてもまさかこういう事をしていとは思わないでしょう。天井のシャンデリヤが冷めたく美しい紫色の光を沈めて居ります。電流の通らないシャンデリヤも又、變つた冷めたい美しさを表すものです。きれいなあと思いました。もう一ぶく吸いこんだタバコの火はチカリッと赤い点を示し、そして白黒い灰に包まれました。

「声を出してはいけない」

私は云い乍ら左手で男の手をおさえ、タバコの火を押しつけました。

「ウッ！……」

男は、強く押さえられた手を引こうと身をよじります。私の手の力は加わり、男の顔を

見てゾクゾクする快感を覚えました。

「ウッ……アッ！」

押し殺した男の声と息づかいは、私にとってこよない音楽です。苦痛を耐える男の顔は私にとってすばらしい贈り物です。やがて終わりました。

「よく我慢したわ、さあ目立つといけなから、その上に時計をはめなさい」

云われた通りに機械人形のように男はしました。けれど焼けた上へ時計をはめればだんだんむれて痛くなる事を知らないのかしら、その店で一時間三十分ばかり、男はとうとう何も口にしないで、私達は外へ出たのです。第二のテストをする為に、受ける為に……。

初夏の風は快く、秋のような青く高い空は地下室から出た私には目のくらむ様な明るさです。彼と連れだって歩く様子は平凡なアベック、道行く人の流れに入って何の不自然さも感じません。混雑する道の中を私達は三愛の前まで来ました。「エステル」からこゝまで無言。只、私の横に従う彼は時々右手首を気にして私に気付かれない様に、そつと確かめて居る様です。三愛の入り口に來た時、私は男に云いました。

「第二のテストは、こゝの中でするの」

男の瞳の奥がチラッと動くのを確かめて、私は人の流れに入りました。この店も私が好きなところ、シャレたセンスの良い品が割りと安く買えるからです。婦人客の多い中を、私の後から黙ってついて来る男の心境を考えると楽しくなるのです。やがて、私は婦人下着売場で立ち止まったのです。後の男を振り返るとギョツとした表情で私の目を見つめ、そして気弱げに目を伏せたのです。私は低く、でもハッキリと

「さあ、第二のテストよ。私は向う側にいて見ていて上げるから、パンティを買ってきなさい。見た目が美しく丈夫な品をよく選ぶのよ」

それだけ云って男の顔も見ず、歩き出しました。私はパンティ売場の前でストッキングを選ぶ様子をしながら男の方を見ました。男は、立ち止ったまゝ動こうともしないでボヤッとしているのです。そして私の目とカチ合ったとたん、決心した様に品物のある所へ来ました。何しろ場所と云い売っている品物と云い婦人専用品ばかりなのです。男性なんか照れ臭くて近寄らない所です。彼はオズオズとパンティの山の中から一枚取った様です。彼の両隣の女性が、さもいやらしそうに彼

を見ています。彼は、その女性達の視線を感じたのか、みるみるうちに真ッ赤な顔になりました。きつと心臓もドキドキと波立っているに違いありません。私は嬉しくなりました。もっともっと恥かしい思いをすればいい、もっともっと両隣の女性から軽蔑されてツバの一つもかけられる様にならないかしら、そして、あの男には一体どういう変化が表れるだろう。……私はいろいろ空想したので。私の空想の早さにくらべて男の動作はのろのろとしていて、気短かな私をイライラさせました。

男は、モジモジとパンティの山に指をはわせていましたが驚いた事にそのまま買わずに私を目で探し、やがて私の前迄來たのです。突然、彼の気が変わったのかしらと私は思いました。でも、それは私の思い違いでした。彼は私の前へ來ると

「あの一、色のお好みとサイズをお聞きしませんでしたので伺いに來ました」と意外にハッキリ云うのです。

「そうだったわね。私はブルーが好きよ、サイズはしよ」

私は答えました。そして更に「早くしなさい。私は疲れたわ」

と突っ放す様に云つて横を向いてしまひました。「どうにでもなれ！」と云つた様な顔つきで、前と違ったシッカリした足どりで彼はパンティ売場の前へ戻りました。でも矢張り恥かしそうに指にまつわりつく、柔かなパンティの中からブルーの品を選び、店員に渡しました。店員の顔がこちらから見えないのが残念です。でも声だけはハッキリ聞こえたのです。

「ありがとうございます。お客様、サイズはMでよろしいのですね」とわざと云っている女店員はきつとあの男を軽蔑しているに違いないと私は思い、嬉しくなりました。男は「いや、あの…それMですか、Lが欲しいの



ですが」と、ヘドモドしながら女店員から引たたくように品物を取り上げて又、一生懸

命に探し始めました。見ると、先程の女店員は同じ仲間と顔を見合せてニヤニヤしているのです。きつと「変態ね、この人」なんて囁き合つたのかも知れません。やっとLサイズが見つかったらしく、男は又、同じ女店員に渡しました。店員も今度はさすがにたしなみよく、「ありがとうございます。三百円でございます」と応待しています。男は一秒でも早くその場を去りたい様な顔つきで、お金を支払って、包みが出来るまで落ちつきなく左右を見まわしています。

「お待たせ致しました」

殊更、大きな声で女店員は云つてバカ丁寧におじぎをしています。彼は、そんな店員の声に、まるで追いかける様に私の側へ近づいてきました。それを見とどけてから私は足早やにそこを歩き出しました。何故ってとても恥かしくてそんな男と一緒になんか歩けないもの。だって皆が見るでしょうから。

後から、おくれまいと足を早める彼の顔は

さぞ恨めしように私の後姿を睨んでいる事でしょう。とに角、外へ出なくては、……やっとの思いで外へ出た私は男の近づくのを待つてやりました。

私達は、銀座の裏通りを黙って歩いていました。さりげない話題を探して、話をする事は出来ませんが、私と彼の場合、それは無意味に違いなと思ったから只、次の目的地まで黙々とアスファルトに足音だけを響かせているのです。

私がサジスチンであると自覚したのは何時頃の事だったか、今は記憶にありませんが、男の人をいじめる事に快感を覚えたのは未だ少女期の頃だった様です。そのうち、男の人にきたない足等洗って貰いたい、寒い時期には冷めたい水の代りに、男の人の舌で汚れた足をきれいにさせたい、と思う様になりました。更に進んだ頃は、ゴツゴツした骨格の男を縛り上げて、ムチで打ちのめしたらどんなに素晴らしいだろう……と思い始めました。そうして、だんだん私の性質の中には人とは違った異常な血が騒ぎ出したのです。

通学の途中、電車やバスの中で無意識を粧いながら男の足をふんづけたり、ソロバンの角で（ムキ出しの）ギューウツと手の甲をねじ

り上げたり、よろけたついでに男の人にかまふフリをして、いやという程つねったり、私に許された行動範囲の中で、私は自分の気持を満たして居りました。そんな時、もし相手の男の人が非難する目を私に向けた場合、私は器用に赤くなりながら、さも済まないと言う顔をしながら云うのです。

「あら、すみません……ごめんなさいね」と。……

さて私達は一軒の金物屋の前に来ました。

「さあ、これがテストの最後よ、頑張って」

「？」

「この店で犬の首輪とクサリを買うの。それから、きれいな引き綱も買うのよ」

「？」

「勿論、お前が買うのよ、でも今度は私も一緒に緒だから少しは心強いでしょう」

優しく私は云ってやりました。男の返事を待たずに店の中へ入り店員を呼びました。前に何度も通りかかって知っているのですが、この店員は可愛らしい女の子なのです。でも、残念な事には、今日は彼女はお休みらしく、代りにこの店の主人らしい貧相な顔をした六十位の男がペコペコしながら奥から出て参りました。「しまった」とは思いましたが

後には引けず、露骨に不機嫌な顔をして「首輪を見せて下さい」と云いつけました。

「ハイ、どの位の大きさのワンちゃんでしょうか、いろいろとございますが、ハイ、こちらでございますが」

主人は、必要以上にペコペコして私達を、その品物の前へ案内しました。側にいる男の顔は青くなり、そして赤くなりました。

「犬のじゃあないの。この人のなの」

私は平然と云ってのけました。主人はビックリした様ですが、忽ち卑屈な笑いを浮かべると

「ご冗談がお上手で……へ……ハア、そうですか、太くて丈夫な首輪が御希望だという意味でございますうな」

と、判った様な、判らない様な事を口走ってグリーンズの皮の大きな首輪を差し出しました。一言も、ものを云わない男の側へ私は近づき

「ねえ、あなた、これどうかしら、お気に召して」と、言葉つきは甘く、目は冷やかに云ってやりました。突然の私の変身ぶりに男はヘドモドし乍ら

「え？ ああ、そうね」

ですってフッフ、バカみたい。

「ねえ御主人、それ、見ただけでは判らないわ。うちのワンちゃんも丁度彼の首の太さなのよ。かまいませんから、それ、彼の首にはめて計ってみて」

当然主人は目を見張り、戸惑った様子でしたが、当の本人が黙っているのは承知しているものと合点したらしく、でもすぐ遠慮しながら彼の前に立ちました。男は泣き出しそうな、恨らめしそうな顔で私を見ました。私はその目をじっと見つめ乍ら低い声で

「早くしなさい。でもいやならこの儘帰りなさい。私は止めないからね」

と申し渡しました。男は破れかぶれの態度で、でも恥かしさを少しでもまぎらわそうとおどけた声で主人に云いました。

「どれどれ、僕に似合うかどうか、首にまわして確かめようかな」

主人はどう感違いしたのか、ニヤニヤしながら首輪を男の首にまわし、きっちりはめ込みました。

「アラ、とてもステキ、あなた、よく似合うわ」

殊更、はしゃいだ声で私は云ってやりました。店の主人も男も、何も云わず、男は私の顔を見、主人は床に目を落し、白々しい一瞬

でした。それを破って私の声が続くのです。「くさりはどこ、細くてきれいで丈夫なのがいいわ、ねえ、あなた」

男は何か云おうとして声をつまらせています。主人はと云えば、もう仕方なしと云った態度で、銀色のきれいなクサリを選んで、今度は直接私に渡しました。私は男の首に手をかけてニコニコしながら、そのクサリを男の首輪に付けました。さすがに店の主人はハッとして目をそらしました。男もあわてて首に手をかけ、首輪をはずそうとしたのです。私はムツとして

「いいのよ。そのまま、とっても素敵なのに」

と云い乍らクサリをグイッと引張りました。そして、私のなすがままの男を鏡の前まで連れて行き、

「どう、この有様は。あなたの渴望する、あなたと私の姿よ。よく見なさい」と云いながら又、グイッとクサリを引張りました。鏡の中の奇妙な光景は、私を喜ばせサジスチックな血を、いやが上にも沸上らせました。

男はオゾオゾと鏡の中の自分の姿を見て居ります。グリーンの首輪は不思議な程彼にマッチして妖しい色気さえ感じました。ウット

りした男の目からは、先程迄の恥かしさという立たしきは全く消え、只、鏡に写る自分の姿にマゾとしての深い感激しかない様に見えました。私は、このまま男を引張って街中を歩いてみたい気持をおさえるのに一生懸命でした。いくら何でも、それではあんまり赤裸々過ぎて却って面白味も半減するでしょうしSMに全く関係のない人達から見世物みたいに見られる事は、何としても耐えられない事です。それだけは、私の理性が勝目を上げたのです。

さて、そのままの姿でいる私達を現実へ戻したのは、他のお客が入って来たからです。私達は気がつきませんでした。店の主人の方がどう云うものか、大いにあわてて私に「あの……お気に召しましたら、お包み致しますよう」と耳許で囁いたので、そこで始めて客が入って来た事に気がついた私は、男に目で合図をしました。男は目で返事をし、残り惜し気に首輪を外し、クサリも取り外し、主人に渡しました。私は沢山ぶら下っている引き綱の中から燃える様な赤の色を選び、それも主人に渡しました。

「ハイハイ、ありがとうございました。全部で千六百八十円でございます」

主人は、商品の売れたことを喜ぶより、この奇妙な二人連が、やっと目的を達して帰って貰える事の方が嬉しかったのではないかと私は考えました。私がそうヒガム程主人の態度はいそいそして見えたのです。

男に、品物の入った袋を持つ様に命じ、外へ出た私は、さすがに疲れを感じました。思えば男も従順によく頑張ったものです。十三時に私を待ってから、今は十七時です。四時間もの間、少しも気持の上では休む事なく私

◎女性モデルを募る◎

○本誌では、口絵写真又は分譲用写真の女性モデルとして出演可能の方、並にプレイご希望の方を募ります。編集部宛て照会下されば、報酬その他詳細お返事の上お打合せいたします。

○緊縛写真希望者は勿論のこと、女相撲女斗美、切腹、浣腸などをはじめとしてMフオートのサジスチンとして出演ご希望の方なども歓迎いたします。

○本誌のグラビア頁並に分譲品を充実するため何卒奮ってご応募あらんことをお待ちしております。妊婦フोट撮影可能の方、遠近に拘らずご連絡願います。

天星社編集部

の云いなりになった男を、私は合格と決めました。未だ明かるい街中の、行きずりの喫茶店へ私達は入り席へ着いたとたん、二人だけに通じるある種の笑みを交し合ったのです。ウェイトレスが去った後、私はごく自然に彼に話しかけました。

「よく頑張りましたわ、疲れた？」

「いいえ、……でも私は合格でしょうか、それとも……」

「合格よ、テストはね。でも、これからも大変よ」

「？」

「私はわがままで気短かで自尊心が強いのに……」

「私に逆らう様な言葉、態度をしたら、それで私とお前の関係はオシマイよ。自信があるなら、これからお互いの性格を裸にしてつきあうわ、でも無理にとは云わないけど……」

「ありがとうございます。私は貴女様のお気に召す様、最大の努力をします。ですから、うんと私をいじめさげすんで下さい」

「そうされる事が嬉しいのね」

「ハイ」

「お互いに社会人としてのエチケット。つまりSM以外のプライバシーは、ノータッチ。」

やさしい様で、これが一番むずかしいと思うの。でもそれを守るなら……。約束守れる」

「ハイ、勿論です」

「それならいいの。さあのが乾いたでしよう。ここは公の場所、気楽に召し上れ」

「ハイ」

「ここを出て車で代々木へ行きましょうね」

「ハイ」

この店は若い人達のたまり場らしく、ハデな男女があたりかまわず下品な笑い声を上げているのには閉口しました。音楽とは思えぬ程の騒々しい音がせまい店内に響き渡り、全く頭が痛くなりそうです。こんな店は大きいです。彼と年令的に大差ない私は、矢張り静かな落ちついた所に魅力を感じます。場違いな所から早く出たいと思ったのは、私ばかりではなく、彼もソワソワして落ちつきません。

「さあ、出ましょう。頭が痛くなりそうよ」

「ハイ」

私達は、ようやく暗くなりかけた街中を車を見つけに急ぎました。私の手にはハンドバッグ。男の手にはパンティの包みと首輪等の入った小さな袋が、しっかりと握られておりました。

(未完)

青木順子ショウ見聞記

糸 島 博

1

今年の春のことである。

私はスポーツ紙の演芸案内を見ていて、その活字にどきっとした。それは、大阪ミナミ『道劇』の宣伝広告であった。

△被虐願望の女性◇青木順子◇誰か私を責めて下さい▽とある。

映画ではスチールなどにだまされてみに行き、期待を裏切られて帰る時などの方が多いのだが、それでもこりずに、やはり、こんな見出しを見ると食欲がそられて、みに行きたくなるのである。

それがSMの心理というものだろうか。もしやにかける人間の本能かもしれない。

私は早速に出かけて行った。道頓堀にある劇場前の大きな立看板にも新聞と同じ事が、でか／＼と書かれてあった。

あたりを気にしながら私は、切符を買うや中へ飛込んだ。入ってみると、おきまりのストリップをやっている。見るともなしに見ている間に時間は過ぎた。一向に青木順子らしき女性が舞台に出てこないのである。そうしている間に見た時と、同じ舞台になってしまったのである。そう一回目が済んだのだ。

私は期待を裏切られたショックで、何故彼女が舞台に出なかったかと、聞きあわす勇氣も失せて劇場を後にした。

それからしばらくして、ある月刊誌の中で

青木順子の事に就いて書かれてあった。

それを読んで、私は元氣をとりもどした。

青木順子は実在する――。

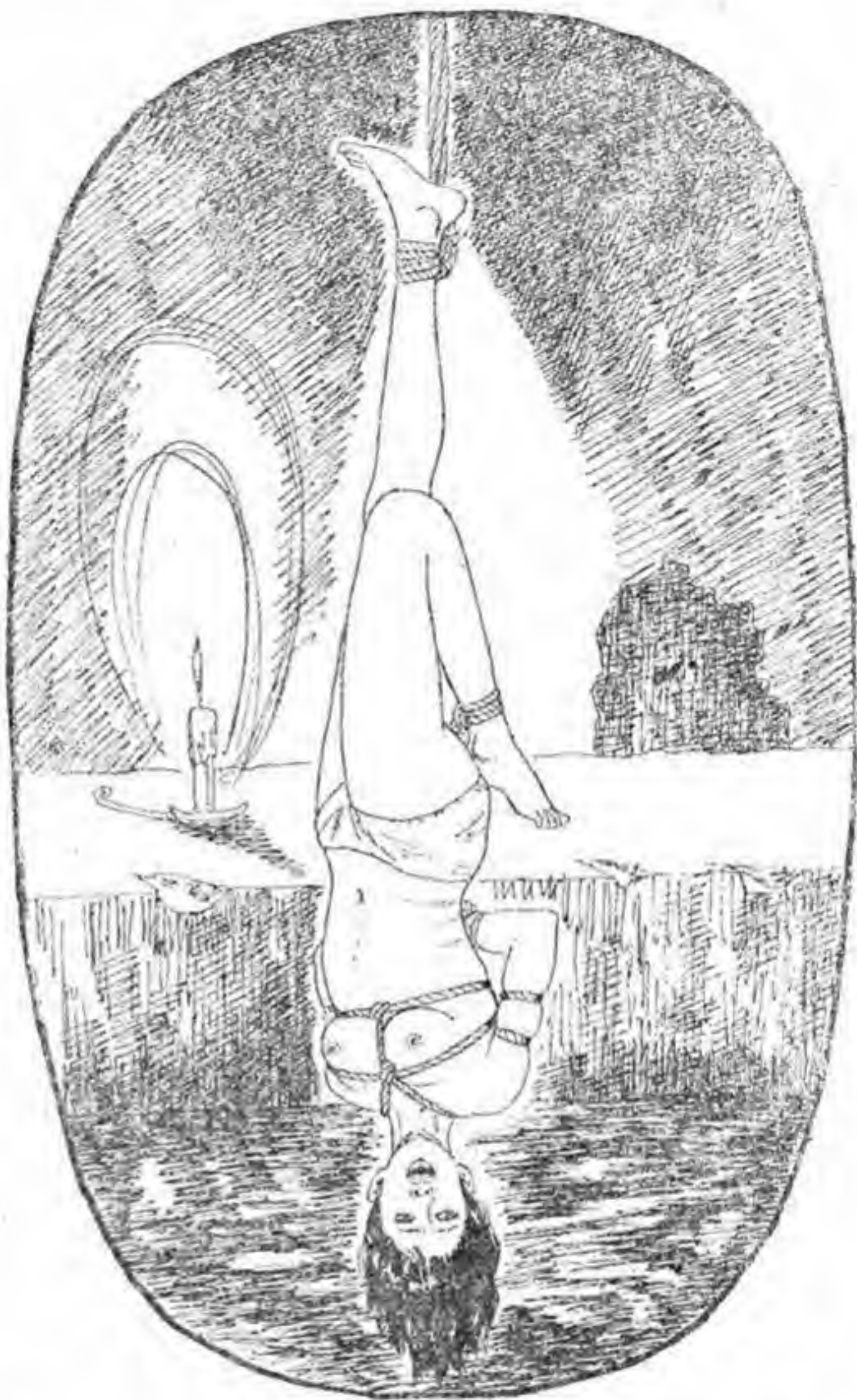
各地を巡業しているとあるからは、必ず大阪へも来る事もあると思い、私は新聞の演芸案内の中に、青木順子の活字が出るのを、今日か明日かと待った。

一向に出てこなかったが、私は偶然のことから彼女の舞台をみたのである。やはり道劇である。

四月に『肉体の門』が上演されて、U誌のグラビアをかざっていた緊縛モデルの南ユリがボルネオのマヤにふんして、リンチの吊り責めをみせていた。

それから半月程してから、私は再び道劇へ行ったのである。

それは唯の時間つぶしの積りであった。入口で貰ったパンフレットを見るともなしに見ていた私は、出演者の名に青木順子とあるのをみて、驚くと共に期待と不安で気もそぞろであった。しかしそれもしばらくして、舞台



での熱演に消し飛んでしまった。

幕があくと、一人の画家（向井一也）が、考え込んでいる。その横に組まれた梯子に、黒タイツの女が吊り上げられていた。

青木順子である。ロープは股間に喰い込んでいる。私が今迄、舞台ではじめてみる股間縛りである。

画家はアイデアに困っているらしく、其の間に一度女の縄をほどき、タイツを脱がしてシュミーズ姿にしてから、又縄を念入りにかけて、舞台のカンパスの上をころがしたり引きずりまわしたりするのである。

それは客席が静まりかえり、唯じっと見つめる程に強烈なものであった。私は満足感を覚えながら劇場を後にした。

唯欲を云えば、二十分位の時間では短かすぎる等勝手な事をぼやきながら……

2

偶然というものは、そう何回もあるものではない。私はその点でめぐまれているのか、二回目の偶然が青木順子を見る機会になったのである。

六月のはじめの事であった。

社用で私は久し振りに神戸へ行った。用を済して三ノ宮駅から電車に乗ろうと、三ノ宮に出て来た。

国鉄の三ノ宮駅の高架の下に、三ノ宮ミュージックと、名は立派だが中は三流位の小さな小屋がある。

ずっと昔に一度来た事がある。

なつかしく思えて、看板でもみてやれと劇場の前に来て驚いたのである。

青木順子の立看板が出ている――。

私はためらう事もなく中へ入った。映画と実演の二本立であって、雨の降った西部劇の映画が済むと、いよいよ待望の実演である。

出し物は大阪でやった物とは替っていた。

一人の女の記憶を失っているのを、昔の恋人が、SMプレイによって昔を思い出させようとして、思い出した所で男が持病で死ぬという筋書であった。

此処でも順子はシュミーズ姿であった。口で男のはいている靴をくわえたり、ローソク責めにしたり、すさまじいの一語につきた。

舞台での彼女がもらす悲鳴は、真にせまうていて、私には何だか芝居を通り越して、Sの男と、Mの女が、プレイを楽しんでいる様にさえ思えた。

それからしばらくして青木順子が、神戸西代キネマに出演している事が、スポーツ紙の演芸案内に出ていた。

青木順子の名をみると、もう無精にみにいきたくなった。

だが神戸西代キネマだけでは場所がわからないので、私はまず神戸市街図を買って、西

代という場所をさがした。

常人が聞いたら笑い話になる様なマニヤの熱心さであった。

山陽電鉄に西代という駅があるのを見つけた。私はさっそく、その駅へ向った。

雨のきつい日だった。西代町といっても広い。

場所柄人に聞くのもてれくさいので、自分でさがす事にした。私は先ず表通からさがしだした。しばらく雨の中を歩いていると、電柱に『ストリップの殿堂西代キネマ』と看板が出ていた。目的は近い。私は元気を出した。殿堂と呼ぶには程遠い西代キネマに、やっと着いた時の気持は、自分でも何だかおかしかった。

はるばる大阪よりこんな場末の未知の所をさがしてみにくる自分という者を、人は知っているであろうか。

入るなり直ぐ、私を待ちかねていた様に青木順子のショウがはじまった。

出し物は三ノ宮ミュージックのと同じであった。唯一つ違っている事は、パンティ一つの裸体になる事であった。

やはり場末ともなると、自然にどぎつさが要求されるのであろうか――。

約十米もあろうかと思われる二重にしたロープで、後手にした手首を縛り、形のいい乳房の上と下に廻して、一度後手首の所で締め、肩から廻して股間縛りにする。縦縄は相当にきつくて、彼女は前かがみの状態になっている。その残ったロープで首を通して、さるぐつわにするのである。

なか／＼あざやかな手順であった。

その縛ったまま、椅子にのせて弓なりになった彼女に、ローソク責めをしたり、バンドでうったりするのである。又ころがした彼女の上に、男が靴をはいたまま乗って立ち上るのである。男の体重による、下敷きになっている後手首の痛さは相当なものと思える。舞台でのSM劇としては、限界を越えている――。

男がサド、女がマゾでなくしては、とうてい実演出来ない様に思われる程びったり意気が合っていた。

演技だとすると、大したものである。

この拙文を読まれた方の中にも、青木順子のショウを御覧になった人もあるだろう。

まだの方は注意されて、ぜひ一見されることをおすすめる。私も又、青木順子の名が新聞に載る限り、今後ともにゆく事だろうか？

フェチシストの告白

チリ紙の魔力

津田 信也

私は以前から女性の放尿に対して、深い関心を持ち続けて来ました。若く健康で体格のいい女性の放つ小水の音は、無精に私の心をかき立て、一度でもよいからあの烈しい小水を顔に浴びせられたいと願いつつも、今日まで一度もその経験もなく、毎日を送っております。

所で、こうした女性の放尿に対する関心から次第に、その後始末に使われるチリ紙に興味を抱くようになりました。放出の音もさることながら、そのあとで使われる紙の音には胸の高なりを抑えきれず、紙がどのように使

われ、そして使用されたあとの紙は、どのようになっているのだろうか、ということが知りたくてたまらず、何とかそれを手に入れたと思います。つめようになったのです。

バッグから取り出した数枚のチリ紙を手にトイレに急ぐ若い女性を見かける時、私の眼はその真白な紙にひきつけられ、私の心は、やがてその紙の受ける運命にと走ります。

ここで少し蛇足的になりますが、私のチリ紙に対するフェチ傾向は、以前、今とは多少違った形で持っていました。それは女性の放尿という動作に続いて、チリ紙であとを拭く

という事にありました。まだ年少の頃は、女の人が便所に行くたびに、チリ紙を持って行くことに、何ら関心はなかったのですが、ある年代に達した頃、それを一つの疑問に思うようになったのです。何故女は放尿後、紙を使うのだろうかという不審は相当長く続きましたが、だん／＼年令が進むにつれ、人体の構造について知識を得るに従って、その理由を知ったのです。

少し横道が長くなりましたが、こうした気持の中にあって、使用後のチリ紙を入手することを考えました。私たちの周囲には数多く

のトイレがあり、そこでは、これ又数多くの女性が用を足し、多くのチリ紙が使い捨てられています。しかし私の求めるような紙は中々得がたいのです。

こうなりますと、入手する場所、即ちトイレの構造なども大きな条件に入り、非常にむずかしいことなのです。

所が数年前、ある機会から目的のものを、ある程度入手することができました。入手の方法については省略致

しますが、今後もしろいろな方法によって、できるだけ集めたいと思っております。

さてこうして入手した紙の数々をゆっくり鑑賞するのは、実にたのしいことです。私の鑑賞方法について、のべたいと思います。

まず手に入れたものは、なるべく原形を崩さぬよう工夫してポリエチレンの袋に入れて



持ち帰ります。原形を崩さないのは、使われた時の状況をよりよく想像するため、ポリ袋に入れるのは、乾燥を防ぐためなのです。

このようにして持ち帰った紙は、そっと袋から出してその形、しわのより具合、よじれや破れの程度、ぬれた部分の広さ、黄変の度合、等を観察します。

集めた紙の中でも、使われた直後

か、あまり時間のたっていない方がずっと魅力的です。一度ある機会にほんとに使用直後のを手に入れることが出来たのは全く大きな感激でした。そして使った女性が知合の二十四、五才の未婚の人で、トイレに入ってから出てくるまでの状況を隣のトイレにいて知ることができたので一層実感的でした。例の如く手に数枚のチリ紙を持って、その女性はトイレに入りました。衣ずれの音につづいて、陶器製の便器にたたきつけるような烈しい音。そして紙の使われる音が、あやしく私の耳をまさぐるのでした。私はその音に全神経を集中し、その音の動きから、使われている様子を想像するのです。やがてトイレから出て来た彼女が足早に立ち去るのを待ちかねて、私がそのトイレに入ったのはいうまでもありません。そして幸運にも一かたまりの紙を、便器の前の方に残されているのを発見しました。はやる胸を抑えながら、慎重にとりあげました。

四枚重ねのビニール入りの上質紙で、折り

たたまず、その真中のあたりで拭かれたらしく、だ円形にしっとりぬれ、ひどくよじれ、うす黄色く変色していました。そしてほんのわずかながら多少の温かささえ感ぜられたのです。先程彼女の手持たれていた真白だった紙のあまりにも変り果てた哀れな形、チリ紙の受けるあわれな運命を痛感させられると同時に、何の配慮もせず、全く無関心に平気で、このようにチリ紙を使い捨てて女性の一種残酷な態度に、胸おどる思いをするのでした。

今までに集めたのを比べてみると、いろいろと興味深い点があります。その二、三をあげてみると、まず紙の種類ですが、私が手に入れたのは殆んど家庭外の所だったので、外出用の上質の紙が大部分です。たまにクレーパーのかかったもの、厚手の黒いものもあり、一寸珍らしかったのは、美濃紙に履歴の書きつぶしがありました。

次に使用枚数と、拭く場合の紙の裏表ですが、三、五枚が一番多く、七、八枚をふんだんに使ったのや、反対に一枚でいいいに拭いたものもあります。裏で拭くか表で拭くかをみますと、七、八割までが表で拭かれています。これは拭く時、特に裏表への関心はな

く、普通東になっているのは裏を中にして折りたたまれていたので、そのまま使うのが多いからのようです。

実際の拭き方について、いろいろと調べてみるのも中々興味深いものです。二つ折、四つ折が比較的多いようですが、中には四、五枚重ねたのを折りたたまず、そのまま真中の所でねじるように強く拭いたものもあり、又端の方から捲くようにしたのもあったりします。

紙のぬれ具合やしみの濃淡は全くまちまちで、ずいぶんひろく又、何枚もしみ透っているものもあり、反対にほんのしめり程度のものもあり、真黄にしているのやら、生理の血のまじったものもあり、個人差がはげしいようです。それに、使ったあとの捨て方ですが、私の手に入れた分では殆んどが丸められておらず、広げたまま捨てられています。水洗トイレの備え付の容器の中からも、いくつか入手しましたが、ふたをあけてみると、広げたままの使用済紙が、而も濡れた所を外側にしておいたりしたのをみて、思わずはっとすることがあります。

昔の女性は放出の音さえはばかって、その音を消すことに気を配ったとか、ましてや自

分が使った紙は、ていねいに丸めこんで、人目につかぬようそっと捨てたことでしょう。今の解放された時代に生きる女性としては、そんなことはある種のたわごとかもしれません。ねている人の頭を平気でまたいで通ったり、脱いだパンティの内側の一番汚れた所を平気で表向にしてはっておく若い女性方のあることは、私たちM派にとっては喜ばしいこととすけれど。

長々と拙き文にたくして自分の体験や気持ちをのべさせて頂きましたが、私の使用済紙に対するフェチ傾向の心の底に流れるものは、チリ紙を自己の代用と考える所にあるようです。実は自分をそのチリ紙の立場におきたいのです。自分がチリ紙の位置にあって、或はチリ紙の立場になって、女性の最も汚れた部分に密着させられ、その小水を拭かせられ、くさい目に合わされるといふ、最も屈辱的な目に合わされたいと思うマゾ心理の一面だと思っております。

今後も用済紙の収集をつづけ、この意味において、ひどく無情な女性の方々の股の下にて、嗅がされ、汚され、散々はずかしめを受けて葬り去られてゆく自分自身を夢みつつ、この一稿を終わります。

サド・サスペンス・シリーズ

深夜の市長

佐原陽一郎

1

私はその夜U Xテレビの一階にあるロビーで、何本目かのタバコを灰皿に押しつけながら、テレビ局からの新番組発表を時計とにらめっこで待ちうけていた。

芸能記者とはいっても、一日のうち半分以上は、あっちこっちのキーステーションをうろついて、タレントのゴシップ記事をあさってまわる私などにとっては、茶の間の話題になりそうな新番組をすばやくキャッチするにとぐらいが、わずかに記者としての生きがいを感じさせることなのであった。

しかし最終版の締切を気にしながら、すきっ腹をかかえてネタを追うのも楽ではない。特ダネを匂わせながら、いっこうに姿を見せない若い広報部員をとちめてやるつもりで私はソファから立ち上った。

そのときうっかりして三、四本の鉛筆をひざの上に置いたままだったらしい。床の上に4Bの取材用が散らばって、そのうちの一本が向い側に腰掛けていた中年の男の足もとの方までいってしまった。

私が急いで拾い集めようと近づくと、男は鉛筆を自分の靴先で軽く私の方へけてよこした。その動作はいかにも自然で、人を馬鹿

にしたようには見えなかったが、私はその男の靴が乗馬用のもので迫車がついていることに異様な感じを受けて思わず男の顔をみた。

年令は四十を少し越したぐらいだが、額が広く精力的な鋭い眼差しをしていた。黒のダブルを端正に着こなして、ネクタイも英国製らしい渋い横縞で好みはわるくなかった。

ただ私は、職業がら新聞記者のカンというのか、その男が無意識のうちに周囲にまき散らしている、暗いかげのようなものを感じとった。

「あなたは新聞社の方ですナ」

男は私の胸につけてあるプレスマンクラブ

のバッジを見たのか突然話しかけてきた。

「ええ、まあそうですが一」

「速記はお出来になりますか」

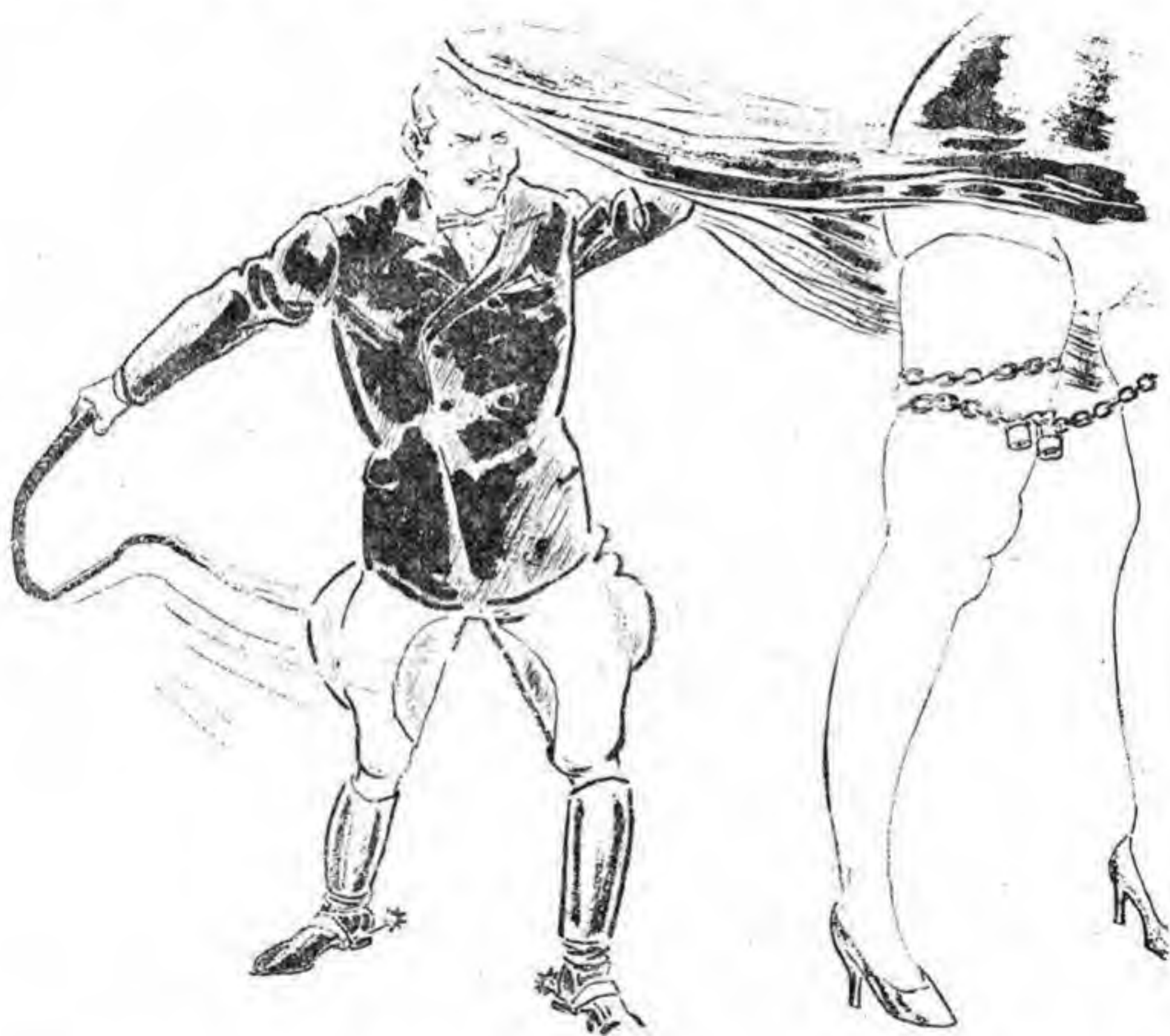
「これでもかなり書ける方でしょう」

「そりや結構、どうですひとつ仕事をたのまれてくれませんか」

男はポケットからフィリップモリスの箱を出して私にすすめながら、私の眼をのぞき込むようにした。

「しかし、私は取材も残っていますし一」

「もちろんそれが済んでからでいいのです。今夜十一時に六本木のクラブダンテスに来て下さい。会員制ですが、市長に逢いに来たといえは入れてくれます。ではお願いし



ます」

私が、男の正体をつかみかねて、あいまいにうなずくと、男はさっと身をひるがえすようにあわただしくロビーから姿を消した。

黒光りする長靴につけた迫車の金属がすれ合うかすかな音だけが、あっけにとられている私の脳裡にいつまでも鳴りつづけた。

2

それにしても市長とはいったい何を意味するのだ。何かの暗号なのか、それともあの男が本当に何処かの市長だというのだろうか。

気ののらない記事を、電話で社へ送ってから、地下のレストランで安物のウイスキーをなめながら、私は何者か得体の知れない男の依頼について考えつづけた。

やぶから棒に、速記をしてく

れということは、何か大事な会議でもあって記録をとるためか。あるいは、すでにテープに録音してあるものを原稿のかたちで残すためなのか、何度も同じことを考えたあげく、私は酔いもてつだって、すっかり面倒くさくなり、テーブルにつつ伏してうとうととまどろんでしまった。

何分ぐらい眠ったろうか、遠くで電話のベルが鳴っているような気がして眼をあけると給仕の少年が私の名前を呼んだ。

「モシモシ、Nタイムスの佐原ですか」

「ああ佐原さんですか、わたしですが」

低いかすれたような声は、あきらかにさっきの男からの電話だった。

「どうして私の名前を」

「記者会の名簿で、すぐわかりましたよ。NタイムスでUXテレビ担当は、あなたしかおりませんから。ところでお約束の時間は大丈夫ですか」

腕時計を見ると、いつの間にか十時をまわっていた。ウィスキーが利いて、すっかり眠りこんでしまったらしい。

「えっ、ああすぐ行きますよ。ダンテスですね。車で十五分ぐらいですから」

私は電話を切った。変な奴だ。私が眠って

いるのを見ていたのだろうか。

外はすっかり雨になっていた。遠く新宿あたりのネオンが、生きもののように点滅して見えた。

こんな時刻にリハーサルでもあるのか、若いタレントが数人、幌のないスポーツカーでずぶぬれになりながら、大さわぎでスタスジオへ通ずる坂を登っていった。

私はやっと新聞記者らしい好奇心が頭をもち上げてくるのを感じた。そしてどうなるかひとつ最後までみとどけてやれという生来の野次馬根性を大いに発揮することにした。

六本木といえば週刊誌などでさわがれた六本木族なるものも、最近では渋谷から自由丘近辺へ場所を移したようで、一時は若いスネカジリ族が君臨した六本木の夜の世界も大分おちついた雰囲気にもどってきた。

六本木交差点から麻布にぬける通りは高級ナイトクラブやバーが多いが、そのほとんどが会員制のいわゆるキークラブというやつで一般の客を受けつけない組織になっている。

クラブダンテスも、その一つで、入口のところに船の舵輪がかざってある以外ネオンもついていない。

ちょうど、どこかの大使館の裏手にあたる

が人通りも少なく、駐車してある車の屋根を薄暗い街燈がわずかに照らして、その界わい全体が雨の中に煙っている感じである。

ドアをノックすると細長い窓がひらいて、「あなたのチエックナンバーは？」

と女の声がした。

「市長に逢いたいのですが」

そういいおわらないうちに、ドアがひらいて、私は赤いジュータンの敷いてある階段を中へみちびかれた。

女は黒い裾の長いドレスを着ていたが終始無言で私を地下まで案内してゆく。

階段を降りきったところにも頑丈そうなドアがあって、はじめてダンテスと書かれたガラス板が飾ってあった。

中は煙草のけむりが立ちこめて、照明が暗いので、どの位奥行きがあるのかよくわからなかったが、四、五十人はゆっくりすわれる円型のカウンターが中央にあって、周囲の壁は全部洋酒を入れる棚になっていた。

客は自分専用のボトルを買って、棚に保管しておき、好みに応じてたしなむという制度になっているのだろう。棚にはひとつひとつ番号がふってあり、鍵がかかっている。

「やあ、お待ちしておりましたよ、さあ、ど

うぞ」

男は私をむかえて、カウンターへかけさせた。服装はさきほどと変っていなかったが、アルコールが入ったらしく顔が薄く赤味をきしていた。

「どうも御無理なことをお願いしましたが、お気をわるくなさらずに。そのかわり今夜は面白いものをごらんになれますよ」

「ちよっと待って下さい。さっぱり私にはわけがわかりませんが、あなたはいったいどんな御商売をなさっているのですか」

「どんなといわれても、ちよっと説明に困るのですが、まあある取引の仲介人とでもいったらよいでしょうか、とにかく生きた商品をあつかうのです」

「えっ、生きた商品？　いったい、それはどういう意味です」

男はそれには答えず、私にカクテルをすすめながら巧みに話題をそらした。

「これは御承知のとおりベネディクティンですが、元来はカトリックの寺院で密造された霊薬酒なんですな。十六世紀のはじめごろはヨーロッパの各地であやしげな薬草を調合した強精酒がさかんにつくられたらしい」

私は洋酒ときたらトリスぐらいしか知らない

いので、いいかげんな合いづちしかできないのだが、男はこの方面の学識は相当にあるらしく、各種のリキュールについてのとりとめのない話を長々とはじめた。

「ところで、この瓶の肩にD・O・Mの頭文字が見えますが、何を意味するのか御存知ですか」

もちろん私が知っているわけではないので黙っている

「デオ・オブチモ・マキシモです。ラテン語で最善最大の神に捧ぐ」

男はそういいながら視線を私の背後に移した。私がふりむくと、長身の女が静かに私たちの方へ近づいてくるところだった。

やはり裾の長い黒のドレスを着ていたが肩も胸も大たんに露出したデザインであった。

年は二十才ぐらいだろうか、こういった場所の女にしては肌もきれいで、真珠のイヤリングがキラキラゆれるのが印象的であった。

女は黙ってカウンターに腰をおろした。

「今夜の神への捧げものは、この女です」

市長は女のドレスの裾をいきなりまくり上げた。肌色のシームレスに包まれた恰好のよい脚の太股のあたりに、銀色にひかる錠前のようなものが、きつく喰い込んでいた。

ちょうど手錠を大きくしたような形で、間かくの短かい鎖でつながっているから、これをかけられた女は、よちよち歩きしか出来ないわけだ。

私は五、六年前に見た『女猫』というフランス映画を思い出した。

スパイの嫌疑をうけたフランソワーズ・アルヌールが、敵の将校の手でスカートの下に大きな錠をかけられ、走れないように片手を連結される場面があった。

しかし現実には、こんなものものしい太股錠が日本にも出来ていることを知らなかった私は、ただ啞然として市長と女の顔を見くらべるだけだった。

「もうおわかりになっていただけたかと思いますが、ここは独自の戒律を持った秘密組織のクラブです。いやクラブというよりも既存のかびくさい道徳論や倫理感に支配されないで人間の本質を追求するべく生まれた一つの社会だといってもよい。私が市長と呼ばれるのも、ここがそういった特殊な場所であるからです。これから別室で金曜日の儀式という会員相互の親睦をはかるセレモニーがあります。実はあなたにその儀式の模様を速記してもらいたいのです」

「しかし、あなたは、さっき生きた商品をあつかうとおっしゃいましたか？」

「そうです、この儀式自体が商品として女の肉体を交換する目的があるのです。あなたは中世のヨーロッパに栄えた女奴隷市場を御存知でしょう。それが東京にもあるのです。新聞記者であるあなたにもぜひ見ていただきたいのです」

奴隷市場、まるで桃色週刊紙のでっち上げ記事の中の世界ではないか。現実には、しかも都心に近いこんなところに、女奴隷が売ったり、買われたりする光景がみられるのだろうか。



になった階段が地下に伸びていた。
「これは市長さん個人の所有物ですか？」

「いや、みな会員による相互寄金でつくりました。実業界の有力なバックがありますので、資金には恵まれております」

地下三階まで降りて、厚いカーテンをあけたとき、私はそこに異様な光景をみた。

円型にソファが並んだ真中に一段と高くなってステージがあり、その上に前手錠をかけられた女が十人ほど、たがいに鎖でじゅずつなぎにされて立たされていた。

「これがわれわれの集会場です。会員がお互いに持ち寄った女を交換し合う場所です。

3
いつの間にか三十人ほどに増した客は、静かに奥の方へ移動をはじめていた。
部屋の隅に置かれたピアノを動かすと、その裏がさらに細長い通路になって、らせん状

出席する会員は必ず一人以上の女をつれてくることが原則となっています。しかし、品物が不足した場合には、金銭による取引もみめています。ここでは会員は必ずガウンとマ

スクをつけることになっています。ですからお互いに顔を知られず、つれて来た女を交換できるわけです」

市長は、さっそく私にも黒いガウンを着せてくれた。それはアメリカの秘密結社クー・クラックス・クランを思わせる何とも奇妙なもので、なにぶんにも裾が長いから動作が緩慢になるのはやむを得ない。

市長は会員がガウンとマスクをつけ終るのを待って、さきほどの女を天井から降ろしたロープで両手を高々と吊り上げた。

女の身体はつま先き立ちになったまま、二三回ぐるりとまわった。

市長はステージの上にゆっくり上っていった。右手には乗馬用の鞭を握っている。

「みなさん、今夜は月の第一週目の金曜日なので、例によって金曜日の儀式を行います。この聖なる夜は神々への生贄として、女の涙と苦悶の声をささげますが、今夜は先月指定以外の会員と遊ぶなど規則に反した行動があった奴隷二十七号を指定しました。では、葡萄酒を！」

市長は吊り上げられている女のドレスを手ぎわよく引き裂いて、パンティとストッキングを着けたままの姿にした。

ブラジャーを外された女の胸は、身体つきに似合わず豊満であった。

ガウン姿の男が二人近づいて左右から大きな陶器の壺に入った赤葡萄酒を、女の頭からそそぎはじめた。

両手の自由がきかない女は、身体をのけぞらすようにして、この奇怪な洗礼から逃れようとするが、二人の男たちは容赦なくあびせかけた。赤葡萄酒は前後左右から照明を受けている女の白い肌を血のように赤く染めて、パンティをぬらし、ストッキングを伝って床に流れた。やがてまわりをとり囲んだ男たちは一人ずつ台の上にあがってしたり落ちる葡萄酒を女の肌につけて吸いはじめた。

三人、五人、十人とこの奇妙な儀式がすすむにつれて女の顔に苦悶と愉悅のいりまじった表情がうかび、ときれときれのうめきが唇からもれてきた。

市長が女に近づいて、手に持った鞭を力いっばい女の太股のあたりに打ちおろした。ガーターのゴムが吹っ飛び、ストッキングは破れて女の白い太股に鞭の跡が赤く浮きはじめた。

するとそれが合図でもあるかのように、残っている女たちも次々にドレスを破られ、パ

ンティ一枚の姿にされて、背中に鞭をあてられながらステージの上をまわりはじめた。

中央に今夜の生贄となった女が吊るし上げられ、そのまわりを前手錠をかけられて鎖でつながれた女奴隷が悲鳴を上げながら歩かされている有様はサディスティックな光景であった。

「これから奴隷たちが、これまで一カ月の間に犯した会則を、われわれに責めあげられて白状しますから、それを速記して下さい」

市長に頼まれて私は速記の用意をした。

「むろんテープにもとりますが、これを会誌に掲載したいのです」

「会誌まであるのですか」

「そうです。海外のこうしたクラブとも連絡をとっています」

女奴隷は一人ずつ前に引き出され天井から滑車を使ったロープで身体を吊られて、両脚を宙に浮かせたまま、悲鳴といっしょに会則違反を白状しはじめた。

「ああ、もうだめ、かんにんして、ウウッ アアウウ、いや、いや、話します。みんな話します」

私の速記文字は、時々同じ記号をくり返ししながら、女奴隷たちの告白をつぎつぎに記録していった。

娘むすめ相す撲もう復ふ活かつ

— ある山村の娘相撲物語 —

海 野 美 津 男

1

九州佐賀県のT村には、その昔、女相撲が盛んに行なわれていた。その始まりは遠く戦国時代にさかのぼる。

戦国の初期のこと。この村の属する小藩は隣藩の攻撃を受けた。突然の攻撃であった上、武士の数が少なかった藩は、領内深く敵に侵入されてしまった。しかし、自分たちの領主の善政に比べ、隣藩の名だたる悪政を知っていた農民たちは、次々に戦斗に加わって敵を悩ました。戦斗が苛烈になり、男たちが次々と倒れていくのを見て、武士の娘はもちろん

農民の娘たちも戦場に出ていった。娘たちは兵糧を炊き、砦を築く作業だけでなく、乱戦状態の中ではしばしば勇敢に戦斗にとびこんでいった。三ヶ月に亘るはげしい戦いは女たちの力もあって遂に勝ち、敵は兵力の大半を失なって敗走した。

その年の秋祭りは、どの村も盛大な戦勝記念の祭りになったが、どの村よりも多くの青年と娘を戦場に出したT村の祭りは、とりわけ盛大だった。娘相撲は、その秋祭りの行事の一つとして、戦斗に参加した娘たちの希望で取り入れられたのだった。

娘たちの申し出の理由は、敵の侍に勇敢にも組みつき、組み伏せて首を上げたが、その瞬間矢に当たって死んだT村の娘ウメの霊を慰めるためというものだった。それはしかし表面上の理由で、戦場を駆け廻った娘たちとしては、ただじっと男たちの相撲を見ているのが物足りなかったのかも知れない。男たちの三分の一が戦死して、その年の相撲大会がさびしくなることが分っていた村長は、娘の申出を許した。

娘相撲には、戦場に出た娘三十人が参加した。戦場で命知らずに戦った娘たちだけに、

その取組は中々はげしいものだった。陽に灼けた体に真白いさらしの六尺褌を締めこみぶっかかり合い、組み合い、投げを打ち合う娘たちの相撲に、村人はヤンヤの喝采をおくった。

T村の娘相撲はそうして始まり、年々盛んになっていった。資格は、その年に初潮を見た娘から与えられた。二日間であつた秋祭りの相撲は娘たちの参加で三日間になった。初日、男たちが部落の相撲を行なうのに続いて二日目には、娘たちが五人の部落代表を選ぶ

ために総当りの相撲を取った。三日目の村の大会では、男たちに先がけて部落対抗の娘相撲が行なわれ、男たちの部落対抗のあと、今度は部落対抗戦で勝星を上げた娘同士個人の戦が行なわれた。

なよなよした女が好まれるようになったのは江戸時代に入ってからのこと。それに、この村では、例の戦い以来たくましい娘が一層好まれるようになり、嫁の口も余計かかるようになった。娘たちの相撲は、年々技と力をつけて立派なものになっていった。

山奥のこの村には



江戸時代になつても「女は柳腰」の風潮は入って来ず、逆に相撲には少女や主婦たちも加わるようになり、江戸中期にはこの村の女相撲は最盛期を迎えた。六尺の褌は本格的な相撲まわしとなり相撲大会も、春秋二回となつた。もちろん女相撲は真裸で行なわれ

少女たちは白、娘たちは紺、主婦たちは赤いまわしを締めこみ、病氣以外のすべての女が参加した。

だが、明治になると、時代の風は山奥にも吹きこんできた。「娘は娘らしく」という風潮がやがてこの村にも大勢を占め、明治の中期から、女相撲は主婦だけのものになり、それはやがて肉じゅばんにまわしという姿に変わった。大正に入ると、女相撲は秋祭りの時だけとなり、取組よりも、子宝と豊作を祈る土俵入りの行事や、相撲甚句の方が中心となるようになった。

しかし、形式が中心となり、その姿も肉じゅばんにまわしという姿になったと言っても昭和十年頃までは主婦の大部分が相撲に加わっていた。化粧まわしを締めての相撲甚句も見ものだったし、夫や子供たちの声援を受け髪を乱してぶっかかり合い、まわしを引いて投げ合う姿も多く見ることができた。

だが、戦争は全てを奪ってしまった。秋祭りも行なわれなくなり、夫や息子を戦争にとられ、山や畑の仕事に追われた女たちは、相撲を取る余裕を失った。戦争が終つても、数年の間は女相撲は行なわれなかった。

それが何とか形だけでも復活したのは、社



ちの「この頃は女プロレスもあるのだから、あれよりずっと品のいい女相撲を続けよう」という説得に応じる若い主婦は一人も出なかった。昭和三十三年頃には、土俵に上る女は五十才代の五人だけとなってしまった。

2

だが、丁村伝統の女相撲は、それから数年ののち、前野美佐、江口和子の十八才になる二人の娘によって、江戸の昔そのままの姿で見事に復活された。

ある年の秋祭りのことだった。六十を遥かに越したとみさん美代さんと、五十代の三人の女が、男たちの相撲の中休みに、型通り土俵入をし、相撲甚句を踊り、五十代の三人は相撲を取って見せたが、それには昔日の女相撲の面影は無かった。それだけではない。男たちの相撲も、ここ一、二年急にふえた出稼ぎのため、若者の殆どが村を離れているために、全く盛り上りのないものだった。村人たちはそれを非常に残念がった。

若者が、渾身の力をぶつけ合って斗う相撲

を見るのが大好きだった美佐も和子も、それが非常に残念だった。相撲が、少年たちと壮年の幾番かの取組で、僅か二時間で終わった時和子は吐き出すように「つまらんね」と言った。美佐は「飛び出してあばれてみたい位だった」と言った。

その夜、部落ごとに酒の席が設けられ、習慣によって十八才以上の娘もそれに加わり、男たちと一緒に飲み、話し合い、踊ったが、美佐と和子は先ほどから、とみさんと美代さん、そして美佐の母の話にじっと聞き入っていた。三人は女相撲がすたれていくのを嘆き合い、その昔、盛んだった頃の話に花を咲かせていたのだった。五十二になる美佐の母はとみさん、美代さんの誘いで、女相撲を勤め通していた引きしまった体の大柄な女だった。

十八になって始めて酒の席に加わった二人は、村の女相撲の歴史を始めて知った。年寄りたちは、小さい頃見たという裸にまわしの勇ましい取組のこと、よその部落に負けまいと、夜中に土蔵の中で稽古をしたことなどを懐かしそうに話し合っていた。二人は、昔は結婚前の娘も裸でぶつかっていたという話を聞いて体がほてってくるのを覚えた。

会全体が落ちつきを取り戻した昭和二十五年のことだった。十六才の若さで結婚し、その年から相撲を取ってきたという五十三才になる田口とみさんや、若い頃とみさんと横綱を張り合ったという五十一になる早崎美代さんを中心に、四十代の主婦を加えた十七人で女相撲は久々に行なわれた。しかし、年寄りの

娘たちがすぐ後ろで自分等の話を聞いているのに気づいた美佐の母は、くるっと振り向き、「お前たち聞いていたんか。元気があるならお前たちも相撲取ってみれ」と、酔いにまかせて言った。とみさんも「お前ら、体が良かで、強くなるぞ」と言った。美佐の母は慌てて「冗談だ、娘っ子に相撲は取らせられんもんな」と言ったが、二人は、恥しそうに俯向くその姿と反対に、何かにどんとぶつかっていきたい衝動を覚えていた。

二人はすっと席を立ち、外に出た。心配して美佐の母は立ちかけたが、年寄り「まあ良か、もっと飲もう」とそれを止めた。美代さんがフト「あの二人は大人しいが顔立ちもキリッとして負けん気だから、相撲を取らせると良いんだが」と言った。

美佐と和子は外に出ると、部落の外れの美佐の家まで一気に走った。そしてどちらからともなく祭りの晴れ着を脱ぎ捨てると、長じゅばんの上から帯をしめ、裾をからげて取組んでいた。二人は畳に横になり、「誰にも言わんで二人だけでやってみようか」と話し合った。しかも、親たちに黙っていては、その目を盗んで時々しかできないし、場所も適当な所が無い、それに本式の稽古はできないだ

ろうから、親たちだけには、思い切って話してみようということにした。じゅばんの上から帯を締めて取組んでも全然相撲にならないことが分った二人は、本式にまわしを締めこんで取ってみたかった。娘たちは、先ず美佐の母に話してみようと、その帰りを待った。

美佐の母は、「さっきのは冗談だったのだが」と繰り返していたが、「思い切ってやってみるか」と許してくれた。そして「稽古はうちでやれ」と言った。美佐の家は、父が早く亡くなり、兄三人も遠い町へ就職していて母と二人暮らしだったから稽古には丁度良かった。また、奥庭が高い土塀と土蔵に囲まれていたので、土俵はそこへ作ることにした。

二人はホッとしたが、和子の父がどう言うか心配だった。和子の家は、母が数年前に亡くなり、妹二人と父の四人暮らしだった。父は相撲好きで、また中々強く、五十近い年だと言うのにその年の三人抜きにも勝ち残ったほどだったが、何しろ無口で何を考えているか分らず、和子は迷ったが、明るく晩、妹が眠ったあとと思い切って打明けてみた。だが父は意外にも一言「やってみろ」と言った。父も女相撲の復活を願っていたのかも知れなかった。父は暫らくして「だが……」と付け加え

た。「やるなら中途半端ではいかん。モタモタ取組む女の相撲など見て居れん」と言うのだ。和子は全くその通りだと思った。そして「見世物じゃあるまいし……美佐さんと真剣にやってみるつもりだ」と、にこっとした。

準備はすぐ始めた。美佐と和子は、肉じゅばんと、まわしにする布を買いに町に出た。肉じゅばんは中々見付からなかったが、町外れの呉服屋でようやく見付けた。土俵は、和子の父も手伝って作り、三日目には見事にでき上った。けがをしてはならんという和子の父の意見で、土俵は低く作られ、周囲にも広く砂を入れた。紺色のまわしもでき上り、早速四日目の晩から稽古することにした。

和子の父は「わしは男だから、久美さん稽古をつけてやってくれ。容しやはいらんからな」と美佐の母に頼んだ。美佐の母は「私の手に負えなくなったら来てやって下さい」と言った。四人は、娘が希望し、親たちもこれならと思うまで、一切秘密にすることを約束した。

3

娘たちは久美さんの指導で、先ず押しの稽古からみづちりやることにした。ともすればまわしを取りたくなったが、「先ず押しだ。

押して押して押しまくれ」と言つて、美佐の母はまわしを取ることを許さなかった。晴れた日は毎晩続けた稽古で、最初のうちはどんなにがんばっても美佐の母に押し返されていた二人も、一カ月経った頃には二回に一回は逆に押し戻すほどになった。

南の国も冬は寒い。秋祭りから二カ月経つて、村の夜はきびしい寒さが続いたが、冬の間も稽古はやめなかった。技も押しから突っ張りへ、そして四つ相撲へと進み、春が訪れる頃には、投げ技や足技も覚えた。美佐の母は、自分より技をうけた娘の指導を和子の父に頼んだ。和子の父は三日に一晚は来て容しやなく娘たちをきたえたので、二人の技はぐんぐん上達した。

三月の或る晩、娘たちは親たちの前で、九番の取組をした。稽古のしめくりがしたかったのだ。二人はいつになく真剣な表情で取組んだ。美佐は一五八センチ、五三キロ、和子は一五五センチ、五四キロと、身長、体重ともに僅かの差である上、二里ほど離れた町の高校へ仲良く通い、バレー部に入つて同じように体をきたえていた。その上稽古には全く差が無かったので、取組は全く互角であった。九回の取組は娘たちを疲れさせるものだ

だったが、お互い「負けるもんか！」と歯を食いしばって斗った。その夜の勝負は、最後の九番目、和子が寄り倒し、ようやく星一つの差で勝ったが、親たちは二人の立派な相撲ぶりを喜んだ。親たちはまた、相撲を始めてからの娘の振舞いが以前よりずっと落ちついてきたこと、農作業も自分からすすんでやるようになったことを喜び合つた。

梅雨が明ける頃、二人は秋祭りの日に、みんなの前で思い切つて取つてみようと言合つた。親もそれを許し、とみさんたち女相撲の五人の仲間に始めて娘たちのことを打明けた。年寄りの喜びようは大変なものだった。そして実際の相撲を見て更に驚いた。それまでに見たどの女相撲よりも立派なものだったからだ。娘たちは「ただ見せるために取るのではない。ほかの娘にも相撲の味を分つてもらいたいし、伝統を復活したいからだ」と言つた。秋祭りの当日の手筈も決まり、それまではほかの者に知らせないことにした。

夏に入り、稽古は一層はげしくなった。年寄りたちも二、三日おきに來ては二人をばけまし、気づかぬところを注意してくれた。

或る晩二人はもう一度九番勝負をやらうと組み合つたが、その夜の暑さは特にきびしか

つた。肉じゅばんは汗でぐっしり濡れ額には汗の玉が次々に噴き出してきた。二人はがまんして取組んでいたが、倒れる度にじゅばんにベトトリとつく砂と、拭うこともできない腋の下の汗は、次第にがまんできないものになった。連日の稽古であちこちにできていたアセモは、しみこむ汗でたまらなくヒリヒリした。

二人は思い切つてじゅばんを脱いでしまった。美佐の母は、息子の住む町に出て四・五日は居なかった。ほかの者も、夫々お盆で来て居なかった。じゅばんを脱ぎ、井戸端で水を浴びてすっかり汗と砂を洗い落した二人は素肌になつて締めこんでみた。ぎゅっと肌を引きしめるまわしの感覚は肉じゅばんでは味わえないものだった。お互いの体をまともに見たのも始めてだった。それは娘同士の間にも立派なものに見え、直接目に入る相手の筋肉の動きも、お互いの心に敵愾心のようなものをかき立てた。二人は、素肌のぶつかり合いに何もかも忘れた。

明くる晩も誰も来なかった。二人は裸で組んだ。だが引き落して這った美佐の乳に血がにじんだことから、乳は、真白いさらしで巻くことにした。二人は、何も身につけな

い方が思い切った相撲になることを知り、秋祭りの日にどうするか話し合ったが、結局、親たちに見てもらって決めることにした。

親たちは娘の裸の相撲を見た。和子の父は暫らく黙っていた

が、「これなら、

女の裸を考える暇はないな」と言っ

た。美佐の母は

「それにこの辺り

じゃ、おなごの体

を見てニヤニヤす

る者は余り居らん

からいいだろう」

と言った。都会の

人には分らないか

も知れないが、都

会から遠く離れた

所の人間ほどあけ

っぱりげなのだ。

異性の体に興味は

ないのではない。

その関心の持ち方

が健康なのだ。

秋祭りには、そ

うして昔の娘相撲の伝統そのままの姿が見られることになった。

5

いよいよ、その日がきた。

少年の相撲が終り、

青年の取組が始まると

和子と美佐は、神社の

すぐ近くの和子の家に

走って行き急いで準備

をした。手早く洋服を

脱ぎ捨て、まわしを締

めこみ、乳をさらしで

巻き、髪をきりつと後

ろに束ねた。そして素

肌ブラウスを着け、

その上から割烹着を着

て境内に戻った。境内

のあちこちには、お昼

のお茶の準備をする割

烹着姿の娘が見えたの

で、二人の姿は目立た

なかった。

数少ない青年の取組

が終ると、壮年の相撲

までの中休みに、女相

撲が始まった。前年と同じ五人の女が、化粧まわしを締めて土俵に上り、土俵入りと相撲甚句をつとめた。二人の胸はさすがに高鳴り、なぜか歯が鳴ったが唇をかみしめ手を握り合って出を待った。

土俵では、年とったとみさんと美代さんを除く三人の取組が始まった。娘に刺戟されてか、美佐の母は一人をばげしく寄り立てて勝ち、もう一人を上手投げで敗った。村人はどよめき、倒された女は目を白黒させた。女相撲で投げが出たのは何年ぶりかだった。

行司の美代さんは、そのどよめきをうまく捉えた。美佐の母に上げた軍配を戻すと、サッと前に出し、娘相撲の伝統が、立派な心かけの娘によって復活される。只今からその取組を行なう、と告げた。村人は驚いてささやき合ったが、美代さんは間をおかず、東に和子を、西に美佐を呼び出した。

二人はその場にすばやく割烹着を脱ぎ捨てると、花道を駆けけるようにして土俵に上り、サッとブラウスをとって向き合った。村人は息を飲んだ。村では「大人しいべっぴん」で通っていた二人が、素肌に紺のまわしという姿で土俵に上ったからだ。

眉の濃い、引しまった細面の顔を幾分下に



引いて、和子をぐっと覗む美佐。豊かな頬を真っ赤に紅潮させ、こぶしを握りしめて立つ和子の表情。一年間みっちりきたえた見事なその体……二人のきびしい美しさに、境内はシーンと静まり返ってしまった。

美代さんは、この相撲は、五回まで取って三つの星を上げた方を勝ちとすると告げ、事前の打合せ通り、四股も型も略し、すぐに待ったなしの仕切りに入らせた。

「はじめッ」という美代さんの声で、二人は思い切りぶつかり、はげしく突っ張り合った。その突っ張り合いは、少年たちの相撲で見られたものよりずっとはげしかった。それは、二人の間で約束されていたことだった。

とにかく最初は思い切り突っ張り合って、みんなに「娘っ子」という感じを無くさせようとしたのだった。しかし、それから先は約束していなかった。二、三步和子が踏み出した時、美佐は得意の左をサッと入れ、前陣を取ってぐんぐん寄って出た。和子は上手を取ろうとして体を浮かせ、土俵際に押しつめられてしまった。しかし和子は良くこらえ、美佐の前陣をつかんでその体を起し寄り返した。四つに組んだ二人は、全身の筋肉をふるわせ齒を食いしばってもみ合った。

村人は静まり返ったままだった。主婦たちはため息を洩らし、娘は唇を開いて息を飲み先ほどの相撲で、やる気を無くして簡単に敗けた青年はぐっと唇をかんだ。

二人はまわしを引き合っていたが、和子を抱えこむようにして外掛けに出た美佐は、その足を外され、逆に寄られ、どっと寄り倒されてしまった。村人の中から拍手が起った。

取組は二回連続して行うことにしていたので二人は砂も払わずに土俵に上った。二回目の勝負は簡単に決まった。一回目負けた美佐が、負けるもんか！と勢いこんで突っこんできたところを、和子がパッとたたき込んだからだ。

二人はそこで砂を払い汗を拭って一息入れた。稽古ではこれほど疲れなかったのに、と思いつながら土俵に上った。和子の父が「美佐がんばれ！」と声援したのをきっかけに、あちこちから声援も飛び始めた。

美佐の表情はきびしくなった。和子もそれにつれ一層真剣な表情になった。立ち上り美佐はパッと右に飛び、和子の背をはたき、よろめく所を更に立陣をつかんで振った。和子は立ち直る暇も無く土俵に這った。見物の中から、ようやく笑いも起った。

四回目は大相撲になった。これに勝てば、という和子と、負けられない美佐とは、立ち上りざま猛烈に突っ張り合った。美佐は、和子の頬を思い切り張った。和子もすかさず張り返すと、見物はどっとどよめいた。お互いけんか四つだったので、肩を突き、腕をつかみ合い、右に左に動いて差し手を争ったが、和子は美佐の右腕を抱えこんで小手投げに出よろめく所をサッと右を差し込んだ。

土俵上は、上手、下手を十分に引き合った右四つの大相撲になった。二人はお互いの出を待って動かなかった。相手の肩に頬をピツタリとつけた二人の全身には汗が流れ、しっかりふんばった足、ぐっとまわしを引く腕には渾身の力がこめられ、ももや肩の筋肉は力を入れる度にブルッと震えた。両者のまわしはじりじりと引かれて、立陣はぐいぐいと股に食いこんだが、二人は一步も引かずがんばった。そのまま三分ほど経った時、美代さんは水を入れた。

見物からは大きな拍手が起った。娘が、水入りの相撲を取るなどとは誰も思っていなかった。親たちにまわしを締め直してもらった二人は再び四つに組んだ。和子は、美代さんが「さあ！」と背中を叩いて取組開始を告げ

た瞬間、早い勝負に出て、上手、下手を次々と打ちまくった。美佐はしかし、よく残し、負けじと下手投げを打った。はげしい投げの打ち合いになった。お互いに良くくらえていたが、和子の右足が出る所を、美佐は足を掛けた。今度は美佐の外掛けは効いた。二人は土俵の真ん中に折り重なって倒れた。

星は遂に同じになった。暫らく休んだ二人は最後の土俵に上った。和子も美佐も、もう何も考えなかった。唇をかみしめ、仕切りに入った。

最後の勝負は、技と技、負けん気と負けん気の相撲になった。立ち上り美佐は低く当た

り左を差した。左四つに組んだ二人は、今度は最初から投げを打ち合った。そして何度も土俵際につめ合った。まわしは解けかかっていたが二人は構わず組み合った。見物も、そんなことに気付かぬほど夢中になり、土俵際につまる度にどつとどよめいた。最初のうちは息をつめていた娘たちも、声の限り声援した。勝負は、美佐の大きな下手投げで決まった。二人は、一回転して土俵下に折り重なった。

二人は、やっと自分たちのまわしが解けかかっているのに気づき、娘らしい恥かしさがぐっとこみ上げ、慌ててまわしを締め直した

が、見物の方はそれも気にとめなかった。美代さんは、二人とも土俵に上げ、美佐にも和子にも勝ち名乗りを送ってやった。村人たちは娘たちの見事な相撲に長い拍手を送った。

T村の女相撲は、そうして復活した。二人と娘たちが土俵に上るようになり、三年経った秋祭りには中学生以上の娘の半数が参加してぶつかり合った。秋祭りが近づくと、娘たちは誰はばかることなく、部落ごとに作られた土俵の上で、陽の光を一杯に浴びながら稽古に励むのだった。

〔最新版〕女体責写真五十粒選

A組五十集 大手札判印画紙(9×13種) 焼付

A1	フミツケ汚辱縛り	(新井)
A2	手吊り乳房責め	(五月)
A3	ハリツケ猿ぐつわ	(新井)
A4	全裸正面柱しばり	(遠藤)

A5	亀甲強烈乳房縛り	(遠藤)
A6	全裸手吊りムチ打	(遠藤)
A7	豊満乳房いじめ	(遠藤)
A8	乳房責め股間縛り	(遠藤)
A9	鼻責鼻梁いたぶり	(遠藤)
A10	全裸後手高小手	(遠藤)
A11	膨隆臀部さらし	(長野)
A12	全裸正面強烈縛り	(長野)
A13	うねる緊縛裸身	(長野)
A14	色禪の開股しばり	(長野)
A15	正面縛蛙股ひらき	(長野)
A16	裸自慢縛りヌード	(長野)

A17	正面アゲラしばり	(長野)
A18	正面大の字開股縛	(長野)
A19	遅ましき裸しばり	(長野)
A20	荒縄縛豆絞り猿轡	(大塚)
A21	両手前縛り髪首絞	(大塚)
A22	両手吊り股間吊り	(桜井)
A23	両手膝下しばり	(関谷)
A24	疼れんする裸身像	(関谷)
A25	両股縄掛け開股縛	(大塚)
A26	正面裸身強烈本縄	(梨花)
A27	乳房晒し肉体自慢	(長野)
A28	責衣にはみ出る肌	(東浦)
A29	投げ出し全裸縛	(長野)
A30	捕われの全裸縛	(梨花)
A31	羞らしいの両股縛	(大塚)
A32	猿轡乳房いたぶり	(大塚)
A33	荒縄全身縛り豆絞	(大塚)

A34	盛り上る乳房縄目	(長野)
A35	亀甲本縄鼻いじめ	(大塚)
A36	ムチ打悶えポーズ	(関谷)
A37	椅子またぎ汚辱責	(東浦)
A38	縦縄股間縛り正面	(関谷)
A39	ゴム猿ぐつわ全身	(大塚)
A40	くさり乳房責め	(長野)
A41	強制片足挙げ責め	(大塚)
A42	正面乳房くびり縛	(関谷)
A43	鴨居正面ハリツケ	(梨花)
A44	手吊りパンティ落	(東浦)
A45	白バンド後手吊り	(東浦)
A46	豆絞り高小手呻	(梨花)
A47	裸縛り鼻いじめ	(梨花)
A48	ガンジガラメ立縛	(愛川)
A49	亀甲本縄股間縛	(絹川)
A50	立木縛竹棒責め	(桜井)

贗作・悩ましのサデイズム

△森山美歌夫人に関する小品▽

芳 野 眉 美

G 日曜日午前零時

熱帯植物を植え込んだポリネシア料理専門店のレストラン『タヒチ』は、ナイトクラブ形式だから午前零時を過ぎてもかなり混んでいる。

ポリネシアというのは、ハワイ、イースター島、ニュージールランドを三角に結んだ南太平洋に散在する島々を云う。有名なタヒチやクリスマス島もここにある。

料理の主食はタロイモ、ブタ肉、エビ、貝類などの海産物も多い。洋食と中国料理をミ

ックスした甘酸っぱい料理だと思えばいい。

ハワイアン・バンドの演奏がポリネシアの南国ムードをレストランに漂わせている。

「何を見ているの」

と美歌夫人がアリサに云った。

「タブーの広告」

音楽教師と人妻が、ひそやかな情熱的な接

吻をかわしている画がレストランの壁にあった。男は片手にバイオリンを持ったまま、女の背はピアノのキイにふれたままである。

東洋調の香水『タブー』の広告だった。

タブー（禁制）おかしめの恋というのだろ

うか。

「わたくしみたいね」

静かな微笑を浮かべて美歌夫人は胸に手を添えた。

今夜の美歌夫人がスプレーした香水もタブーだった。何か秘められた意味でもあるのだろうか。

美歌夫人の三面鏡には、オリエンタル調の香水が並んでいる。神秘的な妖艶な感じがそのまま美歌夫人を象徴しているかのように思える。

光輝と魅惑と神秘と壮麗さが香水瓶の中で

動悸している。ジャコウやリユウゼンコウなどの動物性香料が多い。

ジャングルの熱っぽい一夜のようなタイgris（牝虎）、インドの壮麗な庭園の印象シヤリマー（愛の住家）、フランス風にシックに修正したマイシン（おのが罪）などが美歌夫人の好きな香水だ。

「おじさま、遅いわね」

とアリサが美歌夫人に云った。

「酔ってしまいそう」

紫色のカクテルが、アリサの唇に消えていく。美しい金髪とローカットのネックラインからはみでる豊満な乳房だけで、アリサに店中の視線が集中したと云っても過言ではないだろう。この日仏混血児は美貌すぎる。

アリサはドレスの上に豪華な黒のレースのケープを羽織っているだけである。レストランではケープは脱いでいるけれど。

アリサがボーイにパイオレット・フィズをおかわりした。

「おばさまは」

「アリサ、おばさま、はよして頂戴」

「はい、おねえさま」

「わたくしも」

美歌夫人はヘネシイのエクストラを注文し

た。

「大丈夫」

「たまには酔わせてよ」

「わかった」

とアリサが云った。

「うれしいことがあったのでしよう」

「そうかしら」

「あやしいな」

「何が」

「古城さんの童貞」

「童貞」

「奪ってしまったのでしよう」

「さあ」

「白状なさい」

「フフ」

「おじさまにいいつけるから」

「どうぞ」

「いいの」

「いいわよ」

『その優美さ、典麗さの流れー飛鳥』と名づけられた白鳳天平ムードスタイルの髪をした美歌夫人を振り返って見る客は多かった。意表をつく大胆なデザインだが、妙麗な美歌夫人は見事に『飛鳥』をこなしている。

「おかしいわ」

と美歌夫人が云った。

「古城さんが童貞なこと、どうして知っているの」

「だって、大学生の七八・六%が童貞だっていうでしよう」

「なんですって」

「昭和女子大心理学教室白石教授の二十代のセックスライフ・レポートにそう書いてあったわ」

「あきれた、そんなの読んでいるの」

「あら、週刊誌の記事よ」

「まあ、いいわ。大学生の八〇%が童貞でも古城さんが童貞とは、かぎらないじゃないかと」

「それもそうね」

「あやしいな」

「とにかく、古城さんは童貞なのよ」

とアリサはへんな返事をした。

美歌夫人は、アリサの父牧教授が古城真の所属するA大バスケット部の部長であることは知らないらしい。A大学独自のセックス・ライフ調査では、古城真はたしかに童貞だった。父の話からアリサはそう記憶していた。童貞を失えば、バスケット部員の間にすぐひろまるからわかるはずであった。

「おじさまよ」

大きな荷物を片手に入口でテーブルをさがしているSにアリサが手を振った。

「遅くなって失礼」

Sがテーブルに近づいて来た。

「アリサ君も一緒か」

「アリサ、君、はよけいだわ」

「やあ、会社では誰でも君づけなんでね」

中年の上品な重役タイプのSはダブルの背広がよく似合った。体重も二十貫は越していると思われる。

「食事は」

とSが二人に云った。

「まだよ、おじさま」

「遅れたおわびに、ごちそうするよ」

「遅れなくても、そのつもりよ」

とアリサが云った。

「アリサには弱いな」

「アリサはポリネシアン・ティドビッツ」

「わたくしも」

と美歌夫人が云った。

「私もそれにしよう」

Sはボーイに料理とビールを注文した。

「おみやげ」

美歌夫人の前に小さな箱を置いた。

「有難う」

箱を開けると、オリエンタル調の香水だった。ローブダン・ソワール（夕の衣装）とある。

「夕の衣装ね、素晴らしいわ」

今夜のSの要求が暗示されているのかもしれないなかった。

「あら、アリサには」

「アリサはこれ」

大きな洋服箱をアリサの側に置いた。

「うれしい。なんでしよう」

「美歌さんのところで開けて下さいよ」

「おねえさまのところでないといけないの」

「そうなんだ」

「わたくしが注文した品」

と美歌夫人がSに云った。

「うむ」

「今夜は帰さないわよ、アリサ」

と美歌夫人がアリサに云った。

「こわいわ」

ポリネシアン・ティドビッツがテーブルに運ばれてきた。大きなハチに、まるで盆栽のように花と共に飾られたクシざしの肉や貝などが美しい。これを固形燃料の焰であぶりながら食べるのだ。気怪に手づかみでしやぶる

ところにポリネシア料理の楽しさがあるともいえる。
「わたくしも、あなたにプレゼントする品があるの」

と美歌夫人がSに云った。

「ほう、それは有難う」

「お部屋でさしあげます」

「楽しみだな」

「召し上がれ」

ビールをSにつきながら美歌夫人が二人に云った。

H 日曜日午前一時

「うれしそうね」

とアリサが美歌夫人に云った。

「そうかしら」

美歌夫人はさりと受け流す。

「何かあったの」

とSがアリサに聞いた。

「そうなの」

アリサのハイヒールの先が、美歌夫人の草履をこづいた。

「さては」

「さては、なあに」

とアリサがSに云った。

「M君を二人でいじめてきたんだろう」
 「残念でした」
 「違うのかい」
 「おじさま、嫉ける」

「うむ」
 「フフ」
 と美歌夫人が笑った。美歌夫人の寝室に裸の青年が一人で天井からぶら下っていると思

うと、自然に顔がほころびてくるのを禁じる
 ほうが無理だろう。

「愉快で愉快で堪らないの」
 と美歌夫人がSに云った。

「お部屋のカーテンレールに吊るしてきたかと思うと」

「吊るしてきた」

「そうなの、吊るしたまま、アリサとお食事に来てしまったの」

「誰を」

「古城さん」

とアリサがSに云った。

「古城」

「Mさんの大学の後輩よ」

「ああ、あの古城君か」

「御存知なの」

「M君に紹介されたことがある」

「Mさんにお手紙をおたのみしましたの」

と美歌夫人がSに云った。

「古城さんをわたくしの拷問の部屋にお誘いしようと思って」

「——」

「おじさま」

アリサがSの膝に手を置いてSの



身体をゆさぶった。

「ねえ、おじさま」

「うむ」

「嫉んでいるんでしよう」

「うむ」

「それがね」

美歌夫人が楽しそうに笑った。

「アリサのをマスクにしてきたの」

「アリサの何をマスクにしてきたって」

「おねえさまったらね、アリサのパンティ、あら御免遊ばせ、パンティを無理に脱がせてね」

アリサが小声で云った。

「古城さんの顔にかぶせてきたの」

「それはいい」

Sが大声で笑った。

「しっ」

「古城君の趣味はネクタールなんだが」

とSが美歌夫人に云った。

「飲ませてあげた」

「まさか」

「それはかわいそうだ」

「かわいそう」

とアリサが云った。

「へんなの」

「へんじやないさ」

アリサは美歌夫人とSの顔を見較べて首をかしげた。

「アリサも飲ませてあげなさい」

「ネクタールを」

「うむ」

「直接に」

「うむ」

「おじさまみたいにいかないわ」

「私ならいいのかい」

「いいのかいって、とっくにアリサのお飲みになったくせに」

「あら」

美歌夫人が黒水晶のような瞳をきらりと輝かせた。

「いつ、アリサのネクタールをお飲みになったの」

「うそだよ」

あわててSが否定した。

「な、アリサ」

「あら、本当よ、おねえさま」

「——」

「アリサのを飲ませてくれたら、毛皮のコートを買って下さるっていうから」

「飲ませたのね」

「ごめんなさい」

「直接」

「ええ、直接」

「困ったな」

「お困りになることは御座居ません」

と美歌夫人がSに云った。

「帰ってから、わたくしの前で、アリサのネクタールを直接にお飲みになっていただきま

す」

「——」

「アリサ、いいわね」

「アリサはいいわよ、おねえさまのいいつ

けなら」

「悪かった、あやまる」

「だめ」

「おじさま、おねえさまのネクタールでなくて御免なさい」

「こいつ」

「お部屋にもどったら、うんといじめて差し上げます」

「それならば」

アリサがビールの追加をボーイに命じた。

「ビールを飲んでおかないと」

アリサは勢よくビールを飲んだ。

「おじさまと古城さんにうんと飲ませなくち

やならないから」

「わたくしも」

美歌夫人がコップを握った。

I 日曜日午前二時

カーテン・レールの太い鉄の棒に手錠のまま古城真が吊るされてから、すでに二時間たっていた。

電気を消し、部屋の鍵をかけて美歌夫人とアリサが外出したときは、これからどうなるのか一瞬不安な影が真の顔を横切った。自由を奪われて一人にされるといことが、これほど恐怖を感じさせるものかと真は思った。鍵をかける音が静寂な夜に無気味な余韻を残していた。

手錠の鎖がカーテン・レールの滑車につながり、やっと爪先で立てる位のポーズをとらせたのは、美歌夫人とアリサの合作だった。全頭式皮マスクと皮の足枷からは解放されていた。

真を天井から吊ると、サポーターをとって真の精練な肉体を二人はゆっくりと観賞している。裸に手錠だけというシンプルなおポーズが二人共気にいったら良かった。

猿ぐつわはされていなかったが、アリサの

パンティの汚れた部分が真の鼻口をふさいでいた。軽く触れているといい。

透色の小さなナイロンパンティだから、頭からかぶされても目かくしにはならない。

アリサのパンティは前がチュールで美しいレースが飾られ、妖精が穿くような可愛いものである。それほど汚れていないのは、アリサが清潔すぎるからかもしれない。

二人が外出してしまってから二時間というもの、真はアリサの秘密の香に悩まされていたことになる。

真にしてみれば、これほどの屈辱と苦痛はなかったと思われる。

鍵を開ける音がして、部屋に電気がつけられた。

Sが吊るされた真の前に立った

「これはこれは」

真は絶句した。顔をそむけた。裸を同性にじろ／＼見られるのでさえ、むしろが走るのに、恥知らずな姿をSの前に曝らすのは残酷すぎる。

「前はかくしたほうがいいな」

とSが美歌夫人に云った。

美歌夫人が顔をあからめた。

「汗をお流しになったら」

とSに云った。

「わたくしのプレゼントが浴室に置いてありますの」

アリサを振り返って、そろ／＼古城さんを解放してさしあげたら、と云った。

アリサが滑車の鎖をゆるめた。真が勢よく床にくずれ落ちる。

ぐったりしている真を暫く眺めてから、アリサは真の手錠をはずした。

「あばれたのでしよう」

手錠がしまつて、二の腕共手首が紫色に変色している。アリサは真の変色した皮膚をやさしくマツサージした。

「親切だな」

と真は云った。

「部長にいつつけるのはやめた」

「あら、いいのよ」

とアリサが云った。

「セームセームじゃない」

「それもそうだな、二人だけの秘密か」

アリサがタオルで真の身体の汗を丁寧にぬぐった。

「ほしいものがあるの」

「ほしいもの」

「そう」

「なんだ」

「童貞」

「フフ」

「フフ」

浴室から美歌夫人がアリサを呼んだ。

「手錠と足枷を持って来て頂戴」

「洋服を着たらキッチンにいらして」

アリサは真にウインクした。

背広を着た真は、まだSに挨拶をしていない事に気がついた。天井から吊るされていては挨拶のしようがない。

キッチンルームに行くと、隣の浴室のドアが開いていた。スチームバスに首だけを出しているSが見えた。別に美歌夫人に責められているわけでもないらしい。

スチームバスは鉄パイプを組み立てて断熱材のはいったビニール外装をかぶせた、いわば家庭用のトルコプロである。うしろの穴からスチーム発生器が入るようになっていて、

首だけをバスから出して腰を掛け、前のフアスナーを閉じればいい。

真がSに挨拶をしようすると、

「無駄よ」

と美歌夫人が真に云った。

「無駄」

「このひとは、しゃべれないわ」

Sは眼だけを出して、鼻も口もタオルでおわれていた。いや、レースで飾られたタオルはない。

タオルと思ったのは、美歌夫人の七色のパステイラしかった。

「このひとつたら、少くとも三日は穿いてくれっていうのよ」

「——」

「汚れが手頃なんですって」

はなやかな悩ましい猿ぐつわだった。

スチームバスの中のSは、手錠と足枷で自由を奪われているらしかった。

美歌夫人はスチーム発生器のスイッチを、四百ワットから八百ワットに切りかえた。蒸気が首の穴を激しく吹き出した。

「蒸気の意味、わかる」

と美歌夫人が真に云った。

「蒸気の意味」

「汚れものが暖まると、もとにもどるでしょう」

「もとにもどる」

美歌夫人のプレゼントは、このスチームバスらしい。それも真の小道具としてである。

「古城さんも、あとでお入りなさいな」

「——」

「猿ぐつわは、かんにんしてあげます」

「いえ、おかまいなく」

「されたほうがよろしいの」

「そのほうがいい」

「フフ、いいの、そんなことおっしゃって」

キッチンルームでアリサが真を呼んだ。

「ステーキが焼けましてよ」

「どうも有難う」

「アリサ、ちよっと」

美歌夫人がアリサを呼んだ。

「そろ／＼どう」

「さっきから、がまんしていたの」

「そう」

美歌夫人はなまめかしい七色の猿ぐつわをとると、汗をびっしよりかいているSの顔をその猿ぐつわでふいた。

「お約束した通り、アリサのネクタールを召し上っていただきます」

「ネクタール」

と真が叫んだ。

Sは古城真から眼をそらしていた。無言だった。二十分ばかり前と立場が逆になっている。

「赤ちやんがするように、アリサを抱いてあ

げて頂戴」

と美歌夫人が真に云った。

「赤ちやんがするように、ですか」

「ええ」

ローカットのソフトなドレスの下はアリサは何も着ていない。真のマスクになったアリサのパンティは、真の背広のポケットに盗まれている。

美歌夫人の命令通り、真はアリサの両足をつかんで抱きかかえた。

アリサのすんなりしたまっ白な両脚の間にSの首がある。

Sと古城真が挨拶をかわしたのは、真が夜食中のことである。二人共でれていた。

厚いビーステークをほおばる真のテーブルに、アリサは透明な液体をたたえたシャンパングラスを置いた。

「おねえさまが、召し上がられて」

香り高い美歌夫人のネクタールが、酸郁と真を包んだ。

静寂な深い湖の神秘がシャンパングラスに沈んでいた。

寝室から美歌夫人とアリサのにぎやかな笑い声が聞こえている。Sの上座の品をあけているらしかった。

Sが葉巻に火をつけた。
真はシャンパングラスを握った。

(三部・終)

臨時増刊号……愈々残部僅少……

悦虐小説と悦虐写真特集号

本誌全盛時代の昭和二十七年から昭和二十九年にかけての「悦虐小説」の傑作をすべて網羅して、本特集号の第一集から第五集(但し第五集は残念ながら売切れしました)までの五冊に収録いたしました。従って、「悦特」の五集によって、当時の代表的なS小説を知らんになることが出来ます。更にグラビヤ口絵としては、華麗な緊縛女体を、ふんだんに掲載しました。未入手の方は是非この際お求め下さるようお待ちいたします。

第一集「女体緊縛特集」定価三〇〇円 略号「悦一」
第二集「悶悦姿態特集」定価三〇〇円 略号「悦二」
第三集「嵐を慕う蝶」定価三〇〇円 略号「悦三」

第四集「拘束美態特集」定価三〇〇円 略号「悦四」
第五集「緊縛風景一二〇態」(売切)

最近刊行本誌特集号 限定版案内

○臨時増刊「写真と絵画」文献特集号

定価 五〇〇円 略号 (文献)

○臨時増刊「花と蛇」小説、絵画、写真、特集号

定価 五〇〇円 略号 (花)

○限定版 〆美しき縛しめⅤ第三集

頒価 一〇〇〇円 略号 [美3]

○限定版【豊満と清楚】写真集

頒価 一〇〇〇円 略号 [限二]

女体切腹歴史物語

白鳥城散華

山田久仁子

白鳥城が武田勢の重囲をうけて、もう四カ月。城主政家が戦死し、度重なる攻防戦に手兵も多く倒れて今なお持ちこたえているのは奇蹟という他はありません。攻撃勢、武田長康の率いる二万の兵もさすがに攻めあぐねて兵糧攻めとばかり、城を囲んでの長期戦に入ったのです。城内の食糧はすでに底をつき、最後の日は目に見えて迫っているのです。

この様な白鳥城を守るのは政家の娘由利、梢の二人の姫君と五百の兵でありました。今年二十歳の由利姫は長身でスラリとひきしまった体つきには若武者をしのばせる香をただ

よわせ、やや顔長で抜ける様に白い肌と、はつきりと涼しい目もとは輝く様な凛々しい美貌を見せていました。これに対し、今年十七歳の姫君、梢は小柄ながらふくやかな体つきと、おっとりとした物腰に女性らしさがたまたよい、やさしい愛らしい顔立ちは匂う様でした。大手を守る由利とからめ手を守る梢は、その女性らしさにも似ず、恒に守備軍の陣頭で緋おどしの鎧に身を固め、丈なす黒髪を靡かせる姿は敵味方から注目の的であり、味方の士気をどれ程昂めたか知れません。白鳥城の奇蹟もこの二人の姫君によって成しとげられ

たのでした。しかし、如何に戦っても数の差はおおい難く、もはや戦局は最後の段階でした。

城の桜が七分咲きになる頃、いよいよ最後の時は眼前に迫ったのでした。ちょうどその時を見はからった武田長康は軍使を立てて降服の申し状を渡したのです。この条件は和睦と云える様な寛大なものでありました。

即ち、城主なき今は主だった家臣三名の首級を渡し、即刻城を明け渡す事。三歳の若君と城内の者の命は助ける事。二人の姫君は武田家に引渡される事。この条件をめぐって天

守閣で最後の御前会議が開かれたのでした。

家臣達の議論はこの条件は承服出来ないとする者、一家一族を滅亡させるより、この際涙をのて条件を受入れ、再興をはかろうとする意見が激しく対立し、しまいに刀にかけねばすまぬ様子となりました。心に期することがあるのか、今まで黙って聞き入っていた由利が突然、皆を制するとキッパリとした口調で云渡しました。

「皆の考えはいずれにも一理あります。しかし私の考えはすでにきまつて居ります。一族をことごとく滅亡させるのは本意ではありません。それに加えて一家再興の柱というべき家臣を失う事は、まことに痛手です。この由利とて父亡き後は、この白鳥城の城主、おめおめと、武田殿のお手に渡る心はございません。景持殿ただちに軍使を立て、こう申すのです。城主由利姫、切腹つかまつり、首級をさし上げます故、家老の首と梢の引渡し御容赦願いますと」

「姉上、なりませぬ、姉君のお命と引きかえに生きのびとう存じませぬ。梢も姉君と共に腹切つて潔い最期、見せとう存じます」

「いけませぬ！」

「いえ、お許し下さい。梢は女故、お家の再

興に何のお役にも立てませぬ。どうぞ立派な切腹をとげ、白鳥城に梢姫ありと、その最期をのちのちまで残しとう存じます」

必死の顔色ですがり寄る梢を、じっと見入っていた由利姫は心をきめた様に

「では梢殿、そなたの願いは聞きいれましょう。それ程までにこの姉を、嬉しゅう存じます。二人して城主の最期らしく潔よう武田勢の眼の前で腹掻き切りましょうぞ。景持殿頼みますぞ」

「なりませぬ、お姫様！ お腹召さるるなぞめっそうもない」

「景持殿、これは深い分別。そなた達はお家の再興に尽くしてくりゃれ。景持殿、そなたが軍師になって、由利、梢の両姫は明日午の刻にお堀に浮かべた舟上にてお腹をお召しになります故御観賞下され、先刻の条件これにてお許しの程と伝えてくりゃれ。さあ梢殿、まいりましょう」

軍装の由利は立上ると梢を促して次の間に去ってゆきます。家臣一同、余りのことに涙を払いもせず、その凛々しい後姿を見送るのでした。思いもかけぬこの申出でに武田長康の驚きは大変なものでした。

「何！ 姫がお腹を召されるとな」

「はい、しかとその様に」

身を亡ぼして家来を救う姫の心に痛く感じた長康は、すぐにこの条件を受け入れたのでした。

「如何に気文にせよ姫君の事、見苦しき御最期なきよう介錯の義はお引け申した」

切腹は明日の午、長康の本陣の前に舟をもやい、舟上で自害する事にきまりました。天守で軍使景持のこの返事を聞いた由利姫は

「御苦労でした。しかし、長康殿のお言葉なれど介錯の義、平に御無用に願いたい、女なれど城主の娘、見苦しき姿は、お眼にかけませぬとお伝え下され」

この言葉を聞いた長康は

「見苦しき最期させまいとの我心を無にするとは心外である。しからば望みにまかせて存分に苦しませてみよ。腹切りおえても検使さしむけるまで最期はまかりならぬと伝えよ」

生温い春の夜、由利は梢を最後の打合せに部屋に呼び寄せたのです。

「梢殿、長康殿の御使によると、御介錯お断り申し上げた事、長康殿御立腹の御様子、御検使のお許しあるまで最期まかりならぬとのおおせでした。もとより苦しむのは覚悟の上衆目の中での切腹、仕損ずれば末代までの笑

草、そなたも覚悟頼みますぞ」

「姉上のお供しての切腹、梢、嬉しう思います。なれどおなさない、お姉上のお言葉とも思えませぬ。如何に苦しくも取り乱す梢ではござりませぬ。いざこれを……」

梢はすつとひざをまくり、美しいふくよかなもをあらわにすると、懐剣のさやを払いさつと一突き、

「うむ！」

裾で流れる血潮を抑え、姉を見上げてニッコリとほえみます。

「見事です。梢殿の心の程おみとどけしました。今の由利の言葉許して下さい、梢殿、共に潔よう腹かき切つて御検使に女子の切腹、まことに腹切るのかと疑いなきよう、腹深々と掻き切つて腹わたを見せましょうぞ。そなたの臍腑見とどけて姉が切腹しましょうぞ。共に腹一文字に掻き切り、刃を立てたままにて御検使を受け、それより姉は十文

字腹を果たす覚悟」

「梢とてもおくれはとりませぬ」

「そなたの最期見とどけて、わらわがつづきます」

「姉上、かたじけのう存じます」

春の夜がしらじらとあけると由利と梢は大天守に城中の者を召して最後の宴を催し、水盃を交したのでた。三歳の若君、家老達と最

後の別れをすまずと、次に去り、着換えて沐浴をすませます。

二人は侍女に手伝わせて最後の着換えをするのでした。丈なす黒髪を束ねて背に降した二人。城主としての純白の袴を着した長身の由利は切長のうりざね顔の美貌がきりりとひきしまり、若武者の様に匂うばかりです。

これに引きかえ、二つ重ねの白無垢を着けた小柄でふくよかな梢は、女らしさがあたりにただよっています。

「梢殿、お美しゅう思います」

「姉上こそ、ご立派でございます」

やがて最期の場となる大きな軍舟が一艘、中央に台をしつらえ、この上に畳三枚を白布で巻きしめられた切腹の席が用意されています。天守を降りた二人は三室に腹切刀を捧げた侍女をひき連れ舟側に歩み寄ります。

水門の桜が七分咲きの清



さを見せる中を二人は用意の場にぴたりと正座いたします。家臣のさす棹に水門を離れた舟を家臣達はいつまでも涙を浮かべて見送るのでした。うららかな春の陽差しの映える水面を舟は音もなく滑ってゆきます。

両軍は鳴りをひそめてこの光景を見守るのでした。堀端にしつらえた長康の陣の前七、八間にぴたりと舟を止めるといかりを投じた家臣はしっかりと舟をもやい横向きに長康の本陣に向けます。用意の小舟が近づくと家臣は顔も上げ得ず、小舟に乗り移るのでした。

「景持殿、あとをお頼み致しますぞ」

「はっ、確かに御安心の上、お腹をお召し下され」

「かたじけなく思います」

やがて長康が陣幕を開き、小姓を連れて中央の座につくや、これを合図に右手の由利と左手の梢は半分向き合う様にし、うやうやし



す。長身の上体は明るい陽差しの下に白い象牙の様に輝くばかりでまっ白な形のよい胸から下腹へ流れる線はその面長の美貌とあいまって凛々しい、この世のものと思えない美しさです。由利は腰一杯に着衣を押し下げます。

次に梢が、愛らしい顔に紅をちらし、消え入る様なはじらいを見せつつ諸手を懐に入れ一気に白無垢を押しひらき諸肌を脱ぎすてます。はじらいに上気した十七歳の体はややふとり気味にふっくらとして、小柄な

から桜色にけむる様な美しさです。姉と異って、そのふくよかな体は蕾の様な美しさをたたえ、豊かな胸が桃の花の様に匂っています。梢も白無垢を腰ぎわに充分押下げると、姉を見てニッコリと愛らしくほほえみます。

「では、そなたから心静かに」

「姉上、お先にごめん下さい。梢の切腹、お見とどけ下さい」と云うや、右手で短刀を取

く長康に一礼致します。二人は注視の中で、はじらいを見せつつ切腹の仕度にかかるのです。まず梢が白無垢の帯をゆるめ、手ぎわよく取り去るときちんとたたんでかたわらに置きます。由利は、はじらいを払う様にキッと唇を結び、袴をゆるめると腰の下にひくく着け直し、抜ける様に白い顔をうつ向け懐に手を回すと、さっと一思いに諸肌脱ぎになりま

り上げ、左手を添えて押しいただき、切っ先二寸を出し、白紙をきつく巻きしめ、三宝をうしろにまわします。眼を閉じ、右手に短刀をかまえ、左手でふくよかな下腹をゆっくり二度、三度撫で下します。春の陽がうららかに射す中で今梢は潔きよく切腹しようとしているのです。覚悟がきまり、右手の短刀をふっくらとした左下腹が太腿に流れようとするあたりにかまえます。

「ううッ！」

ああ、遂に少女は桜色にけむるふくよかな腹に短刀を突き立てたのです。刀の輝きはことごとく腹中に没し、思わず洩れる呻声をならじと唇を噛みおさえるけなげさ。

「梢殿、潔い、いざ力一杯引き廻すのじゃ」

「うむッ」

体を固くし、じりじりと短刀を引きまわすのにつれ黄色い脂肪が見え、そこに鮮血があふれて腹を伝いはじめます。

「一寸、さあ梢殿、力一ぱい！」

桜色の姫の肌が苦痛に燃えたつ様です。

「二寸、もっと力一ぱい」

小さきみにふるえるもろ手を短刀にかけ、腰を浮かす様に、きりきりと引きまわしていきます。

「二寸五分！ まだ足らぬ、力一ぱい刃を深く！」

「うむッ、うーッ！」

傷口からしたたる鮮血は白無垢を彩りはじめます。可愛らしい顔に苦痛の色を浮かべ、悩まし気に体をふるわせる梢、臍の下まで切り廻し、あえぎあえぎ力をこめようとするけなげさ。

「刃が動きませぬ。あーッ！」

「梢殿、耐えるのじゃ、腹わたに切込んだのじゃ、引抜く様に掻き切るのじゃ！ いざ腹わたを！」

「あッ！ むっッ！」

思わず洩らした叫声。腸を掻き切った苦痛に全身を慄るわせます。にわかに血が激しく溢れ、白無垢の膝を彩り白布の上に拡がってゆきます。下腹の一番ふくよかなあたりを三寸程も切開かれ、深く窪んだ臍の下を血まみれの短刀が右に進んでゆきます。

「まだ足らぬ、もっと！」

切口は血が溢れて遂に左下腹から黄色脂肪の間から灰色がかった腸がのぞいています。

「むーッ！ あああッ！」

「なんのこれしき、もっと、力をこめるのじゃ！ まだ足らぬ！ もっと！」

「ああッ！」

遂に梢はふくよかな下腹を一気に五寸掻き切り、愛らしい美貌は苦痛に喘いでいます。短刀を腹に立てたまま肩で息をつきつつ、左手で押出された腸をぐっと抑えます。

「梢殿見事じゃ、いざ白鳥城主由利の最期、どの様に腹掻き切るか見物するのじゃ」

輝くばかりの長身をきつと起すと右手に短刀を取上げ、切っ先三寸を残して白紙をキュッと巻きしめ、握り直すや左下腹にかまえ、左手でひきしまった雪白の下腹を撫でさります。目を閉じて覚悟をきめ、キリッと唇をむすび、「いざ！」と一声、キラリと春の陽をうけて短刀がきらめくと「ブスッ！」にいひびき、一息に左下腹に突立てたのです。梢より深く突き立てたのでしよう。一思いに腸に切入った短刀の苦痛を男まさりの由利は唇を噛み、声洩らさず、息をととのえると力一ぱい引きまわします。絞るように短刀を握りしめ、のびりながら、引きしまわしてゆく由利、激しく血を吹く傷口は、激しい切腹を知らせている様です。肌が喘ぎまっ白な胸が波打って苦痛に耐えているのです。

「こ、梢殿、この通り腹わたを、むっ！」

溢れる血潮につれて腸が少しずつ押出され

て来ます。臍の下二寸程を右にきりきりと引きまわします。美貌の眉をひそめて苦痛に耐える由利、大きく開いた傷口から腸が波を打って膝の上に溢れ、袴から白布にかけて流れる血潮の海、遂に右下腹まで真一文字に引きまわした由利は短刀を一思いに深く突立てます。さすが気丈でも二十歳の娘です。この苦痛の耐えがたさに思わず体をのけぞらし

「さ、残念！ なんのこれしき！」

腹わたをしごく様に握りしめて耐えるけなげな姿。今や腹真一文字に掻き切った二人はこのまま検使を待つのでした。

「いざ梢殿、取り乱すまいぞ、うむッ！ 苦しむのじゃ」

「は、はいッ！ あ、姉上！ あッ！ うむッ！」

思うさま腹掻き切って血まみれのまま耐える二人の凛々しさ。この様子にいたく感じた長康は、かたわらを顧みます。

「いざご検使を」

用意された小舟が検使を乗せ、二人の前に漕ぎよせられます。必死に苦痛を耐えつつ二人は検使に一礼します。

「御役目御苦勞に存じます。城主由利、妹梢の兩名切腹つかまつりました。女人の身故、

切腹はたせずとのお疑いなき様兩名の腹わたを、この通り御覽に入れます。何卒、お、お見とどけ下さい」

「おお、たしかに御切腹お見とどけ申しました。いざ御最期を——」

「か、かたじけのう存じます。されど不肖白鳥城の主、まだ氣力がございます。思うさま腹掻き切つての最期のぞむ所でございす。長康殿に城主の切腹御観賞あれとお伝え下さい。お返事を承りたく存じます」

「心得てございます。いざ心静かに」

検使は舟を返しました。去って行く検使を見送りつつ二人は腹の短刀を握りしめ、苦痛に耐え続けるのです。

「由利、梢両姫君の御切腹確かにお見とどけ申しました。姉君由利殿、真一文字にて腹わた悉くあふれ出する程にて、妹君梢殿も真一文字に腹を召されて居ります。御両姫君とも女人としてはずかしからぬ切腹故腹わたを流し出してお心を示すとお考えに存じます。尚、引き続き氣力が許す故、立派な切腹をし遂げたき故お許し下されとの事に存じます」

「むッ！ 潔よい。姫君の御切腹、最後まで長康、拝見つかまつると伝えよ」

長康の眼前には、男も及ばぬ壮烈な切腹を

遂げ、苦痛に耐えているけなげな姫の姿があるのです。小舟は再び二人の前に寄せられます。

「男も及ばぬ御切腹、殿いたく御賞美あり、心ゆくまで腹を召され、御最期を果されるようとおおせにございます」

「か、かたじけのう存じます。いざ梢殿」

「ハ、ハイッ！」

血まみれの短刀を腹から抜取った由利は刃を下向けに鳩尾に力一ぱい突立てます。

「うむ！ うーッ！」

と切長の眉をひそめる美しさ。おくれではならじと梢も右腹の短刀一えぐりするや、じりじりと切上げます。

「あッ！ むーッ！ あ、姉上、もはや力つきて……」

梢の腹から新たな血潮が激しくほとばしります。

「何のこれしき、と、こらえるのじゃ、力一ぱい、うーッ！」

「ああッ！」

「耐えるのじゃ、姉の十文字腹、この、この通り」

きりきりと縦に切下げ、奥深く窪んだ臍を通り、下腹一ぱい、袴の紐まで切下し、開い

た傷口から溢れる腸は膝の上に溢れて白布の上になねうねと波打ちます。

梢も、この壮烈な切腹にはげまされ、のび上るようにつつ悩まし気に体を波打たせてのけぞりながら切上げます。腸が切腹をおえた梢の腹から大きく現れ、波を打って膝の上に溢れます。

「うーッ！ み見事じゃ梢殿！ いざもう一

息、腹の奥底まで突立てましようぞ」

うむッ！ と叫ぶと二人は腹の奥深く、最後の刃をつつ込みます。

「あッ！ あッ！」

遂に二人の唇から耐えかねた叫びが洩れます。苦しい息の下から

「い、いざ最後の刃を梢殿、そなたから」

「あ、姉上、お先に！」

短刀を腹から抜くや持ち直し、乳の下に力一ぱい

「あーッ！」

体を慄わせると、崩れるように前に倒れこむ梢。

「み、美事！」

四人の美女の縛られポーズの代表的作品集

女体緊縛写真のアルバム

限定版グラビヤ印刷写真集

豊満と清楚

一般書店には一切市販しません。是非直接発行所へお申込を！

限定版頒価一部 一〇〇〇円（送共） 略号「限二」

〔モデル〕 長野 良子——大塚 啓子——五月亜紀子——新井マリ子

限定版第一号として、グラビヤ写真集の「美しき縛しめ」第三集、略号（美3）を本年二月に刊行しましたところ、多数のマニヤの方々のお求めを頂き有難うございました。嘗て十数年前コロタイプ印刷の女体

緊縛写真アルバムとして刊行いたしました「美しき縛しめ」第一集、第二集は忽ちのうちに売切れとなり、今では見ることもさえないわぬ稀少な文献となっています。皆様のご熱心な要望によりまして、ここ

おくれではならじと、由利も下腹の短刀を抜き取ると胸に、「うむッ」と伸び上り、がつくり、そのまま倒れこみます。壮烈な切腹を遂げ、血の海に倒れた美しい二人の上に春の日が、さんさんと降り注いでいるのでした。

長康は、この二人の勇ましさに痛く心を動かされ、直ちに城の囲みを解いたのは云うまでもありません。身を滅ぼして城を救った二人の壮烈な最期は、後々までも語り継がれたのでした。

に限定版グラビヤ写真集刊行に踏み切りました。本誌グラビヤ口絵では種々な制約のため、思いきった企画編集を遂行できませんでした。直接販売の限定版写真集によってファンの方々のご期待に応えたいと思います。

今度、限定版第二号として、前集とは、いささか趣を変えた緊縛女体アルバムを作製いたしました。若々しい豊満な肉体を誇る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美しさを最高度に発揮した縛られポーズの大胆奔放のかずかずを、画面いっぱい、所狭ましと活躍させました。特に迫力を増すためとグラビヤ印刷の効果をフルに運用する

ためにも、写真面を大きくしました。
加うるに清楚にして純情なフェイスと初々しい肢体の持主である五月亜紀子と新井マリ子両嬢の痛々しいばかりの可憐な緊縛裸身を以て誌面を飾りました。

緊縛フォト・アルバム

限定版第二号 豊満と清楚 内容

△美しき縛しめ(第四集)▽

(一)、豊満をくびる……………大塚 啓子
(二)、胸と胴をくびった縄にもだえる女体……………長野 良子
(三)、グラマーの縄目……………長野 良子
(四)、豊満裸身の陶酔……………長野 良子
(五)、うっとりとした表情は、縄にか細にか……………長野 良子
(六)、鼻をいためた表情……………長野 良子
(七)、指にて鼻を弄はれて恍惚とした表情……………長野 良子
(八)、荒縄の緊縛感……………大塚 啓子
(九)、とげとげとした荒縄が柔肌を痛める……………大塚 啓子
(一〇)、黒と白の対照……………大塚 啓子
(一一)、白い晒と荒縄のケバとのコントラスト……………大塚 啓子
(一二)、責めに疲れて……………大塚 啓子
(一三)、責め抜かれてぐったりとなった女体……………大塚 啓子
(一四)、戯れの縄プレイ……………新井マリ子
(一五)、アパートの一室での緊縛プレイの一コマ……………新井マリ子
(一六)、襲いくる魔手……………新井マリ子
(一七)、恐怖のまざなし、黒い触手が迫ってくる……………新井マリ子
(一八)、首締め縛り……………新井マリ子
(一九)、のびやかな肢体が痊れんする首絞め姿態……………新井マリ子
(二〇)、猿ぐつわ非情……………新井マリ子
(二一)、開股しばりの上に非情の猿ぐつわが……………新井マリ子

(二二)、開股棒しばり……………新井マリ子
(二三)、革の口枷が頬もくびれよと締めつける……………大塚 啓子
(二四)、絶叫のワンカット……………大塚 啓子
(二五)、縄目が埋もれるような凄惨な緊縛感の味……………大塚 啓子
(二六)、痛さに喘ぐ……………大塚 啓子
(二七)、責められて急所の痛さに思わず呻めく……………大塚 啓子
(二八)、首縄と足縄……………大塚 啓子
(二九)、首に掛った縄と足の縄が女体を変える……………大塚 啓子
(三〇)、縄に狂う……………大塚 啓子
(三一)、悶えても拘束された麗身は逸脱しない……………大塚 啓子
(三二)、足首の縄目……………大塚 啓子
(三三)、反りかえった足の指が縄目に可愛い……………大塚 啓子
(三四)、二筋の縄がかくも美しい姿態を現すか……………大塚 啓子
(三五)、誇らかな成熟の匂を十分に撒きちらす……………長野 良子
(三六)、投げ出された肉づきのよい肢、足、脚……………長野 良子
(三七)、全裸緊縛の羞ら……………長野 良子
(三八)、はにかんで見せた美しい全身のポーズ……………長野 良子
(三九)、両手吊りと足首……………五月亜紀子
(四〇)、両手両足を縛られて一本棒に晒される……………五月亜紀子
(四一)、けがされぬもの……………五月亜紀子
(四二)、清純な美しさが、この全身に漂っている……………五月亜紀子
(四三)、猿ぐつわを噛ます……………大塚 啓子
(四四)、晒の白布が鼻も口も一緒に掩って締め……………大塚 啓子
(四五)、荒縄への誘致……………大塚 啓子
(四六)、荒縄をさばいて次第に捉らわれる蝶々……………大塚 啓子
(四七)、噛まされた猿轡……………大塚 啓子
(四八)、珍しく完全に噛まされた息苦しい猿轡……………大塚 啓子
(四九)、猿ぐつわと縄……………大塚 啓子
(五〇)、厳しい縄目と息づまる猿ぐつわの烈しさ……………大塚 啓子
(五一)、緊縛女体操縦法……………大塚 啓子
(五二)、縛りに変化をつけられた女体はどこへ……………大塚 啓子

(五三)、くねらす豊満女体……………大塚 啓子
(五四)、瑞々しくて柔らかな女体が縄にくねった……………大塚 啓子
(五五)、棒責めの序曲……………新井マリ子
(五六)、両足首の両端に縛られて、さて……………新井マリ子
(五七)、答打ちのポーズ……………新井マリ子
(五八)、さあ、打って、とながし目の艶なこと……………新井マリ子
(五九)、素晴しき美身……………長野 良子
(六〇)、輝くような美しい裸身もあらわに……………長野 良子
(六一)、縄をはねかえす素晴しい女体の重量感……………長野 良子
(六二)、情容赦のない縄は巨大な乳房をへしゃぐ……………長野 良子
(六三)、開股しばりの表情……………大塚 啓子
(六四)、開股しばりになった女の顔のアップ……………大塚 啓子
(六五)、両肢を開けて縛り上げられたポーズ……………大塚 啓子
(六六)、びんと一直線に伸ばして縛られた脚……………大塚 啓子
(六七)、放置されて全身の痛さに耐えるシーン……………大塚 啓子
(六八)、強盗侵入の構想……………新井マリ子
(六九)、押し入った強盗は女を縛って転した……………新井マリ子
(七〇)、緊縛女体の鑑賞……………新井マリ子
(七一)、家宅侵入した賊の目的は美体の鑑賞……………新井マリ子
(七二)、台所で縛られていたぶられるシーン……………新井マリ子
(七三)、胸、美しきトルソ……………大塚 啓子
(七四)、胸、臍、ウェストが縄によって捕捉……………大塚 啓子
(七五)、くねらせた見事な臀部を捉えたレンズ……………大塚 啓子
(七六)、全裸の背面緊縛美……………大塚 啓子
(七七)、後手高小手の美しさは素晴らしい……………大塚 啓子
(七八)、柔肌を喰いちぎるようにくびるコード……………大塚 啓子

奇譚三十九夜物語

△最終回——第三十九夜▽

辻村 隆

マンゴスチンの果肉を思わす様な、あかい太陽が漸やく水平線の彼方に近づき、緑蔭を縫って、磯の香をのせた汐風が、別荘の庭に忍びよる頃、三々伍々、今日の日を待った人々は、蟬しぐれを分けて集って来たのです。

都会の灼けつく暑さと騒音を逃れた紀伊の奥和歌浦のこの別荘はライカ氏の知人に、今日のこの日のために、特別に開放してもらったものでした。

夏の間は社員の厚生寮として使用されているのですが、今日許りは管理の老夫婦も一日暇を出され、退屈男達をもてなすホステスが二人、選ばれて、何かと酒席の間を縫い廻っておりまして。ライカ氏が特に選んだホステス（この二人のホステスの意味は、いずれ最後になって判明しますが……）が用意をすませて控室に引下ると、

やがてスバル氏が、一同を制して立上りました。

千三百坪の百花草木の、樹々に埋れた大庭園に涼風はさやけく吹き渡り、十六畳敷きの客間に一同は居並びます。

床の間を背にして、右より、ナイロン氏、ワイン氏、ドクター氏ステッキ氏、ゴルフ氏、パイプ氏、ライカ氏の七人が順に並び、開放たれた廊下側には、最終回のこの日、特にゲストとして、退屈男達のメン／＼の希望でお招きした人々が居流れます。

左より、奇ク編集長の箕田京二氏、カメラマンの塚本鉄三氏、挿絵の四馬孝氏、投稿者の新宮明夫氏、水野弘氏、瀬沼四郎氏、糸島博氏、それに読者側から三隅良信氏と長田実氏の九人の人々が稍きこちない様子で席を占めております。司会者はスバル氏——辻村隆——、末席でやがて口を切ったのです。

「前回、前々回と二回、メンバーの己むを得ない故障のため、欠会になったのは誠に遺憾です。前々回は三十九夜物語の最終回でもありますので、趣好を凝らすため、又、ゲストの皆さんに御連絡のため、一回ぬけたのですが、前回は突然の不測の事故で、欠会の己むなきに到りました。列席の、ステッキ氏の運営致しております会社の新潟の支店が、大地震の為、致命的な損害を蒙り、ステッキ氏の御心衷をお察しして、お見舞い申上げると共に、一応メンバーの総意で、中止した次第です。幸い斯界各位の御同情も集まり、着々再建されておりますが、集中豪雨もあって、再建は予想通り、捗どらず、ようやく一週間前、開店に漕ぎつけられました。私達メンバーは、過去三年半、一人の欠席もなく続けて参りました、最終回の今日、ステッキ氏の参加を確認して、直ちにゲストの皆様にも御連絡し、今日の例会を持った次第です。」

ゲスト各位には、暑い中を御多忙にも拘わらず御参加賜わり、メンバー一同を代表しまして厚く御礼申し上げます。大団円のお話が面白いが、つまらぬかは別としまして、一応今回を以て、奇ク誌上からもお別れする次第ですが、今日の話し方、ワイン氏、ドクター氏、ライカ氏、パイプ氏の四話をもって、三十九夜物語は九十三話でもって打切られるのです。

公私共に親しく睦みあった私達は、恐らく今後も亦、こうした例会は形を変えて続けて行き度いと思っております。御参考までに各人の話し数を纏めて見ますと、

ナイロン氏、ワイン氏、ドクター氏、ゴルフ氏は各十二話づつ。
ステッキ氏、ライカ氏、パイプ氏は各十一話づつ、私（スバル氏）は十二話の、合計九十三話となります。

今夜の四話の終了は、三時間許り戴いた午後十時頃の予定です。それより引続き、懇談会を致しまして、今宵はごゆるりと御滞在願って、翌朝午前十時過より、先刻皆様御承知の、二人のホステスをモデルに、緊縛の撮影会をこの大庭園を拝借して行ないたいと存じます。

では早速予定通りワイン氏より話して戴くことに致しますが、その前にゲストの皆様、私達メンバーのそれとを、お互いに紹介致したいと思ひます——」

スバル氏の挨拶は終り、メンバー、とゲストはそれと自己紹介をしました。メンバーは、ここでその本名を明らかにし、職業なり簡単な略歴をつけ加えたメンバーもありましたが、茲でそれを説明するとなると、尚更前置きが長くなりますので、メンバーの履歴は割愛して、勿々に話題に入ってゆきます。

最初に指名されたワイン氏は、常になく、心持ち顔を硬ばらせ、やや話し難げでしたが、それでも、やがて語り始めました。十六人の視線が一様に彼の唇にそそがれます。

第九十話 牝犬のわな

何分にも最終回ともなりますと、私も相当タネを出し尽しましてこれと云ったお話もなく、果してゲストの皆様御満足にお応え出来るかどうか、甚だ怪しいのですが、おきき苦しい処は御勘弁願って、私の友人の体験した、こんな話が御座います——。お話中私とは、友人Rのことです。

× × ×

京都の南座の芝居がはねて、小屋からはき出されると、生温かい

熱気が、ムーンと私の体を包んだ。冷房の中から出ると外気の熱さに私はいつもウンザリする。舗道を横切り、向いのレストラン菊水で、冷たい飲物を友人等三人でとり、彼等はすぐ真向いの京阪四条から、大阪行特急の車中に消えた。

私の関係する販売会社の招待興業で、暑いさ中、見たくなかったが、友に奨められて覗いたのである。

私がひとり残ったのには、実は少し魂胆があった。二カ月前、先斗町に接待されて遊んだ時、若い妓で、舞妓からやっと自前になった許りの、菊葉と、フト一夜の馴染を重ねてしまった。男女の惚れ合いなんて誠に他愛のないもので、別れ際、菊葉はすっかり私を好きになって、摺んだ右手を離そうとせず、

「きつと、又、きとくれやす。どんな無理してでも、抜けてきます。本当に逢いとおす……、きつとくどっせ」

と駄目を押して、彼女の方から、激しい唇を寄せてきた。

その餅肌の柔かさと、開花直後の楚々たる美しさにひかれて、私は芝居の中頃から、今一度逢って見たい慾望と衝動にかられ、大江美智子の早変わりも上の空だった。

レストランのカウンターの前の電話から、私は菊葉の住む置屋、鶴家にダイヤルを廻した。女将の声——、私が馴染と云うほどでもない客の一人とすると、口は柔かく流暢だが、婉曲に断わって来た。彼女は大切なお客があつて、恐らく今夜は体があかないからといった返事で、他の妓ならどうだと云われたが、私は菊葉以外ならもう遊ぶ気にはなれなかった。受話器を置くと、すっかり逢える気になっていただけに、空虚が一時に迫ってきた。

△こんなことなら、奴等と一緒に帰ればよかった——。菊葉が私の

電話をしたら、きつと逢ってくれるに違いないのだが……▽
そんな色男めいた自信も、或いはこれが、玄人女の手管ではなからうかと自嘲に還って、私はメモをとって立上った。

京都の盛り場の夜は、未だ、ネオンに赤かった。菊水を出て、独りぶら／＼祇園の方に向って歩き始めると、通行の私に、やたらに小さいチラシが手渡される。

——今宵、素晴らしい恋人が貴方をお待ちしております——電話でどうぞ——……

——しびれる京の感触、貴方のお供をする京美人と今宵ひとときを……

——美女は疼く体を、貴方に投げかけて……しっかりと抱きしめてやって下さい。クラブ×××——

私はそれらの数枚を、ひとまとめにして、ポイと路上に捨てた。この種のガイドクラブやバーの怪しげなことを充分知っているからだ。一度好奇心で、ガイドクラブの女性を呼んでやれと、助平心を出して電話したことがあった。二時間四百円と云う安さに、クサイと思ったが、矢張り一杯ひっかった。待ち合せた喫茶店に来た娘は、確かに一皮むけた美人であったが、入会金二百円、車代二百円それに会費四百円で、忽ち八百円をとられ、しかも、一時間が四十分と云うきまりで、即ち二時間は一時間二十分、それも出発の時からだから正味は一時間——喫茶店でコーヒーをのみ、少し喋べっていたら、一時間はまたたく間に経って、追加金を要求された。下手に交際していたら、二、三千円は吹っとお仕掛になっている。勿論相手次第でうまくゆけば、ホテルにしけこみも出来ようが、恐れをなした私は、匆々に喫茶店を飛び出したことがある——。

当てが外れて、目的もなく歩く私に、執拗に又しても一枚ビラが渡された。

「出血大サービス。大瓶ビール、サービス料おつまみ付で、僅かの百円ポッキリ。ぐっと一杯ぜひどうぞ……」

酒屋で買っても一本百二十五円のビールが、サービス付で百円とは、どう考えても、眉唾である。どうも私は安いものには弱いしどんな仕組になっているのだろうか、半信半疑で、その癖足はいつかしか、ビラのアルサロの方角へ向いて歩いていった。

木屋町界隈の薄暗い横丁に、お目当てのアルサロがあった。間口一米許りの貧弱なかまえに、ネオンのみがどぎつく、入口に鋭い目付のボーイが、つくり笑いを浮べて三人許り立っている。

てっきりいかれそうに思えて、その門口で尻込みして、立去ろうとした時、一人のボーイが既に私の開襟シャツの袖を握っていた。

「ビールのんで、遊んで、たった百円ですよ——。ほんとに百円ばかり……嘘だと思ふなら入って見なさい。カンバンや広告にいつわりなしですよ。ハイ、どうぞ……どうぞお一人さん御案内——」

否応なしに引き戻されて、まるで拉致された姿勢で、私はドスンとうす暗いバーの堅いクッションの椅子におしつけられていた。成程ビールが一本と、申し訳程度のおつまみが届いた。女が四五人、どや／＼とよってくる、変りばんこにコップについだ。

「私ものませてね、……」

「私も……」

「私にも……」

甘い砂糖にたかるアリの群れである。後悔のほぞを噛んだが時既におそし。次々と勝手に注文しては、赤や青の洋酒へらしきもの

が運ばれてくる。これ以上薄く切れないカマボコ、五、六粒のピーナツ、するめのきざんだものを申し訳程度——それを麗々しく大皿に並べてもってくる。ボーイが睨んで、私の挙動を凝視している。

△裸にされても追付かないぞ——これは……▽

私は頓に心細くなり、内心菊葉に逢えなかったから、こんな羽目に陥入ったのだと、関係のない彼女を恨み乍ら、勿々に勘定を求めた。少しでも被害を少なく喰い止たいからである。女の顔など、碌々見るゆとりもない——。

差し出された勘定書が二枚。一枚には判っきりビール一本おつまみ、サービス料共百円と記されてある。もう一枚の別口勘定書を見て、私は蒼くなった。何だかんだと、ゴチャ／＼記入されてあって占めて、二万八千六百円也とトータルしてある。

私の口にしたのは、正味ビール一本分にも足りないのに、これ又何と云う恐怖の勘定書だろう。私の囊中には一万円そこ／＼しか持っていない。

△これは大変なことになった。ウカ／＼すると裸にされても追付くまい。どうしたらよからう？▽

私はポケットで財布をにぎって、その去就をしきりに考えたか、別段いい思案も浮んではこなかった。ボーイが甘い奴だといわん許りに、白い盆を手に佇立している。

「ビール百円だと書いてあったものだから……こんな無茶な勘定ないよ——」

「確かにビールは百円でサービス、おつまみつきですが、追加分はそうなっておりませんので……」

「勝手に女達が注文したんじゃないか——ボクは注文しないよ」
 「彼女達は注文するから奢ってと、貴方に申し上げて、御返事なかつたのは、いいと解釈したからテーブルへ通したのです。今更因縁をつけるのですか——」

ボーイは地金を出してぐっと凄んだ。



ようにして、店を出た。店内で油断なく、定期入れと名刺類をとり上げられているので逃げも出来ない。黒い殺意はこんな時に湧くものだ。フト心に殺意がよぎったが、こんな莫迦な相手を殺したところで、自分の身の破滅と、すぐに理性が私を平静に戻した。

京阪は既に終電に近かった。駅へ向う途次二人は気を許さず、

「仕方がない、払おう。しかし金は一万円少々だ。時計をカタにおいて、残りはボクの家へ一緒にとりに来て貰おう。それしか仕方ないじゃないか——」

私は憤懣やる方なく財布をはたき、大阪までの電車賃だけを残し、時計を外した。激しい復讐的な気持が渦を巻いた。余程警察沙汰にしようかと思ったが、後腐れをおそれ、私は若いのみ上げの長いボーイ（既に派手なシャツとピチツとしたズボンに着換えた、やくざスタイルに変わっていた）と、席にはべった二十一、二才の濃いドーラン化粧の女の二人に抱えられる

私を挟んでピタリと寄り添う様にして歩いた。

△こいつら、恐らく今夜京都へは帰れまいが、或いは車代や宿泊料までゆする気であるに違いない——、何とか胸のすく様なしっぺ返しの方法はないものだろうか——▽

私は思案にくれ、観念したフリをし乍ら、懸命に考えつづけた。△思い切って走るか——、こいつら二人だと何とかマケるだろう。

陳腐な方法だが、今はそれしかあるまい——▽

咄嗟に私の思案はきまった。しかし、相手二人だと甘く見たのが実は私の大変な誤算だったのである。

河原町へ出た時、私はいきなり二人を引き離して、パッと走った——。何か叫ぶ声……十数米走って、私は忽ち前面を数人の若い連中に塞がれてしまった。暴力組織の網は街中に張られてあったのだ。

善良な市民は皆遠巻にしたり、ソッポを向いて行く。私は夢中で叫んだが、数本の腕に両手をとられ、引曳られる様にして、元の暴力アルサロに連れ込まれた。

「困りますね——約束を破られちゃ……。チト痛いめを見ますか……」

言葉は丁寧だが、眼の上に切創のある白服の中年の男が、私の頭をつつき上げた。

「地下の別荘へ御案内しておけ——」

私は恐怖で声も出ない——私の計画は完全に失敗したのだ。両腕をとられて、私はラード臭い隘路を通り、コンクリートの階段をおりた。裸電球がポツンと一つ——。雑然と壊れた椅子やテーブル、ビール瓶、季節違いの造花や、歪んだ毒々しい看板などがあちこち

に散乱している、四坪くらいの漆喰のガラクタ部屋だった。

壊れた椅子の一つを起して、ついてきた三人のボーイ達は、私をそこへ座らせ、両手を肘掛に、落ちていた荒縄で縛りつけ、両足を揃えて縛った。

「一寸、ここで御辛抱下さい。いずれカンバンになり次第マスターがきて、御相談にのりますがね——御退屈なら、ホレ、あれなりと御覧下さい——」

指さした男の一人の先に眼をやって、私はあっと声を立てた。そこには、爪先スレ／＼に両腕を高々と吊られた女が、薄明りにもそれと分る鞭跡を、胸に腰に、乳房に歴然と痕を残して、無惨にもパソナイ一枚で吊り下げられていたのである。

「どうです、お客さん——。肉体の門／＼だってこうはゆかない、いい見世物でしょう。この女はネ、我々のヤリ口を嫌って逃げ様とした女でネ。チョット見せしめに、痛い目にあわした処ですよ。今夜はみっちり叩き直してやるつもりですから、へへ、お客さん、こんないいショウは、一寸見ようたって見られませんよ——」

「おい、いい加減にしろ——」仲間になしなめられて、喋べっていたボーイは、慌てて口を噤んだ。

ガタ／＼と男達は階段を上っていった——裸電球の下で、私はこの女をしばし、息をつめて凝視していた。悪らつなやり口に逃げ出そうとした女の、これは余りにも無惨な手ひどいリンチだ。

女と、椅子に縛りつけられた私との距離は二米足らずであった。もう声もなく女は首を垂れ、微かに身を震わしていた。

映画やお芝居なら、この辺りで誰か助けに現われるのだが、事実

はそんな気配もない。私にしたって、こんな所に檻禁されていようとは、恐らく誰一人知らないに違いない。ここを逃げ出そうとすれば、否応なくアルサロの内部を通り抜けねばならない。脱出は不可能と云うより仕方がない。

「もし……大丈夫ですか？」

私は沈黙に堪えられなくなって声をかけた。女はノロノロと乱れた黒髪の頭を上げた。

「ええ——」

微かに応えたが、絶望的に声は噎れている。

「随分非道くやられた様ですね……」

「地獄ですわ——」

「助けて上げたいけど、私も縛られている。椅子の儘そこまで近寄れますか……」

「駄目ですわ——」

挙げた女の顔は意外と若く、蒼褪めているが、丸顔の美人だった。豊かな胸の隆起が弾み、吊られて伸びた腹部は凹んで細かった。

「もう二、三十分すればカンパンです。私はもうこれ以上責められると、死ぬかも知れませんわ——」

「そんな弱音を吐いてはいけない。二人で助かる方法を考えよう——何とかならない？」

「無理ですわ——」

女は悲しげに眼を伏せた。吊られた両手が、既に紫色に変わっている。爪先立ちして、辛うじて両手の重みをささえているが、ともすれば腰がよろめき、重心を失なって、体が左右に廻りかけた。

「地方から出てきて、欺されて連れ込まれた女のひとが、もう何人も片輪同然にされているそうです。その挙句皆んなでオモチャにして、ダム建設の現場へ売ってしまおうです——。それを聞いて怖くなって逃げ出したんですけど……」

「……………」

「貴方はどうなさったの——」

「法外な値を吹っ掛けられて、金が払えず、逃げて捕まったのさ——」

「よくあることですわ——。お酒の様に見せて、あれは水にシロップで色つけただけのものですわ。いくらのもんでも酔わない仕掛けです。警察もずっと以前から眼をつけているんですけど、被害にかかった人が、後難をおそれ訴えないんです。だからいい気になって悪ドイ事をやっているんですの。」

「私はどうなる？」

「払えば帰すでしょう。払えなかったら、会社へでも、家へでも払う迄、ダニのようにつけ廻しますわ——」

「こんな事が許されていいものかネ」

「女の私達にも罪の一半はあります。でも、殆んど女のヒトは、脅迫されて、渋々やっている人が多いのです。言うことをきかなければ殴りつけるか、逃げれば私のようになってしまふ——どちらにしても、こんな世界に一旦足を踏み入れると、地獄ですわ。トコトコまで絞れるだけ絞りつくすてあいですから」

扉の開く気配に女はフト口を噤み、恐怖に眼は開ききった。ガクリと女の首は垂れた。マスターを先頭に三人のボーイが後に続いて悠々と降りて来た。

「どうだねお客さん——残りを払ってもらえますかね——」

「払うよ——」

「じゃあ、この名刺の裏に一筆かいて下さい。話が始めからこう素直にきまっていたら、手荒なことはなくてすんだんですがネ」

私は差出された自分の名刺の裏に、残金を己むなく書きこもうとした。

「おっと、足代がいりますのでネ、そこへすみませんが、五千円許り余計に書いて頂かないと——何しろ不景気なもんでネ。」

もう私は自暴自棄で、云われる儘の金額をかき込みサインした。

「じゃあ、明日朝から頂戴に行きますが、それまで、一寸御粗末なホテルだが、ここでゆっくり御滞在下さい。いえね、戴き次第、すぐにでも帰ってもらいますよ——」

ボスは糞落着に落着いて、私の書いた名刺をシャツのポケットに入れた。チラリと女を振り返り、

「さて、このアマの始末だが、性根の入る様に、皆の前でチト踊らしてやろうじゃないか——残っている女どもを呼んでこい——」

ボーイがすぐさま階段を駆け上ると、入れ換りに、ゾロ／＼と四人の女がドレス姿のまま、地下に降りてきた。

「さあ、皆よく見てろ。こんな事にならない様、皆んなはいいい娘で頑張るんだよ。こんなめには逢いたくないね——」。ローソク踊りも電気踊りもよくやる手で飽きがきたし、くすぐったって始まらないし、今夜は変わった踊りを、このハルミちゃんが、皆さんにお目にかけるとよ——」

ボスの時々優しくなる声が、尚更一層凄く聞こえた。私自身縛りつけられた儘、ハルミと云う娘が可哀想に思えてならぬ反面、彼等

のやる責めに何らかの期待をもったのは、我乍ら恥かしい限りであった。

ローソクで肌を焼くのがローソク踊りか——白日夢の様に電流を通すのが電気踊りか——そんな手は既にやったらしい。彼等は一休どの様にしてこのハルミなる女を責めようとするのか——

両手を高々と吊られていた彼女は、一旦吊られた縄をゆるめられて、両手を垂れた。

ボーイの一人が駆けよって、女の両手を解き、忽ち、後手に振じあげて、同じ縄で、轟々と後手に縛り上げた。黒布がとり出されて、女の眼を隠した。

眼隠しされた彼女は、足許も危なげに、よろめきそうになり乍ら中央に佇立していた。ボスが傍らの男に耳打ちすると、男は心得て何かをとり上った。降りて来た男の手に小箱が握られていて、男はその丸い箱の中味をサツとハルミの佇立する周囲にまいた。云うまでもなくそれは画紙だった。二、三箱まき終ると、ハルミの周囲は画紙で埋もれた。

男はハルミの背をドスンと押す——。よろめいてハルミは画紙をふみ、悲鳴と共に足をあげ、足を他方におろして又踏んだ。彼女の足の踏み処、必ず画紙が足裏にささった。両足を挙げるわけにも行かず、彼女は腰を振り、足を震わせ、飛び上り、闇雲に奇妙な踊りをつづけた。微かな血が床に、薄暗く染めた。そして力尽きて倒れた体に、画紙がプス／＼と背に胸に腹に尻に、腿に突きささって、転げ廻れば廻る程、画紙はハルミの身体に突きささって行ったのである。

ボスの眼は妖しく光り、惨虐に赤く濁っていた。私はその凄惨な

光景を、息をつめて凝視し、女の中には顔を蔽うものもいた。

画紙に突きささった儘、ハルミは動かなくなった。

「さあ—又明日だ—。みんな踏まない様に気をつけて上りなさいよ：御苦労さん—」

気になる丁寧な言葉が、一層ボスの冷酷な一面を覗かせて、私は身震いした。すっかり全身が萎縮し、体一面にビッシヨリと冷汗をかいていた。

静寂が戻った—。女は身じろぎもせず、死んだ様に眼隠して縛られた儘で、その場に転がっている。なまじ動けば、苦痛は益々ひどくなる事を悟ったに違いない。

何時間経ったのだろうか—。

私は不覚にも縛られた儘で、仮睡していた。足音にハッと眼覚めると、ボーイが二人私の前に立っていた。無言で彼等は私の縄を解いた。夜か朝か、それも分らない。

男達は私を解放すると、足許に注意し乍らハルミの縄も急いで解いた。突きささった画紙を荒々しくもぎとっていた。

「早く立去って下さい—、すぐ—。それから、これはハルミの服だ。早く—」

助けの手だ—。私は椅子より立上ると、云われる儘に階段を走った。アルサロの中の濁った空気に曉方の風が忍びよって、窓の外はうっすらと白みそめていた。続いてハルミも、よろばう様に後を追って来た。いつとはなく、私とハルミは手をつないで、そこを飛び出し、木屋町を抜けて四条河原町に向って、ひっそりとした街並を駆足で走っていた。

鋭いサイレンの響きが、暁の空をついて、遙か彼方からきこ

え、何とはなしに慌ただしい空気がこの界限に流れていた。裸の男が飛び出し、ネグリジエの女が右往左往し、白ナンバーの車が、あちこちでエンジンをふかして走り過ぎた。

助けの手ではなく、証拠湮滅の為私達を逃がしたことが、間もなく判明した。

暁の暴力街の急襲—。それが私達に幸いしたのである。

友人に兎も角金を借り、その中から若干を彼女に割いて私達は京都駅で別れた。

午前九時三十八分、門司行の普通列車の窓から彼女は私に手を振った。

終日ガトゴト揺られて、夜の八時頃、彼女は故郷の松江に無事到着するに違いない—。

彼女が画紙にのたうち廻った、あの苦悶を、血をわき立たせて見入った罪滅しのつもりで、恐らくは手許に戻らぬ数千円を、私は彼女に永久に貸し与えたのである。

牡を漁る牝犬のように、夜の巷にわなを張る彼女が、自らのわなにはまって汚辱の体で今去ってゆく。ノロノロと進行して行く列車の後尾を、私はいつまでも見送っていた—。

ワイン氏の話は終わりました。いつしか夜の幕りは、すっかりとこの別荘と包んで、辺りは静寂に沈んでいました。座がひとしきりざわめいて、ビールの加減か、一人又一人と厠に立ち、やがて一同が戻ったところで、今日の二番手ライカ氏が、袂から数葉の写真をとり出すと、一同に廻しました。手許に戻ったフオトを揃え乍ら、ラ

イカ氏は徐むろに口を切ったのです。

第九十一話 続旅役者緊縛記

「事實は小説よりも奇なり」という言葉がありますが、成程現実には、小説ですらも思い及ばない、不可思議な運命のえにしと云った様なものが時にはあるものです。

今年の六月に、私達同業界の重役クラスで気軽につくった十三人会（参加者が殖えると、十四人会にも十五人会にもなるのですが）のメンバーが、業界の最も閑散なこの月を選んで、城崎に一泊の旅行を試みたのです。

朝の七時、急行「三瓶」で大阪を発った私達は、予定通り午後一時前城崎に到着し、駅前から予約した旅館Y屋の差し廻しの車で、すぐさま旅装を解きました。街中を貫く川の両側には温泉旅館が左右に櫛比し、それらに挟まれて「一の湯」とか「地蔵湯」とか、その外「柳の湯」「こしの湯」「鴻の湯」などかずくずの元湯が、城崎の街を、いかにも温泉情緒たっぷりに包みこんでいました。

時間も早やかかったし、一行は日和山公園へ出掛け、日本海の波がじかに打寄せる、奇岩の浜を散策したり、海女の実演や、小鰯釣りに興じたりして夕暮れに戻り、おきまり通りの夕餉の宴会を始めて八時頃から、いつしか一人又一人、宴席から抜けて、夜の温泉街に溢れる、ヌード・スタジオや、おさわりバーや、イエロー写真やのぞきへと、消えて行ったのです。私だって勿論堅物ではありません。いで湯の夜のひとときを、好色に去る気は充分あったのですが何とはなしに先を越され、立ちそびれて、よく飲む連中二、三人と一緒に残ってしまいました。汐どきを見て私も、便所へ行くふりを

して部屋を出ました。こんな時、気さくな仲間と一緒に行くのも面白いのですが、単なるヌードやエロには、今更この年をして、助平おやじに見られるのも莫迦くしく、私は私なりの存念もあって、快よく酔いの廻った浴衣姿でフラフラと夜の街へと、旅館の下駄をつっかけて出たのです。

流石にネオンの温泉色街は、なまめかしくさんざめいて、辻ごとに、客をひく、ポン引の中年増や、アルバイト仕事の婆さんの姿がちらついておりました。土産ものの店の並び続く中心街を、あちこち覗き込み、家によっては、眼顔でそれと知れる猥写真の売り込みもあって、私はひとりの気楽さの、そぞろ歩きを続けました。既に数人のポン引によって、袂を引かれ、「チョイト、Y屋さんの旦那、二百円でええのが見られまっせ——」「社長さん、いいところへ御案内しまっせ——」と仲々に引く手数多です。

私は笑い流し、聞き捨て、別段あてもなく歩きました。

（温泉街という処は、どうして揃って、この様にエロを売物にするのだろう。白浜しかり、下呂しかり、山代、山中、芦原、片山津も又しかり——、温泉街は段々、エロと云う面で劃一化されて行く様だ。ヌードだ、ストリップだ、おさわりバーだ、八ミリのエロフィルムに写真——、それが、どの温泉も、まるで歩調を合せるかの様に、同じものをさも勿体ぶって売っている。温泉客はすべて好色人種許りだとも思っているのだろうか——）

今更気色ばんで考える程の事でもないのですが、どの温泉を訪れても、余りにもよく似た温泉街の夜の雰囲気、私は今更乍ら、あきれざるを得ませんでした。とはいえこう云う私自身、しかも何かこの街の片隅の何処かに、猥奇的なものはないかと、徘徊している

のですから、甚だ勝手なものなのですが――。

散策に草臥れ、私は喉の渴きを覚えて、街並の一軒の喫茶店に這入りました。クリームソーダーを注文して、漠然とテレビを見つめていると、私の傍らに一人の中年の男が腰を降しました。

「蒸し暑い夜ですね――」

男はさり気なく私に声をかけてきました。

「そうだね……」

相手の顔も見ず、義務的に返事をした私に、男はそっと顔を寄せました。

「旦那、こんな面白いお座敷ショウがあるんですが如何です――」

さてはポン引かと、私は男の方に振返り、そっと彼の差出す一枚の、薄汚れた写真を何気なく見てドキリとしました。若い女を後手に犇々と縛った、上半身のフォトだったからです。私の性癖を承知で差出したのかと、思わず錯覚を起したためドキリとしたのですが勿論そんな事は分ろう筈ありません。全くの偶然から――相手の男は、客の態度を見て、相手によって見せているんですから、偶然とも云えませんが――私の食指はようやく動ききました。

私はその時、中年の男を始めて、まじく見、咄嗟に何処かで見覚えのある男だと、直感で感じとりました。彼も私の顔を判つきり見て、フト古い記憶を辿ろうとする様に、眉をひそめました。

（確かに、何処かで逢った事がある――はて誰だったろう――この顔に覚えがある……）

最近、持に健忘症になり勝ちの私は、相手の顔を覚えて居乍ら、思い出せぬことが屢々でした。思い切って――

「貴方とは、確かに何処かでお会いしましたね――」

私は思い出してくれと云わん許りに、問いかけて見ました。

「はあ――、私も何処かで……今懸命に思い出そうとしているんですが……ああ、ひよっとすると、私のお芝居を見に来ていただいた方じゃあ……」

「お芝居？」

「以前田舎のドサ廻りをやっておりました……」

「ああ、思い出した。いつぞや、奈良の山奥で、葬式の夜、お目にかかった、あの時の――」

「そうでした――そうく、あの時は大変に頂戴しまして……。へい、あの時、社長さんと同宿しました、尾上多三太郎の成れの果てで御座いますよ。こんなお恥かしい処をお見せしまして、穴があら入りしたいくらいで……。社長さん、お変わりもなく御元気そうで御座いますね。」

「本当に奇遇だ――変った処で再会したものだね、あんたも元気？」

「ハイ、まあ何とか――」

尾上多三太郎は、日本手拭の折りたたんだのをとり出すと、しきりに汗をふきました。

去年の秋深く、奈良県の大宇陀町の山奥で、Y氏の葬儀の夜、彼等一座の貴芝居を観賞し、その夜Y氏宅に泊った座長と、彼と彼女（尾上ゆかりと云った）。一室を俱にする偶然から、多三太郎とゆかりの緊縛のシーンを深更撮りまくったことなどが、一瞬、鮮やかな記憶となって私の脳裡に浮かび上りました。（本年三月号、奇譚三十九夜物語、第三十三夜、第七十五話旅役者緊縛記 参照）

「こんな処でも何だから、どこかで一杯やり乍ら話すでしょう……」

「どうだね——」

「ハイ、社長さんさえおよろしければ——」

彼は鞠躬如として私について来ました。土地の人の目には、ボン引の網にかかった客と見えた事でしよう。

飲み屋のチャブ台を隔てて、彼は倫落のその後をポツリ／＼と語り始めました。

「結果から先に申し上げますと、私とゆかりは今年の二月、あの一座を飛び出したんです。この儘、ずっとお芝居をつづけていたら、ゆかりは座長に責め殺されるんじゃないかと思ひましてネ。座長ときゃ、お芝居での必然的な責め場そのものよりも、若いゆかりを責めること自体が愉しくってたまらないんですね。以前にもお話申し上げたと思いますが、地位、門閥、名声のない地廻りの役者は、リアルに徹しないと、客が見に来ないと——これが座長の体のいい言葉で、その言葉の蔭にかくれて、春先と云うのに舞台で本水をぶっかけたり、弓折れや鞭で、あざがつく程ぶちまくったり、本当に火のついたきせるの雁首を押しつけたりするのです。こんな責めの様子は、前にも申し上げました通りですが、当時は座長でしたから、判つきり座長の嗜虐癖を申しますのも差し障りが御座いましたので、身銭をきいたり、親分的なところもあって、いい方だと云ったのですが、実は大変な奴なのです。私とゆかりが夫婦同様の関係にあることを充分知っていた乍ら、蔭では、折さえあればアレを口説いていたそうです。ゆかりがウンと云わないものだから、そのしっぺ返しに、一層非道い責舞台になって、台本にない様な吊責めや、火責め水責めを、勝手にデッチ上げては、芝居にさし挟むのです。しかも、悲愴美が足りないとか、責場面が拙かったとか云っては

舞台がはねたあとも、責場面のみをケイコと称して、ネチ／＼といつまでもつづける始末です。古風な女ですから、忍従的で堪えるんですが、座長と来た日には、免も角、ゆかりが悲鳴をあげ、苦痛に呻き、失心するまで止めようとはしません。

それは未だ辛抱したのですが、あれは四日市の場末の小屋での初日の夜のことでした——。

小屋がハネて、近くの銭湯に行き、屋台店で一杯引っ掛けて戻ってくる、ゆかりが見当りません。小屋の仲間に聞いたのですが、誰も知らないと申します。私は不安な予感にかられて、小屋中を駆け廻りました。小さい田舎小屋ですから、劇場中探したってタカがしれているんです。

私はもう最後にはここしかない、と、永年使っていない、この劇場の奈落へと、降りて行きました。僅か二燭光の小さい豆球がポツンと壁にとりついていて、奈落の底を微かに陰惨に照らしています。

ガタリと音がし、物の動く気配が、光の届かぬ奥でしました。私はじっと眼を凝らし、やがて眼馴れてきた時、そこに判つきりと座長の悪鬼さながらの形相を見出しました。

梁から数条の縄が垂れ下り、あきらかに、吊り責めをした痕跡があり、座長の足許には、全身、血にまみれたゆかりが、半ば失心して、素肌を後手に緊縛されて転がっていました。咄嗟に私は、座長がゆかりに何をしようとしていたかを感じました。日頃の憤激が一時に爆発し、もう師弟関係も、恩義も吹っ飛びまして、私はいきなり座長に飛びかかり、激しい拳をふるっていたのです。裸のゆかりを抱き起すと、真結びにした雁字搦目の縄をやっと解き、奈落を抱く様にして駆け上りました。その夜、手廻り品だけすぐさまとの

え、この小屋から逐電したのです。

ゆかりにその夜のさまを問い訊しますと、私が風呂に出たあとすぐ、待ち兼ねた様に座長が来て、今日の芝居について、一寸イキの合わない処があるからと、例によって、ゆかりを縛り、最初は舞台ゲイコらしかったのですが、人目のないのを見すまして、ゆかりの縄尻をとって、いきなり奈落へ引き曳り込んだそうです。そこで身体を求めたのですが、ゆかりが拒絶すると、彼女の手足を一つに縛って、猪吊りに、ビリ／＼と身につけたものを引裂いて剥いで、それで猿轡をはめ奈落の床に転がっていた竹刀の古いやつで、力任せにところ嫌わず殴りつけたそうです。ゆかりは全身に打撲、噛傷、裂傷をうけていました。すっかり治りきるまでに十日近くかかっています。

血がしたたると、益々狂暴になった座長は、ゆかりの肌を歯を立て、体一面に噛みつきました。その挙句半死半生のゆかりを、粗板の床に降して、将に襲いかかろうとした時、私が飛び込んで来たのでした。

伝手を頼って、他の劇団に行きましたが、座長を殴って破門されたと既に連絡がついていて、どこも使っちゃくれません。表面的には、義理人情に厚い親分肌で通っている座長のことです。同情してくれる奴もいますが、中には非道いになると唾をはかれたり、浪の花をまかれたりで、私はその時、つくづく役者稼業がいやになりました。たくわえとてはなし、まるで乞食同然になり下り乍ら、こんな温泉街に流れ流れて来ました。

女房——ゆかりは私の恋女房なんです——を喰物にする気はないが、己むにやまれず、未だ若いのをいい事に、この土地のヌードに

出して貰いましたが、亭主のこぶつきじゃどこも敬遠されて、それも長続きせず、こんな変ったことでもして、何とか過しているんですが、有難いことに、女の裸にあきたお客さんもボツ／＼ありましてネ、私が女房を縛ったり責めたりする二人で出来るお芝居を、お座敷ショウ式にやりますと、結構うける様になりました。刺激が欲しくなったんですネ。近頃の人——ドサ廻りの、ほんの雀の涙程の金よりも、この方がどれくらいマシだかしれません。それに例え四帖半の二階借りでも、惚れた女と日がな一日一緒におれる位、倅せはないと思ってますよ。お蔭様で、ゆかりも近頃は太分肥えて、健康になりましたよ——」

尾上多三太郎の長い懐古談でした。私はこの奇妙なめぐり合せに城崎の夜が急に輝やかしく、こよなく楽しいものに思われて来ました。

勧めるが儘にのむ彼の顔は既に酔いが浮き上っていました。

「彼女に逢いたいね、よんでくれるかい——」

「いいですとも、ほんの一町許り先の、あの喫茶食堂Uの大きなカバン横の露地を、ちよっと入ったところですよ。だけど社長さん、私じゃ今夜はショウは、やりたくありませんね。社長さんをお客と考えちゃいません。懐かしさで一杯なんです。若し写真をとりたいやら、カメラだって安ものですが持っておりますし、縄だつて相当おいて御座いますよ。滅多に家には人を呼んだことのない私だが、社長さんだけは別だ——。むさくるしいところですが、よろしかったら、いらっしやいませんか——。きつとゆかりも喜びますよ——」

「でも、迷惑じゃないかね、突然に押しかけたりしちゃあ」

「何が迷惑なもんですかね。さあどうぞく」

彼の熱心さに、私はつい誘われました。と共に、ゆかりに会って夢よもう一度——彼女を縛って見たい衝動にかられたのです。どうせ旅館には殆んど帰っちゃいない。夜更けてでも、表戸を開けて、客の帰るを待つのが、これら温泉旅館のしきたりであるらしい。時間は既に午後十時半だったが、私は腹を据えて、飲み屋の勘定を払うと、彼とつれ立って表へ出ました。

浴衣ではっきりと、宿泊旅館が判る仕掛けですので、心得て彼は、私より数歩離れて先に歩いて行きました。喫茶食堂の露地の角で一旦振り返ると、眼で合図して曲がり、私もそのあとを足早に追いました。ヌードスタジオの一軒

おいて隣りの家がそうでした。

階段がその家の横から別個についていて、階下の家は果物と、ジュースやキャンデーの店を出していました。二階を貸す為に急場にとりつけた様な安普請の階段は、一步踏みしめる度に、ギシリ／＼といやな音をたてました。

「さあ、どうぞく。狭いところですが——」

昇りきった私に、彼は、ベニヤ張りの扉を開いて招きます。

階段や踊り場、入口に較べて



室内はしっかりした構造で、四帖半と彼はけんそんして云っておりましたが、二間に勝手元まである。ちよいとした小奇麗な部屋でした。表の露路に面して窓があり、たたみも自分でいれ換えたのか青々と新調でした。

既にきかされていたのでしよう。尾上ゆかりが次の間から現われると、神妙に、半ば気恥かしげに、丁寧に挨拶しました。こんな世界に住み乍ら、妙に娘々しい、女らしさとしとやかさを失なわぬ彼女でした。

「すっかり旦那さんからきいたんだけど、随分苦労したんだってね——。まあしかし、何にしろ、よかったく」。

「本当にお恥かしいことです。あの節はいろ／＼とお世話様になりました……」

「何もしてないよ私は——。しかし奇遇だねえ。君とはよく／＼因縁があるらしい。それも偶然許りだ。」

「私の事、雑誌にお書きなさいましたわね。こんな仕事なもんですから、古本屋でフト本をあの人が買って参り、私達の事が出ているのでビックリしましたわ」

「いけなかったネ——」

「いいんですの、社長さまが、あんな処へ発表なさることが意外だ

「ただけで……私読ませて戴きました——」

「夢よもう一度って気持で、ノコノコやって来たよ——」

「……………」

彼女は応えませんでした。差らい気味に、フツと頬をそめるとうつむいて、たたみに人差しゆびで、何となく、字を書いていました。大字陀で一夜が、ゆくりなくも、思い出されて来たのでしよう。

「やあ、どうも放った儘にしておきまして、ゆかり、ちよいと支度してくれ——」

尾上多三太郎は片手にビールを三本許り握り、一方の手に、するめや、ピーナツの袋を抱いて、ドサリとたたみにおきます。

「いいんだよ。飲んで来た処じやないか——」

「いいんですよ——のみ直しですよ。さあ早く——」

小さいチャブ台を挟んで、私はゆかりの酌を受け乍ら、お座敷シヨウのあり方を訊ねたりしました。

「レパトリーは、三つ許りですが、何しろ温泉客ですから、しょっちゅう相手は変わっておりますので、これで充分間に合っております。お値段は人数次第で大分変わりますし、それに、旅館や、地廻りの人にもリペートをしますので大分削られますが、一寸御勘弁願います——いえ、書かれた時の予防線でもないんですが……。〈チクリと彼の皮肉らしい〉値段によって上中下と三つのだしものに分れていて、大体いずれも十五分から二十分ものです。」

上はマゲモノで、「野崎小唄」の伴奏に合わせて、野崎詣りのお染が途中雲助に出逢い衣類を剥がれて、縛られた上なぶりものになると云った筋で、これは全裸を見せ、かなりきわどい処までお芝居し

て、縛りや責めの時、相当本格的に強くやります。

中の部は現代風で、召使いが助平旦那の云うことをきかないで、縛られて責められる筋です。パンティ一枚ぐらいまでなります。

下の部は筋らしい筋もなく、縛り方の手ほどきと云った程度で、シユミーズの上から縛り、さも力のこもった様に責めますが、これは全部手加減してやります。

最初から断わっておくのですが、ヌードやストリップでないから裸を見にくるお客は場違いですが、責めや縛りの方に重点をおいてやりますから、そのつもりで来た客は、結構満足して帰ります。お客さんの話ですが、近頃は大阪の一流のストリップ劇場にも、青木順子とか云う女性の、この種の劇がうけているとの話でがネ……。」「私も見たよ。ところで、客の中には矢張り写真とる人もいるだろう?」

「おりますね——しかし、中と下は黙認していますが、上は断わります。客は本来なれば上の部のようなのを撮りたいのでしょうが、安いシヨウの金で、そうは参りません——」

「私なら——」

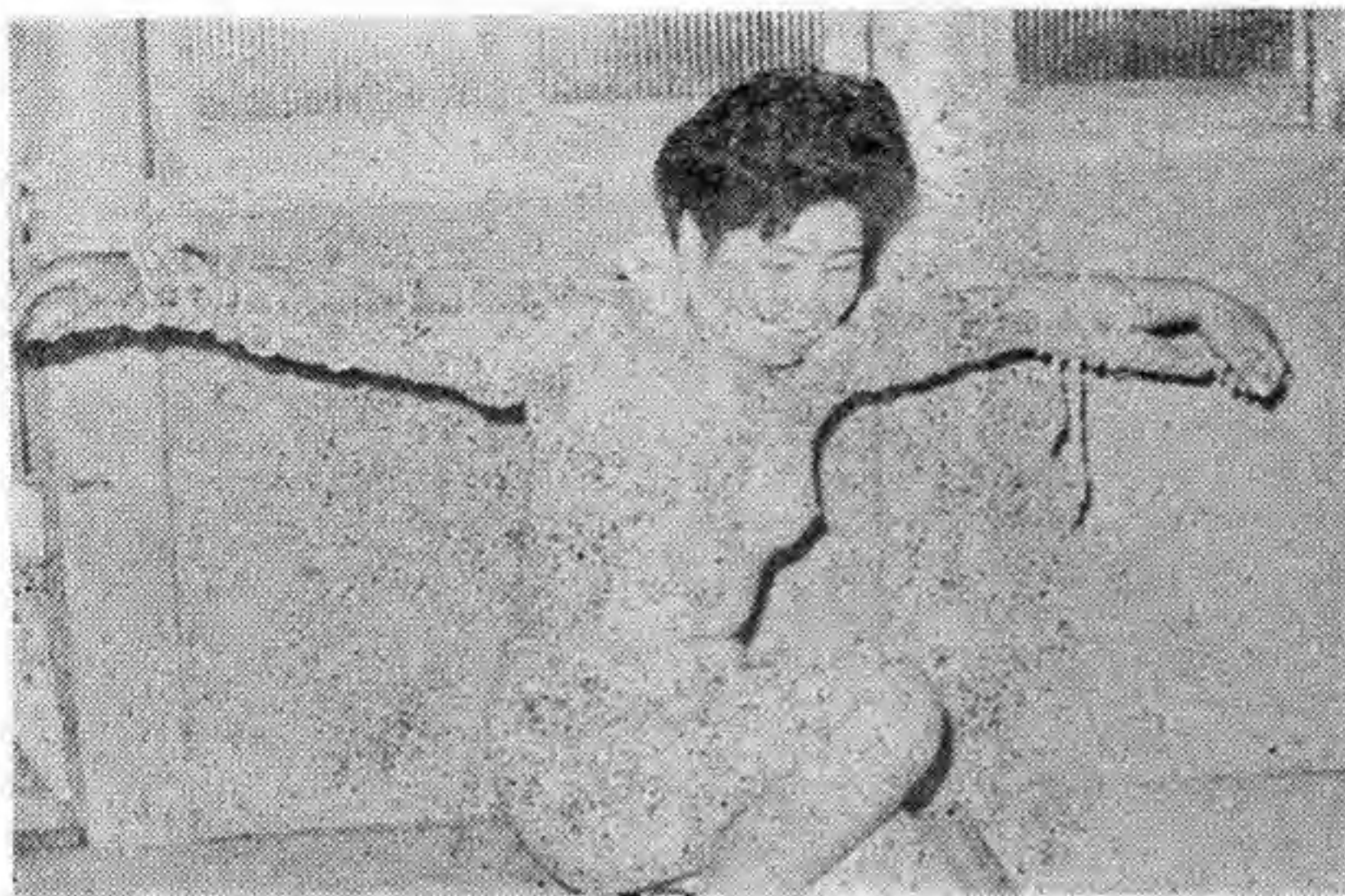
「特上のスペシャルといきましょうか——」

彼は大きく笑いました。そこには少しの卑屈さの影もなかったのです。

「ここで少し許り撮ってもいいかね——」

「そのつもりで、二〇枚どりのSSSを買って来ましたよ。カメラはミノルタの安ものですが、私が撮ってもよくうつりますよ。ゆかりのが、もうこんなに出来ましたよ」

彼は棚からカッターシャツの函をおろすと、蓋を開いて私に差出



しました。ゆかりの緊縛の露わな肢態の数々が、かなりの程度でとれておりました。中には、私より遥かに上手なものもあります。緊縛の考えられる、殆んどがそこにありました。二人はこの部屋で、唯あくことなく、SMのプレイに耽溺しているのではないでしょうか——。同一肢態や、類似ポーズの少ない事が、写真が主であるより、プレイ自体

が主である事を如実に物語っています。

「D・P・Eはどうしているの？」

「蛇の道はヘビで、これの好きな写真屋がいましてネ、何から何までやってくれるんですよ。只でやってやるから、変ったのをドシ／＼とれって、フィルムまでくれますよ。彼自体もタノシんでいるで

しょうよ」

「いや、貴重なものをどうも有難度う——じゃあ、少し撮らしてくれるかい——」

「いいですとも、さあ、ゆかり脱ぐんだ……」

彼はチャブ台を片隅に押しやり、ポストンバッグを持ち出してきて、ぞろ／＼と数条の縄をとり出しました。

「私が縛りましょうか——それとも社長さんがやりますか？」

「やらして貰いましょう」

「そうですか——、じゃあ……」

次の間で脱いだゆかりが、見違えるように充満した体を惜しげもなく曝して、私に近付きました。

「室内はこのストロボに限りますよ。手間もかからないし、撮り損ないも、ありませんからね。連動距離計になっていますから——さあ、遠慮なくとって下さい。私が入用ならいつだって応援しますよ——」

彼は片隅のチャブ台によりかかって、残ったビールを傾けては、可成り酔の廻った血走った眼で、傍観者の立場に廻りました。ひとつは私の緊縛に、云い知れぬ興味を抱いていたに違いありません。（何か変った縛り方はないものだろうか——後手縛りは随分とっているし、曲もない……）

私は何かアクセサリになる様なものはないかと部屋中を見廻しました。その眼に、何に使うのか知りませんが、丸い一米許りの棒が、窓際に立てかけてあるのに行き当たったのです。

最初は棒縛りにしよう——咄嗟に思うと、私はつか／＼とそれに近づき、丸棒をとり上げて、彼女のうしろに廻りました。ゆかりは

浅黒い顔をやや染めて、うずくまっています。

彼女の両手をとって横に伸ばさせ、それに丸棒をあてて、腕と丸棒をあてて、腕と丸棒をグル／＼巻きに巻いて行きました。

「山田の案山子ですネ——」

多三太郎が茶々を入れます、縛り終って日本手拭を口に喰い込ませて猿轡にし、私は座ったポーズ、立った正面のポーズ、横から、斜めからと数枚を忽ちとりました。ついで更に右手を下げさせて、ゆかりの右足の股辺りと右腕と一緒にして縛りました。細い麻縄はよくしまり、フトゆかりの眉がかげります。半開股のポーズでこれも数枚とりました。

次は左手と左足を一緒に縛ろうとしましたが、右手足と一緒に縛ってあるだけに、これは大分無理です。肢一杯に開かせて、半分許り縛った時、入口の扉をドン／＼と叩くものがあります。

「誰……」

多三太郎が、慌てて私達を制し、私達に眼で次の間へ行く様合図しました。私は内心ドキ／＼し乍ら、ポリュームのあるゆかりの重たい体を抱きかかえて、次の三帖の間の蔭に隠れました。

「あつ、わたし——K荘のユキや。一寸あけてんか——」

「どうしたんや、今頃……」

多三太郎が渋々扉を開きます。

「あのなあタミさん、京都から来た馴染さんが三人、仲居さんからあんたらの事聞いて、是非呼べ云うて、承知せえへんの——。遅かったら、倍払てもええいうねんけど、頼むさかい、わたしの顔立て、来てくれへんか——」

「こんな時間に困るなあ——それにゆかりも体の調子悪いし……」

「一生の頼みや——恩にきるわ……。頼むさかいきたって……」

「仕様ないなあ、K荘さんのことやし……」

彼は暫らく黙っていましたが、渋々応諾しました。慌ただしく女が帰ったあと、彼は次の間へ入って来ました。

「おききの通りです。折角、今夜はゆっくり遊んで戴くつもりでしたのに、申訳ありませんなあ……」

「いいんだよく。ショーバイ／＼、行ってやり給え——」

私は意馬心猿の心を押し静めて、ゆかりの縄をといてやりました。あっけないひとときでした。縛り始めて、ものの二十分も経っていなかったでしょうが、奇麗に私は引下るつもりでした。

「又いつお逢い出来るか分りませんね。明日お発ちで……」

「団体できているしネ。二度あることは三度あるって、もう一度はあえるかも知れないよ——」

私は浴衣のほだけを直し、袂の財布から、五千円札をとり出すと黙って多三太郎に握らせました。

「何ですか社長さん——これは……。私しや怒りますよ。こんなつまらぬ私でも、社長さんとは意気のあった友達のもりでいるんですよ——ヘンな真似はしないで下さいよ——」

怒った様に云って彼は、それを突っ返しました。

「イヤ、悪かった。じゃあ、あんたの御好意に甘えよう——。その代り、若し困ったことがあったら、友達甲斐にいつでも電話してくれ給え——。力になるからネ」

「嬉しいねエ——その言葉……。おっとフィルムを抜いて渡さなきゃ……。三四枚余っていますが、巻き取ってしまいますよ——」

私は既に衣類をつけ終ったゆかりに、眼でサヨナラを送りました。

た。彼女はやるせない眼付になって、顔を硬ばらせ、黙って頭を下げたのです。無口な彼女に私は、或る種の好意をもった事は否めませんでした。忍従的な弱い女に、私はいじらしさを覚えると共に、折角のチャンスの、余りにも短かったことを嘆かずにはおられませんでした。

私は一足先に階段を降り、露路を出て、表通りの角で二人を待ちました。流石に人通りも途絶え、「一の湯」から帰る湯治客が二、三人、私を振り返って行き過ぎました。

夜の風に、並木の柳はサヤ／＼と葉ずれを川面に流して、櫛比する旅館の窓の灯りも、あらかた消えておりました。

ポストンバッグを抱え、ゆかりを抱きかかえるようにして、いたわり乍ら二人は出てきました。

「遅くから、本当に大変だね——」

「いえ、もう、馴れていますよ——」

彼は淋しげに笑い、私の宿とは反対の道へと行くのです。

「じゃあ元気でね——」

二人は私に丁寧に頭を下げ、肩を並べて、街灯の消えた川筋の街を西へ消えて行きました。

嘘の様な奇遇を確かめる様に、私は袂のパトローネを、もう一度しっかりと握り直し、既に闇に消えた二人の姿を、いつ迄も／＼見送っております。

ライカ氏の話は終わりました。人々は今一度フォートの巡回を頼みました。かつらを外した素顔の尾上ゆかりを、改めて確認するかの様に……。

ライカ氏が話を始める前には、誰一人として、このフォートが、かつての「旅役者緊縛記」の彼女であると気のついた者は居りませんでした。

「こんな事なら、この最後の例会を、城崎にするんだったネ。時既に遅しか……。三十九夜の△△△ときけば、きっと来てくれたのにネ」

ステッキ氏が慨嘆しました。

次いで、パイプ氏におハチが廻って来ました。

「私にはこんない話はありません。そこで、ここに取り出しましたる数枚の写真、これで一席」

ついで、今宵の三番手、パイプ氏が立上りまして、部屋の片隅の袍から、封筒を持ち出して来ました。おもむろにとり出した一葉の写真が彼の右側に坐るドクター氏から順番に廻されます。

「唯今、皆さんが御覧になられているフォートは、残念乍ら私の撮ったものでは御座いません。友人B氏が、特に三十九夜の為に提供して下さったもので、フォートはB氏の奥さんであります。B氏夫妻は典型的な夫婦SMプレーの実践者ですが、今夜は彼の、プレーへの誘導の實際を、皆様に御披露申し上げようと思います。B氏自体、今夜御出席下さって話して戴くと、もっと精しいと思うのですが、そうになると、私の最後の話の責任が果せなくなりますので、代弁ですが……。以下私とはB氏の事です」

こういってパイプ氏は、二、三服吸った許りの長いピースをぐしやりと揉みつぶすと、しばらく考える様に瞑想し、やがて口を切りました。

第九十二話 SMプレイ夫妻の一典型

私と妻とは、どちらも再婚同志です。

縁なんて不思議なものですネ。糟糠の妻を子宮ガンでなくし、既に長男の孫まであるこの年では、今更再婚でもない、いいおじいちゃんになるつもりでいたのですが、矢張り身辺はポカリと歯の抜けた様に索漠たるものです。そうなると会社の経営の方も熱がなくなり専務の地位で実質上工場を切廻している長男に社長の席を譲り、私は引退しました。いいえね、会社で云ったって同族会社の私のワンマン工場ですよ。

仲間がゴルフをすすめてくれるのですが、出かけるのも億劫だし退屈しのぎのザル基を近くの好きな連中と囲んだり、下手の横好きのカメラいじりや、映画にいったり、その頃出廻り始めたテレビを見たりで気楽なんです。

今の妻と始めて出逢ったのは、そんな頃の、駅前の映画館の中でした。封切映画が二本立て、上映時間がたっぷり四時間はあります。独り者の気楽さから、軽食御持参で半日は時間が潰せるというものです。私は三本立の中の、長谷川一夫、香川京子の「大経師昔暦」から脚色した、おさん茂兵衛の物語がお目当てでした。

「恐れ入りますが、一寸席をお願いしたいのですが——」

一人見の悲しさから、私は便所へ立つ時にそういつて、隣りに坐っている女性に頼んだのでした。

「ええ、いいですよ——」

女性は気軽に応じてくれました。手洗いから帰って会釈をして私はくだんの女性を改めて、そっと観察しました。

年の頃は三十前後でしょうか、地味な銘仙に、長い髪を無難作に巻き上げた、眼立たぬ服装で、彼女も一人の様でした。

いろいろの誤解から、人妻おさんと駈落した茂兵衛との、丹波での激しい恋のやりとりは、年甲斐もなく、私の胸に犇々と女恋しさ、いとしさを覚えさせずにはおきませんでした。最後に裸馬に荒縄で縛られた二人が姦通の処刑を前に、握りかわす手と手に、恋の勝利者の歓びがありありと感じとられ、流石に溝口健二監督の素晴らしさが画面に躍動しておりましたよ。場内に電気がついて、私は未だ劇中に陶醉しておりました。私は恥かし乍ら「おさん」になった女優の名を知らませんでした。

「いい映画ですね——、ところで、あの「おさん」になった女優は誰ですか——」

極く怪い気持で隣りの女性にきいたのです。

「香川京子でしょう。いつもは、お嬢さん役か、綺麗な娘役ですのに、人妻をやらして、あれほど色っぽい演技が出来るとは思いませんでしたわ——」

女性は正面をむいた儘、やや頬を上気させて応えました。

「そうですか——私は又彼女は結婚していると思いましたが——」

「確か未婚の筈ですよ……」

そんな会話から硬さがはぐれて、私は女性にみかんを進呈し、彼女はお返しにキャラメルを数個、そっと押しつけて来ました。

話相手が出来ると、映画は更に愉しいものです。見た処まで見終った私は、何故か立ち兼ねて、彼女が立つ迄もう一度同じものを見る気で席を並べて繰り返して見ておりました。女性は一向に立ちません——。一体彼女、どの辺りから見始めたのだらう。もう入って

六時間は経つ筈だが……

女性にもなんとなく見飽きた感じがよみとられるのです。

後で分ったことですが、彼女も私の見た処まで辛抱していたのです。意心伝心とはこんなことでしょうか——。私は暗闇の中で、妻に死なれたことや、工場経営の事を、ポツリポツリ喋っていました。女性は聞き手一方でしたが、お気の毒に——とか、御不自由でしようとか、時々合槌を打っておりました。

「出ませんか——」

私は汐時を見て声をかけました。女性は素直にうなづいて立上り歩調を揃えて、既に夕闇迫った街路へ出ました。

「よろしかったら夕食でも一緒にしませんか——、帰った処で待つ人もなし、貴女さえよかったら、どうぞ——」

「始めてお目にかかって厚顔ましいですわ」

「いいんですよ——じゃ、旨い天婦羅をくわすところがありますから行きましょう——」

私は若やいだ気持ちになっておりました。雀百迄踊り忘れずとか申しますが、もう五十の坂を越えても、眉目うるわしき女性との同伴は、何となく心をくすぐるものです。

二人で食事し乍ら、私は、彼女が戦争未亡人である事をしりました。結婚して十五日目に夫が召集で外地におもむき、その儘戦死した十五日妻が、世間体から、その儘未亡人という、いやな名称をつけられて、独り暮しを余儀なくさせられ、今は洋裁の内職で、何とか食べるに困らぬ生活をつづけているとの事でした。紙浦よし子はその時二十八才、私とは、二十数才許り年令のへだたりがありました。

その後五、六度私達は出合いました。私達のことを最初に気付いたのは長男の嫁で、私の素振りが、やはり変っていたのでしょうか——、ヘヤトニックを買ったり、不精鬚をこまめに剃ったり、ワイシャツの白いのを着る様になったりで、私自身やはりしらずしらず身だしなみに注意を払うようになっていたのでしょうかね。

父子さかさまで、長男にききだされ、私は大いに照れ乍ら、よし子との一件を話しました。捌けた息子で、そりゃ願ってもないと、早速彼女の家へ行って意向をただしてくれたり、先方の親族にかけ合ったり、話はトントン拍子に進み、私は息子まかせで気恥かしく思い乍らも、こうなりや、老いては子に従えと、すっかり任しきり内輪だけで祝言し、二十数才も若いよし子を妻に迎えました。息子が親爺の私を、粹をきかして別居させてくれましたよ。一度忘れかけた青春がもう一度戻ってきたみたいで、いくつになってもタタミと女房は新らしいのがいいですね。

私だって、うなぎやホルモン料理で、随分精をつけましたよ。未だ未だ若いもんじゃ負けない気だったのですね。

私と一緒にってからでも、妻は遊んでいるのは勿体ないっていいましてネ、洋裁だけは続けておりましたよ。私は伴の仕送りで、ブラブラ遊んでいりゃいい身分なんです。余んまりこれじやおテントウさんに勿体ないと思いました。道楽のカメラからヒントをえて妻の洋裁を引受ける先々へ、D・P・Eも写真屋の半額位でやるからといって見ました。商売にする程注文があると、到底出来ませんが、儲けが目当てでもなし道楽半分ですから恰度いいところです。

ところが、これが面白いことになりましたネ——。もぐりのDP E屋だと云うので、時々、滅多に見られぬネガが舞い込んでくるん

ですよ。内緒で頼みますよ、と云われりや、こちらは尚更結構、現像がタノシミです。人のネガを頼まれたのだといい乍ら、現像してみても妻に見せると、

「あら、これSさんの若い奥さんよ——。こんなの撮ってるのネ——」

と妻は顔を真赤にさせる事も再三です。動機はホンの道楽半分だったのに、私は段々面白くなってきました。依頼

者に内緒で、別に自分用に焼増しする夜なんかは、更けるのを忘れて、時には夜明け迄もつづけることがありました。

妻のさまざまな肢態を撮って見たい——そんな衝動にかられ出したのも亦、無理からぬ事でしょう。

Sさんの若奥さんは、結婚の前ホステスをしていたというだけあって、見事な伸び伸びとした申し分のない体をしていました。

こんなDPEなら、代金を払って貰わなかったって、こちらから頼んででもやりたいくらいです。

妻だつて今なら、均整は崩れていない——年令的には峠を整えてはおりましたが、結婚生活はわずか十五日に過ぎず、今どきの怪しげな娘より、遙かに体は奇麗でしたし、娘そのものでした。いえ、決してこれは私の自惚れでも、ひいき目でもありません。



私はある夜、妻にその願望を、怖る怖る申し出ましたが、なにしろ惚れた若い女房ですから、Hとでも思われて帰られたらどうしようと冷汗ものでしたよ。

「私、Sさんの奥様のように若くもないし、恥かしいですわ——」

妻は頬を染めて、軽く拒みました。

「でも、よし子のその若い体を、いついつまでも持ち続けていきたいのだよ。人間は誰だって年をとって行くからね——。若し子供でも出来たら線もくずれるし、今のよし子なら、娘のままの体なんだよ駄目かい……」

妻はとうとう返事しませんでした。

x x x

あれからもう七、八年も経ったことです。妻も洋裁をやめて、二人の子供の母親となって、すっかり落着いてしまいました。孫より私の子供が下です、矢張り可愛いものです。

道楽で始めたDPE屋がすっかり本職になってカメラ店を構えて結構はやるし、長男も仕送りをとくにやめています、生活に不自由はなく、私は若い写真学校卒の大西君一人と女店員二人に大半店を任せっきりで、時々今も昔のよしみで廻ってくるオモシロイ変わったネガのみ手がけておりました。

Sさんも最近流石に余りとりませんが、或る日、彼と同年輩の人を連れて、ヒョッコリ店へ現われました。

「変ったのをお願いしに来ましたよ。どうせ現像すれば判ることだから、ズバリ先に云いますが、友人のWですが、夫婦のSMプレーをとったのです。現像処理が出来なくて、奴さん困っていたんです。ボクが以前やっていたところだったら安心だということ、是非紹介してくれて——連れて来たんです。これからは自分でくると思います、よろしくね」

「ああ、いいですとも、名刺ですか、手札ですか——それともキヤビネ？」

「手札でいいんですが、大丈夫でしょうね——」

「まあ任しといて下さい。料金だって普通でいいです——」

それでWは緑の筒に入ったフィルムを二本私に手渡し、明日とりにくるからといって、つれ立って帰りました。

久し振りのので、私はワクワクしてWの夫婦プレーなるものを期待しました。当然夫婦間のセックスを連想したのです。

「おや、御主人じきじきですか？——珍らしいですね——」

乾燥機に印画紙をかけていた大西君が、奇妙な笑顔で振向きました。

「スペシャルだよ——」

別段云訳もせず、私はそういつて暗室に消えました。大タンクの現像液に浸し、定着してから十分後私は遮光電球で覗き、おやッ！と変なネガにルーペを眼にはめました。

てっきり私の予想したものと思っていたのに、ネガは郊外の風景の様に見えたからです。

立木に女性の縛られているのが判明し、ネガを追うと、それに何か男性が棒や、バンドのようなものをふるっているのです。

私は慌ててもう一本を大急ぎで現像しました。これは室内で、被写体の女性が大きく三十六枚すべて縛られたり、梁から吊されたりして、さまざまに責められているものでした。近頃の映画では、よくこんなものも見ますが、長い写真歴で、私がじかに現像したものは始めてでした。

——こりや確かに変わっている。単なるヌードやYものではない——私は年甲斐もなく急に心臓のたかまりを覚え、水洗に廻すと、つききりでザアザア水を流し、速乾液に浸して電気乾燥機にぶら下げました。

大西君や女店員の帰ったあと、私は暗室で早速引伸しにとりかかりました。

Sはたしかにあの時、夫婦のSMプレーと云ったが、Sとはなにか、Mとは何か、私にはその意味がわかりませんでした。引伸しをやっているうち、SMの意味が臆気乍らわかる様な気がして来ました。

私は憑かれたように次々と二枚宛引伸して行きました。三十六枚撮りの二本ですから七二枚の倍の一四四枚です。午前一時頃すっかり焼き終って、私は右手で肩をもみ乍ら、水洗にかかりました。妻は既に子供等と寝ておりましたがフトこの時、妻にこのフォートの乾燥を手伝わせたら、どんな反応を起すだろうかという興味を抱きました。

郊外の方は、車で走ったらしく、画面のすみに時々自家用車らしきものが覗きましたが、私は出来るだけトリミングして人物本位に焼きました。夫婦のプレーというからには、きっとWの奥さんでしようが、二十七、八才の女性が或るものはパンティ一枚で、あるも

のは全裸で、立木に犂々と縛られたり、草むらに縛られて転がしていたり、大木の綺から爪先すれすれに吊られていたりして、それにWが何らかの恰好で姿を見せておるものもありました。これはセルフタイマーなのでしょう。女の表情が又マチマチで、眉をしかめたものや、笑っているもの、無表情に睨を閉じたもの、眼隠しのものといろいろあります。水洗の井戸水に手をつけて、明るい所で私はあれこれと摘出しては、凝然と見入っております。室内の縛りは、いろいろと縛り方もありましたが、奥さんはどれも、ストリッパの着用する様な三角型のパンティをつけておりました。梁から逆さに吊ったものなど、実に胸がドキドキする程に圧巻で、私はその刹那から、こんな縛りを、妻にもやって見たい慾望にとりつかれたのです。

私はWには悪いが、そっくり一枚づつ別に焼いておきました。こんな夫婦の世界があることが、私には正に驚異でした。

妻を起しますと、寝入りばなただけに少し機嫌が悪かったのです。こんな御機嫌の時に、こんなものをいきなり見せるのも反ってまずいと、私は一服するからといってコーヒを要求しました。

印画紙を全部パットに引揚げて、回転式の乾燥機に向って椅子に腰をおろしていると、妻がコーヒをもって現われました。

「一緒にやってくれる？ 随分あるんだから……」

「大西さんにしてもらいませんでしたの？」

「これがやらされるかい——見て御覧……」

妻は云われる儘に、二、三枚を水よりとり上げ、見つめていたましたが、驚いた声で、

「一体この女の人、誰ですの——どれもこれも縛った写真許りね。」

変ったものをとるのね——」

そこで私は行ってやりました。

「S君の紹介で頼まれた、ある夫婦のSMプレーとかいう写真だそ。うだよ。倦怠期の御夫婦がこのプレーを始めてからというもの、すごく仲がよくなって、とっても円満だなんていったがね——。マッネリ化した夫婦には、こうした刺激的なことも必要じゃないのかな——私だってやって見たいと思うよ。」

倦怠期云々は勿論、私の咄嗟の言葉です。

「そうかしら——でも貴方には、こんなことをする元気がないでしょうネ……あるとしたら……」

妻は意味ありげに濁しました。欲求不満を感じていることは、私も以前から察してはおりましたが、妻は三十六才の女盛りですし、私は老境に入ろうとしております。年令的なギャップは如何とも致し兼ねたのです。

「私がハッスルしたら、OKかね……」

「さあ、でもネ……」

「じゃあ、こうしよう。ワンポーズ百円でどうだい。三十六枚一本とると三千六百元のへそくりが出来るよ。」

この言葉は、へそくりに腐心している妻を動かしたようです。眠気が一ペんにさめた顔で妻は、それでも、

「でも私、近頃大分やせたでしょう——こんな体でもいいの。この写真のように魅力はありませんよ、それでもよかったら……。けれどそんなのを撮って一体どうなさるの——？」

「撮ることは二の次さ——。マッネリ化した私達の夫婦の生活に、変った刺激を偶にとり入れるのもいいじゃないか——。私は女を

縛ったことなんて、生れて五十数年この方、ただの一度もないが、このフォトを見ているうちに、何だか、お前を縛りたくなって来たよ。いつか昔、お前のヌードをとりたいていったら断わられたことがあったっけ——あの時、若し撮っていたら、いつまでも、お前の若々しく、みずみずしい体を、思い出すよすがになったのになあ——」

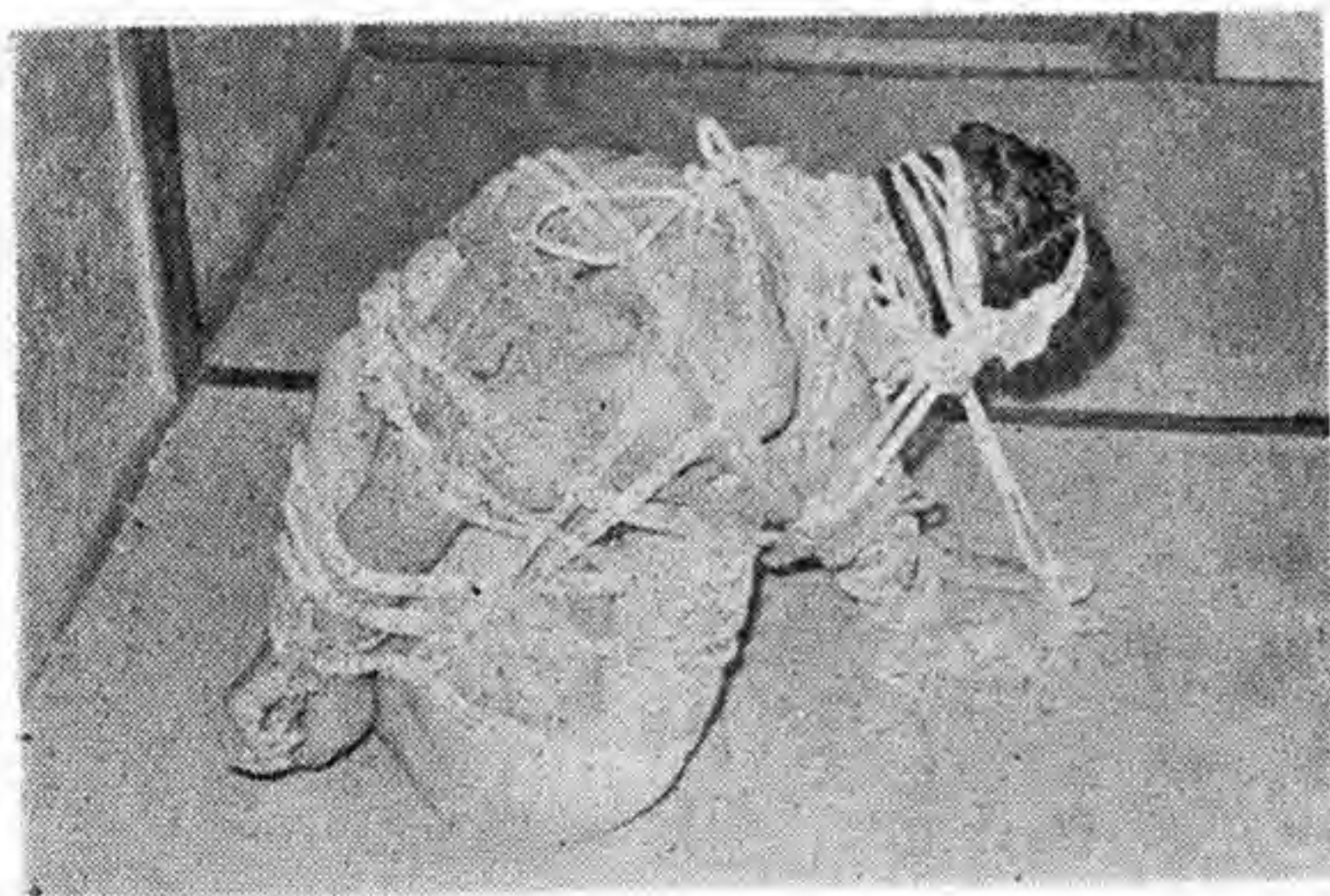
「結婚して間もなくでしたし、恥かしかったからですわ。でも貴方がやれと命令なさったら、きつとやりましたのに、黙ってしまわれたから、もういいのかと思って……」

「惚れていたからネー、もしも嫌だといって帰られたら……それが怖かったのさ、今なら図々しく、命令するかも知れないけど——」
「年寄り臭くなっちゃいやよ。私、それで貴方が元気出して戴けるのなら、構いせんわ。でも痛いでしょうネ……」

妻は欲求不満半分、へそくり欲しさ半分で、大体諒解したようです。

翌朝、私が未だ寝てる頃Wはフォトを取りに来ました。私は渡し乍ら思わず聞いたのです。

「実はネ、私も一度その夫婦のSMプレイとやらを撮りたいのですが、SMって何のことですか——」



Wは苦笑して、私の白髪頭を見やり乍ら、
「SMって、サドとマゾ——といっても分らないでしょうね。つまり、いじめたり、いじめられたりして、人生の快楽を見出すってことですよ。男がいじめる時もあり、いじめられる時もあります。女も又その様に逆の場合がありますが、夫婦のいわば刺激的な円滑剤です。毎日やるわけじゃないんですが偶にSMのプレイをやりま

と、女房のサービスは目に見えてボク等の場合違いますね——。口で判っきり云えないが本屋に行くと、そういった事を専門に書いた本も売っていますから、四五冊買って読んで御覧なさい。その方が手っ取り早いや——」
私はそれで、本の売っている店を訪ね、Wには半額に負けてやりましたよ。内心一枚づつ焼増したヒゲ目を感じていたのかも知れません。

早いもので、妻のよし子を縛り出して、もう一年半にもなります。近頃又とみに元気で一年一年反対に若くなっている様ですが、妻は少しやせました。妻の思惑外れはワンポーズ百円の件です。今は二百円に値上げしましたが、私は計画通り、緊縛をやっても、二、三ポーズしかとらない。始めての時は、物珍しさも手伝って、パチパチと忽ち一本とって三、六〇〇円とられてから考えました。現像

の結果、同じポーズ許りを矢鱈に沢山とりまくっているのです。私は徐々に枚数をへらし、一つの緊縛に相当時間をかけていいものを数少なくとって一本のフィルムを費やすのに、少なくとも、七、八回はプレイをやる様にします。その結果の値上げですが、それに対抗して、フィルム数はいよいよ少なく、汗をかくて緋々と縛ってもフィルムはたった一枚という時もあります。要は写真をとるよりS Mのプレイに主力をそそげばいいので、いわば、カメラは従のものに過ぎなくなりました。

子供が早くねた時や、機嫌のいい時、妻は自分の方からいい出す様にまでなりました。

「父ちゃん、今夜は体の調子ええわ——」

この言葉の親近感——。貴方から父ちゃんに変わり、言葉も雑になりましたが、しみじみした夫婦の結びつきを感じるのです。ここまてくるには、随分「奇ク」の世話にもなり、妻も読む様になりました。いっか機会があったら、私の撮ったフォトを送って見ようかなあと思っていた矢先、S君の知合いのP氏が訪ねられて、私のフォトを拝借したいといってこられたのです。それと共に、私達夫婦のS Mプレイの模様をきかれたのです。妻と相談の結果、これならいいと云うのを三枚ばかりお借ししましたが、どんな具合に発表されますことやら——。

妻は専ら、緊縛に重点をおいて、自分の顔の出るのを避けたので、フォトは、私が緊縛に約三十分かけて妻の肉体を、家中の縄を総動員して縛りましたる「縄責め」をお借しました。足の爪先に至るまで、これ以上縄をかける余地はないというシロモノです。このポーズ流石に十数枚とりましたが、そのうちの三枚は縦、横、

斜からのものです。一度異った女性を縛って見たい願望にかられる時もありますが、妻に悪いのでネ——桑原桑原。妻がこれを読むとコワイです。

とあれ、近頃になって琴琴相和し、まるで新婚の様です。いや、どうもトンだおのろけになりました。

パイプ氏の話はあっさりと終わりました。それを待ちかねた様に、三十九夜の最後の語り手ドクター氏が話し始めました。これが最後の物語九十三話という感慨が、何とはなしに居並ぶ人の顔にただよいます。

（辻村隆註。「奇譚三十九夜」物語の第三十九夜（第九十話、第九十一話、第九十二話、第九十三話）の全文、翌日の「懇談会」及び庭園での二人のホステスを使つての「緊縛モデル撮影会」の模様を一挙に掲載するつもりで準備していましたが、原稿が二百枚近くにも亘りますので、誌面の関係上、編集部から半分は来月号に回してほしいとの要望がありました。従つて、

「奇譚三十九夜物語」第九十三話。

「奇譚三十九夜完結懇談会」

「緊縛モデル撮影会」

は、特に次号十二月号に掲載させて戴きますから、何卒あしからず御諒承下さい。）

（おわり）

x x x

【新版】 女体緊縛コレクト・フォト集

E組百花選

大手札印画紙(9×13型) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E 1	全裸の悦虐プレイ(愛川)
E 2	仕置を受ける裸身(大塚)
E 3	荒縄に苦悶する肌(愛川)
E 4	ムチに耐える美肌(関谷)
E 5	豊臀と豊胸しほり(愛川)
E 6	捨身の後手観念像(大塚)
E 7	足から眺めた裸身(水本)
E 8	全裸エビ責尻強調(関谷)
E 9	ハリツケられた娘(大塚)
E 10	強烈後手高手小手(愛川)
E 11	責め抜かれた疲労(梨花)
E 12	逆エビにもだえる(大塚)

E 13	拘禁された美囚女(大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛(愛川)
E 15	海老責に泣く足首(大塚)
E 16	乳房強烈締めつけ(愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘(大塚)
E 18	美しき全裸股間縛(大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ(関谷)
E 20	ベッドにもだえる(関谷)
E 21	身体中に強烈な縄(愛川)
E 22	放置された海老責(東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる(東浦)
E 24	ローソクで責める(大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ(絹川)
E 26	足指先に漂う媚態(関谷)
E 27	後手吊り正面裸像(関谷)
E 28	嚴重な高手小手縛(東浦)
E 29	女体の全部を晒す(愛川)
E 30	激しいムチ打の果(関谷)
E 31	若肌も縄にくびれ(東浦)
E 32	投げ出した脚線美(絹川)
E 33	脐中心の腹部緊縛(梨花)
E 34	セーラー服の哀歓(梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部(関谷)
E 36	仰向けの囚衣の女(梨花)
E 37	制服の女学生縛り(梨花)
E 38	悦虐にむせぶ若妻(関谷)

E 39	痛打にくねる裸身(関谷)
E 40	乳房に加える金具(大塚)
E 41	鼻責めにあえぐ顔(大塚)
E 42	あぐら縛りを拒む(大塚)
E 43	浣腸ポーズの裸身(梨花)
E 44	激烈なエビ責苦悶(大塚)
E 45	敷布の上にのびて(絹川)
E 46	鼻いじめのアップ(梨花)
E 47	柔肌に喰込む麻縄(東浦)
E 48	縄にくびれる裸身(東浦)
E 49	椅子に晒された女(大塚)
E 50	脐そうじをされる(大塚)
E 51	荒縄のトゲに狂う(絹川)
E 52	火のついた煙草責(四方)
E 53	踏みつけられた胸(梨花)
E 54	裸身をゆだねた娘(大塚)
E 55	手足猪吊りの美態(絹川)
E 56	囚女の美しき緊縛(絹川)
E 57	諦めた観念全裸像(水本)
E 58	縄にもだえぬく姿(絹川)
E 59	黒髪を吊られた女(大塚)
E 60	女奴隷美しく悶ゆ(絹川)
E 61	袋の中の緊縛裸身(竹本)
E 62	ビニール袋に蒸す(竹本)
E 63	亀甲型の雁字搦目(大塚)
E 64	緊縛裸像の舞踏会(絹川)
E 65	野外の後手宙吊り(梨花)
E 66	足首に鎖錠実施中(四方)
E 67	室内の後手宙吊り(梨花)
E 68	雨装束の悦虐姿態(梨花)
E 69	乳房いじめ踏つけ(大塚)

E 70	足の裏ハネ操り責(梨花)
E 71	乳首プライヤ挟み(竹本)
E 72	野外の逆さ吊り責(梨花)
E 73	梯子責にあう美女(梨花)
E 74	逆さ吊りに揺れる(梨花)
E 75	娘十六しほり加減(花坂)
E 76	踏みにじられた顔(大塚)
E 77	逆エビニ反る足先(大塚)
E 78	両手吊りのお仕置(絹川)
E 79	責折檻に呻く若妻(梨花)
E 80	豊麗を誇る正面像(大塚)
E 81	食卓上の縛り人形(大塚)
E 82	むしられる下着(大塚)
E 83	月経帯の羞恥縛り(梨花)
E 84	寝台上的の若妻狂態(関谷)
E 85	強烈全裸エビ縛り(東浦)
E 86	禪姿後手縛り吊り(東浦)
E 87	後手縛豊満臀部晒(関谷)
E 88	黒髪いじめ凌辱囚(大塚)
E 89	令嬢後手高手小手(絹川)
E 90	脐部乳房強調緊縛(東浦)
E 91	責衣にくるまれて(東浦)
E 92	全裸逆エビ責め(水本)
E 93	ローソク乳首ゼメ(梨花)
E 94	全裸後手縛り関晒(関谷)
E 95	強打全裸のあえぎ(関谷)
E 96	肉体美の責衣ゼメ(東浦)
E 97	バンド二ツ折縛り(梨花)
E 98	全裸正坐縛り猿轡(関谷)
E 99	豆しほりの猿轡(絹川)
E 100	強烈縛り脐いじめ(東浦)



衣 軍 一

昭和三十六年十月号（新装一周年記念号）
告白特集『偏執記録の断層』の告白の一端として、私は「ふんどし恍惚」という拙文を発表した。

その中にも書いたのだが、私は八、九才のころから、ふんどしに魅入られ、いまでは、毎晩必ずふんどしを締めなければ寝られなくなっている。たいていは晒の六尺ふんどしを

キリキリ締め上げてから、同じ晒の腹巻をして、素肌に寝間着を着て寝るのだが、時には亦ふんや花模様のハデな色ものをして楽しむ時もある。就寝前、いかに寒くても私は必ず素裸になり、ふとんの上でふんどし一つになり、鏡台を引き寄せ、いろいろな体位、姿勢をとってあらゆる角度から股間にくい込むふんどしを眺めてからでないと寝られない。

冬の冷たい夜気の中でも、毎晩必ず素裸になり、身体を動かしたり、くねらせたりすることは、これがかえって一種の体操になり、ヒップの訓練にもなるとみえて、おかげでめったにカゼもひかない。

「ふんどし恍惚」の最後にも書いたのだが私は時々夜更けの野原や河の堤に散歩に行き、そこでふんどし一つになり、裸身を夜風にさらして楽しんでいる。このような文章を発表しようとするそのものが一種の露出症だ。が私は自分の露出趣味は、あくまで私以外のだれもみていないというヤミ夜の安心感があるからだと思っていた。ところがある夜、だれも見えていないのではなく、誰かがみているかも知れない、だれかにみられるかも知れないというスリルのあるところで、ふんどしを露出し、またはふんどし一つの裸になることの方が、数倍も刺激の強いことを知った。

「悦悦」の中で書いた私のふんどしを中心に、サド、マゾ、女装、切腹、ナルチズムなどが総合した複雑な変態性は、その他にもう一つ露出症を加えなければならぬようだ。

ところで私は、真冬は別として春から秋にかけて、夕食後一ふろ浴びた八時か九時ごろ

から散歩に出かける。白の六尺または赤ふん、時には花模様のふんどしに、その花模様の『垂れ』を大きめにたらし上から浴衣を羽織っただけの姿である。風が吹いてすそがまくれれば、すぐ花の『たれ』が露出してひるがえる。そして私の身体はそれを見るだけでゾクゾクした快感に襲われてくる。

私の家の近くには、まだ野原や畑があり、数百メートルの間、街灯のない道だとか、あっても街灯と街灯の間に相当な距離があり、人影がシルエットになってみえる程度の暗さを保っているところが多い。そこを通る男女の区別は分つても、それが誰で、どんな顔をしているかは、ほとんどわからない。そのような道を選んで私は散歩をし、そして着物を肌けてふんどしを露出させるのである。

私は歩きながら、まず浴衣の前を左半分だけ引き広げる。晒の場合だと夜目にも白く長目の垂れがチラチラと現われ、半裸の素肌に夜風が気持ちよくあたる。そのままの姿で歩きながら、さらに右前も引きはけると、ふんどしは丸出しになり、夜風は『たれ』を太腿から股間にまつわりつかせる。私はその刺激で次第に興奮してくる。そのままならまだ袖を通してあるので、誰かがくれば、すぐ前を

かき合わせるだけで、一応ていさいを整えられるが、私はさらに両前を広げたまま歩きつづけ、そして片袖を肩から外してしまふ。夜風の中で胸から背中を冷気にさらすことは、全身をひやりとひき締め、半裸であることを自ら確認させ、尻にくい込むふんどしの刺激も一層強くなり、私はその異常な感覚にたまらなくなり、歩きながら身体をくねらせてしまふのだ。

すでに片袖となった着物は、身をくねらせ風にふかれることによって、残る片袖もずり落ちて双肌ぬぎになってしまう。私は乱れた自分の姿にますます興奮し、ついには帯も引きほどこき、ふんどし一つの素っ裸になる。そして私は暗やみの戸外で全身を露出した快感に胸をかきむしり、男に必要なような乳房が何のために残されていたのかを知り、うめき声を上げてあえぎながら、なおも歩きつづける。そんな時、もし人が現われたら、も早收拾がつかないのだが、その一種のアバンチュールのために、私の異常性は一層刺激される。

実際、私は夏の終りのある夜、曲り角から急に現われた二人の女性に、そんな姿を見られてしまった。さきにもいったように、暗く

て顔まではわからないが、二人とも白地の浴衣を着ていたことが、私にははっきりみえたのだから、向うも私の裸の白いふんどしが、はっきりみえたはずだ。私は初めドキンとしたが、すぐ二人とも女性であるという安心感と、夜とはいえ、まだ夏ではあったので、そうしてすすんでいるようなかつこうをして、脱いだ浴衣と帯を裸の肩にひっかけたまま、ゆうゆうと通り過ぎた。その時私は腹巻なしの六尺一本であったが、あられもないふんどし姿を二人の女性に暴らしたということに、軽い狼狽としゆう恥が、ない合わさった快感を感じた。そして私は自分の露出症を再確認した。

しかし私は暗くて顔がわからないという安心感と、誰もがするふつうの白ふんであったから、恥かしさとともに快感を感じ得たのかも知れないとも思う。あの場合、もし赤ふんあるいは花模様のふんどしであったら、私はただすすんでいるのだというかつこうもとれず恥かしさに動きがとれなくなっていたかも知れない。だがまた一方では私はそれが赤ふんであろうと、花模様であらうと、顔さえみられなければ、人目にふれるかも知れない、という潜在的スリルがあった方が、快感は大

きいような気もするのだ。それでなければ何も戸外でふんどし裸になる必要はないわけで、家の中で十分楽しめるはずである。結局夜の野道を素っ裸で歩くのは、股間をきつく締め上げたふんどしが歩くことによって肌身にいくい込む刺激を求めるためだけではなく、私が露出症なのだからだと思う。



私には妻子がある。ぬけぬけといわしてもらうならば、私の妻は綺麗だ……と私は思っている。「ふんどし恍惚」の中にも書いたように、私はその妻にふんどしをさせることを承諾させた。白ふんはもちろん、ピンクや赤やサックス、色とりどりのふんどしが用意してある。ふだんスーツやスカートの時は彼女はこれもふんどしのように切れ込んだ小さなパンティをはいているが、着物を着たり、夜寝る時は、必ず本物のふんどしときつく締める。初めのうちは六尺の締め方が何度やってもわからず、私が手伝っていたが、いまでは自分でギリギリ締め上げ、下腹にピッタリくい込ませていないと、何んとか不安で寝られないというほどになっている。

妻の場合、たいてい緋縮緬の六尺ふんどしが多いが、ピンクの時も紫にする時もある。

冬は六尺の上に私が希望で同じ緋縮緬の腰巻をつけるが、冬以外はふんどし一つで寝る。

ふっくらした甘い裸身、その股間にくい込む赤いふんどし、そんな妻の姿をみると私は狂おしいばかりに彼女が愛しくなり、ひしと抱き締めてしまう。もちろん私もふんどし一つである。私たちの寝室は子供たちと離れた二階にあるが、夏などは私が白ふん、妻は赤ふん一つで、ふんもかけずに朝まで寝ていることが多い。朝、目がさめて、赤いふんどし一本でスヤスヤ寝息を立てている妻の姿を見ると私は、その胸にも腹にも、身体中とところきらず接吻の雨をふらせてしまうのだ。もし第三者が、そんなふんどし一つの私たちの寝姿をみたら、さぞかし異様なものにみえるだろうが、私にとっては自分がそういう姿でいることはもちろん、傍にそういう姿の女性がおるということは、無上の喜びであり、この世の天国なのである。おかげで私たちの夫婦関係は極めて円満に行なわれており、私は私にこのような甘美な生活を与えてくれた神に感謝せずにはいられないのである。

私のサデイスティックな性癖は、長い間に妻にも反映し、このごろは妻はマゾヒスティックになり、ふんどし一つのまま縛られたが

ったり、噛まれたがったりするようになってきた。

以前は彼女にとってしばられたり鞭うたれれることは、ありうべからざることであり嫌悪すべきことであつたのだが、このごろはおとなしくしばられ、自分の方から「お尻噛んで」「背中たたいて」と要求するようになってきた。女性の性感覚やセックスは夫次第、訓練次第でずいぶん変わるものだと思う。

妻を縛る場合、ふんどし姿も悪くはないがむしろ長縮緬などを着せた方が、私にとっては一層刺激的である。緋縮緬のふんどしに同じ緋縮緬の腹巻をさせ、その巻きはじめで垂れをとり、長縮緬の前をひろげて、太腿を露わにしてから、別々の縄で手足や乳房や腹や股をしばり、その縄尻をそれぞれ部屋の四隅の柱の上部に打ちつけた。形の環に引っかける。(この環についてはふんどし恍惚の中でも説明してある)すると妻の身体は四隅から捕り縄をかけられたようになり、立ったまま手足を大の字に広げたかっこうで身動きがとれなくなる。それでもまだ多少縄にゆとりを残して、なおも仰向けに身体を倒し、さらに両脚をいっぱい広げさせ張った縄にからみつかせる。下腹や太腿、乳房など、やわら

かい部分は、縄にくびれたまま、むき出しになり、はだけたピンクの長襦袢がその縄にからみつき、左右に広げて上げた白い太腿の間に緋縮緬の垂れが下りさらにその奥に股間を締め上げる真紅の縦帯をのぞかせて、彼女はかすかなため息をつきながら、身体をくねらせる。あられもなく乱れたその姿に私は喜びにふるえながら、あらゆる角度から彼女の姿態を眺め回し、そしてさらに鏡台を引きよせて、その哀れな姿を彼女自身にみせてやる。

「恥ずかしいワ」と首をふるのをかまわず、無理矢理に顔を起こして、鏡の中をのぞき込ませると、自分の尻の割れ目に深く食い込んでいる真紅のふんどしや、太腿や乳房にくび

文献資料を求む

本誌上に紹介して価値のあるS・M・F等各種の文献、資料を御所持の方で御提供可能の方は御連絡願います。誌上発表の分につきましては、出来るだけの謝礼を差し上げたいと存じますので、文献誌としての本誌の価値を高めるためにも何卒新古多少に拘らず御提供願います。御希望により使用後資料は御返却いたします。

れ込んでいる縄目をみて、「ウウツ…」と小さくうめき声を上げながら、身動きできぬ手足のまま身体をくねらせ、首をのぼして、髪の毛の乱れかかる顔を、私のふんどしの前袋に寄せてくる。

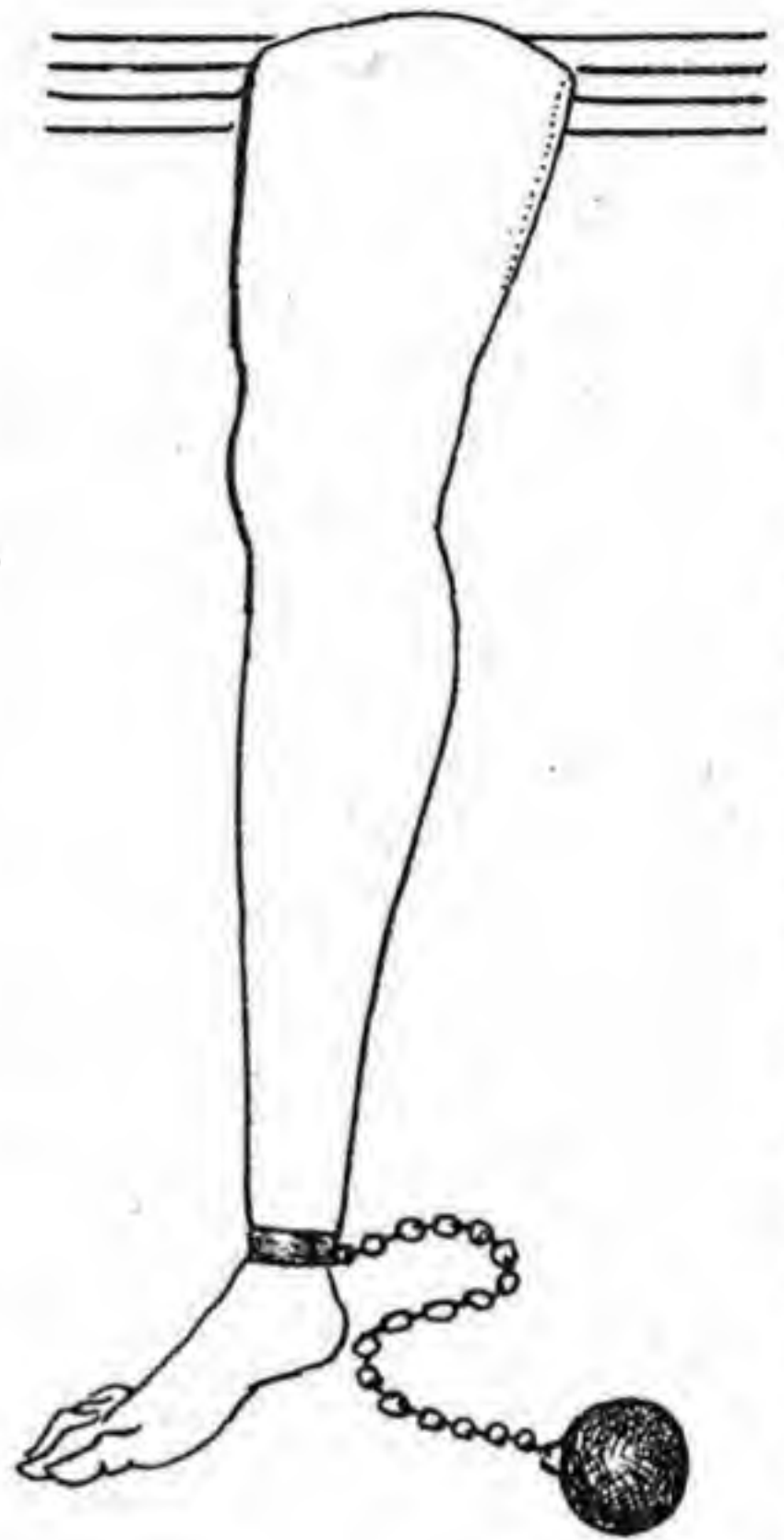
何んとも異常な光景だが、私にとっては、この世にこれ以上のものはない、無上の快楽なのである。乱れた長襦袢にふんどしを丸出しにした妻を縛るとき、私は子供のころ見た半裸のふんどし姿で、御用役人にとり囲まれ突棒、捕り縄、刺刃などで八方から痛めつけられる平井権八や丸橋忠弥の映画を思い出し、彼等を女性に置き換えてみたいという願望をみだしているのである。妻こそいい災難というべきだが、そうしてくれる妻に私はたまらない愛しさを感じ、一層妻を愛するようになる。妻もそうすることが私の愛情を増すことを知って応じているうちに、いつの間にか自分自身もそのようなマゾヒスティックな気分になってしまったのだと思う。微妙な循環作用であると思うと同時に、私の妻になったことによって被虐の哀欲を覚えさせられた女の性の哀れさを、感ぜずにはいられない。私たちの愛のあり方が変態的になればなるほど単純で正常な生活をくり返していた時

より、私たちは一層強く深く結びついて行くようである。

妻は「こんなことでいいのかしら、私たちは異常すぎない？ 許される変態的愛の限界はどのへんにおけばいいのかしら」と時々反省的になる。そんな時、私は、正常と変態の限界は行為そのものより、その行為が他人に類を及ぼすか及ぼさないかできまるのではないかな、などと答えている。私たちの内側において行なわれるかぎり、その変態的な愛情は、正常なるが故に単純で退屈な愛情より絢爛で繊細な快感となって、私たちの五体を包み、生きていることの喜びを与えてくれるような気がする。

赤ふん一つで私に抱かれながら妻は「そうねえ、私たちは、だれにも迷惑をかけてないんだから、いいわねえ」と自分にいいきかせるようにいつて、遠い目つきをする。そして私はそんな妻の赤いふんどしに頬づりをし、この世に生をうけた喜びをかみしめ、彼女のふっくらした前袋に顔をうずめながら、暢快に入っていくのである。私にとって、ふんどしのない世界などは無いのと同然である。ああふんどし、ふんどし、ふんどしこそ、私の『いのち』である。

映画にあらわれた「殺し」の場面



黒田 寿

「人間魚雷」にエレオノラ・ロッシ・ドラゴが女スパイとして登場する。味方決死隊の手引に成功し、その攻撃寸前に敵の憲兵に発見され、かくし持った拳銃でこれを倒すが、彼が必死で放った一弾は、彼女の心臓部を貫ぬいてしまう。砂浜にくずれおちた美女の死顔に、ヒタヒタとおしよせる波が印象的。

しかし彼女はどうせ銃殺される身だった。八発から十一発も射ちこまれたら、乳房などあとかたもなくふっとんでしまう。彼女にとって、この方が幸いだろう。そのエレオノラは、例のアモーレ、アモーレで有名になった「刑事」で、豊かな乳房をのみ様のもので、無惨にもズブリ、ズブリと

突き刺され、あっけなく死体となった。しかも警察の死体置場に運ばれ、全裸とされて法医解剖をうけるのだ。さぞ切りごたえがあったろう。

「女は一回勝負する」のミレーヌ・ドモンジヨは、ラストシーンで射殺される。多分かわいなおへソでも射ちぬかれたのだろう。但しおへソは宣伝スチールだけで、映画のなかでは見せなかったような気がする。そのかわり「全艦を撃沈せよ」で、たっぷり見せてくれたから満足。まったくナイフをズブリとやったら、どんなに気持が良いだろうと、思わせたほどのおへソだった。尚映画では助かっているが、実話の方では哀れにも溺死するのである。前者はフランス映画、後者はアメリカ映画だから当然か。

「女猫」では、フランソアーズ・アルヌールが、裏切者として自動小銃の乱射を浴び、それこそ、オッパイもおへソも穴だらけにされる。主役であっても駄目だった（だから欧州映画は好き）。

主役の死ぬのは珍らしいアメリカ映画にあって、「めまい」ではキム・ノバクが二役を演じ、どちらも死ぬのだから嬉しい。最初の女は首を絞められ、念のために頸骨を折って

おいてから、高い塔より投げ落される。二人目の方も罪のむくいで、同じ塔からおっこちて粉みじんとなるが、この方は生きたままだから、地上に達するまでの何秒間かの気持はどうだったろう。当然受けるべき電気イスとどちらが良かったか。

「肉の蠟人形」で、ヒロインの親友は絞殺され、死体置場に安置されたあとで、その死体を犯人が盗みにくる。グルグル巻きにした美女の首にロープを引っかけ、二階から地上の車に吊りおろすのだが、ちようど絞首刑のような恰好なので気に入った。このあと犯人の家で蠟人形とされるのだ。この家は犯罪博物館となっており、誘かいされてきた美女たちは、或は火あぶり、或はハリッケ、又は股裂き、ギロチンなどの、各種死刑のモデルとなってしまう。やがてヒロインも捕えられ、四角の箱に入れられて、上から溶けた蠟を注がれそうになる。あわやという時に救いの手がかかることは言うまでもない。

「モルグ街の殺人」ではゴリラが犯人だが、哀れな助演女優たちは相續いで悲惨な最後をとげる。このゴリラ君、なかなか話せる奴で美女の両脚をつかんで引き裂いたり、首と四肢の関節を砕き、団子みたいにまるめて煙突

の中につめてみたり、足首をつかんでコンクリートの壁にたたきつけたりする。首をネジ切られたのは最も好運な方だ。ところが主役に対しては、主人に対する召使の如く従順になるのだから世話はない。(だから主役は嫌いだ)

「黒死館の恐怖」は英国の新人女優が、次々とあらわれて次々と死んでゆく。双眼鏡をのぞいたとたん鋭い針が飛びだして両眼を脳まで突き刺すもの。戸棚をあけたとたん銃弾が心臓を貫くもの。車の窓ガラスに首を絞められて息絶えるもの。崩れた石材の下でペチャンコになるものがあるが、一番気に入ったのは、ベッドに横たわった瞬間、天井から巨大な斧が落ちてきて、美しい首を胴体から切断するものだった。床にころがったブロンドの生首を、殺人者が持って行ってしまうのは記念品としてアルコール漬にするのだろう。

「狂った本能」で無人島に漂着した三人の美女(いずれもビキニ・スタイル)は、欧州映画の有難さで全部死ぬ。まずロッサナ・ポデスタは小舟で海に出て溺れ死に、ドーン・アダムスは崖から突き落されて粉みじん。最後のマガリ・ノエルは実は死刑囚で、救助即ちギロチンだから、秘密を知っている二人を鮮

やかに消したわけ。かくて救いの船が見えた時、彼女は崖から身をおどらせ、胴体は魚の餌に、死首は塩漬にされ、本国に運ばれて獄門に梟けられる。

「黙示録の四騎士」というのは、そのむつかしい題名におそれをなして見なかったが、今次大戦をあつかった現代劇で、しかもブロード美女のイベット・ミメオが、ナチに殺される娘を演じていた。彼女は絞首刑だったのかそれとも銃殺されたのだろうか(残念) 女が二人あらわれてヒーローをあらそう場合は、例外なくタイトル・ネームの下位の女優が死ぬ。アン・フランシスなどもその犠牲だ。

「悪徳警官」で殺し屋のためにバスに沈められて溺死したり、インデアンの矢に胸をふかぶかと射ぬかれてみたり、やっと王女になったと思ったら反逆罪で首を刎ねられるなど、ことごとく損な役まわり。「日本人の勲章」に至っては、ただ一人の女優だったにかかわらず、一発のもとに片附けられて、死体は地上をゴロゴロとこころがる哀れな最後となった(サンキウ・ミス・アン)。

「ブラボー岩の脱出」で、映画の方はインデアンを撃退、エレノア・パーカはか適当な奴だけ助かるが、原作の方は彼女一人を残して

全部死ぬ。しかも彼女は女スパイとして絞首刑に処せられる運命だった(原題名ロープの先)。その他西部小説の映画化は原作とはかなり違ったものが多く、「白人狩り」でインデアンに捕えられ、胸を槍で突き刺されたのち顔皮をはがれる娘が、結構恋人と結ばれる。あきれて話にならない。

西部劇で女が死ぬのは、ヒーローの身がわりになるものが多い。「遠い国」のルス・ローマン。「ミズリー大平原」のジャン・スターリングなど。

ギャング映画で警官隊の銃火を浴びて蜂の巣になる、というのはあまりなく、たまにあっても美女とは言い難いものばかり。せいぜい情婦が捕えられ、どんな死刑になるかを想像して楽しむだけだ。

題名は忘れたが、ボスが美女の拷問に硫酸を使うのがあった。顔にかけると言っておどかさすのだが、それよりも全裸にして床にねかし、おヘソのくぼみに一滴づつポトリとおとしたらどうだろう。それでも口を割らぬ時は乳房の先を狙えばよい。

戦争映画で五人の看解婦が、タイトルネームの下から順々に死んでゆくものがあった。ゲリラのために喉をかき切られ、首を絞めら

れて吊るされ、或はナイフでグサリ、手榴弾の爆発でふっとび最後の一人も機銃で打ち倒される。

「海の牙」で船から船に渡したロープで乗移ろうとした美女が、力つきて手を放し海に落ちる。とたんに荒波のため二隻の船は、胴体と胴体とが激突し、にぶいひびきをたてる。彼女は首から足の先まで、紙よりも薄くのされてしまう。

「絶海の嵐」で密航をくわだてたスーザン・ヘイワードは、船が沈没したため、かくれていた箱もろとも海底に沈み、突然あらわれた巨大なタコの八本の脚でまかれ、遂にはその餌食となってしまう。あとには服の切れはしが残っただけ(だから無賃乗車はするものじゃない)。

海賊の死刑はマストからの絞首刑である。実際に死刑になったある女海賊の最後の言葉は、執行者に対し、「あなたの名は何と言うの」だそう。普通は上半身裸体で吊るすのだが、特に彼女の場合シャツが許されたそう。翌日その死体は、ゴミにまぎれ、河口近くにプカプカ浮いていた(余計な話)。

「海賊バラクータ」の女海賊は、敵と戦うが武運つたなくサーベルが折れ、素手となって

は助演だけにどうにもならず、オッパイとおヘソを刺されて殺される。味方は皆彼女の死体を残して逃げてしまうので、哀れマスト行の運命となる。これより「女海賊アン」のジョン・ピータースのように、大砲の直撃をうけて粉々に飛び散る方が幸運だ。

「ジギル博士とハイド氏」で、ハイド氏の愛人のストリップパーは、あいびきの最中にジギルに変じたのを見たため、あえなくも絞め殺される。一方ジギルの妻であるドン・アダムスは、六階の窓からフロアのガラス屋根に死のダイビング。美しい肉体に無数の破片を食いこませて一巻の終りとなる。

「大盗賊」のクラウデア・カルデナーレは二挺拳銃をふりまわしての奮戦空しく死体となり、「危険曲角」のパスカル・ブチも車を暴走させ自殺するから、マリー・ラフォレも負けずに「金色の目の女」で死んでくれた。「太陽はいっぱい」でも刺殺され、グルグル巻になって海にドボンと投げられたら、申し分なかったが。

ナタリー・ウッドも負けてはいない。「イエストサイド」で相手方のアネゴと格闘、見事にその首をかき落とし、自らも従容とガス室行きとなる十九才のおてんばを演じていた

(でたらめでもいいかげんにしろ)。

「ソドムとゴモラ」でピア・アンジェリが、神の怒りをうけて石だか塩だかの柱になるがこの時彼女はどんな感じだったろう。自らの身体が次第に冷く、固くなってゆくのだ。泣いても、もがいてもどうにもならない。

「ハンニバル」のリタ・ガムは、生理めになる。「ユリシーズ」では、侍女が弓で射殺され、「カルタゴ」では火あぶり、ハリツケの大量生産。「愛は惜しみなく」でアントネラ・ルアルデイがギロチンの錆と消える。

そのほかにも「モデル殺人事件」「血を吸うカメラ」「生血を吸う女」等々最近すばらしい映画が続いているが、すでにこれらについてふれられた方も居るし、別な機会にゆずることにします。

ここで私の製作による空想惨酷映画をお見せしましょう。出演はわれらがモデル嬢にお願いします。但しギャラは一文も出しませんから悪しからず。

梨花悠紀子がトップ、バッター。大刀でバツサリと首を刎ねるのだが、前後左右から数台のカメラを使用し、彼女の首が左前方にころがり、斬口から血汐が高々と噴きあげ、胴

体が、がっくりと、のめる場面を撮影するのだ。勿論カラーだし、分解写真もスローモーションもある。

スローはすばらしい。じっと坐っている彼女の首に、徐々に刃が近づいて肉に食いこみ、血がにじみ斬口が見えてくるのだ。この時の表情も大うつしにされ、恐怖と苦痛で目が大きくひらくのもわかる。やがて刃は骨を断ち首は胴体から次第にはなれてゆく。血汐は徐々に噴きあがり、やがて三メートル位の高さに達する。そして最後は、ころがりおちた首にカメラが向けられ、まだ眼瞼がピクピクふるわせているのを撮影する。そして次第に目は輝きを失い、すべての表情が消えてゆく。カラーであるため特に血汐が鮮かであった。

分解写真はスチールとして売り出そう。刃が半分位食いこみ、その刃先が首からつき出ている場面、完全に切れて首が胴をはなれようとした瞬間、血汐が最も高く噴きあげ、首はまだ地上におちていない場面が最も好評と思われる。

私はかりかせいで申しわけないから、彼女にも少々サービスする。

生首をきれいに洗い、ウイスキーのグラス

を唇にあて、静かに注いでやる。喉を通って首の斬口からポタポタと、チェリー・ブランデーみたいになって滴りおちる。

次に火のついたタバコをくわえさせると、やがて鼻からモヤモヤとうすい煙が立ちのぼる。すばらしい眺めだ。やはりこれも映画にとることにしよう。

遠藤百合子の処刑スチールは、ギロチンに首をつっこんでいるところ、刃が首にふれた瞬間、半分まで食いこんだところ、刎ねられた首がちよっと浮きあがっている場面、バスケットの中の首、獄門に掛けられた晒し首がある。

水本茂美は溺死させよう。海に投げこむのだが、フィルムは高いので、いよいよという時まで撮影はしない。やがて力つき、手足をぐんなりとのぼしながら、静かに沈んでゆく美女の姿がカメラにおさめられる。

長野良子は火あぶりだ。炎と煙につつまれてもだえ苦しみ、遂に黒焦げとなるまでが、あますところなくおりこんである。

五月亜紀子は下腹に爆薬を結びつけ、導火線に火を点ずる。しゅうしゅうと燃えてゆき裏音と共に粉みじんに砕けるのだが、勿論スローもとられている。この方にはふつとぶ四

肢と首が認められるだろう。最後の瞬間の恐怖の表情がすばらしい。

新井マリ子は股裂きの刑に処す。大きな目は恐怖のためますます大きく、美しくひらいている。両脚をせいっぱいにひらき、二本

の木をまげて片脚づつ結び、これを放せば型の如く真二つというわけだ。スローによれば女体が少しづつ裂けてゆく光景がはっきりみられる。はじめは血汐がにじみだす程度から内臓がばらばらになるところまで。決定的瞬間

縛られた美女ばかりの超豪華アルバム

限定版
写真集

美しき縛しめ

第三集 略号「美3」
頒価 一〇〇〇円（送共）

一般書店売りは一切いたしません。直接天星社へお申込み下さい。

美人モデルの縄にあえぐ姿態が、両面特アート紙にギッシリとグラビヤで印刷されて、皆様のお求めを心からお待ち申しております。内容は次に掲げた百二十態の写真で、いずれも今まで一回も発表されたことのない、とっておきの秘蔵品ばかりです。

◎緊縛女体百二十態 △本誌優秀モデル総登場の写真集▽

樹間にさらされる (絹川)
豆しぼりの猿ぐつわ (絹川)
縄目と裸身の羞らい (長野)
後手首に喰込む縄目 (梨花)
荷造り縛り人形 (大塚)
バンド着用しぼり (遠藤)
替ゴム猿ぐつわ虐め (東浦)
ゴム布に包まれて (梨花)
椅子利用エビ縛り (東浦)
厳しき胴絞 (絹川)

輝く白肌をさらして (関谷)
荒縄黒皮フンドシ (大塚)
野性的な緊縛模様 (絹川)
全裸のいましめ (愛川)
白晒六尺フンドシ (遠藤)
百CC浣腸器責め (大塚)
荒縄のトゲに喘ぐ (大塚)
両手吊りさらし (桜井)
M女性の本領発揮 (梨花)
足錠をつけられる (四方)

美貌を踏みつける (絹川)
悦虐の園にさまよう (水本)
若肌に襲う白ローブ (若原)
蚊群の襲うにまかせ (絹川)
きびしき縄目に喘ぐ (加茂)
麗しき裸身の縄目 (絹川)
猿ぐつわ黒フン縛り (愛川)
あえぐゴム布嵌口 (大塚)
美しい顔をなぶる (梨花)
飛び出す双丘と後手 (長野)

間は言うまでもなくスチールとなる。

最後をかざるのは、絹川文代と大塚啓子の死斗でなくてはならぬ。

文代は啓子の隙をみて遂にこれを組みしいてしまった。カメラは戦いの邪魔にならぬ程度に動きまわり、上気した顔、絶望の表情を次々ととらえてゆく。短刀が胸のただなかにブスリともぐりこんだ時、この映画を見る人たちは拍手して迎えるだろう。

悲鳴をひとつ残しただけで、あっけなく息絶えた啓子の死顔、その唇から一滴の血汐がすっと流れる大うっし。だが、死せる啓子の二本の腕は、恐るべき一念をこめて蛇のようにおどり、文代の細首にまきついてぐっと絞めつけた。

文代はそれにかまわず、短刀を横にゴシゴシと啓子の首をかき斬っている。やがてにぶい響と共に首がころがるが、このゴトリという音は皆様の耳にも入るだろう。

血の滴る生首を、髪の毛をつかんで高々とさしあげ、勝名のりをあげる文代の姿は、この映画のクライマックスである。しかし文代の首にまきついた二本の腕は、肘からたたき斬ったにかかわらず、尚もはなれようとしなかった。死後強直が、死の直後にあらわれる

首縄胴縛り股間縛り	(絹川)	被虐のマゾ女性	(東浦)	首吊りのプレイ	(大塚)
被虐に耐えた表情	(水本)	大きな猿ぐつわ	(竹野)	後手縛り猿ぐつわ	(絹川)
生首フォト	(新宮)	可愛い足首	(絹川)	電光に肌は映えて	(梨花)
祭壇のささげもの	(大塚)	黒髪なぶり	(大塚)	噛まされる猿轡	(東浦)
パンプス開股しぼり	(大塚)	喰い込む柔肌に縄	(大塚)	柔肌高手小手	(梨花)
越中フンドシ緊縛	(大塚)	裸身に投げたタオル	(加茂)	高手背高しぼり	(水本)
飛びだした双丘	(加茂)	緊縛の優美ポーズ	(絹川)	後手小手股間縛り	(絹川)
塩水を無理に飲ます	(大塚)	くわえた赤い花	(絹川)	柱後手縛りにて	(山路)
胸部と臍窩の魅力	(遠藤)	エビしぼり正面	(梨花)	下げられたズロース	(梨花)
臍窩を狙う蛇の舌	(梨花)	美貌美身の緊縛	(大塚)	十文字しぼり	(桜井)
顔枷の装着中	(四方)	首を締めるくさり	(絹川)	木洩れ陽に白き肌	(絹川)
鼻孔ゼムピン責め	(絹川)	手吊りのけぞり姿	(桜井)	叫ぶ捕われの乙女	(大塚)
鼻孔から薬液注入	(大塚)	乳首に咬みつく蛇	(大塚)	汗まみれの被虐	(梨花)
豊軀にまつわる黒縄	(若原)	後手縛りと臀部	(絹川)	洋服タンスに吊る	(大塚)
ピンクカバーと豆絞	(絹川)	ピンクの腰巻さらし	(東浦)	全裸にてもだえる	(関谷)
斬首処刑フォト	(新宮)	重圧に耐える表情	(大塚)	黒縄地獄	(四方)
両手首吊りさらし	(大塚)	強烈アグラしぼり	(絹川)	るせつの裸身	(梨花)
後手足首逆エビ縛り	(梨花)	ポリウムの誇り	(桜井)	セーラー服を縛る	(梨花)
丈なす黒髪	(大塚)	鏡にうつす裸しぼり	(山路)	首縄から膝縄まで	(大塚)
責衣からのぞく乳房	(大塚)	惜しみなく晒す裸身	(大塚)	高々と上った後手	(梨花)
美貌放心の表情	(梨花)	ゴム帽子麗身晒し	(梨花)	くびれた胸と腹部	(大塚)
後手強烈しぼり	(梨花)	首絞めに苦しむ	(大塚)	カクテルドレスの女	(絹川)
従順なるマゾの発散	(竹野)	麗身をもだえさす	(絹川)	浣腸責め	(大塚)
手錠足錠首くさり	(四方)	猿ぐつわの苦悶	(加茂)	首のくさりに悶える	(絹川)
白晒六尺フンドシ	(大塚)	黒縄にもだえて	(大塚)	黒のズロース	(絹川)
ガンジガラメの縄目	(絹川)	全裸の手吊り責め	(大塚)	破られたズボン	(梨花)
首縄胴絞め股間縛	(桜井)	ゴムの猿ぐつわ	(絹川)	正面立姿全身縛り	(大塚)
引き回される裸身	(絹川)	汚れた縄と輝く白肌	(絹川)	くさりに捕縛される	(山路)
豊胸を彩る茶の縄	(大塚)	手首足首椅子しぼり	(梨花)	龜甲型股間しぼり	(大塚)
捕われの女学生	(竹花)	あえぐ夫人の表情	(関谷)	長襦袢と腰巻	(館)

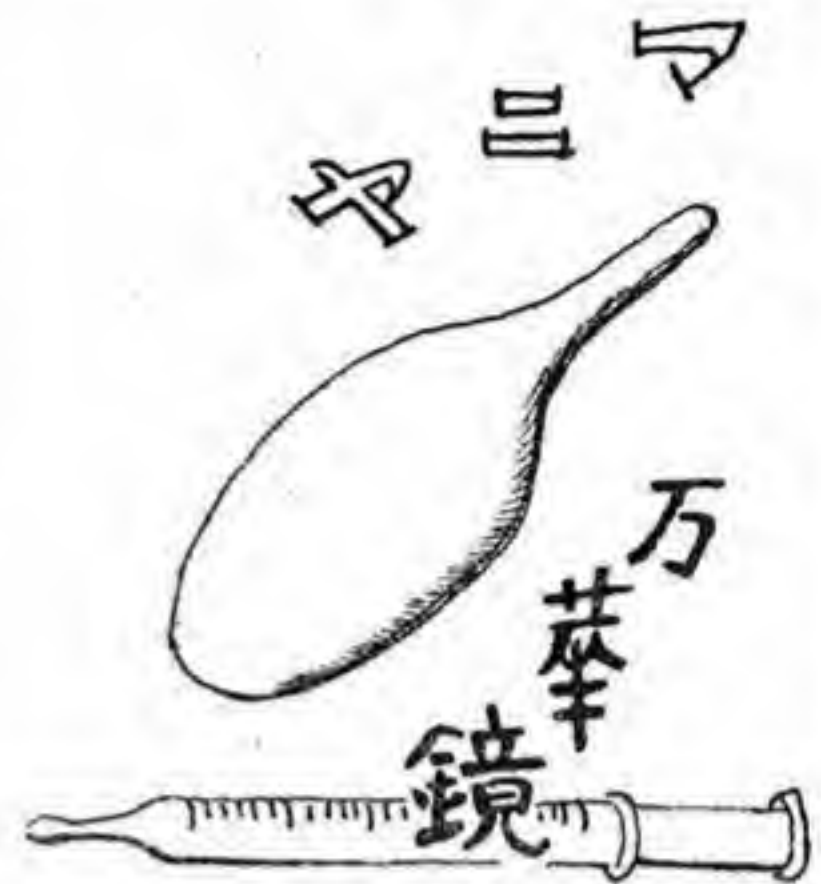
ことがある。啓子の場合がそれであった。文代はこのために呪われたものとして死刑の宣告をうける。最後の希望として、最も好きな絞首刑を許されたのは、せめてものなぐさめだった。

絞首台をのぼる文代の姿をカメラが追う。ロープが首にまかれた時、呪いがとけたのか啓子の腕がポロリとおちる。踏板が落ち、かよわい首すじがキュッと絞まり、以後カメラは顔面に固定する。

十三分十三秒後、文代は息絶えるのだが、恐怖と苦悶に見ひらいた目、ピクピクあえいでいた鼻口、そして舌をダラリとだした口、ロープが食いこんで僅かながらも血汐のにじみでた頸すじと、どれをとっても見ごたえのあるものだ。

やがてカメラは下方に移動する。全裸の絞首屍体をなめるように、乳房、おへそ、下腹部、大腿、そして宙をふらついている足首が画面にあらわれる。

足首から先は細鎖によって結ばれた重さ十三キロの鉄丸、その表面に「終」の文字が浮かびだしてくる。



クリスター・マニアの体験

北 沢 操

一般の生活では、あらゆる点で女性よりも男性の方が有利なことは、言う迄もありませんが、私の様な浣腸マニアにとっても、それは云えそうで、しみじみ男に生ればよかったなあと思います。

女性では医師か看護婦になる以外はひとに浣腸する機会なんてないし、仮にそんな立場の人でも、対象に出来るのは、お年をめした方か、でなければほとんど同性に限られていると思います。それが男性のマニアでしたら対象となる女性の身体そのものが浣腸を必要とする場合が多いのですから、異性の魅力で自分の恋人なり奥様なりを浣腸マニアに誘導

するチャンスは、いくらでもあるでしょう。

あたしがこんなことを考えましたのは、このところつづけてショッキングな（マニアにとりましては）場面にぶつかったからなのです。

美容院で

初めにあたしのゆきつけの美容院での出来ごと。日本堤にあるKと云うお店、この主人は五十がらみのおばさんと云う感じのピツタリする、とても気さくな感じで、助手が三人程いる小さな店ですけど、顔なじみでいつもおばさんがやってくれます。この間あたし

が行ったときは、昼ごろで、客が一人もなく皆集って雑談しているところでした。その中に、新しく来たらしい、やせぎすな、キリッとした顔に、大きな眼が可愛い、一寸へッパバーンを思わせる十七、八才の少女が交っていました。顔見知りの助手の一人が「いらっしやい。セツちゃん、先生呼んで来て」

セツちゃんと云うのが、この子の名前でした。戦後値うちの下った言葉は、先生と社長だとよくいわれますが、髪結さんを先生と呼ぶのは、いつもながらおかしい感じがしてなりません。間もなく奥から先生がセツちゃんと

連れ立って何か話しながらやってきました。

「そいであんた医者へ行かなくて大丈夫。」

「ええ。」

「ヤダねえ、だから浣腸しなさいって云ったのに」

あたしはハッと聞き耳を立てました。先生はたしかに「浣腸」と云ったのです。

「草加じゃこんなことなかったんです。水が変ったからかしら。」

「水道の水なら、わるくないわけだけどね。」そこで、あたしは口をはさみました。

「どうしたんです。」

すると先生は、あたしの方にむきなおって「いやあね、本当に若い娘って、このひと、通じが結しちやって、痔になっちゃうって騒ぎなの。」

「いやよ、先生、恥しいわ。」

セッちゃんは赤くなりましたが、先生は一向かまわずに

「五日も六日も放っとくから、お通じが硬くてお尻から血が出ちゃうのよ、早く浣腸して出せばいいのに。」

あまりアケスケな話し方なので返事に困っているうち、話は切れました。もしあたしが男性なら、この便秘に苦しんでいる少女をた

ちまちマニアに仕立ててしまうのにと考えたことでした。

勤務先で

この間、ポンプの故障で、トイレの水が三十分程止まったときのこと。偶然、村山さんと、トイレでぶつかりました。この方は三十過ぎの整った顔の美人で、何故一人でいるのか、うちの課の七不思議に数えられている人です。

丁度あたしが、鏡の前に立ったとき、奥のドアがあいて、出て来たところでした。

「いやんなっちゃうわね。水出なくて。」

何故か顔を赤くして急ぎ足で出て行く後姿を見送りながら、あたしはピンと第六感にひびくものがありました。彼女は先刻から、随分長いこと席をあけていましたし、以前にも便秘で肌が荒れて困るわ。と話したことがあります。あたしは今彼女が出て来た扉をあけました。余程長く入っていたらしく、中にはまだ、彼女の移り香がただよい、足もとの真白な便器の上は、かたまりの上にトイレットペーパーが恥かしそうにおおいかぶせてあります。

あたしは直感的にそれが彼女のものである

ことを感じ、少し残酷な気持で紙をとり除きました。すると下には、思った通り、彼女の苦戦の成果が、フィッシュ・ソーセージの様にキチンと二つ並んでいました。そしてその隣にピンクのイチジク浣腸の空が落ちていましたと書けば、これは作り話となってしまう。残念ながら浣腸はありませんでした。でも、もし彼女がマニアに目覚めたら、こんな悩みはなくなるでしょうに。

薬局で

昨日、少し風邪気味で、夜、近くの薬局に行ったとき、話し好きの主人につかまって、一時間程雑談をしました。クリステイの小説の主人公を思わせる、背のひくい、額の禿げ上った面白いおじさんです。そろそろ帰ろうかなあと思ったとき、女子高校生らしいセーラー服のニキビだらけの子が入ってきて、隅にあたしがいるのをみて、ちよっと戸迷った様でした。（外からは位置の関係で姿は見えなかったのです）

「何にします」と主人がききますと、チラとあたしの方を当惑した様にみて

「アノお腹の痛くならない下剤ありますか。」と赤くなってたずねました。

「そうですね。今迄なに使ってました。」

「〇〇ですけど、とてもお腹が痛むんです。」

「アレは一番作用がゆるやかですから、腹痛は起らない筈なんですけどね。……他の薬はアレより強いから……。いつも便秘するんですか。」

「いいえ、アノ時々二、三日なの。」

「それじゃあ浣腸してごらんなさい。この方が早くきくし、お腹も痛まないですよ。」

「……」

「これ二個入りですけど、大がい一つで間にあいますよ。ダメだったら、もう一つして下さい。やり方知ってますね。」

少女は真赤になってうなづきました。逃げる様に出て行くうしろ姿も可愛らしく見送り、一寸あとをつけてみようかと思いましたが、余りの寒さに家に帰りました。

レストランで

今まで毎朝あったものが、この頃不規則になってきて、必ずついていい位、朝は催すだけでうまくゆかず、やっと通じるのは昼すぎから夕方、それも都合で少しこらえていると、もうその日は、だめになってしまいうのです。そしてその結果、浣腸排便ではキリがあ

りませんので近頃では少しでも便意が起ると、ところかまわずトイレに行くことにきめました。焼芋、バナナ、ゆであずきと、いいといわれるものは、のこらずためしてみまして、あたしの身体にはあわないようです。

神田駅近くにTと云うレストランがあります。気易く入れるのと雑談にもってこいなのでよく立寄るところです。その日も帰りにここでN子さんとおしゃべりしているうち、催して来しました。ここはトイレは一つしかなく先刻隣のアベックの女の方が入ったので、そのまま待ちました。ところがどうでしょう。

もう二十分以上もたつのに、出て来る気配がないのです。また機会を逃してしまうとイライラしながら、連れの男性方をみますと、そのひとも、退屈したらしくモジモジしています。男のひとをあんなに待たせて悠々とトイレに入っているなんて、あたしだったら我慢しちゃうのになど考えると、一寸待たされているひとが気の毒になりました。三十分以上もたったでしょうか。待ちかねて、ドアをあけますと、何と便器の上は、黒っぽいドロドロになった便が一杯悪臭を放っているではありませんか。

「どうして流さないのかしら、行儀のわるいひと。」と思いながら、ペタルをふみますと、水不足でか、ほとんど出ないのです。

あたしは、便意を喪失して、外に出ましたが、彼女が長いこと男のひとをおきざりにしてまでもトイレにいたわけがわかりました。

そのよく消化された色からみても只の下痢でないことはたしかです。恐らく彼女は下剤でもきいて来たところだったのでしょうか。

同じ様な話ばかりで退屈されたかも知れませんが、どこにもあるありふれたことですから、マニアにとっては、とても刺激を受ける出来ごとなのです。

最近日本臨床と云う雑誌で便秘の治療にワグスチグミン注射の記事がありました。迷走神経に作用して腸の動きを促進するのだそうです。一度ためしてみたいと思いますが、どなたか経験された方はいらっしゃるでしょうか。

お詫び

北沢操って本当はあたしの従兄、ひそかにあたしが思いをよせている人。もう三十に手が届くっていうのにまだ独身で高校教師のくせに、ダンスに夢中になって校長さんからお

目玉頂いたり仕方のない方です。今まで名前だけ無断借用してたわけ。この前の投稿で読者によびかけておきながら、局に行くのは怖かったので、彼にたのみますと、私の大好きな笑を片頬にうかべながら

「いいともいいとも、他ならぬ——子ちゃん」

のたのみなら……。とは云っても、興味があるな。名前を使われた以上聞く必要がある。」

「同人雑誌に出したの、どこから来るかわからないから恥しいわ。」

従兄がK・Kをみる筈はないと知り乍ら、

凄じスリルでした。

「随分きてたなア、みせてくれない。」

とお手紙の束を手渡されたとき

「いいわよ、あとでね（とんでもない）。」

とさりげなく答えながら、あたしの胸は陳腐にその場をにぎして、部屋にもどり、し

っかりと鍵をかけてから、改めてその六十通

余りのお手紙を前にしてはじめて事の重大さに気がついたのです。一通一通真心のこもっ

た内容を拝見しながら、（覚悟はしていまし

たが全部男性からのものでした）「とり返し

のつかない事をしたと自責の思いでいっぱい

でした。体の調子も正常にもどり不十分なが

ら（少し硬すぎるので）毎朝のものがあ

うになってきますと、前に書いたことが悪夢

のような気さえます。皆さんまじめな方

しいのですが、もしご返事をさし上げまし

たら、もはやあたしは正常な神経とはいえな

なるでしょう。そのうちまた拙文でお目にか

かります。どうかお手紙を下された方々、勇

気のないあたしをお許し下さい。

本誌既刊号在庫一覧

注文殺到！お申込みはお早く

本誌既刊号在庫案内

○左記一覧表のうち、定価の記してあります分は、只今在庫しておりますから、御注文次第お送りいたします。

○送料は当社にて負担いたします故、読代のみお送り下さい。

○昭和35年5月号以前の号は、全部売切れとなり在庫はございません。

在庫雑誌及び定価

昭和35年6月号（定価三〇〇円）
昭和35年7月号（定価三〇〇円）

昭和35年8月号	昭和35年9月号	昭和35年10月号	昭和35年11月号	昭和35年12月号	昭和36年1月号	昭和36年2月号	昭和36年3月号	昭和36年4月号	昭和36年5月号	昭和36年6月号	昭和36年7月号	昭和36年8月号
（売切）	（定価三〇〇円）	（売切）	（売切）	（売切）	（売切）	（売切）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）

昭和36年9月号	昭和36年10月号	昭和36年11月号	昭和36年12月号	昭和37年1月号	昭和37年2月号	昭和37年3月号	昭和37年4月号	昭和37年5月号	昭和37年6月号	昭和37年7月号	昭和37年8月号	昭和37年9月号	昭和37年10月号	昭和37年11月号	昭和37年12月号	昭和38年1月号	昭和38年2月号	昭和38年3月号	昭和38年4月号
（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）

昭和38年5月号	昭和38年6月号	昭和38年7月号	昭和38年8月号	昭和38年9月号	昭和38年10月号	昭和38年11月号	昭和38年12月号	昭和39年1月号	昭和39年2月号	昭和39年3月号	昭和39年4月号	昭和39年5月号	昭和39年6月号	昭和39年10月号	悦特第三集	悦特第二集	悦特第一集	悦特第四集
（売切）	（売切）	（売切）	（売切）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価一五〇円）	（定価三〇〇円）	（定価三〇〇円）	（定価三〇〇円）	（定価三〇〇円）



花田 一郎

1

「ああ、あたしは、とうとう『地下室の女』
って口走ってしまったわ」

ヴァレリーは二階の手すりにもたれ、セーヌから吹いてくる河風に金髪をなぶらせながら、虚空を渡ってくる何ものかの足音を聞いた。後悔はなかった。河風はきらめく若葉の街路樹をめぐり、初夏の日光の匂いを吹き送ってくるが、ヴァレリーの目には、それはもう真暗い獄舎の窓からチラリとあおぎ見る外

界にしか過ぎなかった。ペートヴェンの『運命』を静かに口ずさみながら、ヴァレリーは楽しかった幼時を走馬燈のように思い返すのだった。

ヴァレリーが生まれたのは、ちょうど一八〇〇年であったから、父がナポレオン軍の一兵士としてモスクワ遠征の帰途行方不明となつたときは、まだ十二才の少女であった。母はヴァレリーが絵筆一本でどうにか自活して行けるようになったのを見とどけて他界した。

—はこうした模索の時代に画家の群れに身を投じた。

やがてやってくるロマン派のドラクロアと古典派のアンゲルとの対決への胎動を、女性特有の直感で感じとりながら、彼女はやはり遠い異境で自適するダヴィッドの面影を慕う一人であった。従つてその画面も均整のとれた古典の世界であったが、彼女の色彩には不思議な生彩があった。ドラクロアの抬頭から、遠く印象派の出現を予見させるような、

激動を続ける社会に劣らず、画壇の変遷も激しかった。ナポレオン帝国のために、自分の芸術を献じたダヴィッドは、一八一六年のワテルローの敗戦と共に、ブラッセルに亡命して帰国のすすめに応じなかった。それに対してフランスの画壇は今もお尊敬の念を惜しみなく捧げていた。ヴァレリ

ひたむきな日光の輝やきがあった。

彼女の画に最初に目をつけたのは、画商のオドール爺さんであった。

「三月に一枚でいいから、私のために描いておくれでないか。生活費とえのぐ代だけは心配かけないからね。べっぴんさん」

もっとも爺さんの希望は最後の一語だけだったのかも知れない。それがヴァレリーの画がアカデミーに入選し、つぎつぎに注文がやってくるようになってからは、爺さんの立場は一変した。

「べっぴんさん。お前さんの画を最初に買ってあげたのは、このわしなんじゃ。どうか三月に一枚の約束を続けて、この老人を喜ばせてやっておくれでないか」

おどおどした爺さんの目を、ヴァレリーは微笑で見返した。

「大丈夫よ。一番よくできたのをまわして上げるわ」

この彼女の生涯での絶頂から、わずか六カ月、娼婦になってから二カ月目の昨日、彼女はとうとう客にむかって

「地下室の女」

という禁句を口走ってしまったのだった。

一昨日がちょうど彼女の二十一才の誕生日に

あたるという感傷からきたものかも知れなかったが、彼女がこれまで、この禁句をのどまて出しかかっていたのも事実である。誕生日というのは、単なるひき金の一つに過ぎなかった。

こうして二階の手すりで輝やく日光と薫風を楽しんでいる今も、階段を二つおりた地下室の中では、オルタンスが分厚いレンガの壁の中で、そのしなやかな身体を苦悶にのたうたせ、清純な唇から絶叫をほとばしらせているかも知れない。ヴァレリーは次の地下室の女は自分であると、はつきり悟った。

ヴァレリーが画を描いていたころ、オルタンスにそのモデルになったことがあった。それが二人の交友のはじまりであった。題材はある富豪が札束を積んで頼んで行った『聖フランソワーズの殉教』であった。

毎日オルタンスはヴァレリーのアトリエにやって来て、十字架にはりつけになった。一時間十字架にかかって、三十分休憩のためにおろされる。又一時間かかる。それが日課であった。ヴァレリーはせっせと絵筆を進めながら、かすかにあえぐオルタンスの裸身にさす夕陽のバラ色の美しさに息をのんだ。次第にオルタンスが十字架にかかる時間はのびて

行った。契約の時間がおわっても、ヴァレリーはオルタンスを十字架からおろさず、二時間も三時間も余分に放置して、うっとり眺め入った。オルタンスの身体は苦悶にブルブル震えた。

夜ふけて、十字架に固定された手首から先が完全に血の気を失っているオルタンスが解かれる。じゅうたんの上に荷物のようにドサリとおちたオルタンスを抱きしめるヴァレリーに、オルタンスはあえぎあえぎ言った。「お願い。絵ができ上がったら、私の身体が傷だらけになってもいいから、思い切りムチ打って」

ヴァレリーはうなずいて約束をした。そしてそれを果した。オルタンスは鮮血にまみれ毛布で何枚くるんでやっても

「寒い、寒い」

と悪感にふるえ続けた。彼女の全身の傷がなおるには、一カ月を要した。そして二人はわかれた。

ヴァレリーは今、六月の薫風の中で、十字架のオルタンス、ムチの下で血まみれになったオルタンスを思い出した。それは思い出ではなく、現実のこの同じ屋根の下の地階で今行なわれている惨劇でもある。ヴァレリー

はふいと手すりをはなれて階段を下りて行った。地下室へ下りる階段にかかる、もうなまぐさい空気がよどんでいるような気がする。その階段の途中で手をのばせば、レンガの一つが、コトリとはずれることを知っている。そこから地下室の中の様子がのぞけるのであった。

うす暗い地下室の中は、目がなれるまで、まっ暗に見えた。ローソクが一つともっていない。ヴァレリーは辛抱よく目がなれるのを待った。やがて暗い部屋の中央に置かれた白い石の椅子と、それに鉄鎖でがんじがらめに縛りつけられている白い塊が、もうろうと浮かび上がってきた。

そのとき彼女は、その陰々たる部屋の中からかすかに聞こえてくる急調子のあえぎの声に気づいた。炎天の下で長距離を走ってきた犬のような声だ。それが椅子の上の白い肉塊から出ている声だと気づくのに時間はかからなかった。オルタンスを縛りつけた椅子は、むこう向きになっているので、くわしい様子は見えないが、何か拷問具を加えられているのである。ヴァレリーは爪でレンガの壁を搔いた。

やがて、気がつかなかったもう一つの黒い

影が部屋のすみから歩み寄ってオルタンスの前にうずくまった。こちら向きであるが、うつむいているので、のぞいているヴァレリーの眼には気づかない様子である。

そのとき、オルタンスの肉塊が鎖の下で、それとわかるくらい怒張しけいれんし、そこから絶叫がほとばしった。

「ギャーツ、殺してッ、もう生きていたくないッ」

聞くものの肺腑を、えぐるような声であった。ブルブルと戦慄して、ヴァレリーはレンガをコトリとともにどし、階段を駆け上がった。行った。

「もう今度は、オルタンスは助かりそうにないわ」

彼女は胸に十字を切った。両眼に涙が溢れた。

「お可哀想に、オルタンスは一体なんのために生まれて来たのかしら」

あの黒い影はユロ男爵なのである。

……

この『ルージュ』の店が店びらきをして、オルタンスは十一人目の『地下室の女』である。今まで十人の女の中、地下室を出て来たとき、七人は不具になって出て来た。一人は

死体になっていた。残る二人は地下室を出てから息をひきとった。その十人の犠牲者の中、ユロの手にかかって不具になったもの五人、絶命したもの二人という高率なのだ。絶命しても、『ルージュ』のフェルヴァックばあさんは警察に大金をにぎらせて闇にはおむってしまう。そしてその大金が加害者のふところから出たものであることはいままでもない。

パリにはむかしから、このような被虐専門の娼婦がいることは、フィクションではない。代金は普通の娼婦の三倍である。先天的に責められるのが好きな女は、この職業を志願した。一晚責められ、二日は休んで傷の手あてをしたものである。ところが責め手と娼婦と意気投合した場合、特定の女が特定の客に一週間、十日と買いさられることがあった。初日につけた傷も自分がつけたものであって見れば、二日目も三日目も客は不快感を抱かないで責め続けることができたわけである。十日買いさられると、普通の娼婦の一月分の収入になった。だから二十日の休養が公認され、買いさられることを歓迎する女もいた。

ヴァレリーは、この店にやって来てしばらくしたころ、こういう光景に接したことがあ

った。——当時、地下室の女はセレスティーンであつたが、ヴァレリーはある朝早く目が覚めて、トイレに行った。そのいますぐ下の地下室のとびらがあいて、ガウンを羽おったセレスティーンと客が中からあらわれたのだ。そこでセレスティーンは、フェルヴァックばあさんの点検を受けるのであつた。セレスティーンはばあさんの目の前で、パツとガウンをひろげて見せた。丸見えになったセレスティーンの裸身は、いたるところあざになつてゐるのはよいとして、数十本の横なぐりにつけられたムチ跡がみみずばれになり、十カ所ばかりから血がしたたつてゐた。フェルヴァックは一目見るなり、

「まあお客さん、ずい分痛めつけられましたね。これじゃ回復に四日はかかりますぜ。もう二日分の給料をやって下さらないと」

といつて客からさらに二枚の金貨を受け取つてゐた。このように一日買われれば二日休むという比率は大たいの目安ではあつた。

この『ルージュ』の店の営業方針は一風変わった。普通の娼婦をいつも十数人かかえ、これと思つた女を地下室の女として送りこんだ。交替が行われたのは、今までの地下室の女が不具になるか絶命するときに限られ

た。だから地下室の女はいつも一人であり、空席になつてゐることさえあつた。このように厳選された女であつたし、その地下室の拷問施設は完備してゐたので、この『ルージュ』の店は、通の間ではかなり知れわたつてゐた。

そしてこの店の普通の娼婦になるために集まつた女たちも、心の奥底には、こうした世界にあこがれとまで行かなくとも、好奇心を抱いてきたような女が多かつた。ヴァレリーが将来囑望された絵筆を捨てて、こともあろうに娼婦に進んで身をおとしたのも、実にこの好奇心からであつた。

そして彼女はそこで、かつての自分のモデルだつたオルタンスに遇つたのである。

「まあ、あんたはオルタンス！」

「あら、ヴァレリー」

二人は抱擁した。全てを理解し合つた。二人がわかれたとき、今度遇うのはこの『ルージュ』であると運命づけられてゐたのだと、突如として悟つたのだつた。そのときはオルタンスも普通の娼婦であつた。

この普通の娼婦たちの間で『地下室の女』ということばは禁句であつた。口走るだけで戦慄を感じるからであつたが、反面、『地

下室の女』というのは、彼女たちの心の奥底であこがれの座を意味してゐたからでもある。ライバル同志で目的物について話し合うはずがない。

不審に思われたらデパートへ行つて案内係のB・Gに聞いて見られるとよい。

「乗馬用具は何階で売つていますか？」

「×階でございます」

「どういふものを売つていますか？」

これに対してB・Gは例外なく

「ムチだとか……」

と答える。けれども案内係のB・G同志の会話の中に『ムチ』という単語は決してあらわれないのである。またデパートのB・Gは異性の客に軽がると「ムチだとか……」と口走るが、この『ルージュ』で異性の客に対して『地下室の女』と口走つたら、次の地下室の女になることを承諾したことになる。微妙な女ごころは、この『地下室の女』ということばを、異性の客に対しても禁句とさせてゐたのである。

けれどもこの『ルージュ』の店の娼婦を志願したというだけで、この店の娼婦たちは一次試験をパスしたようなものであつた。それが二次をパスして一度地下室の女になつたも

のは、自由意志が認められているにもかかわらず、どんなにすさまじい拷問にかけられても、ふたたび普通の娼婦にかえろうとするものはいなかった。そして身をほろぼし、あるいは絶命して行った。この事実がさらに残された娼婦たちの心の中に戦慄とあこがれを育てて行った。ヴァレリーの好奇心もいつかあこがれに変化していた。

その夜はヴァレリーは寝つかれなかった。夜ふけてもつと階段を下り、レンガをはずして見た。今度はやみになれた目だったので、部屋の内部がすぐ目にうつった。黒い影が黙々として石の椅子に肉塊を縛りつけた鉄鎖を解いている。ヴァレリーの胸は早がねのようにうった。解きおわると、肉塊はグルリと前に倒れかかる。黒い影がそれを肩にかつき上げ、肉塊は石だたみの上に、ドタリと投げ出された。もうまっ白ではなく、黒い斑点と縞が一面に模様を描いているのは、あれは血であらう。ヴァレリーはそのときユロ男爵の処刑がおわったことを知った。ユロ男爵が二十日間の契約でオルタンスを買いきって今日で十七日目である。オルタンスは実に十七日間かかって、なぶり殺されたのである。ヴァレリーのほほを涙が伝わった。

ヴァレリーは夜が明けるまで、まんじりとしなかった。指おり数えて見ると、オルタンスが『地下室の女』になって今日はわずかに三十三日目である。食事のときフェルヴァックはあさんはオルタンスを隣席へ呼び、みんなを見渡して静かにいった。

「みなさん、今日からオルタンスが地下室へはいることになりました。みんな門出を祝福してやって下さい」

オルタンスはそのときは羞恥にはほを染めてうつむいているだけであつた。それからオルタンスは白い丈夫な木綿の囚衣に着替えさせられ、地下室の入口のところへ、右足首に鎖をはめられて一昼夜晒された。フェルヴァックはそれを『おひろめ』と呼んだ。ようやく自分の立場を自覚して、恐怖に両眼をカッと見開いたオルタンスのところへ、なじみの客に手をとられた娼婦たちが祝福にやってきた。そして、のどまで出かかったことば

「一日でも長く生きてね」

を口に出さずに、その足首の冷たい鉄鎖に口づけして階上へ帰って行くのだった。彼女たちは知っていた。過去十人の地下室の女たちの中で落命した三人は、一番魅力のある三人であつた。そしてオルタンスの魅力は、そ

の三人の娘をしのいでいることを。

それに気づかないのはオルタンス自身だけであつた。だから彼女が恐怖に両眼を見ひらいて虚空に想い描いていた図は、むごたらしい拷問を受けている自分の姿と共に、不具になった老後の生活のことだけであつた。娼婦たちの予測とオルタンスの予測のこうした違いが、両者の間にみぞとなり、もうことばは通じなかった。

「おひろめ」が終った翌日、最初の客がオルタンスを三日間買い取った。六日の治療がまだ三日しか済まぬのに、次の客がフェルヴァックとオルタンスを口どきおとして五日間買い取った。最初の客がつけた傷跡などかまわぬというのである。

それからわずか四日の休養をしただけで、ユロ男爵が大金をフェルヴァックの前に積んでオルタンスを二十日間買い取った。オルタンスはびっこをひきひき地下室へ消えて行った。

それから四日目の夕方、食堂へはいって行った娼婦たちの間に、どよめきが湧きおこった。無理もない。オルタンスが夕食に列席していたのである。全く異例のことであつた。しかもその出席の姿は残酷をきわめていた。



両手を背中にまわして鎖で縛り上げられ、首には太い鉄の輪をかけられ、その鉄の輪と両手を縛った鎖とは、また別の鎖できつく連結されていた。そして白い皮膚はいたるところムチ跡で裂かれ、古いムチ跡には黒い血がこびりつき、新しいムチ跡からは血がしたたっていた。オルタンスの肉体が夕食の一部として食卓に提供されたのではないかと錯覚するような光景であった。

浅間しい姿に集まる四十近い視線を意識しながら、オルタンスも食事に加わった。横に座ったフェルヴァックが口に食事を運んでやるのであった。咀嚼すると傷が痛むのか、オルタンスはときどき顔をしかめ、目からポロポロと涙をこぼした。それをまた無数の視線がさし貫ぬいた。

普通の女なら九分の羞恥の残り一分は、自分の傷跡を誇示するところであるが、オルタンスは、かつての朋輩の視線を羞恥だけで受けとめているのであった。そのことから判断して、彼女の列席は、彼女の意志を全く無視したユロ男爵のむごたらしいたのしみからであつたろう。黙々として食事を進めて朋輩たちが安堵したことはそれ程すさまじい傷跡にもかかわらず、オルタンスの肉づきが全然おとろえを見せていなかったことであつた。オルタンスはこの四日間の言語に絶する被虐を楽しんでいたのである。このことが、オルタンスの消え入るばかりの羞恥にかかわらず、娼婦たちの心の中に羨望の念をかき立てた。

フェルヴァックの手がスプーンをとって、スープをオルタンスの口元まで運んだときであった。突然ドアのところでユロ男爵の声がムチのようにとんだ。

「オルタンス、いつまで食事をしているんだ」

娼婦たちが驚いたことに、恐怖にカッと両眼をむき出したオルタンスが、そのときよりろっとう椅子から立ち上がり、ものに憑かれたように、ドアの方へ不自由な身体を運び出したことであつた。夢のように眺めている娼婦たちの目の前で、ドアのかけからニュッとたくましい腕がのびて、オルタンスの首筋をつかんで引きずり出したのであつた。

「さあ、今夜はちよつと苦しんで貰うぞ」

それから十日が過ぎた。ふたたび夕食の食卓にどよめきが上がった。

鉄の鎖に鉄の首輪という衣装にかわりはなかつた。けれどもオルタンスのおとろえようはどうであつたろう。おちこんだ目は青いくまでふちどられ、あばら骨が数えられる程やせこけている。それにもう皮膚にはきれいな部分が残っていないまでに、一面のムチ跡とやけどの跡であつた。食事は全然とろろとしなかつた。

「オルタンス、あと六日我慢すれば四十日の休養よ」

「しっかりしてね」

オルタンスはただうなずくだけであつた。

わずかに残っている生気は、ドアのところまで「オルタンス！」

という呼び声がとんだとき、カッと見開かれた両眼に宿っていただけだつた。彼女はふたたび椅子から立ち上がり、後ろ手に縛られた人間持前の前かがみの姿勢で、見えない糸にひかれるようにドアの方へ歩み去つた。ふと女たちの間でため息のような声がした。

「あんなに男に愛された女っているかしら」

アドリーヌである。静寂と嫉妬がいつまでも食卓の上に流れた。

そのユロ男爵の長い処刑も、どうやら今日で終つたようだ。ほのぼのと明けて行く白光の中で、ヴァレリーはオルタンスの冥福を祈りつつけるのであつた。

恋人のヴィクトランの来訪を受けたのは、思いがけなくも、それから一時間程してからであつた。フェルヴァックが呼びに行かせたのであつた。ヴァレリーとヴィクトランは地下室へ下りて行つた。二人が階段を下りきらない中に、石のとびらがギーッと中から開き

まずユロ男爵のしうすいした姿が後ろ手で現われた。たなかを持っていたのである。たなかの上には白い布がかけてあつた。たなかの後ろ側は二人の娼婦がかかえていた。

ヴァレリーはそつと十字を切つて、そのまま階段を上がつて行つた。オルタンスが息を引きとつたのは、その日の昼前であつた。地下室を出てから一度も意識を回復しなかつたので、遺言を聞くこともできなかつたし、またむごたらしく切りきざまれ、焼けただれた親友の姿を見る勇氣もヴァレリーには湧かなかつた。二度目にやせおとろえて食卓に出て来たのが見おさめだつた。あれはオルタンスが別れに来たのであつた。

ヴィクトランは少壮の弁護士であつた。「ルージュ」でヴァレリーを知り、通いつづけるようになった。画家としてのヴァレリーを知っていたともいふた。そして真剣なプロポーズをし、ヴァレリーもそれに心を動かされるようになった。ただヴィクトランも「ルージュ」へ来るだけであつて、その道には情熱を感じてゐるようであつた。通う度に、彼のポケットは鎖、手錠、ムチ、そんな責め道具でふくらんできた。ヴァレリーを縛りながら彼はいった。

「結婚する前に、二ヶ月だけ地下室へはいってくれないか。パリでも有名な責め道具で、君をさまざまな拷問にかけて見たいのだ」

はじめはヴィクトランの真意を疑って、ヴァレリーはそれを無視した。けれども、そのくどきの回数が増加すると、馬耳東風では済まなくなつた。彼女にとつてもあこがれの座ではないか？ 生命を保証して二ヶ月だけはいってくれという。こんな願つてもない申し出がまたとあろうか。けれども彼女は無視するジュエスターをつづけた。

そして誕生日の翌日の、むごたらしい責めに、彼女にしては珍らしく半狂乱の状態になつた。

「もうよしてッ。これじゃ地下室の女と同じじゃないのッ」

それは承諾の白旗をかかげたことを意味した。おそらく今日はヴィクトランとフェルヴァックの間でもう細かいうち合わせが進められているであろう。ふいとヴァレリーは何か大きなモノに向かつて自分のからだを投げ出した衝動にかられた。そのモノはベッドの夜具のようにヴァレリーの身も心も包みこみ、自由を奪い、大河のように彼女を海の方へ押し流すようであつた。

夕方、どのように口説きおとしたものか思案しながら、こわばつた表情のヴィクトランがヴァレリーの部屋にはいつてきたとき、彼は猫のように従順にからだをすり寄せてくる恋人の姿に一驚した。用意したさまざまなせりふも無用になつた。

「おひろめの前に一度地下室の中を見せて上げようか？」

「それよりもユロ男爵が二十日間、あたしを買いきつたら、どうなるの？」

「大丈夫だ。三日に一日は必らず君を買うことを予約して、誰にもわり込むすきは与えない」

「嬉しいわ、早く地下室の女にして」

二人は地下室へ下りて行つた。とびらをあけると、ムツと異臭が鼻をついた。

目がなれてくると、何とおびただしい拷問具がローソクのおかりの中に浮かび上がってきたことであろう。それらのたくましい野性の腕の一つ一つへ、オルタンスはそのやわらかい女体のすみずみまでを、青春の情熱をこめて投げつけ、こなごなに粉碎されたのだ。

大蛇のように石の椅子にまきついた太い革帯、それは女体に巻きついて水を吸い、息のとまるまでしめつける冷血動物なのだ。天井

から下がった二本の鎖。その先にはムチ打ちの苦悶に虚空をかきむしる女の手首を決してはなさない二つの輪がブランプランとゆれてゐる。テーブルの上に並べられた大小さまざまな十数本のムチ。そのテーブルの横には舵輪のような車がついているが、それをまわせば、テーブルの上の女体は二本の足と二本の腕が抜けるばかりにひきのばされる。オルタンスはこの恐ろしいテーブルに、何の抵抗もしないで唯々として上がって行つたのであるうか？ ヴァレリーは恐怖よりも、オルタンスへのいとおしさに胸がつまるばかりだつた。その他、ビーンとたわめられていて、それがのびるとき、股を裂く二枚のはがねの板等々数え切れない拷問具が並べられていた。中でも炉ばたに立てかけられた十本ばかりの焼きごてに、ヴァレリーは慄然とした。いつかレンガをはずしてのぞき見たとき、うつむいた黒い影に責められて石の椅子の上で絶叫していたオルタンス。あれは焼きごてをあてられていたのだと始めて気づいたのであつた。

「ヴィクトラン、あなた、あたしにもこてをあてるお積り？」

あえぎながら聞くヴァレリーの唇へ、自分

の唇を持って行きながら、ヴィクトランは短かく答えた

「うん、一度はね」

魂をとろかす熱い口づけの中で、ヴァレリーは、焼きごてというのは恋人の唇のたぐいだと気づいた。

部屋を出るとき、ヴァレリーはふとテーブルの一つの上に投げかけられた異様な布に気づいた。雑巾の大きなものと思って気にとめなかったが、よく見るとそれは生血のこびりついた白木綿の囚衣であった。全体の三分の二近くが古い黒血、新しい鮮血で染められ、薄く垢じみた白い部分は三分の一に過ぎなかった。顔死のオルタンスを運び出す騒ぎで忘れられたものであろう。

「ねえ、ヴィクトラン、おひろめるときも、地下室にはいつてからも、あたしにあの囚衣を着せて下さない」

ヴィクトランは、ちよつと驚いたようであったが、すぐ承知した。

異例のおひろめだった。血染めの囚衣を着たとき、それはベトベトして、親友の血だと知らなければ、ヴァレリーはそれだけで失神したかも知れなかった。右足首と両手首の自由を奪う鉄鎖に、朋輩たちが祝福の口づけを

しにやって来たが、恐怖に目をむいたのは朋輩であり、晒されている筈のヴァレリーの目の方がうっとり雲間をさまよっていた。

いよいよオルタンスを外界の思い出からとざした石の扉がギーッとしまつて、地下室の暗黒の中で、ヴァレリーとヴィクトランは二人きりとなった。

石の椅子に、ヴァレリーをひしひしと縛りつけながら、ヴィクトランは聞かないではいられなかった。

「ヴァレリー、僕にはどうしても分からない。天才女流画家の名前をほしきままにした君、パリのいかなる貴婦人よりも美貌とうたわれた君が、いくら被虐に興味をひかれたからといって、こんな娼婦に身をおとしたわけが分からないのだ。今日こそは、その謎をムチに聞かせてやるからね」

恐怖に油汗を浮かべ両手をにぎりしめる、ヴァレリーの両肩、胸部、腰部が鉄鎖の下でむかれた。こんもりと盛り上がった双丘は、激しい運動の後のように波打っている。

ムチの一本をえらんだヴィクトランはビュッビュッとすぶりをくれて、ヴァレリーの恐怖をさらにかき立てた。いきなり打ってくれた方がましだ。

激しい衝撃が襲ってきた。一ツ、二ツ、

「ムムムムムッ」

鎖もちぎれんばかりにのたうちまわりながら、ヴァレリーは苦悶から一度立ち直ろうとしたが無駄だった。

「ちよつと手を休めて、お願い。もうがまんできないわ、アアッ」

「その声が聞きたかったのだ。もっと聞かせてくれ」

「アアッ、ひと思いに殺して、アアッ、」
白い肌はたちまち裂けて、流れ出る血潮はオルタンスの血痕と一しょになった。

失神一步手前のヴァレリーを解いて、ヴィクトランはそれを石だたみの上に横たえた。目のくらむような苦痛と、惚の中で、ヴァレリーは全てをヴィクトランに話す気になった。

ヴィクトランの腕の中で、ヴァレリーはホッと溜息をついた。

「ヴィクトラン、ミロのビーナスを知ってる」

「知ってるさ、去年ギリシャで掘り出され、今年の二月にパリへやって来たやつだろ。僕も一度見たよ。」

「ヴィクトラン、絵画の負けなのよ。もう私

には絵筆を取る気持ちはないの」

「……」

「ヴィクトラン、金をはらってモデルを裸にしたときの芸術家の気持ちおわかりかしら」

「……」

「契約の時間の間は、その女は彼のものよ。空間にどのような形で固定しようと、思い通りのポーズを命ずればいいのよ」

「……」

「しかし、いくらその時間だけはモデルのからだを占領しても、契約の時間が過ぎれば、モデルはかごから放たれた小鳥のように自由よ。おまけに契約時間の間だって、そのモデルを芸術家の自由に縛っている絆は金だけなの。弱い絆よ」

「……」

「彫刻家は、だからもう一つの生きうつしの裸身をけずって空間に固定し、せめてもそれを永遠に占領しようとするの。これだけでも彫刻は絵画に優っているわ」

「……」

「ところが、彫刻のノミを用いなくとも女のからだを空間に固定する方法があるわ。それは女を縛ることなの。固定するだけでなく占領しようと思えばムチをふるって肌を裂けば

いいわ。あたしがいつているのは、女を縛ることと、彫刻のノミをふるうこととは実によく似ているということだわ」

「……」

「あたしがオルタンスを十字架にはりつけにして描いた画は御存じと思うわ。オルタンスを縛って見て、あたしは始めて絵画に絶望したの。契約の時間がおわっても、あたしはオルタンスを二時間も十字架にかけっぱなしにして眺めたわ。」

「……」

「これで、あたしが『ルージュ』の店の娼婦に身をおとしたわけがわかっていただけたかしら。オルタンスも同じことを考えていたと思うの。あたしよりも少し前に、この『ルージュ』の娼婦になっていたわ。二人は『ルージュ』でパツタリ再会したの」

「君が『ルージュ』の娼婦になった理由は、十字架の上の聖オルタンスだったわけだね。それにしても時間にはずれがあるね。ひき金になったのは、ミロのビーナスというわけなのだね」

「そう両腕のとれた美神の彫刻。それは二重の意味で女のからだから自由を奪って、女の肉体を空間に固定することだわ。あたしはふ

と、鎖で縛られて、ムチ打たれている女のからだを連想したの」

「……」

「フランスの芸術が根強いのは、女を責めることを母胎としているからだと思うわ。だからミロのビーナスにあんなに騒いでいるのだから。見ていてごらんないさい。ミロのビーナスがフランス一の国宝になるのは時間の問題だわ。フランス芸術の伝統という後押しがある以上、もしかしたら、ミロのビーナスは世界一の美術品にのし上がるかも知れないわ」

「……」

「あたしはいさぎよく、ミロのビーナスにぬかづくわ。そして、せめても自分の身体を鎖に縛られて空間に固定して貰い、さらにムチをふるって、二重の意味で占領されて見たいの」

「わかった。僕はこれでも前途のある弁護士だ。娼婦の君をめとることにためらいを感じていたのだ。これで誇りを持って君を妻にすることができる。しかも自分の芸術で敗北した力の弱い、ただの女としての君をだ。やはり『ルージュ』に来てよかった。そのかわり次からは少し手ひどく責めるよ」

「遠慮は御無用よ。あたしの悲鳴や哀願など

に気をくじかれちゃだめよ」

激しい抱擁の中で、ヴァレリーははじめて女になり切っている自分を見出すのであった。

二日おいてヴィクトランはやってきた。地下室のすみに玉つき台のような机があった。その表面には、短い太い釘が一面に植えてある。何に用いるのか？ ヴァレリーは玉をつ

いた勢いで机の上にうつぶせに倒れかかった姿勢で、両手首を机のむこう側へゆわえつけられた。両足首も机のこちら側の二本の脚にくくりつけられた。机の面上の無数の釘がゴツゴツと胸や腹に食いついてくる。

「どうするのか知ら。あたしの背中に乗って胸や腹の肌を破るのかしら」

攻撃は彼女の予測よりもはるかにはげしかった。目のくらむようなムチの衝撃が背中に加えられた。

「アーン」

恐怖に目を見開いた彼女の背中へ、つづいて二撃、三撃目が襲ってきた。三日前のムチの激痛に数倍する痛みが伝わってくる。ムチが違ふのだ。のたうつ女の胸と腹へ、机の釘がブスブスと音を立てて突きささる。

「ギヤーン」

もう十数撃目である。胸と腹へ突きささった釘は女の皮下脂肪を、縦横に食い破った。背中も一面に血を噴いてくる。ムチは尻もモモも逃さなかった。白い肉体がたちまち真赤な肉体とかわる。それはサンドイッチのパンきれにはさまれたグチャグチャの中味を思わせた。

からだの前面と背面と同時に攻撃を加えられて刺戟が断末魔の苦悶にかわった。彼女はブルブルとけいれんし、血の池の中で気を失なった。

ヴァレリーは知らなかったのであったが、パリの被虐専門の娼婦をかかえている店には、必らずそなえてある拷問具であった。中には釘が長すぎて絶命した娼婦もある。

今度は六日の休養が必要だった。ヴィクトランは七日分の代金を払いながら、自分のつけた傷だから、こちらはかまわない。一つユロ男爵なみに二十日間買いきるよう、フェルヴァックとヴァレリーにたのんで見ようかと思索していた。

四日後、全身をほうたいに巻かれたヴァレリーのところへ思いがけない情報がはいった。フェルヴァックがもたらしたものであった。それによればヴィクトランが弁護を頼ま

れていた大会社が倒産し、その倒れ方にいかがわしい点があり、ヴィクトランも共犯の疑いで逮捕され、無実を証明するのに五十日以上かかりそうだが、ぬれぎぬが晴ればふたたび弁護士として再起できるから心配するな。「ルージュ」には五十日間の『地下室』の代金を払っておくからという伝言であった。

これは少壮弁護士にあり勝ちな自信の過剰であった。フェルヴァックはヴァレリーの目の前で、その『五十日分の代金』にあたる小切手を紙切れのように破りすてた。もうヴィクトランは社会的には地位を失墜しているのであった。

「でもあの人は、釈放されたら学校の先生でも何でもやれる人だよ。また見事に再起するに違いない。お前さんはいい人に惚れられたもんだ」

フェルヴァックはそう慰めてつけ加えた。

「あのユロ男爵が、明日から二十日間、お前を買いきりたいとおっしゃるんだよ。事情を話せばことわれないこともないが、ことわるとこの店の伝統も、ほかの女へのしめしも、無茶苦茶になるんだよ、困ったねー」

フェルヴァックはあさんは、ホッと溜息を

ついた。それをヴァレリーはキッと見返した。

「ユロ男爵にお引き受けすると、おっしゃって下さいませんか？ あたしはヴィクトランのために、二十日間の責めに生き抜いて見せますわ。たとい不具になっても、それくらいでヴィクトランが、あたしを見捨てるわけがありませんわ」

「まあお前、引き受けてくれるの。有難いとだ。『ルージュ』にとっては救いの神様だよ。お前は」

フェルヴァックは面をかがやかせて、ユロのところへ急いだ。

このときのヴァレリーの女心の中の悪魔を誰が責め得よう。彼女も『地下室の女』の極刑、ユロ男爵の二十日間の刑に好奇心を抱いていたのだ。その欲望がたまたま正義の動機から実現したのに過ぎない。けれども、彼女は精神力で生き抜ける自信があった。

それがヴィクトラン同様、悲しむべき誤算から発したものであることは、ユロのところへ急ぐフェルヴァックがいちはやく見破っていた。街路の上で彼女は十字を切りながら、つぶやいていた。

「やれ可哀想に。あのヴァレリーの魅力とき

たらオルタンスそのけだものな。それにユロ男爵はヴィクトラン様を妬いていなさっていたからな。」

石室の中で、四つの目が火花を散らしていた。石の椅子に鎖で縛りつけられたヴァレリーの生き抜こうとするすさまじいまでの光りを帯びた二つの目と、死刑執行者のようにそれを見おろすユロの二つの目とが……この二十日間生き抜けば四十日の休養がとれる。不具になればそのまま釈放。不具にならなくとも、そのころは約束の二ヶ月が過ぎ、次の地下室の女の予定者に首尾よくバトンが渡せる……。

「さあ、息を吸い込んで」

ユロが歩み寄ってきた。ヴァレリーはこぶしを一層強くにぎりしめて、立ち合う力士のような表情になった。必らず生き抜いてやる。

二階では、フェルヴァックとアドリーヌが通夜のような表情でコーヒーをのんでいた。

「アドリーヌや、結婚を楽しみにしている娘が死んで行くんだよ。あたしははじめてこの店がいやになったよ」

「おばさん、そんなこといって駄目よ。ヴァレリーは死にたくなくても、次のあたしは

喜こんで身を滅ぼして上げるわ」

「アドリーヌや、お前さんの魅力も並大ていじゃない。お前さんも不具では済みそうもないよ」

「わかってるわ。でもこれ以上の女のしあわせはないのよ」

深沈と夜が更けて行った。

(おわり)

(追記) それから四日目と十四日目に食卓に列席したヴァレリーの経過が、オルタンスの場合と瓜二つであったことから、ヴァレリーに加えられている拷問が、オルタンスの場合の数倍も苛酷なものであること、ヴァレリーの生きようとする意志の力が、それをカムフラージュして、オルタンスの場合と瓜二つに見せていることを、フェルヴァックとアドリーヌだけがくみとった。そして三日後に、階段の途中のレンガを一枚はずした地下室の内部で、石の椅子の上の白い塊りから

「ギャーッ、殺してッ、もう生きていたくないッ」という絶叫がほとばしるまで、その意志の力がつづいたことを、アドリーヌだけが知っていた。

「あたしの番が来たらしいわ」

アドリーヌは自分の部屋を整理するために階段を駆け上がって行った。

フアンタジック・エネマ………宇都奈緒美………

「夢の浣腸情景集」

川柳でつづる

(一)

華やかなデパートの雰囲気の中で、ここだけは取澄ましているような薬品売場――。

そのショー・ウィンドウにそっと置かれてある冷たく青く光った30CCの浣腸器。

そして、その隣にはウネウネと、赤いゴム管の中央にふくらみをもつ奇妙なエネマシリンジがならんでいる。

そのどちらもが、何かを求めるように嘴管の先をかがやかせている。まだ高校卒まもない年頃のあの女店員は、果してその素晴らしきガラスとゴムのもっている偉大な効果と魅力を知っているのだろうか？

そして、その前を通りすぎてゆく人々の中には、もう『浣腸』というものと自分とがど

うしても離れられない間柄？ になっている人もきっと居るに違いない。

そして又、素晴らしいコレクションを求める時の心の中の動悸を思い出しながら、どうせ求めるならば、あのあどけない女店員の細い指先に一度浣腸器を握らせて、その可愛らしい口から「カンチョウ」という言葉をいわせてみたい等とも考える者もいるに違いない。

しかし買物をするということが、こんなに羞かしいと思うこともそんなにない。

『浣腸器』『便器』『月経帯』など――それに較べれば男が女物の下着を買うという事は、なれてしまえば案外に容易なことであろう。

行きつ戻りつ、人の混雑して来るタイミングを見はからって声をかける。

気もそぞろ「浣腸器下さい」とやっと云いそして人の眼を必要以上に気にしながら、アパートの一室にもどる。あの可愛らしい女店員がわずかに頬をそめ乍ら、包んでくれたことを思い出しながら

浣腸器、頬ずりよせてにぎりしめ

自からに浣腸をするはずかしさ

そして早速、新着の浣腸器の喜びを味わうことにする。鏡の前にゴムシートを敷き、グリスリンを半分程吸い上げ冷水を混ぜてうすめる。

今日はゆっくりと新しい浣腸器の効き具合を試みるためである。



そして僕は何時の間にか、幻想の夢心地にさそい込まれ、継母に浣腸のお仕置きをされる初々しい女学生とか、美しい令嬢がオールド・ミスの看護婦に施される浣腸などの場面

を自由におもひ浮べるのである。

浣腸ときくだけで娘、頬をそめ

浣腸を母にゆだねて腎をむけ

浣腸をされる娘の尻白し

いやいやと

さからいながら尻を出し

そして一人二役の加虐と受難のプレイは尚も続く。

便秘には浣腸ですと医師はいい

看護婦の役得ですとお浣腸

浣腸に令嬢すでに気も遠く

(二)

継母の娘に対するしつけは、人一倍きびしい。少しでもさからうと、昼間でも太い浣腸器がお仕置きをあたえる。看護婦の経験もある母は、年頃の娘に対して『浣腸責め』が最もきき目があることをよく知っているのだった。

羞恥心の強い高校二年生にとって死ぬほど恥かしいお仕置きである。抵抗すれば手をしばり上げても施すはげしいけんま。

今日も食欲不振を理由に、奥の一室に呼ばれ、最初は優しくなだめら

れつつ浣腸を受けるのだった。セーラー服を脱ぎ、ねまきを着せられると白いシーツの上に横たえられる。

母は後側で手なれた動作で浣腸の用意をしてゆく。今から楽しいスポーツでも始めるという満足気な顔をして、グリセリンに濡れた嘴管の先を見つめている。

「さあー用意が出来たわ、貴女またお通じが来ないんでしょう。いけない娘ね。さあ早く浣腸しましょうね。今日はようく済ませないと、もう一度してあげますからね」

頬をそめて両手で顔をおおう娘を見下ろしながら、半ばあきらめたように投げ出している娘の脚の間に近づいてゆく――。

そんな想定で、僕は自からの体内におぞましい薬液を注入してゆくのがあった。

いやいやと娘浣腸されている

浣腸のききめ思わずあえぎ出したえきれぬ嗚咽、浣腸無情なり

人前でエネマのききめ思い知る

やっと、母の熱の入った浣腸の施術がすんで、空になった浣腸器がおかれる。わずかな時間があるが、しかし間もなく、あの激しい腹痛と切ない苦しみが全身を襲ってくるのだった。そして次にやってくるものは――。

お便器を横目で見つめ頬をそめ
お便器と小さな声でうったえる
堪えぬいて、やっと便器の許しでる

そして生理の要求は、だんだんとはげしく
なり、どんな我慢づよい人でも遂に屈伏して
しまうのだ。

もう駄目と娘、おまるに腰をのせ
十六でおまるを使う羞かしさ

(三)

この世に生きる喜びと悲しみ。そして浣腸
にも又、喜びと悲しみがあるのではなからう
か。甘い切なさや苦しい腹痛、それに結局、
緊張と弛緩のおしよせる波のように無限の味
わいがあるのだから。

お寝床で便器をつかう恥かしさ
ぐったりと力も抜けて始末させ
浣腸の仕置、娘にききめあり

『付記』僕はもう奇譚クラブを十一年近く愛
読している。昭和二十九年頃からだから長い
ものだ。一つの雑誌で、こんなに長く続いた
のも僕にとって他にないと思う。僕の青春は
この雑誌がひっそりと付添っていたと思う。
二年間の療養生活中、病院のベッドの下に
こっそりと愛蔵しておいた想い出の白表紙時
代。それ以前はエキゾチックな色表紙と中断
前のあの部厚い中味の頃。
今、どっしりと秘蔵しているのは、昭和三

十年三月号、三一六頁の定価百四十円。目次
の長い折たたみ。

そして現在盛んにご活躍の辻村隆氏、四馬
孝氏、その他の方々。モデルの女性には、な
つかしい思い出が一杯ある。

多分、昭和三十三年頃だったか、『読者通
信』に私の投稿が掲載され、とても嬉しく感
じたことがあった。今度初めて作品らしいも
のを綴った訳であるが、文才がないのが全く
はつかしい限りである。今後とも同好者のた
めに何か作れたらばと思っている。尚、読後
感を知らせてもらえれば幸いである。

(略歴) 昭和七年東京生れ。現在宇都宮
市在住。平凡な公務員、独身。

緊縛写真と悦虐絵画満載の超弩級版

臨時増刊 写真と絵画 文献 特集号

直接お申込を 定価一部五〇〇円 (送共) 略号 (文献)

◎サド、マゾ、フェチ、女斗美、女体切腹、
女相撲、浣腸、とあらゆる趣向を網羅した本
誌臨時増刊号の決定版。
〔第一グラビア〕 (十六頁)
自己愛の女神を写す……………塚本鉄三、構成

「私の乳房を見て」……………長野 良子
露出癖の充足……………長野 良子
後手縛りのワンカット……………大塚 啓子
転ったエビ縛りの女体……………大塚 啓子
新井マリさんと共に……………由岐敏夫、構成

棒責め愉快……………新井マリ子
ムチ打たれる肌……………新井マリ子
サテンの責衣緊縛……………東浦ひかる
顔なぶり、踏みつけ……………大塚 啓子
押しつぶし、足逆取り……………大塚 啓子
餅肌はくびれて……………東浦ひかる
柱縛り首縄……………梨花悠紀子
海老責二態……………梨花悠紀子
黒いアンネパンティ……………遠藤百合子
〔巻頭口絵〕 (オフセット八頁)
△絵物語△白ターパンの女……………四馬孝・画
第一図章△捕獲△……………第五図章△美容△
第二図章△飼育命令△……………第六図章△洗腸△

第三図章へ調教V 第七図章へ矯正V
第四図章へ訓練V 第八図章へ仕上げV

〔第二オフセット〕 (八頁)

女体切腹、城主の姫君切腹……………四馬孝・画
女相撲、御前相撲……………雪崎京人提供
マゾ画、犬になった男の告白より……………
マゾ画、谷崎潤一郎「富美子の足」の幻想、
女相撲「海辺にて」グラマの対戦……………雪崎
女体切腹「侍女の奮戦」……………四馬孝・画

〔第二グラビヤ〕 (十六頁)

五月亜紀子さんの場合……………由岐敏夫・構成
軽い拒否と羞い……………五月亜紀子
美しい諦観のポーズ……………五月亜紀子
恐怖と怨嗟のまなざし……………五月亜紀子
鼻責「鼻孔測定」……………大塚啓子
緊縛俯瞰姿……………大塚啓子
憶れの優美ポーズ……………長野良子
両手吊りの構成……………新井マリ子
ズベ公天使(トカゲグループ)……………由岐敏夫
1、「みんな剥いじまいな」
2、「その顔をめっちゃくちゃにしてやる」
3、「それだけは止めておきなさい」
4、「トカゲ団の掟をよく覚えておきな」
投げ出した脚線美……………絹川文代
悶悦ポーズ二題……………絹川文代
厳重な本縄掛け……………梨花悠紀子

〔写真版アルバム〕 (十六頁)

裸女斗争場面……………絹川・大塚
浣腸器を握って……………大塚啓子
縄にくびれた柔肌鑑賞……………大塚啓子
女やくざ一本刀姿……………大塚啓子
女ネズミ小僧次郎吉……………大塚啓子

高手小手二ツ折り……………松本アサ子
エビ縛り二種類……………松本アサ子
血紅使用女体切腹連続フォト……………大塚啓子
サジスチン宮井美佐子の近影……………宮井美佐子
縛り過程の構成……………大塚啓子
鼻責めシーンの点綴……………絹川文代

〔本文・解説〕 (三十二頁)

新人撮影行、五月亜紀子さんの場合……………由岐
絵物語「白ターバン」の女……………辻村隆
新しいモデルを写す……………由岐敏夫
(告白) 宮井美佐子の略歴……………宮井美佐子
(告白) モデルとしての私……………大塚啓子
自己愛の女神、長野良子撮影記……………塚本鉄三

〔第三グラビヤ〕 (十六頁)

台所のめしうど……………新井マリ子
飼育のヴァリエーション……………新井マリ子
椅子に呻めく……………新井マリ子
長襦袢と腰巻……………遠藤百合子
豊満への擦過……………遠藤百合子
美しき小鳩の緊縛……………長野良子
ポリウム自慢絵模様……………長野良子
床柱縛りに耐える表情……………大塚啓子
煙草一服の鑑賞……………大塚啓子
組上の鯉と料理の仕方……………五月亜紀子
二ツ折り縛り……………大塚啓子
鼻料理と鼻掃除……………大塚啓子
上からと横からと……………梨花悠紀子

〔第一オフセット写真〕 (十六頁)

神さまへの人身御供……………絹川文代
腕と脚の双曲線……………梨花悠紀子
足首の縄を解く……………大塚啓子
緊縛女体モザイク模様……………愛川悦子

光と影の表と裏……………梨花悠紀子
縄に狙われたポーズ……………梨花悠紀子
女相撲「四ツに組む」……………A氏提供
女相撲「吊り合い」……………A氏提供
爪切りと白足袋……………浜千代子
高手小手腰縄……………梨花悠紀子
底園の塑像……………絹川文代

〔第四グラビヤ〕 (十六頁)

女奴隷の飼育効果……………新井マリ子
ゴム衣着用中……………梨花悠紀子
バンド着用後後手縛り……………東浦ひかる
荒縄さらしと折檻場……………梨花悠紀子
下着の散乱する中にて……………新井マリ子
用意周到なる馴致……………新井マリ子
白刃に狙われた柔肌……………大塚啓子
浣腸器の恐怖と幻想……………梨花悠紀子
くさり、くさり、くさり……………長野良子
団子鼻をいためる……………長野良子

〔第二オフセット写真〕 (十六頁)

美しき乳房……………長野良子
愛らしき羞らい……………長野良子
仰角のいたずら……………長野良子
顛倒した瞬間の表情……………大塚啓子
森の中のニフ……………絹川文代
緊迫の演技(斬られる女)……………愛川・田中
ヘッドロックと首絞め……………春日・愛川
SMの魅力プレイ……………三木・浜本
前手縛りと後手縛り……………梨花悠紀子
黒フンドシと白フンドシ……………大塚啓子
Mフォト陳列——長靴にもだゆ。鉄鎖と手枷
の下で。凌辱される男ドレイ。煙草とローソ
クで——
愉悦ポーズ二景……………絹川文代

S
M
カ
メ
ラ
・
ハ
ン
ト「マゾ願望
の
人
気
者」

青木順子を縛る

辻
村
隆

凄い舞台にビックリ!!

ここ半年許り前から、同好者の噂に、青木順子の名前がしばしば登場して、東京を振出しに現在、関西のストリップ劇場を、特出で廻っているから、君らしくもない、是非一見し給えとけしかけられた。

映画『白日夢』や『O才の女』の影響もあって、興業界はこの処大分SMづいている傾向がある。元来ストリップは余り覗かない私

であるが、AもUもKも、口を揃えて、青木順子の舞台での演技の素晴らしさを褒めたたえるので、しからばと、重い腰をあげて、京都の、彼女のかかっている小屋に出向くことにした。

小屋は八分の入りで、そろそろと前列の方へ席を移動してゆく。可成り露出の強いストリップが終って、場内が一瞬暗くなると、マイクから説明が流れ出す。

演しものは『生の確認』という、分ったよ

うなわからぬ様な、難かしい題名である。

青木順子の相手役は、向井一也という、苦味走った、こんな小屋には惜しい、およそ場違いな感じのスターである。

記憶喪失の女性(青木順子)を誘拐した青年(向井一也)が、アパートの一室に彼女を監禁し、白血病で既に死期の迫った体に鞭打って、過去の記憶を想起させ様と、彼女を責め始めるのである。多分に新劇的な要素を含んでいて、二人は至極真面目に演じるから、

客席はシーンとなってしまう。

逃げようとする彼女を追って、青年は女の衣服を剥ぎ、下着を裂いてゆく。青年は彼女に屈辱的な命令を下して行く。汚れた青年の靴を彼女は口にくわえさせられ、夢遊病者のように、彼の命ずるが儘に行動する。

激しい昂ぶりを覚えた青年は、卓上のウィスキーを煽り乍ら、矢庭に彼女を押し倒し、髪の毛を掴んで引曳り廻し乍ら、彼女を縛々と縛り上げる。

SM劇のスター青木順子のスナップ



舞台での本縛りを、私は実に何年振りかで判っきりこの眼で確かめた。おどおどと虚無的に左右に揺れる彼女——、恐怖におののき乍ら、しかも男の嗜虐性をかき立てずにはおかぬ、その妖しくも美しい容貌は、流石に看板に偽りのない、マゾ願望の女性の姿を、十分に露呈していた。

青年は長い縄を巧みに捌いて、後手に振じ上げた彼女の両手を素早く縄の端でしっかりと縛り上げ、二回胸から背に廻して、ぐいと引き絞る。彼女の二の腕に、深く縄は喰込んでいく。更にその縄を肩から股に通して、股縛りにした上、彼女の口に強く縄を喰い込ませて、狼嚙の縛りをして押し転がす。

青年の命令一下、彼女は立上り、又蹲がみ、押し倒されて転がると、青年の足許まで、ごろごろと転がってくる。再び彼方へと転がり、その運動が鈍くなるにつれ、青年は業を煮やして、彼女の

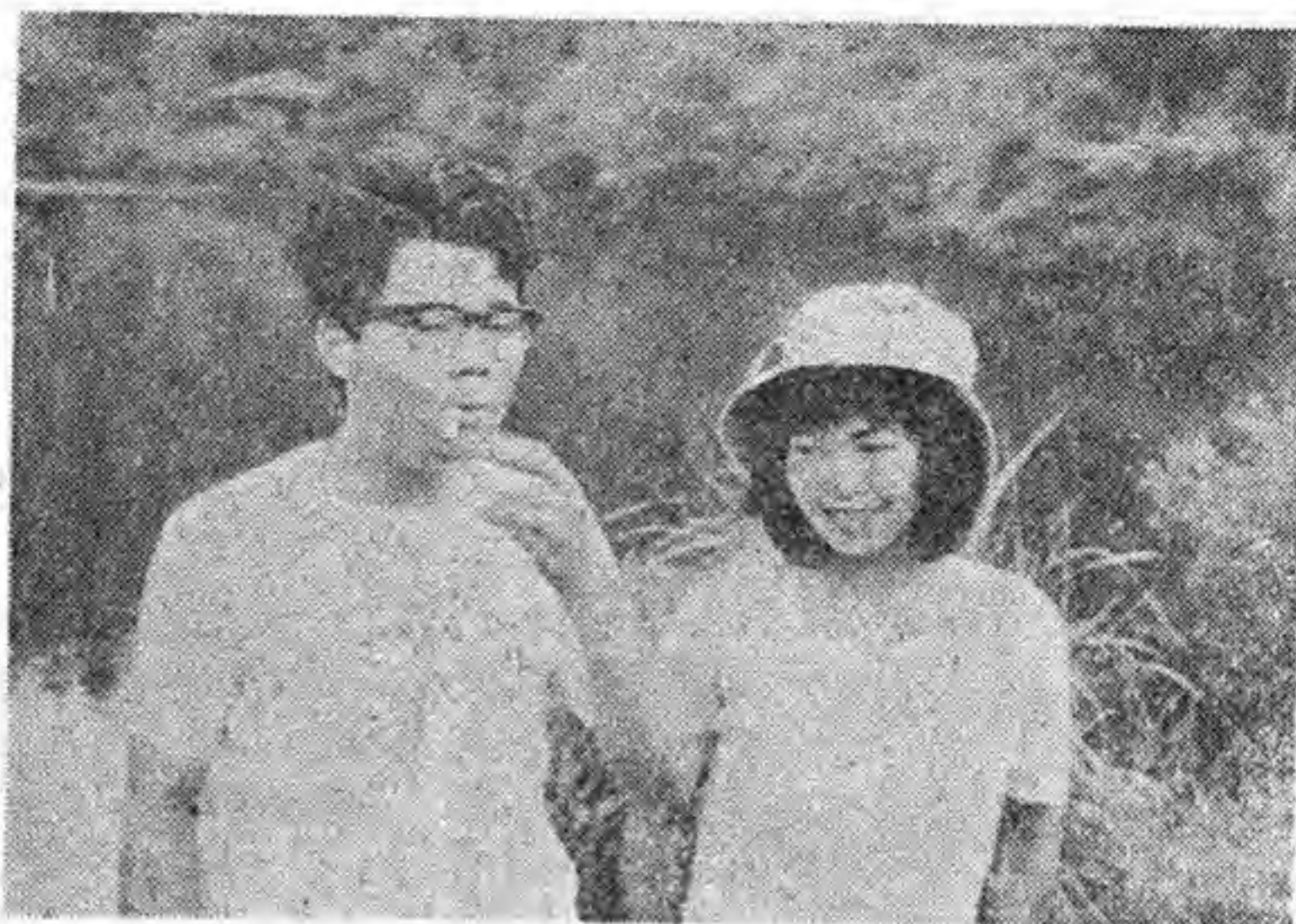
両脚を掴んで、逆海老に吊り上げるなり、交互に足をねじってころがして行く。苦悶の悲鳴が舞台一杯に流れ、観客に固唾をのんで、この凄惨お責めを、またたきもせず見入っている。

青年は太い二本のローソクにライターで灯を点じると、彼女の胸や腰を押し拡げ、ローソクを倒して近附ける。ポトポトと蠟涙が、あきらかに彼女の肌に落ちてゆく。この責めが終ると、青年は遂に下着も剥ぎとり、パンティも下までずり下げて、腰掛けにうつ伏せに押えつけ、ズボンのバンドで激しく、背中を打ちのめす——。ローソクの光の下で、バンドをふるう青年の顔は幽鬼の如く凄惨であり、満面に嗜虐の快楽が走っている。

そして、力尽きて青年は倒れ、その儘その場に息絶えてしまう。よろよろと立上った彼女は、その激しい責めの中から、過去の記憶を呼びさまし、かつて激しい恋愛当時、夢中で自分を責めた青年だと気付いて、彼の傍にかけより、頬をよせてさめざめと泣き崩れる——。誘拐犯人逮捕にかけつけた警官の声、彼女を呼ぶ声が入り乱れる中、彼女はうつろな瞳で、在りし日の追憶に耽り乍ら、しっかりと青年の冷めたい体をかき抱く。そして静

春日奥山にて

向井一也、青木順子のご兩人



かに舞台は暗転——。

大きい溜息が客席のあちこちで起る。人々は拍手も忘れて、この迫真力溢れる、新劇調の舞台にひきつけられていたのである。二十

分そこそこの寸劇なのに、一分の隙もない出来栄えに、私も皆と等しく思わず溜息をついていた。成程、噂に違わぬこれはSM劇である。恐らくこの種のものが、堂々と演じられたのは空前であろう。奇クの同好者なら、讃嘆し、感激するのも又、無理からぬ次第であると思った。私は無性に彼等に逢いたくなかった。もう残りの泥臭いストリップなんて、どちらでもよい——。私は匆々に小屋を出ると、受付のモギリ嬢にきいて、楽屋を訪れた。

青木順子と

ドライブの顛末

奇クの辻村隆だと通じると、矢張り向井一也も青木順子も、私を知っていてくれた。こんな時は下手な雑文書きでも、長い年期が有難い。二人は暑苦しい楽屋の片隅で、扇風機に当り乍ら、冷暖兼用のポリエステルの保存箱から、果物をとり出して、よく冷えた桃を噛んでいる処だった。

近くで見る彼女は至極平凡、明朗、小柄なお嬢さんといったタイプの可愛らしい女性だった。私に軽く会釈して、向井一也に話を渡

す様に眼で合図する。私は彼に向って、一度ゆっくりお眼にかかりたい希望を申し述べた。

「そうですね。明日でここを打上げて、奈良へ行くのですが、一度春日の奥山の方をドライブしたいと思っているんですが——ようし

「ええ、いいですとも是非お待たしましょう。

私の車を御利用下さい——」

「勿怪の幸いですよ。ボク達、旅興行なもんでは東京に置きっ放しですから、定期観光バスでも利用するつもりだったんですよ。じゃあ御案内願ひましょうか——」

それで私はイソイソと帰り、約束の三日後奈良のS劇場に近い猿沢池のほとりで午前九時、二人を待った。

約束時間きっかりに二人は私の車に近附いてきた。

向井一也はショートパンツにスポーツシャツのいでたちで、麦わら帽子——、青木順子も短パンツのおなじいでたちで登山帽といった、ごくどこにでもある、ドライブスタイルである。私は過去数回この道をドライブした経験があるが、奈良は始めてという青木順子が、人のよく行く名所旧蹟をわざと避けて、

人里離れた奥山を選んだのには、その人柄のよさを何故ともなく感じとった。

春日ドライブコースにかかり、春日山の入口近くに新薬師寺がある。

「一度ひなびたお寺によって見たいわ——」
彼女は生々と眼を輝やかせて、そういった。ウィークデイの寺は、訪れる人もなく、静寂そのもので、萩の寺の別名の通り、境内のあちこちに萩が繁茂している。

新薬師寺本堂の石段に座り、私達三人は、携帯して来た、冷えたコカ・コーラをのみほした。

「ホホウ、これこれ、ボクも時々、買っちゃあ、参考に読んでいるのですが、この『三十夜物語』の辻村さんが、まさか貴方だとは——」

向井一也は、石段に腰を落し、私の差出した十数冊の奇クを、あれこれと無難作にとり上げては、グラビヤや挿絵に眼を通した。

青木順子は淑やかに、彼に寄添い、それを覗き込んで、やや羞らい気味に微笑み、そして、キラキラとよく輝やく眼で、奇クのグラビヤの緊縛ポーズを追っていた。

「順子さんは、こうした奇クとか、又同傾向の『裏窓』『風俗奇譚』などを参考にして、

あれを作られたのですか？」

あれとは、青木順子作、演出の、あの激しいSMの劇『生の確認』である。

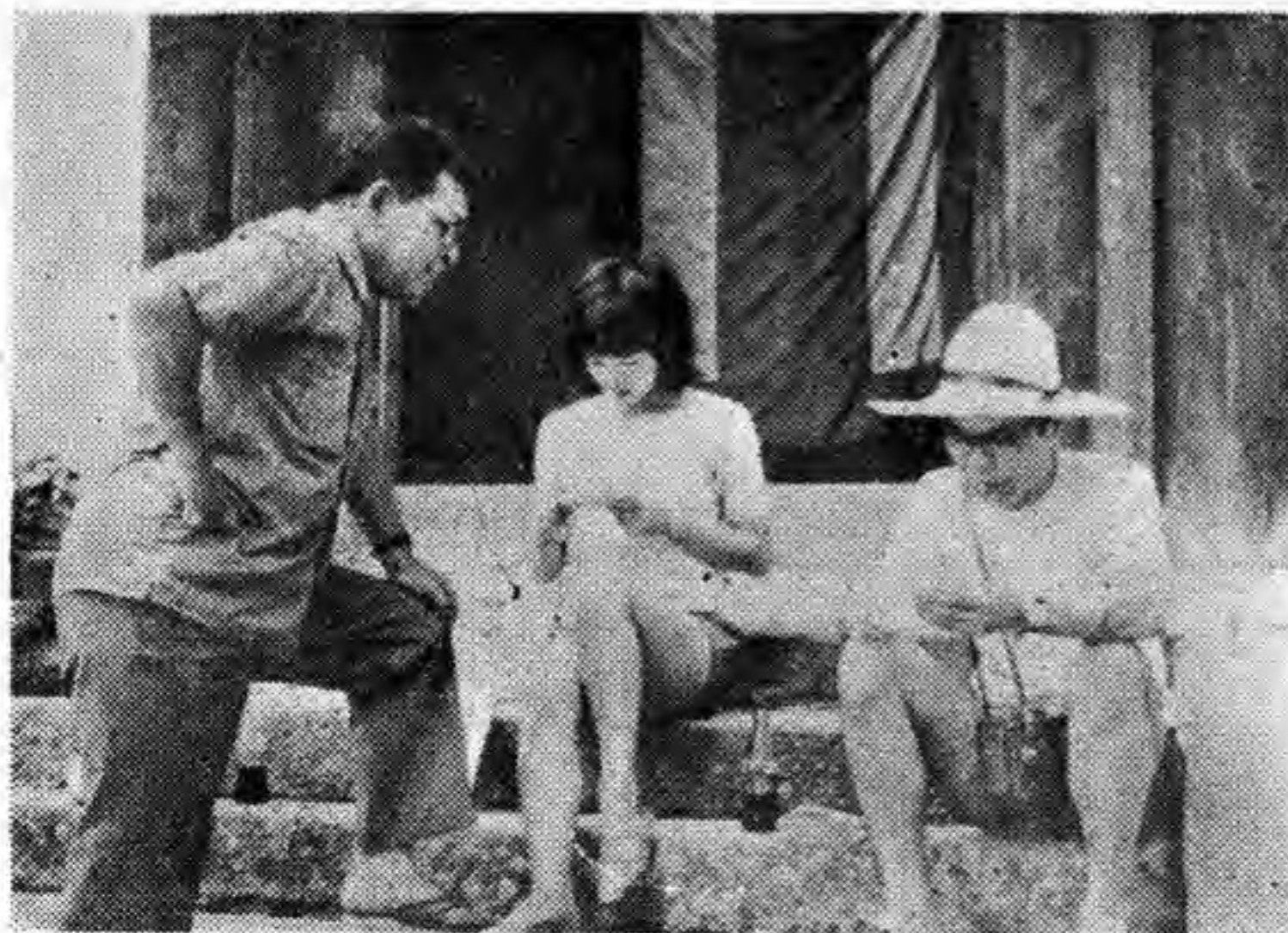
「いいえ、全然——。唯、何となく、私の頭の中にあつたものを、トンちゃん（向井一也の愛称、彼は幼年時代よく頼間なことをして笑わせたり、笑われたりしていたので、それからトンちゃんと呼ばれるようになった）と相談して、纏めて見ましたの——。辻村さんが御覧になったら、随分と物足りないものだったでしょう」

「とんでもない——、唯々、素晴らしいの一語に尽きますよ。よくあれだけのものを作られたものだ、感心し放しです——」
「余り褒めないで下さい。褒めるといよいよ彼女お高くなっちゃって……。それより悪い個所を指摘して下さい、今後の勉強になりますから……。今の処、この『生の確認』と、前回の『画家とモデル』の二本しかありません。もっとレパトリーを広くしないと、やがて飽きられるんじゃないかと、それが気掛りですが、何しろ、次から次へとスケジュールに逐われて、ホンを書く間がないのです。その点では、本当に不勉強だと思うのですが、私達の希望は大き

く、何れはストリップとの抱き合せではなく例え小さくてもいいから、まっとうな劇場で、真面目にやって見たいのです。日本の青木順子じゃなく、世界の青木順子にまでなっ

新薬師寺における筆者と

向井、青木のご二人



て見たいのです。フランスだって、イタリアだって、ボードビルの芸人が皆一流タレントになると、世界の各国を交流していますよ。彼女の演ずるお芝居が、パリのモンマルトルで、フランス人相手に手を叩かせて見たいのですよ——」

「ホラ又、トンちゃんのおハコが始まった。でも、夢はこれ位もっていないと駄目だと思ふのです。今はドサ廻りでも、何れきつと海外に出る日があると信じて、毎回毎回を懸命にやっていますの。いつ、何処で、どんな人が見るかも知れないと思うと、手を抜くのがこわいんですの。例えば辻村さんが、或る日不意に見ておられた様にね——」

私は二人のその氣宇に打たれた。奇クにのみ小心翼翼と書き続けている私に較べて、これは又大そうな相違である。しかし感心許りはしておられない、私は未だ未だ訊ねたいことが一杯ある。

車中に帰って、春日ドライブウェイの有料道路の入口で三三〇円支払うと、私達は、春日の原始林にわけ入って行った。

「まあ、いいわ。すてき……。空気までおいしいわ。いいなあ、いいなあ——」

青木順子は、感嘆詞を連発した。事実、旅

から旅をかけて、陽の眼の見ない、楽屋住いの生活がこの処ずっと二人につづいていた様である。原始林の中腹に近い車道で一旦車をとめると私達は原始林につづく小道を徒歩で辿った。

通称地獄谷のこのほとりに、忽然と美しい池が現われた。

「ウワァッ綺麗。」

泳ぎたいなあ——

トンちゃん、いけないかしら……」

純真そのものの彼女は、無邪気に池のほとりをぐるぐる歩き廻り乍ら、彼に叫んだ。

「水着ないんだろ——」

「ウウン、いいの——。誰もいやしないから裸で泳いじゃうわ——。構わないでしょ」

事実、彼女は登山帽を放り投げると、赤い

「縛られた」青木順子



ショートパンツを脱ぎかけた。

私は時ならぬ仕儀に、些かうろたえ乍ら、彼女のニフの如き、そのスイミングをこの眼で見られる光榮に唾をのみ込んだ。

しかし、池は無情であった。土手に近く、『この池で泳ぐこと厳禁します』と、もののしい立札が私の眼に入った。

「いけないそうですよ——」

「あら、本当——。残念だなあ……」

彼女はかもしかの様な足をバタバタさせて池のほとりにすわり込み、池の面の水をパチャパチャ叩いた。

実に天真爛漫である。私とトンちゃんは顔見合せて苦笑する。

「ところでお訊ねしたいんですが、青木順子さんは本名ですか——？」

「勿論芸名ですよ。私が以前かいた本の主人公が向井一也であり青木順子なんです。彼女それがすごく気に入っちゃって、遂々それを芸名にしたのです」

「あれだけ非道くやれば、彼女随分生傷の絶え間がないでしょうね……」

「お芝居ですから、やはり演技してはいますが時には、当り損なって、彼女の肌を実際に打つことがあります。最初のうちは、青いあざや、鞭あとを随分つけたものです。けれど、割切っているんですね。案外ケロリとしていますよ——」

「ローソクを垂らすと、随分熱いでしょうがね——」

青木順子が、相変らず足でパチャパチャ水面を叩き乍ら、それに返事した。

「大丈夫ですわ。トンちゃんがローソクの距離を加減して、私が耐えられる位置まで上げているんです。肌にローソクを近づけて落すと、そりゃ熱いですけど——、それより、本当はもっと痛いことがあるのよ——」

「という……」

「トンちゃんが、髪を掴んだり、ぶったり、引曳り廻したり、縛ったりするのは、演技だから計算に入れてやっていますけど、縛る時皮膚が縄に挟まるとすごく痛いんです。それに転かって引曳られる時、悪い舞台ですと、板がささくれ立っていて、そのとげがお尻や足にささったり、時には、縛られた両手の指の間に、とげがささったりするんです。何度とげぬきで、指やお尻のとげを抜いたかしれませんわ。やっているものでなければ分らない苦しさですわ」

彼女は淡々と話していた。所謂演技の裏話である。陽光は池の面に映え、四圍の原始林は辺りを濃緑に染めて追っている。野鳥の声も時には鋭く耳をつく。

一行は再び車中に戻り、一路頂上の「十国峠」を目指し、ここで一服して、冷しそばで軽く昼食をしたためた。

たべる間ももどかしく、青木順子は展望台

にかけ上り、望遠鏡で樹々に続く、大和の下界を見廻していた。大仏殿のいらか、五重の塔、県庁のばかでかい建築中の鉄筋、俗悪な三笠温泉郷の一群が、眼下に点在している。時はまたたく間に過ぎ、開演時間は迫っていた。私達は大急ぎで下山し、元の猿沢池で分れた。舞台がはねてから、夏の夜を心ゆくまで欲を尽す事を約して——。

私は大急ぎで、奈良の一角に、今宵の宿を探さねばならない——。

念願叶って

青木順子を縛る

ドライブの数時間の間に、私は青木順子と向井一也の出身地や経歴、二人の間柄などきいたが、彼等は実に淡泊に話してくれた。その淡泊さに対してでも、私は仁義的に、彼等のプライバシーの秘密は守らねばならない。ここにそれを精しく報告出来ないのは残念だが、青木順子が関東のS女子大学卒業のインテリ女性である一事だけは発表しても叱られないだろう。

兎も角、舞台がはねた午後十時半頃、私は再度、S劇場の楽屋口まで、二人を迎えに行



辻村隆に責められる

青木順子

った。車で早速予約しておいた若草山麓の料理旅館へ走る。汗をさっぱりと洗い落し、宿の浴衣にきかえて、改めて私達はビールで互いの健康を祝して乾杯した。トンちゃんは肉が大好物、そしてよく飲む。彼女はホンのちよっぴりおつき合い程度——、そして談論風発——、午前一時になっても二時になっても満ちて尽きるところを知らない。

眠れなかったのでハイミナールをのんだところ、出番になってくすりが効き出し、ふらふらで半醒半睡で舞台をつとめた彼女——、

それが又、リアルで、うるんだ瞳、ゆらめく女体がとてもよかったこと——。

大阪のD劇場で、『ミス・キラーの情事』の劇中劇を頼まれ、急拠、東京より駆けつけたものの、満足な台本もなく、立ちがいこのしのブツケ本番でやったら、迫真力あったとマネージャーから喜ばれたこと——。

記念すべき第一回作の『画家とモデル』は当初数人のスタッフでやる筈だったのに、一人欠け、又一人欠けて、最後には二人きりになって、恰好がつかなくなったこと——。

東京で、青木順子がトンちゃんと組む以前、演出者が、彼女の相手役のコメディアンに、彼女はマゾだから本当に打てといわれ、コメディアンが、それをまともに受けて、縛った彼女をビシビシ叩きのめし、舞台上で気が遠くなりかけたこと——。

いくら話していても、きりがなかった。唯一日のつき合いで、私達はまるで十年の知己のように、相手に親しさを感じ、私も又、自分の略歴、同好者のことなど、差支えない限り出来るだけ話した。私の話が、多少なりとも彼等の舞台のアドヴァイスになれば、それで本望だったのである。縛り方や、縄のつかい方、又、責めの方法には、彼等も大分参考になったものがあつたらしい。

彼女は時折、自分で手を後ろに廻し、こんな縛り方どう?などと演じて見せたりした。「一度試して見ますか——、実行に如かず、実際にやれば、よく分りますよ——。辻村さん、縄もってきちゃいないでしょうか——」

トンちゃんは、かなり酔を発していたが、芯はしっかりしているらしく、ちゃんと姿勢を正して私にきいた。かくあろうかとも思っ、私はカメラと数条の縄をバッグに入れて来てある。

「持っていますよ——。やっていいですか——」

時こそ来れと、私はトンちゃんに眼くばせして、青木順子の様子をうかがった。彼女の顔には否定の色はない。

「流石に辻村さんだ。手廻しがいいですね。じゃあ、少し片付けて、ここで始めましょう」

——四帖半のプレイって奴だな……」

「フォトはいけませんか——」

「いやですわ——」

彼女は実にきっぱりといい切った——

「いやね、彼女、東京で一度騙される様にして写真をとられたことがありましてね。それ以来写真ぎらいなんですよ——」

「それもありますけど、私も舞台人ですわ。舞台とか、楽屋でならいいけど、こんな遊びの部屋ではいいですよ」

もっともな彼女の、一線を画したプライドである。私は直ちにカメラを藏った。内心の残念さは、おくびにも出すべきではない。言い過ぎたと思ったのか彼女は言葉を継いだ。

「楽屋ならいいですわ。スチールをとって戴いてもかまいませんわ。明日にでも……それはお約束してもいい……」

「じゃあ……明日——」

既に午前三時を廻っていた。明日の舞台にも差支えるので、三十分許り、縛りのあれこれを私とトンちゃんは青木順子に試みた。

私の縛りは手ぬるいと、トンちゃんは、中途で私に代り、力任せに縄を引き絞って、細身の彼女の柔肌を、轟々と強烈に締め上げた。ウーッとこらえて、彼女はトンちゃんにされるが儘に縛られていた。

三つ許り、縛りの型を代え最後の縛りで、彼は、いきなり順子を蹴倒した。あっとたたみに転ぶ彼女に、トンちゃんは近附くや否や彼女の乳の辺りと腰の辺りに両足をのせて、彼女の体の上ののって立った。

声にならぬ悲鳴がもれ、トンちゃんが体をゆすぶると、それにつれて、彼女の悲鳴も断続して高く、低く、苦悶に呻いた。

「ウーン、苦しいわ。トンちゃん、もう止して……苦しいわ……」

彼女の声は真に迫って、途切れ途切れにそう叫んでいた。これは演技ではない。正しくSMのプレイだ。私は傍らで手に汗してその様子を見守っていた。

彼はやっと体をたたみに降した。そして彼女の両脚をにぎって、えいっと持ち上げると、肩に逆さにかつき上げ、のしっのしっ部屋

を逆吊りにした儘歩き廻ったのである。

「情婦マノン」緊縛の図である。

彼女の頬に汗が浮かび、吊り上った眼は妖しくうるんでいた。止してくれといわない不思議さに、私は啞然として、座敷の片隅に手を拱ねいて、その壮観を眺めていたのである。

青木順子の緊縛フォト

宿の女中さんに起されて私はやっと眼をさました。陽は高く、部屋は暑く、時計を見ると既に十一時である。

「お隣りさん起きた？」

「今、お起こしました」

暁方のはのかに夜明けの空に驚いて、寝付いた私達であった。

寝起き勿々の、旨くない朝食を、義理か厄介のように喰べて、私達は暑い道に出た。

眼前の若草山の緑は一段と冴えて、蟬の聲が、かしましく耳に響いた。

車で劇場の近くまで送り届けると、兎も角私は一路我が家へ戻った。緊縛フォトをとるにしても、終演まで時間があき過ぎる。

気もソワソワと、その日の仕事の段取りをすませ、再び奈良へとって帰したのは、既に

午後の十時に近かった。

楽屋を訪れると、恰度、最終回が終って、トンちゃんは水を浴びていた。銭湯に行くストリップパー。特出の旅館帰りなどで、しばらくごった返していたが、どの女の顔も疲労の色が濃かった。

楽屋裏の狭い空地で、早速撮る事になった。トンちゃんが、支配人に了解を求めにいくってくれる。誰か覗きにくる者もあるかも知れないので、シュミーズの上から縛ることにした。私がためらっていると、

「さあさあ遠慮しないで——、いいスチールを頼みますよ——君、いいね……」

とトンちゃんは青木順子を狭い空地の中央に引っ張り出した。バックはトタンである。私はかねての予定通り、荒縄縛りを始めた。かなりぐるぐる巻きに縛り上げたが、

「どうもゆるいですなあ——、も一つ緊縛感が出ていませんよ——」

とトンちゃんにいわれて、あわててしめ直した。どうもフェミニストでいかん。梯子を使ったり、トンちゃんに応援をたのんだりして、数枚とり終り、ついで、今舞台にかけている『生の確認』の縛りを、私の手で再現して見た。舞台化粧の儘の彼女のつけ

まつげが、近くで見れば一入長く、眼くまが黒々と私のカメラの窓から覗けた。

夢中でとったといった方がピッタリする。いつもの私にも似ず、たしかにアガっていた。ストリップパーが帰ってきたきはしないか、誰か邪魔が入らないか——と、そんな憂慮許り先に立って、ライトも準備せず、ストロボで撮ったものだけに、さして自信はなかった。

しかし、兎にも角にも、私はこの手で青木順子を縛ることが出来た。私のSM歴に、又一頁、得がたい『緊縛の確認』をしたわけだ。

再会を約して、私達は別れた。

すぐさま現像——そして乾燥もそこそこに私は引伸しにかかる。平面的だが、ピントは意外に固く、よく撮れていると思った。

私は翌朝、再びそれを携えて楽屋を訪れた。トンちゃんはフोटを見て無表情だった。

「どうです——いけませんか……?」

「そうですね。よく撮れているんですよ。しかし個性がありませんね。いや失礼——。まあ御参考にこれを見て下さい——」

そういつてトンちゃんは、トランクから大型の封筒を出すと、六つ切りに伸ばした、ス

チールを見せてくれた。いずれも舞台にスポットをあてた、舞台終演後撮ったものである。私は思わず唖った。そして得々ともって来た自分のフोटが恥かしくなった。

躍動するSMの極致がそこにあった。順子の悶える顔、呻めく顔、虚無の顔、そのすべてが、マゾ願望の女性、青木順子の真の姿をうつし出していた。

「つまり動きのあるお芝居をし乍らとると、この様に生き生きとするんですね。辻村さんのは撮影は優等でも、フोटに動きがないんです。緊縛が死んでいるんです。御免なさいね」

「いわれる通りです。どうも恥かしくて、持って帰りたくなりましたよ——」

「いやいや、これも又記念です。彼女もフोटを期待していたのですが……」

私達は固い握手をして別れた。順子さんはフィナーレの総げいこで舞台に出ている——

私は暑さのせいだけでない汗をかき乍ら、ひき上げた。

青木順子が真性のマゾなのか——、それとも演技なのか——。

それは未だ私にも分らない。ドライブでの、あの明朗さ、純真さ、天真

爛漫さ—あれが彼女の本来の姿であろうか。

舞台での湿潤した肢体—暗憂たる眼—

苦悶の叫喚—あれも彼女の本来の姿なのだろうか—。

—。

そして彼女の声価は日と共に高まって行く—。順子さんノハイミナルをのみすぎないで下さい……慢性風邪を治して下さい。もう少し昔の様に肥えてボリュームをつけて下さい。トンちゃん、余りひどく彼女をいじめないで下さい——。三平じゃないが、体だけ

は気をつけて下さいよ——

これが同好の士、向井一也氏、青木順子嬢への、私の偽らぬお願いである。

彼は今、第三作『防空壕の女(仮題)』を

執筆中である。私はその後二人と、伊丹で逢い、京の伏見で逢って、話せば愈々意気投合し、舞台のハネたあと、のみあかす夜も数度に亘り、彼等の巡業先を、まるで恋人のように追い廻しているが、それをくどくどかくのは最早蛇足に等しい。関西地方を巡業して行

く限り、私は二人のあとを追いかけたい衝動にかられる。とあれ、辻村隆も又、青木順子に魅せられた一人であるかも知れない——。

× × ×

「青木順子後援会」を作りたいと思いますので、同好の方は、辻村隆(奇ク連絡、天星社気付辻村隆で届きます)まで御連絡下さい。青木順子さん、向井一也さんを囲んで、お二人を激励し、よりよき舞台の発展にお力添えして行きたいと思っています。

〔最新版〕 女体緊縛フォト五十選

B組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

各組一枚一組(送料共)

B 1	全裸エビ貴仰向け(関谷)	一組一枚	一〇〇〇円
B 2	逆エビ責め全裸像(水本)	五組五枚	四〇〇〇円
B 3	乳首ペンチ挟み(竹野)	十組十枚	七五〇〇円
B 4	後手十字縛肩口上(梨花)	二十組二十枚	一四〇〇〇円
		三十組三十枚	二〇〇〇〇円
		四十組四十枚	二五〇〇〇円
		五十組五十枚	三〇〇〇〇円

B 5	足の裏擦り責め(竹野)	B 17	尻突立てエビ責め(水本)
B 6	おへソいじめ大享(関谷)	B 18	椅子開股鼻責触手(梨花)
B 7	剃いだバタフライ(関谷)	B 19	息もつがせぬ猿轡(竹野)
B 8	貴方に捧げた裸身(大塚)	B 20	投げ出した全裸(関谷)
B 9	乳房責め絶叫苦悶(大塚)	B 21	美しき尻部の露出(絹川)
B 10	無防備双手吊り(絹川)	B 22	猿ぐつわ悦虐境(竹野)
B 11	豊満臀部エビ縛り(水本)	B 23	後手柱縛り脚線美(竹野)
B 12	糸纏わぬ股間縛(水本)	B 24	強制鼻挟水吞ませ(梨花)
B 13	全裸亀甲股間縛(関谷)	B 25	苦悶にねじる裸身(関谷)
B 14	足踏付け二つ折り(大塚)	B 26	責めに気を失って(関谷)
B 15	尻突出しムチ打ち(関谷)	B 27	さアどうでもして(関谷)
B 16	手錠にもだえる(竹野)	B 28	豊麗乳房膨隆縛り(竹野)

B 31	強烈縛りに悦ぶ(梨花)	B 43	犠牲台の人身御供(大塚)
B 32	全裸逆エビ片脚拳(東浦)	B 44	美肌無茶苦茶縛り(絹川)
B 33	踏みつけマゾ境地(東浦)	B 45	裸身に立つ蠟燭(大塚)
		B 46	手枷足枷大享し(四方)
		B 47	鎖に悶える足首美(柳初)
		B 48	蛇責めに柔肌栗然(梨花)
		B 49	鼻の玩弄恍惚境(大塚)
		B 50	女囚菱縄さらし(絹川)
		B 34	すべてをさらけて(関谷)
		B 35	ムチ打ち失神寸前(関谷)
		B 36	クリップ鼻挟み(絹川)
		B 37	台上的マゾポーズ(大塚)
		B 38	吊られゆく美体(絹川)
		B 39	拷問に無惨な美貌(梨花)
		B 40	マゾ女性の表情美(東浦)
		B 41	喰い込む股間縄(絹川)
		B 42	灸責めに悶える(梨花)

青 い 時 代

……悦 虐 絵 灯 籠 その十……

万 田 不 仁

★

病院を出た間垣稔と幾島輝蔵は暫く黙って歩いた。晩春の午下がりの乳色の日差が運河の水面を鈍色に照らしている。ぼむぼむぼむと短い煙突から軽やかに薄青い煙をあげながら蒸気船が通る。

「バ、バカげたことをしたもんじやないか、ええ、すんでのところでアウトじゃねエか」

だんまりを破ったのは輝蔵だった。

「……」

稔は喉の奥が乾涸びて、それに何かひどく腹立たしくて、物を云いたくない。

「ちえッ、やな気分だな、こんな恰好でなきや一丁遊んできたいとこだ」

きちツとした、と云うより軟派学生らしい身嗜みの制服姿が、いっそ輝蔵には口惜しいらしい。

「なア、間島、君はえらく勉強してるみたいだが、あまり詰めると、頭に血が溜っちゃうよ。悪血が溜るんだ。もう僕ら体は大人なんだからナ、少しは遊べよ。よかったら一度案内してもいいぜ」

輝蔵は喋って、にやり笑う。高手小手に緊縛された可憐な腰元をどぎつい色彩で描いた絵看板が目立つ古い映画館の傍の橋を渡りかけて稔は立止まった。どうした——と云う表情で輝蔵が振向く。いつもの擬悪的な目付きが、その儘稔には心惹かれる微笑のうちに和

む。稔の頭には今し方見舞ったばかりの自殺未遂の級友の蒼白な顔があった。

——諸君は今一番むつかしい時期じゃから……と、しゃがれ声が聞える。藪医者が渾名の不精たらしく泥鰌髭を蓄えた生徒監今泉先生の声だ。

「まア今日は仕方がねエ、おれんちで遊んでけよ、千絵が喜ぶよ。あいつ近頃えらく啄木に熱中してやがる。もともと文学少女なんだが、君とは話が合う訳さ。みんなでトランプでもやるか、どうも気が滅入る」

駅の階段を二段ずつ大股に上がった処で輝蔵が誘った。

★

稔はこれまで輝蔵の家を度々訪ねていたが輝蔵の父母には馴染む所がなかった。第一その父親幾島伝造とは、顔を合わせたこともない。輝蔵の話では、伝造は趣味に和泉流の狂言を習っていて、稔が訪れる日曜日は殆ど専門家の師匠の許へ行っているそう。母親はほっそりした浮世絵風の美人だが、いつもマルチスを抱いているような人で、めったに子供たちの部屋へは現れない。稔にはその家では、親子がてんでに勝手に暮しているかと思えた。

輝蔵を客が待っていた。

「やあ、すまないが一寸千絵んとこで啄木論でも聞いててくれ、どうせ直ぐ帰る。いや中園は残るナ、どうせ土曜日だ、ゆっくりしててくれよ」

螺旋階段の上がり口の部屋を指差して輝蔵は客間へ入って行った。

取残された稔は、輝蔵と己れの交友関係の位置がもう全く間をひらいていることに今更気付いた。

三年生の秋、ドイツ語をみっちり仕込む学校から輝蔵が転校して来た頃、稔は輝蔵の華車な体と少女のような美貌に先ず惹きつけられたのだ。輝蔵が徒競歩で転倒したり、柔道

場で力の強い生徒に投げられたり、跳び箱を飛びそこねて膝を痛めたりすると、息が弾み胸がきりりと痛んだ。少年同士の濃やかな友情、それは遂には胸苦しい程の愛情に発展する。美少年への憧憬の切なさ、好きな川端康成の短篇「虹」に出て来る木村のような少年の幻像を稔はずっと温めていた。勿論まだソドミイに対する愛執が萌したとは云えぬ段階であったが、その心根は吾れながら甘く、苦しいものだった。稔は恥じらいに耐えて輝蔵に交際を求めた。

ところが輝蔵はそんな稔の二人きりでひっそり互の友情を確かめ合っているとするセンチな女学生めいた感情を無造作に打砕いてしまった。彼は実に仲々の軟派で、恐るべき子供の一人だったのだ。

「幾島のやつ、△△ですッ裸で……」と、屢停学処分を食って、稔なぞには極附の不良に見えるクラスの軟派のボスが舌捲いた時、稔は校庭のポプラの木の下で輝蔵を詰った。

「ああ、そのことか、フフン、禁断の木の実の件か。確かにいいことじゃないサ、でも仲間垣君、おかしな写真や絵や本なんか、こっそり眺めたり、読んだりしてる癖に表面澄まし込んでる、そこらの点取虫野郎よりも俺の

方がさっぱりしてる心算さ。みんな悩んでるんだろ、何食わぬ顔してるけど。何て文士だったかな、俺たちの年頃が最も性的に汚ねエ時期だって、どっかに書いてたよ」

この輝蔵の言葉は少年期に星莖派的な夢を抱いていた稔に取っては、頭から冷たい汚水を浴せかけられるに等しい悪魔的なものだった。

「前の学校にネ、こんなやつがいた。自分の部屋の天井や壁に、あの写真を貼るんだ、始終目を愉しませるのさ。ハハハハ、え、どうだい、若い女中が掃除に来て、たまげて赤くなるのを見るのが、又やつの愉しみなんだそうだ」

こんな話もする輝蔵から稔はそれでも離れられなかった。堕ちたアポロ——稔は心に呟いて、妖しい女のいる怪しい家で青い果のよるな体を洗す輝蔵の所業を歎きつつ……。

★

森の奥より銃声聞ゆあわれあわれ自ら死ぬる音のよろしき

己が名をほのかに呼びて涙せし十四の春にかえる術なし

みぞれ降る石狩の野の汽車に読みしツルゲエネフの物語かな

千絵は少女雑誌の附録の啄木カルタを手本にして、自製の啄木カルタを作っていた。不自然なくらい大きな目の、まつ毛の長い面長の少女を細い絵筆で丹念に描くのだから一枚仕上げるのに可成り時間がかかる。

「うわア、きれいだな、木版刷みたいだ」

「フフフ、それ程でもないけど……勉強とデニスの間隙をぬってやるんだから仲々はかがないの、でももうじき、あと十枚よ、出来上ったらお友達とする。間垣君も特別に入れたげるわ」

「友の恋歌矢車の花……啄木はいいけど、少し幼稚じゃない？ 表現がサ」

「フフフ、生意気いってる、あたしの少女の友借りてったの誰よ」

「あ、今度持ってくる。僕は路谷虹児と加藤まささをの挿絵が見たいんだ……小説も少しは読むけど……」

「ハハハハ、間垣君こそ幼稚じゃない？」

「……明日の野球に、千絵ちゃん出てくれるだろうネ？」

「フフン、人数が足りなきやしょうがないけど、実は近頃あんまり暴れたくないんだ。たけくらべの美登利の心境かな」

「そお、でもアマゾンがいなくちゃ、みんな

が張切らない」

「それ、お世辞の心算なの？ フフフ、もう一寸でこれ一枚出来上りだから、あ、この雑誌読んでよ、瀬尾君が送ってくれたの」

麝脂の地に誌名の『象形』を白く抜いたその薄いガリ版誌をひらくと、中頃に自殺しそこねた級友の詩があった。

虹の下で何かさがしている少女の瞳

栗色のその瞳のなかにひそむ秘密

を僕がいい当てたら少女はすぐ自

殺してしまうだろう

「ああ、その短かい詩ネ」

絵筆を止めて、千絵は横眼に稔の膝の上のガリ版誌を見て

「ああしたとしそうな人らしい詩じゃない？」

という。

「ねエ、時々あたしも死にたくなる時がある……自殺の空想に何時の間にか落込る時もあるわ、いろんな花が咲いてる森の奥で、ピストルで。ホラ啄木じゃないけど『自ら死ぬる音のよろしさ』よ。しかもネ、あたしひとり死ぬのじゃない。素敵な美少年を道連れにしちゃうの、若草の上に向こう向きに坐らせて後頭部を射ってやるんだ。そして少年の屍

に腰掛けてあたしは従容と自害……ハハハ、間垣君は気が小さいから、きびが悪いでしょう。フフフフ」

★

輝蔵、稔、稔も知っている、輝蔵の友人中園、千絵、輝蔵と千絵の姉沙紀子、この五人で花札を引いた。

沙紀子は幾島伝造の死んだ先妻の子で、輝蔵、千絵兄妹とはずっと年がひらいて、二十七才、体格がいい。豊かな黒髪を常に変った容ちに結び、切長の目が彫りの深い顔を一層個性的にしていた。ミッシェンスクールを出てから、伝造が経営する商事会社で働いている。

その日は、伝造夫妻は能楽堂へ行って、帰宅が遅くなるので、晩飯を近所の仕出屋から取り、みんな花札に熱心だった。が、輝蔵が敗けだすと、飽きッぽく、むら気な彼は「いち抜けた」

子供みたいに叫んで後へ寝転がってしまった。

「よう、レスリングしようや」

派手な柄ものの靴下をはいた足で、ついでに中園の腰を頻りにつつく。

「うるさいぞ、俺は好調なんだ、めずらしく

も。日頃の怨みを晴らすんだ」

「いいじゃねエか、ねエ、俺は気が入らなくなっちゃったんだ」

「大人しく観戦してろよ、観戦武官に任命する」

「そうよ、兄さん少し休んでて、千絵もつきかけてるんだから」

「いいや、もうよそう、いや一時中止としないか、俺は見てるのは退屈で厭なんだ」

「暴君ねエ、兄さん」

「うむ、ネロ大王さまが命令する、暫く中止せよ。えへん、えへん、その代り、御婦人方に、お転婆千絵公も最早立派なレディじゃ、ハハハハ、御婦人方に俺対中園のレスリングをお目にかけよう」

「何だ、弱い癖にまた挑戦しようってのか」

「うわア、またするの、野蛮々々」

千絵は顔をしかめながら本当は愉しそうに沙紀子と部屋の間へ逃げる。

「おい、千絵公はレフェリーだ」

輝蔵と中園は金剛力士よろしく忽ちどたんばたん始めた。非力の輝蔵はいい出し兵エの口ほどもなく中園に組敷かれてしまう。跳返そうと両足を挙げて跳くと、ズボンがきっちりしているのでお尻が大きく見え、お尻の割

目が極立って、稔は吹き出したくなる。

「……ファイブ、シクス、セブン」

カウントを取る千絵は、畳に膝をつき、身を低くして兄の両肩が畳から離れるかどうか見ている。

輝蔵が負けて、稔と代った。稔は背こそ高いが、痩せッぽで腕力は輝蔵に優るほどでない。色白の円顔を真赤にした中園は精一杯立向う稔をむんずと押伏せてしまう。

「ワン、ツウ、スリー、間垣君だらしないや、フォー、ファイブ」

千絵の声に励ませたように、否見栄坊なところのある稔は、少女に不甲斐なく思われるのが残念で、やけ糞にじたばた跳いた。

「あッ、痛い」

上になっていた中園がのけ反った。稔の肘が当たったらしく、鼻血が鮮かに出て来た。

「あら、あら、脱脂綿、脱脂綿」

「大丈夫よ、私が止めたげる」

それまで薄笑いを浮かべて少年同士の組討を眺めていた沙紀子が淡いピンクの薄紙を丸めて中園の鼻の穴に詰め、手刀でひとつと少年のうなじを打った。

「あーあ、詰まんないの、間垣君の判定勝というところか」

興ざめて千絵は水色のスカートを広げ気味に坐りこむ。

「千絵公、一番中園の仇討といったら、どうだ？」

生欠伸を噛んだ輝蔵が寝そべった儘いう。

「あら、厭だ、姫御前のあられもない」

「野球やる癖に、遠慮するなよ」

「野球はいいじゃないの、アメリカには女子野球だってあるわ」

「レスリングにだって、女レスラーがいるんだよ、千絵公見なかったのかい、この間うち駅前のクリーニング屋のウインドに写真が出たぜ。マットに泥を塗っというてやるんだナ金髪や紅毛の巨きな女が泥だらけになって闘うんだ、何とも凄じい、第一エロチックだ」

「そんな写真、気が付かなかったわ」

「そりや惜しいことしたナ、国際ニュース写真画報だ、美容院か歯医者のところにあるだろう、お転婆娘千絵公の一見に値する」

「野蛮だわ、不潔ねエ、エログロだわ、ねエ沙紀子姉さん」

千絵は大仰に嫌悪の表情をつくって、姉の体に寄りかかった。すると、そんな腹違いの妹のわざとらしい口の歪めよう、眼付き、カマトト的な身ぶりが癪に触れたのかどうか、

沙紀子が

「いいわ、私が
間垣君を捻った
げる、どう面白
そうでしょう、
この試合。中園
君には前に英語
教えてた私だか
らいわば弟子の
仇を打とうって
訳、見事間島君
をフォールした
ら御喝采」

「といって立上
がった。これに
は挑まれた稔は
もとより、千絵
も中園も驚いた。
ひとり輝蔵は、

にやり笑い、片頬に大人びた翳を浮かべた。
(沙系子姉さん、コニヤック飲んでたわ、花
札に誘いに行ったとき、酔いが残ってるんだ
わ、間垣君どうする？あたし知らないッと)
千絵が稔の傍へ身を寄せて、低く早口に囁
いた。稔は愈々弱った。



「これは素晴らしい、ビッグゲームだ、ネロ大
王は満悦この上ない。双方とも早々闘技場に
立つがよいぞ」

輝蔵はすっかりおどけている。

「さア、間垣君ひと勝負しましょう、あなた
が相手じゃズボンにはき代えなくてもよさそ

うネ、このまんまでい
いわ」

「わッ、凄いわ姉さん
じゃこれから間垣君対
沙紀子姉さんの試合が
始まりまアす、少し重
量が違うけどいいわ」
「何よ、千絵、私はそ
んなにデブ？」

「あ、いいえ、そんな
ことございません。フ
フフ」

「ハハハハ、さ、間垣
君正々堂々よ」

沙紀子は薄い、目の
粗い紺のセーター、オ
リーブ色のスカートと
いう姿だった。稔と沙

紀子は始め相撲の手四
つのような恰好でしばし押し合い、沙紀子の
方が先に攻勢に出て足を掛けて稔を倒そうと
して、逆に下に倒れたがすぐ跳返した。その
時、稔は初めて沙紀子の息にコニヤックの香
いを嗅いだ。それに大人の女の甘ったるい体
臭と微かな香水の香いも。彼は軟かい体を撓

わけて沙紀子の体の重みからのがれる。闘志が湧かなかつた。女と取組み合う——子供の時分隣家のおきやんな女の子と相撲を取ったことはあるが——まるで思いがけない成行になつてしまつて、彼は当惑していた。沙紀子は余裕をもつて、彼のバンドをしっかりと掴み、片手を彼の首に巻き、長い脚を彼の脚に絡めて遮二無二攻める。

「沙紀子さん頑張れ」中園が声援している。

「間垣君、勝てばチャンピオンよ」唆すような千絵の声。「どっちも負けるなア」ふざけた輝蔵の間伸びした声。穂は掴みどころがない、まさか沙紀子の髪を掴む手も用いらぬ。セーターの胸を隆くしている乳房の感触が、何かぞつとするような圧迫を加えて来る。到頭沙紀子が穂を制し、穂の胸板に片膝かけ両手で彼の肩を抑えて、フォールしようとする。「うまいッ」と中園、「まだまだ」輝蔵、千絵が一緒にいう。巧く穂が体を転がして沙紀子の膝を外した。追いつがって、再び沙紀子の円い、白い膝頭が穂の鳩尾にかかる。スカートがまくれている。「あー駄目よ、姉さん、そんなんじゃない。また逃げちゃうわ」千絵がもどかしそうにいった。果して穂は体を反転した。「ホラ御覧なさい、上にち

やんと乗っからないからよ」「千絵公お前レフェリーの筈だぞ」「だって沙紀子姉さん手ぬるいんだもん」「だから俺が最初にお前やれっていったじゃねエか」またひとしきり相撲みたいになつたりして揉合つた末、遂に沙紀子は穂を下にして、今度は膝で抑え込まず彼の胸の上に馬乗りに跨つた。その時、オリーブ色のスカートが大きく広がり、穂の顔を蔽つたが、沙紀子はそれを直そうとせず、穂の両手を己れの両膝の下に敷いてから徐に左右に分けた。「……………」中園がごくツと唾を飲んだらしい。穂はわいわいいていた輝蔵や千絵が瞬間へんに静まつた訳がすぐに解つたから赫々と頭が熱くなり頬が火照つた。「さア、もうこっちのものネ、間垣君どうだ跳返せないでしよう」

切長の目を光らせて穂を見下した沙紀子にはっこり笑う。

「千絵ちゃん、カウント取つてよ。ゆっくりでいいわ、私は大磐石だから、フッフ」

「ハイ、ハイ、ワン、ツウ、スリー……………」

★

翌朝、穂は風邪引いたように頭が重かつた。胸苦しい夢のあやしい定かならぬ影が未だ睨の裏に粘り付いている。

海岸で八時からオレンジ色のユニホームを着た坊ちゃん学校のチームと野球試合。朝飯もそこそこに穂は家を出た。

「ねむたそうネ、間垣君、フッフ、昨夜の大会試合のせい？ フッフ」

紺のユニホームを粋に着こなした千絵が早速ひやかした。(畜生、チビ悪女)穂は何時になく腹が立った。千絵こそ昨夜の忌わしいレスリングの——女とあんなことをするなんて、女に組敷かれるなんて——演出者だ。いまましい。穂は唯ふくれっ面をしていたかった。それでないと己れの心の今ひとつ奥に蠢き出した思いもよらぬ暗い、段々膨れそうなかたまりに気付かれてしまふかも知れないから。沙紀子の体の重みが尚胸廓に残っていた。

穂たちのチームは、技巧的な球質の輝蔵がピッチャーで、その辺の中学生チームの間では強い方だった。殊にショートを守る小柄な美少女千絵の軽快な動きが草野球ファンの小父さん連の人気の的になっていた。しかし、チーム力はメンバーの誰彼が高等学校や大学予科へ進学する準備に追われている為、練習不足で可成り落ちていた。

この日の試合もオレンジ軍に押されながら

五回表を迎えた。二死走者一、二塁で、オレ
ンジ軍の四番打者が、高い内野飛球を打上げ
た。もう夏めいた海辺の午前の日に白いボー
ルが眩しく輝く。ショートの千絵が捕球する
かに見えた時、横からセカンドの稔がぶつか
った。

「あッ、痛い」

ボールをグローブに入れた千絵は悲鳴をあ
げてうずくまった。

「痛い、痛い、スパイクが刺さっちゃった」

稔が千絵の足を踏んでしまったのだ。あま
り痛がるので彼はうろたえた。

「ちえッ、千絵公大袈裟だぞ、家へ行って赤
チンつけろ」

輝蔵がこともなげにいったので、千絵は怨
めしそうな顔をして戻って行った。桃色に塗
った軽そうな自転車のペダルを片足で踏んで
――。

試合はオレンジ軍の圧勝に終わった。

「間垣君、俺今日ちよいと約束があるんだ、
済まんが、これ家へ持ってつといてくれ、お
い諸君お先きに失敬」

逸早くジャンパー、フラノのズボンに着換
えた輝蔵はあたふたと海岸線の駅へ急ぐ。

「なんだい、幾島は。忙しいやつだナ、どっ

か遊びに行くんだろうけど」

「例の、じゃないの」

「ああ、少将閣下の令嬢か」

「まあそうかな。ああ間垣君、千絵さんの傷
どうかな、お大事に」

「おい、おい、千絵さんのことは……」

「そうか、いや、間垣君がおこるぞオ」

稔は輝蔵のユニホーム、グローブ、バット
を持って、皆に別れた。

千絵は二階の居間で「風と共に去りぬ」を
読んでいた。繃帯した右足を投げ出して。

「どお、痛む？ ごめんネ、僕が声を掛けれ
ばよかったんだ」

「すごく血が出たのよ、元村医院に寄って来
た、日曜日だから先生いなかったけど、看護
婦に薬塗って貰ったの」

「すまない、さぞ薬がしみたらう」

「そうよ、すまないと思う？ 間垣君」

「平にあやまるよ」

「フフン、それならネ、これ見てよ」

机の下から千絵は黒、橙、白三色のストッ
キングのかたっぱを出して稔の膝に投げた。
足の甲に当たるところに血が少しついていて

「ここにはあまり血がついてないネ」

「医院でストッキング脱いだら、どツと出た

のよ、嘘じゃないわよ、責任を感じべきよ」

「お医者さんの金、僕出すよ」

「バカねエ、あたし、そんなこと要求しない
わ。本当に痛い目逢わせて悪かったと思うの
ならその気持見せてよ」

「じゃ、どうすればいいのサ？」

「ウフン、たいしたことじゃないわ、間垣君
そのストッキングの血のついてるところにネ、
君がベースすればそれでOKだわ」

「……………」

「ねエ、いや？ いやなの？」

「……………いやじゃないけど……………」

「あたしの足から出た血よ、処女の血だから
きたなくなかないわ」

稔は千絵を怒らせたくない。彼は千絵の汗
と血のしみたストッキングに接吻した。

「フフフ、外国映画のナイトみたい、あら
そんな深刻な顔しないでよ、ハハハハハ」

ピアノの音がころんころん弾んでいる。

「沙紀子姉さんよ、御機嫌なのよ、ホラ昨夜
エネルギーを発散させたから」

「よせよ、そんなこというの」

「随分長い闘いだっじゃない、善戦したわ
ネ、間垣君、まるで源平時代の巴御前と内田
なにがしの組討のよう」

〔新版〕 女体悦虐フォト七十選

Z組七十集 大手札印画紙 (9×13 種) 焼付各組一枚一組 (送料共)

一組 一枚	一〇〇〇円
五組 五枚	四〇〇〇円
十組 十枚	七五〇〇円
二十組 二十枚	一四〇〇〇円
三十組 三十枚	二〇〇〇〇円
四十組 四十枚	二五〇〇〇円
五十組 五十枚	三〇〇〇〇円
六十組 六十枚	三五〇〇〇円
七十組 七十枚	四〇〇〇〇円

Z 1	ゴムの猿ぐつわ	(梨花)
Z 2	囚女第六十三号	(柳)
Z 3	猪型手足吊り	(梨花)
Z 4	逆エビ強烈縛り	(大塚)
Z 5	ローソク責め	(四浦)
Z 6	豊臀への珍責め	(絹川)
Z 7	淫らな変型縛り	(愛川)
Z 8	ザリガニしばり	(梨花)

Z 9	引き回しシーン	(東浦)
Z 10	全裸後手高手小手	(加茂)
Z 11	豊満な肌の被虐	(大井)
Z 12	黒髪いたぶり	(大塚)
Z 13	足吊り媚態責め	(絹川)
Z 14	黒縄高手小手縛り	(四方)
Z 15	強烈荒縄しばり	(梨花)
Z 16	肌に喰込む白い縄	(東浦)
Z 17	くの字の足指苦悶	(桜井)
Z 18	裸身にいどむ縄	(前本)
Z 19	無茶な猿ぐつわ	(竹野)
Z 20	ハリツケの女体	(梨花)
Z 21	おへソなぶり	(大塚)
Z 22	逆手足吊り	(竹野)
Z 23	美肌のいたぶり	(絹川)
Z 24	仰向きの鼻いじめ	(加茂)
Z 25	恐怖の表情一瞬間	(若原)
Z 26	火箸で責める乳房	(梨花)

Z 27	全裸の海老責め	(熱海)
Z 28	ベッド上の痴態	(絹川)
Z 29	足の裏の擦り責め	(大塚)
Z 30	闇の女体飾り縛り	(竹野)
Z 31	首絞め晒しもの	(大塚)
Z 32	鼻孔に加虐	(若原)
Z 33	悦虐責め放心状態	(梨花)
Z 34	手枷足くさり	(四方)
Z 35	寝室でのプレイ	(花本)
Z 36	猿ぐつわの妙味	(梨花)
Z 37	首縄、柱しばり	(絹川)
Z 38	巻煙草責め	(大塚)
Z 39	尻立て縛りポーズ	(桜井)
Z 40	厳しきエビ責め	(東浦)
Z 41	ゴムのカパー縛り	(竹野)
Z 42	ワンピースの縛り	(花本)
Z 43	荒縄縛り竹棒責め	(梨花)
Z 44	尻を突つ立てて	(大塚)
Z 45	鏡に映す縛り裸像	(山路)
Z 46	苦悶に喘ぐ柔肌	(大塚)
Z 47	酔後の淫らしばり	(絹川)
Z 48	逆十字エビ縛り	(大塚)

Z 49	全裸縛り猿ぐつわ	(東浦)
Z 50	欄間に宙吊り	(梨花)
Z 51	全裸逆エビ縛り	(絹川)
Z 52	荒縄のお仕置室	(梨花)
Z 53	庭園の惨酷風景	(館)
Z 54	被虐の果て	(大塚)
Z 55	痛められた裸身	(大塚)
Z 56	鏡の中の全裸像	(愛川)
Z 57	セーラー服縛り	(梨花)
Z 58	檻の中の緊縛裸身	(愛川)
Z 59	全裸の股間縛り	(絹川)
Z 60	オムツ逆エビ責め	(田中)
Z 61	胴縄に膨らむ腹部	(桜井)
Z 62	ゴム人形の女	(竹野)
Z 63	荒縄のトゲ責め	(梨花)
Z 64	女子大生恥態責め	(田中)
Z 65	白肌露出の全裸縛	(絹川)
Z 66	強要する開股縛り	(絹川)
Z 67	強烈縛り全裸の晒	(愛川)
Z 68	亀甲縛り乳房責め	(梨花)
Z 69	ベッド上のもだえ	(愛川)
Z 70	恥しさに耐えて	(館)

「からかわないでくれ、きみは人が悪いよ」
 「あのネ、今後のこともあるから教えたげる
 けど姉さん少し酒乱の気味ありよ。昨夜は未
 だ酔が浅かった。それだけに何かもやもや鬱
 積してたのネ、オールドミスのやり場ない」
 「もういいよ、千絵ちゃん、君は悪いよ」
 「フフフフ、どうだった？ 感じは。きれい

な年上の女性の尻の下にどっかり敷かれた
 感じはどお？」
 稔はシャム猫のように目が光る千絵の恥ず
 かし気もないいい方に参って、頬を赤くし
 た。俯た彼の目を仄暗い幕がとざし、その中
 にオリーブ色のスカートが揺れ、広がり、ひ
 らいて、蛇の腹のようにぬめぬめと白い女の

腿がひらめいた。千絵が止めを刺すようにい
 った。
 「間垣君、ねエ、沙紀子姉さんどんな色の下
 着してた？ 白、むらさき、それともピンク
 かしら？ え、どうだった？ フフフ知らない
 ことないでしょうに、フフフフ」
 (おわり)

新連載サディズム小説

心 傷 た む 遍 歴

第四章 そのかみのこと (四)

「パリ警視庁での取調べ」

西 条 操

婦人留置場の起床は六時。婦人警官達が警棒で鉄格子を叩いて起して回わる。髪を撫で顔をこすり乍ら、女囚達はベンチのあちらこちらに屯ろして力なく話し合う。

「寒いわあ。早いところ、スチーム通したら、どう？」

「ちよっとお、ポリさん。預けてあるコートを出しとくれよ」

「トイレット・ペーパーもないわ。けちけちしないで出しなよ」

身心に受けた打撃と寝不足とに、ミシュリーヌは体がゾクゾクし、コンクリートの冷氣

が素足にしみ通った。便器のそばに群がり立って急がせて居る女達を眺めて、頭痛と寒むけさえ感じた。やがて朝の点呼。

「第二号檻、全員十三名……と。全部居るわね」

「当り前よ。夜遊びに出たのは一人も居なくてよ」

と、アンジェラが憎まれ口を叩く。

「いつまで立たせとくの？ 早くお化粧させてよ。あたい、今日あたり、いい男から呼び出しがかかるんだから」

婦人警官は鉛筆で髪を掻き上げながら、舌

打ちして睨みつけた。一つの檻を更に二回に分けて、女囚達は一組宛檻から出され、隅の壁際の洗面台で顔を洗う。消毒液に浸されたままの歯ブラシは誰が使ったものやら、壁に鎖で結んだヘアブラシと櫛も消毒薬の臭いがきつい。石鹸は一個を手から手へ渡して一回だけ掌に塗る。湯など出る筈もなく、水さえも勢いよくは出ない。辛うじて首から上を映せる古ぼけた鏡。ミシュリーヌは自分の顔を悲しく眺めた。たった一日で、こうもやつれるものか。監視の婦警が無慈悲に急がせ、桶を抱えた当番の女囚がタオルを取り上げて回

わる。佗びしい思いで洗面台を離れたミシュリーヌは、何か忘れ物をした様な心地だった。そうだ、化粧をして居ないのだ。香料の香り高い化粧品の数々、それらを手に朝の一刻を過すのが毎日の習いだったのに、今日限りそれとも縁切れになったのだ。ビショビショに濡れて気持の悪い布スリッパを爪先にはき直しつつ見回すと、他の連中も流石に女は女、物悲しさを噛みしめて鼻を吸って居た。こんな時でも決して後手錠を外しては貰えないジャクリヌは、他人の手で口をゆすぎ顔を洗って貰いつつ吸り上げて居た。

黒パンと水の朝食が済むと、先ず検事局行きの連中がデスクの所に集められる。番号を呼ぶ婦人警官の威丈高な声、胸にこたえる鉄格子扉の音、ふてくされて小突かれ腕をねじられる女囚の姿、そしてやがて、手首に嵌められて行く鉄枷の音、通される鉄鎖の響き、叱りつける罵声と頬を撲ぐる音。ミシュリーヌは頭を抱えて耳を掩った。或いはうなだれて悄然と、或いは頭を立てて虚勢を張り、十数名の女達が二列に並んで連鎖手錠姿で追われて行き、暫くすると、今度は警視庁内での取調べを受ける者が一人二人と曳き出されて行く。

「二十二号ッ」

アンジェラが黙って、のっそりと立上がった。

「何故返事しないのッ」

婦人警官がきびしい眉をあげて叱った。襟のバッジがキラリと輝やく。

「ふん。番号なんかで呼ぶからよ。頭に来ちゃうわ、全く」

「二十六号ッ」

クラリスが、ミシュレーヌの脇腹を突ついた。

「あんたよ」

大きな鍵で錠がビーンと鳴って外れ、ふてくされて肩を大きくゆするアンジェラに続いて、ミシュリーヌも檻を出た。デスクの所で婦人警官が手錠をガチャンと取り上げてアンジェラの手を掴む。

（又、あんなものを嵌められるんだわ。逃げも暴れもしはしないのに……）

悲しく諦めたミシュリーヌは、手錠を受けるために両手を差し出した。

「手錠って、ほんとに不自由らしいのね」

アンジェラは忌々しげにそう云って、ガチャガチャ云わせながら顔をしかめた。

「あんたはいいの。おとなしくなさい」

そう云われたミシュリーヌは、ホッととして下ろした腕を婦人警官に掴まれながら嬉しかった。

「ふん」

アンジェラは鼻を鳴らして横眼で見たが、兇悪犯容疑の彼女には手錠も当然だ。

「痛いッ。行くわよ。い、いたいったら……」

がっちりした体格の婦人警官に手錠の革紐を手荒く引張られて、アンジェラは喚き乍ら曳かれて行った。留置場区画を出て暫く行くと、

「お前、ほんとにおとなしいのね」

と、ミシュリーヌは肘を放して貰えた。すらりとした背の高い其の婦人は、うなだれてしおしお歩むミシュリーヌを横眼で見下ろし、其の態度が真物かどうかを見抜いたらしい。連れ込まれた調べ室は半地下にあって、テーブルと椅子だけの殺風景極まる小部屋、鉄格子の嵌まった高い窓の摺硝子の外光が、ミシュリーヌの眼に眩しかった。

「君は、ほんとにクレーブドリュエ伯爵夫人だったんだねえ。コモ湖は静かでない所だ」
取調に当たったメグレ警部はそう云って煙草をすすめてくれた。かぶりを振って断わり乍ら、彼女の胸は深い悲しみと後悔に締めつ

けられた。

（あのまま、シャルルの墓を守ってあの館で暮して居たら……）

そう思うと、熱い涙が頬を伝わるのだった。

「ああ、両手をテーブルの上におき給え。規則だからね」

「ハイ」

「ところで、と……」

ミシュリーヌは犯行をすべて認めた。後悔と悲しさと、そして時々こみ上げるみじめな思いに言葉は途切れ勝ちだったが、犯行そのものは何一つ隠すことなく自供した。

「此の小切手だがね、全部で八枚。しめて〇〇フラン。全部、君が横領したんだね？」

よく調べて御覧」

証拠品の小切手を突きつけられて、彼女は深々とうなだれ、微かにうなずいた。手に取って見るまでもなく、犯した罪の証拠から眼をそむけたい思いの彼女だった。

「所で、どうしてそんなに金が要ったんだい



？ 誰に渡したの？」

メグレ警部はさりげなく訊ねて眼を光らせた。内縁の夫ジェラルルの手に其の大半が、いや全部が渡ったと云うことは、警部ならでも想像はつく。其の頃、別の調べ室では、情婦の寝室から連行されて来たジェラルルが鋭

ちが

く調べられて居た。彼の共犯、少くとも教唆は明白なのだった。
「ありのまま云った方がいいよ。誰かにそそのかされたんだらう？ え？ 脅かされたんじゃないのかい？」

余りに同情的な警部の取調べ振りに、調書を取る若い刑事が眼をあげて警部の顔を眺め、ミシュリーヌの伏せた顔をしげしげと見て微笑し、そして、まなざしが一瞬燃えて熱っぽく光った。

ミシュリーヌの胸に突然怒りの念が渦巻いた。あの呪わしい人になしのジェラルル。あんな男の云うがままに罪を犯した我が身が口惜しかった。

（あんな男に唆かされたなんて思われたくないわ。忌々しいことよ。庇われたと思って浅墓に喜ぶに違いない彼を嗤ってやりましょう。せめてものプライドだわ）

彼女は眉をあげてキツパリと云い切った。
「誰に云われてやったことでもございせん。私、自分ひとりで考えてやったんです」

メグレ警部は、仕立のいい背広の肩をすくめた。

「そんなこと云うもんじゃないよ。そんなこととしても、なんにもなりはしないんだから」

そして小声でつけ加えた。

「あんな男なんかにはね……」

しかし、既に思い定めたミシュリーヌは頑くなに黙って、昨日取り上げられた指環の痕を見詰めて居た。おお、あの指環！ 決して高価なものではなかったが、あの指環はラグランジュ氏がやさしい心をこめて贈ってくれたものだ。美貌だがどこか冷たいリュシェンヌ夫人。

（いつも淋しげな、ラグランジュ様だったこと。もし訊ねられたら、あの方のことをどう答えたらいいのかしら？）

「じゃあね、あれだけの金を一体どうしたんだい？ 隠してるのかい？」

ハッとした彼女は、声もしどろもどろだった。

「あ、あの……それは……あの、いろんなことに使いましたわ。ドレスや指環や……それから……」

「もう、いいよ」

警部は苦笑いして、ミシュリーヌの顔を覗

き込み

「ね、ありのまま云った方がいいよ。罪が軽くなるからね。詰らない犠牲的精神は止し給え。刑務所の一年はずい分ちがうんだよ。じや、少し早いけど、おひる休みにしよう。よく考えることだね。おい、サンシール君」

た。

「差し入れがあったよ。ここで喰べるといい。ジェラルムからじゃないぜ」

警部達と入れちがいに婦人警官が入って来た。

「サインしなさい」

包みと共に示された紙片にサインし乍ら、ミシュリーヌは差し入れた人の名を読んだ。

ジャン・ラグランジュ。彼女の喉に熱い涙が溢れて字がかすむ。包みを解き乍ら彼女は声を忍んで嗚咽した。籠には、名の通った店の料理や果物が並んで居た。

（こんなことまでして頂くなんて、あんな御迷惑をかけた私なのに。ジャン、あなたとのことはきっと黙り通して見せますわ。その方があなたにとっていいと思いますもの。お、お、神様。ミシュリーヌは又も嘘をつかねばならなくなりましたの。お許し下さいまし）

検査を終えた籠をミシュリーヌに押しやつ

た婦人警官は、そばに坐って監視した。あれを思いこれに思つて、ミシュリーヌの咽喉はともすれば詰ったが、心づくしの食物はしみじみと胸に沁みて美味しかった。残った食物は捨てるのが規則だ。どうしても喰べ残してしまつた料理の籠を片手に、片腕を婦人警官に掴まれて捨てに行つたミシュリーヌは、勿体なくて泣いた。ラグランジュ氏のやさしい心がこもつた品々は、たとえ腐ろうとも大切に取つておいて、明日にでも再び味わいたかつた。それとも、連れ戻される檻に持ち帰つて、同囚の女達に与えてやったら、どんなにか喜ぶことか。けれども、詮方もない規則なのだった。

留置場へ戻されるかと思つたが、ミシュリーヌは再び調べ室に入れられて待たされた。婦人警官と顔突き合わせてただ坐つて居るのは、所在なく退屈で、やがてみじめさが胸に募つて来る。哀れにみすばらしい自分の姿を思うと涙がさしぐんで来るし、片時も離れない監視の視線を感じると身動きするのも憚られる心地だった。しかし、既に思い定めたミシュリーヌは何だか心軽かつた。早いこと取り調べを終えて貰つて裁きを受け、刑を決

めて貰って罪に服したい気持ちで一杯だった。ミシュリーヌの方からは声をかけるのを憚かって居た婦人警官が、案外やさしい口調で話しかけて来た。

「あなた、どう見ても悪いこと出来るひとじゃないわね」

「ハ、ハイ。けれど、悪いことしたんですの。ほんとにすみません」

「そう。けど、何か事情があったんでしょ？ ありのまま云った方がよくってよ」

「ハイ。ありがとうございます」

ミシュリーヌは眼を伏せて唇を噛んだ。婦人警官の言葉は身に泌みて嬉しかったが、ジエラルのことを思うと憎しみが複雑にこみ上げるのだった。ミシュリーヌは思い出して膝の両手を机の上に載せ、ふくよかなこぶしを軽く握って溜息を洩らした。何と云おうとジエラルは、ミシュリーヌにとっては初めての男だったのだ。

「煙草はどう？ 喫わないのね？」

煙草を取り出す婦人のポケットからこぼれ落ちた手錠が床にカチャンと鳴った。眼を射る銀色の光と其の金属音に、ミシュリーヌは眼をそむけて息を詰める。

「あの……刑務所って、どんな所ですか？」

手錠、鎖、牢獄の鉄格子……次々と連想してわなないたミシュリーヌはおずおずと訊ねた。

（昨日の朝、オフィスの前でパトカーに乗せられた時は、無我夢中でボーッとしてて何とも思わなかったけど、考えて見ると恥かしい姿を見られたのね。これからはずい分と恥かしい思いをさせられるんだわ）

婦人警官は手錠を拾い上げてスカートの膝におき、煙草に火をつけた。

「そうね。ま、人によって感じ方もいろいろだと思うわ。あんた初犯でしょ？ そりゃ、楽しいとは云えないけど、初犯者の刑務所はそんなにきつくはない筈よ。第一級殺人罪なら別だけどね」

婦人警官は手錠の環を押してジ、ジと鳴らせつつそう云ってポケットに納めた。

（昔ほどひどくはないって云うことだけど、それでも矢張り辛らくてみじめなものに違いないわ。薄暗い牢獄に閉じこめられて何年間も……ああ……）

話に聞いた牢獄の恐ろしさを、あれこれ想像すると、折角の決心もぐらつく心地がした。

「あんた、子供さんあるの？」

「ハ、ハイ……娘が……ひとり……」

ミシュリーヌの瞳は涙で掻き暮れ、机の上の手が切なさになわなないた。しかし、此の婦人警官に訴えた所で何になろう。

（おお、ジュヌビエーブ。どこに居るの？）

逢いたいわ。けれど、けれど、お母さんはもうこんな身になってしまったの。とうとうお前を探し出せもしないで監獄へ入れられてしまふのよ。もう会わない方がいいのね。ジュヌビエーブも、そう思うでしょ？

突伏して慟哭を初めたミシュリーヌを婦人警官は黙って眺めて、紫煙をくゆらせて居た。監視の婦人警官が交替し、やがて若い刑事が入って来て婦人を追い払った。

「お嬢さん、もういいよ。警部、何してるのかな。ま、すぐ来るだろう」

「お嬢さんだなんて、嬉しがらせないでよ。ほんとにいいのね？」

小母さんと呼んだ方が似つかわしい婦人は嬉しげに笑い声を立て、肥り気味の体をゆすって出て行った。調書をひろげた若い刑事はミシュリーヌの前に席を移し、まじまじと見詰めた。

「僕、サンシールって云うんだ。ロジェ・サンシール。泣いていたんだね」

メグレ警部はなかなか現われず、サンシール刑事はハンカチを与えたり煙草をすすめたりして何かと話し掛ける。同情といったわりを越えて、其の口調には歓心を買う様な響きすら時には感じられた。

「君はほんとに綺麗だ。心もきつと美しいに違いないと思うよ」

涙に濡れた眼を僅かに上げたミシュリーヌは、白い額越しに男をちらと見て、力なく微笑んだ。

「凄い差し入れだったね。いいひとからだな」

ミシュリーヌは頬を染めて弱々しく頭を振り、深くうなだれたままだった。

「僕も何か上げたいけど、現職の警察官だからねえ。ま、出来るだけのことはして上げるよ。どうせ、保釈になるんだろ？ 何か困ったことがあったら僕に連絡してくれるといいよ。僕の住所はね……」

サンシール刑事はデスクの上のミシュリーヌの手をそっと握り、ピクツとした彼女がためらい勝ちに手を引込めようとした時、扉の向こうに足音がしてメグレ警部がやって来た。

「おや、婦警は？ お嬢さん方は仕様がな

ね。さて、と……」

警部は、サンシール刑事が立って退いた椅子に腰を掛け、午後の取調べが始まった。もう、二時を回って居た。

「どうだい？ 誰に云われたのか教えてくれる気になったかい？」

一瞬ためらったミシュリーヌは、勇を鼓し自分を励まして単独犯行を主張した。厳格な両親に幼少時代を躰けられて育ったミシュリーヌは、芯の強い面もある女性だった。メグレ警部は顔をしかめた。

「お金は、ドレスやなんか他に競馬にも使いましたわ。ルーレットにも賭けましたし、それに旅行も……」

「じゃ、賭けた馬の名を云ってごらん。どこかの競馬場へ行った？ 旅行はどこへ行ったんだ？」

警部の声はきびしくなった。別室で取り調べ中のジェラルムも知らぬ存ぜぬの一点張りなので、いらいらして来て居たのだ。

「そうら、云えないだろ。自分を苛めるのもいい加減にしたら、どうなんだ。検事や裁判官の心証も悪くなるぜ。それとも、どうなってもいいのかい？ 小切手偽造、横領と来ると、最高十五年までは行くんだぜ」

ビシリと云われて彼女はわなないたが、辛うじて耐えた。あの憎いジェラルムの名を云う気になれないのが、自分でも不思議な位だった。警部は鋒先を変えた。

「ラグランジュ氏とはどんな関係だった？」

「どんかって……ただの使用人ですわ」

彼女の声は思わず震えたが、警部はそれ以上追求はしなかった。

「明日、もう一度調べるからね。誰に唆かされたか。誰に金を渡したか、よく思い出して見るんだ。君自身のためなんだぜ。」

ミシュリーヌは再び肘を掴まれて留置場へ戻され、そして其の頃忌々しそうに釈放されたジェラルムは、パリ警視庁の扉を押して外気を胸に吸い乍ら、嬉しげにほくそ笑んで居たのだった。

一方、ラグランジュ氏は其の日、友人の弁護士と会って居た。予想される保釈金は、氏がリュシェンヌ夫人の眼を掠めて捻出するとは困難な額だった。何しろ、会社は夫人の亡夫から引継いだものなのだ。

「経済事犯や横領などの保釈金は案外高いんだ。隠匿される恐れがあるからね。所で、彼女もチャッカリ隠して居るんじゃないだろうね？」

マイヨール弁護士の言葉にラグランジュ氏は頭を振った。

（ミシュリーヌが、そんな女なもんか。香水一瓶を買うのにも、長いこと思案する様ないじらしい女なんだ。可愛想に……）

「そうかい。大分、参ってた様だね。ま、君個人の金なら、君が許してやれば相当酌量もされるんだが、何しろ名目上だけにしても法人の財産なんだからなあ。いくらでも弁償したことにする手もあるが、それも難かしいな。ま、ともかく引き受けるよ、安くね」

「ありがとう。頼むよ。可愛想な女なんだ。ジェラールと云う男に捉ったのが因果なんだなあ」

「ともかく起訴になったら会って見るよ。彼女、断わりはしないだろうね？」

「自分で弁護士を才覚できる様な女じゃないよ。金もないし。それにもう、諦め切つていじらしい程に後悔してるに違いないんだ。君のことは手紙でそう云ってやるよ」

「いや、被害者の君が余り同情的に動くのはよくないぜ。彼女とのこと、リュシェンヌ夫人も感付いてるんだろ？ 下手すると、共犯にはされないまでも、何だかだと巻き込まれてうるさいぜ。ま、僕に任しとけよ」

「うん。けど、何とか保釈にしてやれないものかねえ」

「無理算段して保釈にして、自殺でもされたらどうする？ そんな女性なら思い詰めてやりかねないぜ。まあ、監視して貰ってる方が無難だよ」

辞し去ったラグランジュ氏は、胸の愁いをまぎらすために、行きつけの骨董店へ立ち寄ってひやかした。氏は古い陶器、ことに古代東洋の陶磁器類に興味をもって蒐集して居るのだ。そして氏は、マイヨール弁護士がリュシェンヌ夫人にすぐ電話をかけたのを知る由もなかった。

ミシュリーヌが鉄檻に戻されて暫くすると、豪華なドレスをまとった若い女が引き立てられて来た。乱れたドレスや髪に身体検査の跡が残り、態度が悪いのか、背後の婦人警官に右腕を背にねじ上げられて居る。

「もう、いい加減に放してよッ。い、いたいッたら……」

入念な化粧が濃い顔を歪めて女は呻き、振り離そうと身をもがく。

「おとなしくしないからよ。そっちじゃないの、こっちの檻よ」

更に強くねじ上げられた右腕の痛さに悲鳴

をあげた女は、くの字に曲げた上体をくねらせ左手を振り回し乍ら、二号檻の前へ引き摺られて来た。もう一人の婦警が錠を開く。

「いやよッ。鉄の檻はいや。かんにんして。あたし、今夜約束があるの。明日、きつと来るから檻に入れないで。お願い」

もつらせて踏張る脚の布スリッパが脱げて飛んだ。二人の婦警は容赦なく女を押し入れてぐいッと捻じ上げてから腕を突き放す。鉄格子扉が音高く閉じて、錠がそのままかかってピーンと鳴った。

「ね、出して。出してよう」

鉄格子扉にしがみついて、なおも無駄な哀願をする女の顔に、投げ込まれた布スリッパが当って落ち、女はそのままズルズルと膝をついて、婦警達の背を恨めしげに睨んだ。

「ちきしょうッ」

呟いて立ち上った女は、ガラリと態度をふぶてしく変えて、身繕ろいしながらベンチに腰を掛け、ドレスの片脚を抱いて鉄格子に背をもたれた。

「又かい？ ステラ。どんなドジを踏んだの？」

ジゼルが薄笑いを浮べて声をかけた。

「あーら、ジゼル。あんたも居たの？ いえ

ね、ちょっと、余碌にありつこうと思ったらさ、田舎の爺さんだとナメてたのがいけなかったのね。うー寒い」

コールガールらしいステラは捨鉢にそう云って、乳色の素足をドレスの裾に包み乍らあぐびをした。

「あんまりあくどい真似をするからさ」

「あら、ジゼル。お前さん、そんなことを云える柄じゃないだろ。あーあ、煙草吸えないのが堪らないわね。ドレス一枚台なしだし」

「まあ、災難と思って諦めるさ。税金だと思ひよ。うまく行きや、三週間で出れるよ」

もう一度あくびをしたステラは、彼女にとっては済ませたばかりの朝化粧の香水の匂いを強く振りまいてドレスを伸ばし、そしてベソチに寝そべってしまった。

婦人警官がやって来てクラレンスに何か手渡した。うずくまって居たクラレンスが待ちかねた様に貰って便器にしゃがみこみ、そして寝棚の陰に入ってしまった。最少限度に切り詰められた生理用品を与えられたのだ。

「おや、寝そべってるのが居るのね。二十七号ッお起きッ。もう夕方よ。お前が出る幕の頃じゃないの？」

きびしく叱られ嘲けられたステラはふくれ

面をのろのろ起き直った。

「くそッ。何よ、檻の外からえらそうに云いやがること」

ステラは忌々しげに呟いて金髪を掻き上げスカートを上げて腿を掻いた。今度は、紙片を手にした婦人警官がやって来た。

「十七号。ジゼル・モントレー。起訴状です」

ジゼルは肩をすくめて鉄格子の間から受取った。

「おありがとう存じます。フ、フ、フ」

「十四号。ジャクリーヌ・クロード。あんたもよ。ここへ来て」

ポケットから鍵をつまみ出す婦警に顎をしやくられて、ジャクリーヌは嬉しげに鉄格子に背をつけた。四日間かけられ放しだった後手錠が漸く外される。

「これ、起訴状。サインおし」

「だって、手が動かないわよ。フーッ」

漸く前に回した両腕をゆるく動かし手首を撫でて、ジャクリーヌは口をとがらせる。

「文句云わずにサインするのッ」

ジャクリーヌは、顔をしかめ乍ら鉛筆を握った。

「どう？ 未だかけといて欲しい？」

婦人警官は今外してやった手錠をカチャカチャ示しつつそう云い、ジャクリーヌは思わず身を引いて胸を押えた。

夕食を余したミシュリーヌを見て、アンジェラが忽ち眼を輝かせて平らげた。見回わすと、二号檻の女囚達から二人が姿を消し、ステラを含めて三人は新顔だった。ジゼルとジャクリーヌも一兩日中には拘置所へ移されて姿を消すことだろう。

「又、立たせやがるのかい。ちくしょう」

夜の点呼の時、アンジェラが膝を押えて立ち上がりつつ唸った。彼女は今日一日、朝から夕方まで、立たされたままで取調べられたのだ。

刑務所行きがほぼ決定となったジゼルは流石にしよげて口も利かず、何日振りかで楽に寝られるジャクリーヌは手足を伸ばして何度も吐息を洩らし、疲れ果てたアンジェラは寝棚に入るや寝入ってしまった、ステラが時々口惜しげにブツブツ呟くほかは二号檻だけは静まって、婦人留置場の夜は更けて行った。諦め、思い定めたミシュリーヌも囚われの身の第二夜をいつしか眠りに落ちて行ったのだ。

(未完)

代理部分讓品一覽

○妊婦女体資料の部○

臨月腹ヌード	大手札二枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「りく」
臨月腹アップ	大手札二枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「りと」
臨月妊婦の全身	大手札二枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「りせ」
臨月腹の側面	大手札三枚一組 四〇〇円 安原さゆり 略号「りそ」
臨月腹の背面	大手札二枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「りも」
臨月垂れ腹	大手札三枚一組 四〇〇円 安原さゆり 略号「りみ」
妊婦ヌード	大手札三枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「やま」
妊婦しぼり	大手札三枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「やむ」
臨月妊婦三態	大手札三枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「よむ」
産み月のお腹	大手札三枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「よま」
動物的な腹部	大手札三枚一組 三〇〇円

○女体緊縛資料の部○

安原さゆり 略号「よみ」	妊婦の股間縛り
大手札三枚一組 四〇〇円	児玉 昌子 略号「には」
妊婦八カ月の緊縛	大手札三枚一組 四〇〇円
児玉 昌子 略号「にあ」	妊娠五カ月の緊縛
大手札三枚一組 三〇〇円	児玉 昌子 略号「にこ」
妊娠前裸縛り	大手札三枚一組 三〇〇円
児玉 昌子 略号「まさ」	妊娠初期の緊縛
大手札三枚一組 三〇〇円	児玉 昌子 略号「ぬろ」
妊婦の股間縛り	大手札三枚一組 四〇〇円
児玉 昌子 略号「にふ」	妊婦の股間縛り
大手札三枚一組 三〇〇円	児玉 昌子 略号「にと」
分娩後縛り	大手札三枚一組 三〇〇円
児玉 昌子 略号「につ」	分娩後股間縛り
大手札三枚一組 三〇〇円	児玉 昌子 略号「にて」

鼻の穴責め	大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号「なく」	鼻
なぶり	大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号「ない」	鼻責めの陶酔
大手札三枚一組 三〇〇円	大塚 啓子 略号「なは」
苦悶の裸身	大手札四枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号「くせ」	裸身の晒し
大手札三枚一組 三〇〇円	関谷富佐子 略号「わあ」
全裸股間縛り	大手札四枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号「せら」	強烈エビ責め
大塚 啓子 略号「えり」	蒲団に悶ゆ
大手札三枚一組 三〇〇円	関谷富佐子 略号「なき」
悦慮の果て	大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号「なみ」	椅子エビ責め
大手札三枚一組 三〇〇円	六尺縛り
東浦ひかる 略号「おき」	弓吊り責め
大手札三枚一組 三〇〇円	梨花悠紀子 略号「つき」

手足宙吊り	大手札三枚一組 三〇〇円
梨花悠紀子 略号「つた」	オムツの股間縛り
大手札四枚一組 四〇〇円	東浦ひかる 略号「むく」
強烈責、被虐の果	梨花悠紀子 略号「りお」
乳房 いじめ	大塚 啓子 略号「とお」
大塚 啓子 略号「きえ」	美貌の裸身に縄目
大塚 啓子 略号「きん」	腰元吊り責め
村井知可子 略号「こり」	腰元間諜の拷問
大手札四枚一組 四〇〇円	強烈エビ縛り
関谷富佐子 略号「もい」	乳房責の苦悶
大手札二枚一組 二〇〇円	全裸ムチ打ち
関谷富佐子 略号「もた」	強打に泣く裸身
関谷富佐子 略号「むち」	

狙われた和装の娘

大手札十二枚一組 略号「一〇〇〇円」

愛川悦子 略号「ねい」

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

水本茂美 略号「えひ」

ゴム衣緊縛

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

水本茂美 略号「みす」

バンド開股

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「はこ」

バンド責め

大手札五枚一組 略号「五〇〇円」

東浦ひかる 略号「はん」

夫人の表情

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

関谷富佐子 略号「せや」

後手吊り足挙縛り

大手札五枚一組 略号「五〇〇円」

東浦ひかる 略号「うら」

二つ折りエビ責め

大手札五枚一組 略号「五〇〇円」

東浦ひかる 略号「うり」

足挙げ椅子責め

大手札五枚一組 略号「五〇〇円」

東浦ひかる 略号「うる」

吊り打ち

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

関谷富佐子 略号「やり」

股間縛法悦境

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

絹川文代 略号「ぬこ」

踊り子緊縛

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

絹川文代 略号「りこ」

責め衣

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

大塚啓子 略号「せめ」

猪吊り

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

梨花悠紀子 略号「いの」

足挙開股責

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

梨花悠紀子 略号「あけ」

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 略号「四〇〇円」

大塚啓子 略号「むら」

〇フエチ資料の部〇

白晒六尺襦 略号「(正面)」

大手札四枚一組 略号「四〇〇円」

遠藤百合子 略号「しは」

白晒六尺襦

大手札四枚一組 略号「四〇〇円」

遠藤百合子 略号「しろ」

黒襦の女

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

遠藤百合子 略号「くま」

黒襦の女

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

遠藤百合子 略号「くう」

相撲襦を締め込む

大手札四枚一組 略号「四〇〇円」

遠藤百合子 略号「すい」

変形六尺襦

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

細川アヤ子 略号「ふい」

六尺襦開股

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

細川アヤ子 略号「ふは」

六尺フンドシ

大手札五枚一組 略号「四〇〇円」

東浦ひかる 略号「ろい」

六尺襦の女性像

大手札四枚一組 略号「四〇〇円」

関谷富佐子 略号「くろ」

レインコートの拘束

大手札四枚一組 略号「四〇〇円」

大塚啓子 略号「いろ」

ゴムフエチ

大手札四枚一組 略号「四〇〇円」

梨花悠紀子 略号「こま」

バンドを脱ぐ女

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

遠藤百合子 略号「ゆお」

月経帯縛り

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

遠藤百合子 略号「ゆす」

相撲襦着用

大手札十一枚一組 略号「一〇〇〇円」

大塚啓子 略号「すま」

股に喰い込む黒フンドシ

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「とし」

股を開いた黒フンドシ

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「とひ」

バンド晒し

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「はと」

バンド足挙げ

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「はそ」

バンド見せ

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「はぬ」

白フンドシ

大手札四枚一組 略号「四〇〇円」

大塚啓子 略号「ふん」

黒フンドシ

大手札四枚一組 略号「四〇〇円」

大塚啓子 略号「くふ」

ゴムぐるみ人形

大手札四枚一組 略号「四〇〇円」

東浦ひかる 略号「こみ」

ゴム包みの束縛

大手札四枚一組 略号「四〇〇円」

東浦ひかる 略号「こは」

ゴムと女体アップ

大手札四枚一組 略号「四〇〇円」

東浦ひかる 略号「こあ」

パリスバンド前開き

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「おい」

パリスバンド縛り

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「おは」

携帯用白バンド

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「おか」

サカエ軽便型バンド

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「おた」

パリスSSバンド

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「おこ」

パピアバンド

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「おし」

サカエバンド

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「おえ」

四馬孝画廊

浣腸美媚態

大中判(13×19) 印画紙焼付
三枚一組 六〇〇円
略号(のゆ)

新しい狙いによる四馬孝画伯による浣腸美の極致を最高度に描写した女性の美しさを女体浣腸に求めた芸術的作品

一、令嬢の浣腸

美しい令嬢、二人の看護婦に腕をとられて身動きできぬようにつかまえられる、真白な逞ましいお尻をあらわにされて、百CCの巨大なガラス製浣腸器が医師の手によって迫ってくる。美に對する汚辱のスリル。

二、BGの浣腸

診療所の治療室にて、花恥しきビジネスガールが、羞らいながら、医師の目の前に臀部をつき出して浣腸ポイズをとると、やむにやまれぬ緊縛をうけて、浣腸の祭壇に立たされる美しい女性。

三、女学生の浣腸

セーラー服の可憐な少女が、ズベ公とチンピラ達に、よってたかかって浣腸される。華々しい美の断層の一場面。

女体切腹図絵

△時代物女性切腹△

大中判(13×19) 印画紙焼付
五枚一組 一〇〇〇円
略号(しせ)

一、姫君切腹

美しき姫君、豊満な上半身をくつろげて、短刀をたたかたに下腹に刺す。鮮血あふれる膝の上。

二、介錯寸前

覚悟の切腹。白装束の娘くつろげた前をきりと九寸五分にて斬る。ふり上げた大刀まさに首筋へ

三、娘子軍切腹

城を目前にして、力及ばざるを殿にお詫びして、いさぎよく腹を切る。娘子軍の娘二人。

四、早まるな

屏風をめぐらした一室で白衣の胸もあらわに腹を切る若妻。帰宅した夫の止めるのもきかず。

五、恋人の介錯

さあ早くお討ち下さい。と下腹をかき切った娘は、首さしのべて恋人の刃を待つのであった。

浣腸責め図譜

△強制浣腸五態△

大中判(13×19) 印画紙焼付
五枚一組 一〇〇〇円
略号(しき)

一、片足吊り浣腸

片足を高く吊られて、逆さ吊りの女の臀部に對してイルリガートルの嘴管が非情に迫ってくる。

二、いちじくの恐怖

革紐で身動きもできない女を抱えあげて、露出した尻へイチジクの怪便浣腸が挿し込まれる。

三、高圧浣腸

後手に縛られてタイルの上にこがされた女体の口には、高圧ポンプのゴム管が挿入されている。

四、五十cc硝子ポンプ

カウンタに麻縄で縛られたホステスの盛り上った双丘に狙いをつけガラス浣腸器のあくどさ。

五、大量浣腸

医局のテーブルに手足を縛られた看護婦が医師の手でイルリガートルから浣腸を施されている。

浣腸責め図譜

△浣腸緊縛五態△

大中判(13×19) 印画紙焼付
五枚一組 一〇〇〇円
略号(しえ)

一、踊子の浣腸

両手と片足を天井から吊られて奇妙な恰好のままイルリガートルから浣腸される踊子。

二、ヒマシ油

足をバタつかせても縛られた上にヒマシ油を無理に飲まされて、このあとに来るものが恐ろしい。

三、進める浣腸液

ガラスポンプからグリセリンの原液が腸内へ送り込まれると、激しい便意が身をさいなむ。

四、浣腸用責衣

お尻のところが、ぼっかりと口の開いた奇妙な責衣。液を流しつつゴムが尻に近づく。

五、両足吊り浣腸

このポーズだったら、イルリガートルの液は、もういくらでも体内に流れ込むだろう。

羞恥責め絵巻

△異色責め五態△

大中判(13×19) 印画紙焼付
五枚一組 一〇〇〇円
略号(しい)

一、人工妊婦

女の腹はもう臨月に近いくらい膨れ上がっているが、まだ水はどんどん送られてゆく。ああ。

二、浴槽の女神

後手を括った皮は、湯を吸って喰いちぎれるように痛い。男は荒縄タワシで柔肌をさいなむのだ。

三、三角木馬の責

荒縄で乳房の上下を縛られた女が三角木馬に跨がられて、呻めきながらムチ打たれている。

四、全裸の柱抱き

真白な豊満な背中から臀部にかけて、むごたらしいミミズ腹れが女に對する激しい責を物語る。

五、女体洗滌

二つ折りの奇妙な形に縛られた女体に、汚れを洗う水が手荒く注ぎかけられる。

女体切腹資料 分譲品

血紅使用、腸露出

女体切腹シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

大塚 啓子 略号(せい12)

血紅切腹絶命ポーズ

大手札四枚一組 四〇〇円

梨花悠紀子 略号(せん)

血紅切腹祭壇の女体切腹

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(せぬ)

禪裸女血紅切腹

大写真連続迫力フォト

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(おお)

血紅使用苦悶表情悦楽

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(くえ)

肉体美裸身切腹写真

大手札五枚一組 五〇〇円

長野 良子 略号(なせ)

女体切腹態

大手札二枚一組 三〇〇円

細川アヤ子 略号(ねは)

女体自刃態

大手札三枚一組 三〇〇円

細川アヤ子 略号(ねに)

血紅使用血塗れ下腹

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(わい)

殿中の自決

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(わこ)

切腹美態から絶命へ

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(わは)

豊満に挑戦

大手札五枚一組 四〇〇円

東浦ひかる 略号(えん)

介添切腹

大手札四枚一組 四〇〇円

甘木 春子 略号(あか)

腹を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(やい)

下腹に刺す刃

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(やお)

柔肌を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(やえ)

浣腸関連フォト

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かく)

百CCの浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かな)

浣腸責の極

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かむ)

浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

梨花悠紀子 略号(れち)

強制浣腸三態

大手札三枚一組 三〇〇円

絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(へか)

浣腸をする女

浣腸器と女

浣腸後排便

進ばしる液

浣腸プレイ

イルリの嘴管挿入

エネマ・シリーズ

浣腸後排便

浣腸後排便

浣腸後排便

浣腸後排便

浣腸後排便

浣腸後排便

浣腸後排便

浣腸後排便

浣腸後排便

浣腸後排便

浣腸後排便

浣腸後排便

浣腸後排便

浣腸後排便

浣腸後排便

浣腸後排便

浣腸後排便



KK誌健在を続け独自の境地を征く。全くめでたき限りです。さて雪崎氏提供の女相撲図、最近土俵などを略すやり方は一寸困りますね。それとたまには時代物の風景も扱って頂きたいです。「御前相撲」などはその一例で良かったと思います。それから「すか」と「すね」昨今分譲の女相撲激突の図、第二シリーズを出されたし。フォト、女相撲図も土俵とか何か

背景を一考して貰い度い。前進を期待する所切です。女相撲や女斗美だけを目的にKK誌を買う人が相当あるのですから箕田主幹もその点考慮されたし。九州の室井英山氏、このごろ顔を見せませんが、御元氣ですか。「明暗」の明、明るさと朗らかさをもう少し持ってみては、笑わせることも必要です。(東京八小山田浩明)

始めて御便り致します。小生二十五才のマゾ青年です。一年前書店で何げなく貴誌のページをめくり全くギクッとしたものです。小生一人のものかと思っておった己れの趣味?がかくも大勢な仲間に通じていた点、非常に心強かったことを記憶しています。以来書店にて貴誌を出来る限り愛読、今では一カドのキクファンになった様な気持ちになっております。そこで潜越ながらも小生の感想、希望を記させていたいただきます。最近号では七月号八月号が秀作。特に高木嬢の「女子寮の押え込み」が良かった。組敷かれ入替りになってみたいものだ。高木嬢益々奮起、毎月誌上をかざ

る様どしどし投稿されるよう切に希望する。それにつけても数年前のキクの女王、長瀬、三隅嬢、今では人妻になって? 何かと多忙かとは思われるが、是非再び筆をとって劣弱な男や女を逞ましい尻の下に敷いているところを描いてほしいものだ。佐藤健児氏の「妖異女斗美八景」も、最高によろしい。小生思うにマゾと女斗美とは兄弟のようなものだ。美女が相手の女の上にドッキリと跨り短刀で咽喉笛に止めを刺す。マゾヒズム又はこれに準ずる最高のシーンと思う。予告では八景まである様だが、一月一景でなく、少くとも二景は記載してほしいと強く要望する。(編集部へ) 佐藤氏も八景に終る事なく続何景と考案して下さい。尚小生若尾文子ファン。彼女のモデルが敵を組敷き、首級を高々と掲げる場面があれば云う事はない。今春のキクに女斗彦氏の「東西美女決斗」の投稿がなされた由出て居ったが未だ誌上に発表されないのは、如何なるわけですか? 誠に残念。それから昨年暮れの諸岡先生の「現代女武勇伝」其の後さっぱりだが、これ又遺憾の至り。美しい女武者が相手を組伏せ首元に短刀を押しつけ最後の

引導を申し渡している問答等はマゾの極地。文中組打ちの詳細読者の希望があれば又の機会に...とあるのに無沙汰はファンのため表現不足ではないか? 改めて少くとも三月に一篇は先生の作品を拝読したいものと切望する。ここで小生自らを反省し稍稚拙かも知れぬが一つの提案を供する。奇クはもとよりマゾの独占出来るものではないようだ。自己の主張を通さんがため排他的になるのは考えものだ。しかし、やはり自己の望みはどうすることもできない。そこで「奇クガリバン倶楽部」の出生を強く希望する。最近の何かにつけての規制で公刊誌としては発表出来ぬ絵、創作、小説は多いものと思われる。読者の折角の投稿の中で秀作でありながらも、編集部で二の足を踏まざるを得ないと推察出来る様な気がする。仮りに二篇でも三篇でもよい、マゾ並に女斗美を本当にガリバンずりで結構、百円から二百円程度の料金にてマゾに分譲してはどうだろう。編集部読者諸兄の真剣なる検討を乞うや切。(川崎市八高田康一)

○
京の祇園とともに代表的な花街先斗町(ぼんとちょう)の芸妓市

そ名(いちそめ)さん、本名深藤久子、京都市中京区先斗町通蛸薬師下ル(三八才)がさる八月二十三日、強盗にはいられ縛られた。それも妊娠九カ月という身重でコードで手足を縛られたというのだから一寸ショッキングな事件だった。市そ名さんは、舞踊尾上流の名取で、名物の「鴨川おどり」では、いつもヒロインを演じている大スターの芸妓さんである。「静と義経」では静御前とか「安寿姫物語」では安寿姫など、第一人者であった。事件は八月二十三日午後六時ごろ、自宅の四帖半のテレビを見ながら、うたた寝をしていた。そこへあけ放していた表入口から若い男が侵入、長さ約六センチの果物ナイフのようなものを

きつけ、市そ名さんの左拇指に五日間のけがをさせた上、「金を出せ、おれはいま、ほかのところでも二人をやっつけてきた。あすの新聞を見てみる、ちゃんと出ているぞ」とおどし、市そ名さんがかわらのたんすから出した現金二千円を奪った。市そ名さんがキズの手当をしようと鏡台からほう帯を出すと、「くくってやる」と手助けしたあと、ほう帯で両足をしばりあげ、さらに電気蚊取り器のコードで両手を首に巻きつけるようにしばりあげ、「一時間ぐらいはおとなしていろ」と、同六時十分頃、表入口から逃げた。市そ名さんはしばられていた両手足のほう帯やコードをほどいたが、恐ろしさでしばらく動けず約三十分後に

木村洋子

完全逆さ吊りフオート

分譲

大判判印画紙焼付三枚一組

一〇〇〇円

略号(さつり)

樟の枝にとりつけた滑車に、綿ロープをきりきりと巻きつけ、引き上げられた木村洋子は、両足を上に頭を下にした完全な逆さ吊りだ。足先が滑車につくと、頭から地面まで一米はあいた。引き縄を樹の幹に止めると、逆さ吊りになった女体は、一本の縄を中心として、ゆっくりと回転を続ける。

カメラはアングルを変えて四方八方からシャッターを切る。この三葉は、アングルもポーズもバックも皆違ったもの。その惨酷さのため口絵には使用できませんので、特に分譲品として提供します。久々に放つ真に本格的な責めらしいムードに満ちたフオート。Sマニヤの方はどうぞ御一覽を。

近くの母親のユキさんに知らせ、同七時二十分ごろ五条署四条小橋派出所に電話で届けた。五条署では、強盗傷人事件として捜査を始めたが男は二十五才くらい、約一・六メートル、面長、色が黒く、紺色ポロシャツを着ていた。先斗町の路地内の強盗事件は戦後二度目といわれている。市そ名さんは恐怖の顔色でその模様を次のように語っている。テレビを見ていたうたたねをしていたんです。「起きろ」という男の声で目をさましたら、鼻先にナイフをつきつけられビククリしました。ほう帯でケガの手当をしてくれましたが、手や足をしばられ、どうしようもありませんでした。来月には赤ちゃんが生まれるというので、気が気やおまへんどした。(京都市八東山映史)

初めて御便り致します。私は神奈川県に住む二十六才のS的性格の男性です。思春期の頃から女の人が縛られたり拷問を受けている映画や写真などを見ると知らずのうちに熱中している自分でした。それが最近まではS的性格である事に気が付きませんでした。先日偶然に書店で奇クを拝見致しまして、

私と同じ性格の方が大勢いる事を知りうれしくてなりません。早速四冊程購入致しまして毎晩秘かに眺め楽しんでおりますが、なぜ、もっと早く奇クのある事に気付かなかったか残念でなりません。つきましては神奈川県近傍にお住いのマゾ的性格の女性の方、私とお友達になつて戴けませんか、楽しく文通など致したいと思っています。(神奈川県八TK生)

○ 芦屋市の小島寿子さん。奇ク10月号誌上読者通信にての御希望の件小生にては如何かと思ひます。参考迄に職業は石油関係の営業、年令三十才、身長五尺七寸、体重十七貫、そして勿論独身です。自宅は東京ですが、関西関係の仕事が主の為、大阪にアパートを借り月の大半は過しています。車を持つてますから、時間等御都合をお知らせいただけたら、早速参上します。尚最初は梅田辺りで待合せお茶でも飲みながら、お互いに観察し合つて又話し合つて、第二回目からプレイという様な方法など良いのではないかと思つています。数多い志願者の中から選ばれる幸甚を念じつつ。(大阪八MK生)

初めまして私は東京丸の内に勤務する二十一才のビジネスガールです。奇クを知りましたのは、私の会社の友達で彼女はよく私にマゾの男性の性癖を話してくれましたのでつい私も興味を持ったからです。世の中には案外多いんです。私、私もハッスルしていいみたいです。ようかしら……。朝出勤する電車の中でヒップをさわる最低の男性がいるでしょう。そんな男性の顔を足で踏みにつけて私の汚れたパンティーをすっぽりかぶせたら素晴らしい事でしょうね。それに夏場にかけて痴漢シーズンでしょう。本当に憂鬱ですわ。私の容姿？そうね、自分で云うのも変ですが、顔、スタイル自信ありますのよ、フフフ……。会社の方は、白川由美さんに似ていると……。マゾの方で私のドレイとしてプレイしたく思います。思う存分奉仕させるつもり、だって私は私の若さと美貌を誇り守る為にドレイが必要じゃないかしら……。ドレイの男でどんなプレイが一番好きかしら。お馬かしら、足の裏を舐めさせる事かな。それともパンティーかな。何んでしたら犬にしてあげますわ。私て自信家なのね、女王

みたいで……。ドレイの男を私が命令一切服従させるなんてやっぱ女王なのね……。 (東京八有光令子)

小生、当年三十一才の会社員です。最近東京に転勤となり、知人もなく、夕方など時間を持てあます事が度々あります。そのつれづれに二年程前から読んでいた事のあるK誌を読む様になりました。学生時代に、心理学で、S・Mを教わり、通常誰でもS・Mの傾向がある事を知りました。最近K誌を通じて、自分を、SかMかを考え、M的傾向の様な気がします。しかし、SでもMでも強度のものでない限り正常です。外国では、S・Mプレーが、普通の家庭で行われているそうです。小生は、外見も悪くない男子ですが、一度理解ある若い女性の方とプレーをして見たく思っています。全て経験は道徳だと考えます。小生は、全く無経験ですが、手足の縛り、馬乗、トイレ、等、東京近辺のS的趣味の女性のお便りをお待ちします。プライベイトの秘密は厳守します。 (東京池袋八入江洋二)

私、奇譚クラブの愛読者ですが

「今月の新版分譲品」

待望の女相撲 女斗美

モデル……木村 洋子
大塚 啓子

玉田美佐子対大塚啓子の第一回女相撲と女斗美の写真を発表いたしましたところ、多数のマニヤの方々のお求めを頂き、且つ御意見を御批判を賜り厚く感謝しております。ここに、それらの御意見を参考に第二回の作品を作成の上分譲品として発表いたします。

女相撲四十八手

その一

大手札六枚一組 八〇〇円
略号(すは)

雲霧の相撲場を着けた二人の若い女性が、躊躇の姿勢から、互いに上手下手まわし充分にとり合っ四つに組んで、下手投げ、上手投げ、外掛けと力のかぎりをつくして術をかけようとするところを次々とキャッチした動きのある連続フット。但しフラッシュやストロボを使用せず、動感を持たせるためフラッド・ランプ数灯使用によるスピード・シャッターを用いました。

女相撲四十八手

その二

大手札六枚一組 八〇〇円
略号(すむ)

(その一)に引続いて、手四つの争や吊り出し、強烈な上手出し投げなどの術を掛ける瞬間瞬間をキャッチした動感と力量の溢れる場面の中で、ポーズの素晴らしいものばかりを選び出しました。同じ術の中でも、以上の点に欠けたものは惜しげもなくオミットして数倍の不適合品を出しました。

黒禪対白禪女斗美

女闘立術の応酬

大手札六枚一組 八〇〇円
略号(すち)

黒禪と白禪の二人の若い女性が、何のためらいもなく必死の女斗を展開する。立ったままの互いの首絞め、一本背負い、激しい首投げ腰の入った背負い投げなど、遠慮会釈なく、相手を好き放題に攻撃させて、その中できまり手の素晴らしいものだけを選びました。

立術の攻撃場面

大手札六枚一組 八〇〇円
略号(すた)

テレビに於ける大のプロレス・ファンであるという二人が、ここ

四月号で真夜中の女子レスリングを拝見し、感心いたしました。今度は是非何時もと主を変えて女子レスリングの写真を特集にして下さい。胴絞めの型など、是非ページ数を或る程度まとめて女子レスリング特集として、四十八手の型の写真を特集にて御願ひ致します。楽しみに愛読を続けておりますので、一日も早くお願いいたします。(岩手県盛岡市大通り八佐多太一)

数年前、町の古本屋でかい見たKK誌が、私の気持を捉えてずっと愛読を続け、早や二十六才になりました。その間、幾度となくアブの耽美の世界から自分を取り戻そうと試みましたが、物心両方から魅せられてしまった私はKK誌を捨てることの無駄なことを知りしました。来春は私も結婚式を挙げることにしております。読者投稿などで、夫婦プレイを楽しんでおられる記事を拝見する度に羨ましく思っていました。来春からは自分も天下晴れて夫婦プレイが出来ると思うと胸の高鳴りを禁じえません。しかし私は全くの無経験者ですのでどなたか先輩のよりよきアドバイスをお願いしたいと思います。

いペンをとった次第です。何卒よろしく願ひします。(因島市土生町八岡野よしひろ)

僕は二十三才の青年ですが、世に女王様と称せられる女性の方に縛られて責められたくて気も狂いそうです。嚴重に手足を縛られ、一日中、いや二日でも三日でも放置しておかれない、そして苦しくなってしまう声でも出したら、さるぐつわをはめ、屈辱を与えていただきます。このような空想にふけていると、仕事も手につかない有様です。僕はくどくどと長い望みを書きたくありません。どなたか、こののぼせ上っている僕の頭を冷して下さい。平伏してお願い致します。(埼玉県八戸部章)

初めて通信欄にて、御呼びかけさせていただきます。私は、二年來の読者でございますが、最近東京地区の方々の御投書が多く、いつも、うれしく拝見させて頂いて居ります。私と同じ性向を御持ちの方と、お訪ねも致して見たく又、許せる範囲でのプレイを共々たのしみたいとも存じて居ります。私はS・Mどちらでございましょうか、或は両方の傾向がある

を先途と、互いに相手をプロレスの決め術でフォールしようと争うところを、次々とシャッターをきってゆきました。この写真を撮るときは実際に自由に相手を攻撃させましたので、カメラマンの足の上に二人が重って転がってくることも度々でした。

寝業の女レス

大手札六枚一組 八〇〇円

略号(すほ)

黒禪と白禪のあられもない裸身の二人が、組んずばぐれつ女のたてらの取っ組み合い。四肢から胸

のではないかと思ったりも致します。然し映画「白日夢」などの各カットは、あまりに生々しすぎて感心致しませんでした。それにあれでは余りに一方的なSであり、受け身の立場にあるMの立場が、ただ苦痛でしかありません。Mの立場をよるこんで受けられる様な責めでこそ、ほんとうのS・Mの極致だと存じます。そう云った意味から、芳野様が御書きになったイメージの中にある「もっと恥づかしめて、差し上げましょうか」「あとで直接味っていただきますわ」等々の言葉に、云い様の無い世界を感じます。私と、語り、プレイをたのしむ、御意志のある女

臀部まで露出した女体が、激しい躍動を見せて、素晴らしい女斗美の場面を展開する女レスリング。

女闘連続場面

大手札九枚一組 一〇〇〇円

略号(すく)

二人の禪一本の女性が互いに立って組み合い、激しい投げ業の応酬から、やがて力勝った方の投げがきまった瞬間。それから愈々寝業にうつり、どちらも自分が優位に立とうと懸命の奮闘。遂に一人が押さえ込まれるまでの、連続フット。

性が居られましたら毎土曜日午後六時〜六時半に上野文化会館入口にて御待ち致します。貴女は、右手に週刊誌とバッグを御持ち下さい。御呼びかけ致します。(東京八戸張幸)

大阪市旭区大宮町、中川芳子さんにお答えします。私も数年来の本誌の読者ですが、貴女のような人の出現を喜んで初めてお便りします。私は鉄工業を営む35才の男性です。貴女との出会いに先ず美しい飾りのついた、コルセットをプレゼントしましょう。そして先ず貴女は風呂へ入る時以外は夜寝る時もそれをつけて寝るのです。そ

して、そのサイズの小さいコルセットによる緊縛感から始めて、だんだんと私の奴隷として飼育して行きます。貴女は私と二人きりになると、生理バンドかゴムのオシメカバーをはかされます。そして腰をしめつける革の腰枷から股帯が下り、それが後から前へ廻って、固定されます。そしてそれは私でなければはずせない鍵がついて居ます。そして両手は後手に固定されて、貴女は私の後に立ちます。私は手に鞭を持って、貴女にスネークダンスを踊らせます。先ず腰を前後に振る事、次に上下に動かす事、そして最後に一番むづかしい事即ち腰を前後左右上下に回転させるのです。そして貴女は股革のせつなさに、動きが鈍って来ます。そうすると、私の手にある鞭が貴女の身体に炸裂し、貴女はその為一層身もだえするのです。そして一生懸命腰をくねらせるのです。そして寝む時はそのままの姿で寝むのです。第一回目の教育がすむと、コルセットの下には常に（常にですよ）私のプレゼントした生理帯かゴムのカバーをつける事を約束し、貴女はそれをはいて私と別れます。貴女はそれを、いつでも、いかなる時でも、

いかに汚れても、はずす事は出来ません。それは私の命令だからです。洗濯など以ての他です。もしその様な事をしたら、第二回目には貴女の身体に私の名前を焼印してしまいます。そして貴女は身をしめつけられるせつなさにもだえて、御主人様の事を想いながら、会社へ行き寝み歩くのです。そして次の生理が来る時には又私と第二回目の会合をするのです。そうです、貴女は生理期間中のみ私と会えるのです。そして女としての恥しさを、私の前にさらけ出した時、始めて、一人前の女性となれるのです。そして貴女の飼育が進み、私を唯一の御主人様として考える様になったならば御ほう美として、貴女の汚れた身体を清めてあげます。貴女は恥しさのあまり、身もだえして私の仕事の邪魔をしたため、貴女の汚れた下穿きで目かくしされて、固定されるのです。そして、貴女が私の云附を守らない時は、鞭で打たれるのです。そして、帰りにお別れる時には、カバーの上から腰枷で固定し股枷をつけて、その上にコルセットで緊縛しお別れしましょう。貴女は御主人様の命令の通りそれをはずす事は出来ず、毎日会

社へ股革をつけたまま電車やバスに乗り通勤するのです。そして恥しさの為せつなさの為常に御主人様である私の事を思い浮べながら仕事するのです。次に第三回目には、ビニールロープで後手に固定し、首縄をつけその首縄から、股をくぐらして、股縄をしめつけて股間縛りに固定して居ます。そして私に奉仕するのです。奉仕の仕方悪い時は股縄をしていて注意します。貴女はその痛さに悲鳴を上げる事でしょう。まだ他にせぬばならぬ事がありますが、それは又お目に掛つての事にしましょう。

（広島八小川庸一）

残暑厳しき折柄。編集部の皆様御苦勞さんで御座居ます。愛読者の皆様お元気ですか、奇譚クラブ十月号拝見致しました。いつに変わらぬ、雪崎京人先生の健筆、特に今月号の口絵娘相撲熱戦譜は素晴らしいの一語につきると思います。切返しの絵も大変良いと思います。が、私は特に双差し絵が好きです。双差し腰を落し右差手を返して寄る娘、それを左外掛けに防いでいる娘。娘相撲の力感が溢れていると思います。前編が外れ解けて足にからんでいるのも、この絵

に迫力を盛っていると思います。雪崎先生に心から拍手を送ると共に今後共に健筆を期待致して居ります。なお本号に私の初の投稿、娘相撲勝抜戦が採用になり喜んで居ります。甚だ拙文であります。同好者の皆様の御批評、又御指導を、お願い致します。（神戸八田中一生）

○ ゴム同好の皆さん。KK誌発展の為にも大いに意見を述べ合いましょう。ゴムに関する記事が大変少いのを寂しく思います。編集係の方もグラビアにも毎回一カットでも結構ですから、必ず載せて下さることを要望します。残暑とは云え、朝夕は十分凌ぎ易くなりましたが、又、ゴムの粘着触感も一番すばらしい時候でもあります。ゴムのオシメカバーをピッタリと着け、総ゴムのレインコートを着、ゴムの手袋、メンスバンドの替ゴムをマスクに用い、夜分人のいない近所をひそかに歩き、そのままの格好でぬま湯の風呂に入り、ゴムのプリプリした粘着感をゆっくり楽しむのも、実にすばらしいことです。私は女房にもこれと同様のプレイをさせ、これを見て楽しむ、ゴムの大型ボールを奪い合い

ながら寝ることもしています。ほのかなゴムの匂い、これが粘着タッチをさらに増大させます。ゴムの感触は生ゴムが最高で、オシメカバーはニシキゴムが最もよく、これもアメ色と乳色と二色市販されて居り、いずれも好みによって使用されるとよいと思います。レインコートは、やっぱり以前に流行した女ものの絹裏ゴムがすばらしく、表ゴムの黒色合羽は感心しません。頭から足の爪先までゴムでまとい尽した格好を想像したただけでも、素晴らしいではありませんか。夫婦で毎日プレイを楽しめる私達は本当に幸せだと思つて居ります。九州に住んで居られるゴムフェチの皆さま。大いにハッスルして紙上に意見、体験談を交換しましょう。編集係の方もグラビヤにすばらしいゴムの感触を再現した傑作を載せて下さることを心からお願いいたします。(佐賀八吉沢春夫)

10月号「奇クサロン」のトップに私の拙ない通信を掲載されまして思つても居なかつたため驚きと共に赤面の至りでした。「ダンボール箱の生首」フォトも、顔が鮮明に出ず読者諸兄姉に物足りなさ

を感じさせたものと思います。グラビヤフォトも、自肅の線です。どうしても、止む得ない事と思いますが、何かむし返えしの様なものが多くなり新鮮味に欠けるものを感じました。これも一般書店にての販売を考えると、仕方ない。青少年の非行に關係ありとすれば吾々大人は勿論、我慢してサロン、等の読者通信、投稿フォト等でバラエティーを考え編集して戴かねばと考えて居ります。同人雑誌でない以上、止むを得ん編集と、編集室の皆様の御苦勞を察し致します。サロン掲載の「中田明氏」の日曜工作室面白く読みました。これからも日曜大工の部をもうけ例えば絞首台、ギロチン台、断頭台、磔け台等と、投稿があれば楽しいと思います。そしてマニヤ諸氏も大いに参考になり、日曜日に、ニヤニヤと外出するのとなく家で工作される事と思ひます。そして良きパパぶりを見て、奥さんも夜になればきつと絶大な協力をして下さるでしょう。私もギロチン台(私の様な不器用な者でも作れる物)を作りたいと思つて居ります。どうか、絵心のある方お教えをお願いします。もし私と文通、フォトの交換と……お考えの

分譲品御注文の栞

○代理部の分譲品は、すべて前金にて御注文願います。直接の訪問並に代金引換はお断りします。
○御注文品は注文書到着と同時に発送申し上げます。
○御送金は、現金書留(封筒は一枚三円にて局が売っています)小為替、定額小為替(小額のときは御便利です)振替(用紙は郵便局にあります)切手代用(十円、二十円、三十円、四十円などの切手で、絶対紙にはりつけないで送り下さい)等を御利用願います。
○御注文品は、雑誌では何年何月号、或は略号の付してあるものは略号。フォトの類はすべて略号をお書き下さい。品名をお書きになると間違いが起り易いので、必ず略号のみ、お書き願います。
○送料は日本国内に限り、すべて当方にて負担させて頂きます。但し速達並に書留それに外国便は、実費御負担下さい。
○局留にてお受取り希望の方が増えてきておりますが、せいぜい御利用下さい。御注文の際、お受取りにしたい郵便局名(特定局でも結構)とお名前(仮名にて可なれど市販の認印なんかを準備した方がよい)とを当方へ御連絡下さい。

れば、その御指定の局に局留としてお送りします。別に局からは通知がありませんから、局へ出向かれて、お名前をいってお受取り下さい。局での郵便物の留置期間は十日間です。十日間を過ぎると差出人へ返戻されます。
○御注文の宛先は大阪阿倍野郵便局私書函第十四号、天星社です。(私書函番号を明記するように依頼されましたので右の通りお願いいたします)
○尚、御注文の際、もし代品として第二希望品がございましたら添記頂けますと、万一分譲中止、品切などのとき迅速に処理できて助かります。
○分譲品の新しいものは、毎月号の誌上で「新版案内」として発表しております。又、古くなりましてものは漸次打切りにします。
○御注文の宛先は必ず楷書ではっきりとお書き願います。肩書きがございましたら、それもお忘れなくお書き添え願います。
○御注文者の御氏名は絶対に他へ洩らすようなことは致しません故御安心下さい。
○金額にして五千円以上のフォトをまとめて御注文の際は金額に応じて優秀フォトのサービス品を贈呈させていただきます。

方がありましたら御遠慮せず編集部に問合せの上、お便り下さい。又東海地方の方で夫婦でSMプレイをお楽しみの方ありましたら御連絡下さい。お待ちしております。居ります。(岐阜八水野弘)

○ 小生、大版以来の奇倶ファンです。知らぬ間に年をとりもう妻子ある四十才の中年です。学生当時から違い生活の面も広くなるに従いプラクチカントの小生など代理の効かぬ悲しさ、煩雑な日常に追い廻されてゆっくりアブの世界に耽溺している余裕がないのが残念多少プレイの経験もあった当時の自分が懐しく、昨今、通信欄に御活躍の人々が羨しく。職業的に婦人の肌に接する機会も多い小生等が目下は月々届けられる奇ク、そして新しい企画の分譲品を唯一の楽しみとしています。もともとS一〇〇%と思っています、多少下着フェチがあり、通信欄に譲渡の話があると大いに心引かれますがこれも着用していた相手を辱しめる意味に於いてサド的だと思います。今年の何月号かに地元京都に会友制集りがあるのを読みましたが、之にも心をかけ乍ら呼びかけに応じかねていました。未だ存続

しているようなれば再度呼びかけ下さい。今度は時間を都合つけて参加させて頂き度いと思ひます。サドも多種多様でしょうが、小生の場合従前はやはり対象は若い女性ばかりだったのが、最近年のせいか中年或はそれに老年に近い婦人でも、更に又異常に肥ったオバちゃんなどにもそれなりに考えられるようになりました、私の寝室の押入れは奇クの集積です。一杯ですがこれからも心の伴侶として夫々御つき合ひさせて頂きたいと思ひますが何卒よろしく、(桂T.S.生)

○ 十月号入手、内容もさることながら、目次の裏のMフォトシリーズ分譲の知らせを拝見し胸おどろと共に、我々M族のために多くの犠牲を払って、このような作品を作って下さる編集部の方々の御配慮に心から感謝申し上げます。いずれ注文したいと思ひますが、今から心おどる期待で一ぱいです。十月号の読者通信には、多くのM族の方の文がみられ非常に心づよく思ひました。M族の皆様、今後とも一致協力して我々の希望や意見を誌上に反映してゆくよう努力しようではありませんか。小生の

M性の第一は、女性の体臭を求めることです。若く美しい女の方に仰向けに押し倒され、顔をお尻の下にしかれたら、どんなに苦しいでしょう。そしてその時、嗅がされるお尻の臭気はどんなでしよう。現在では実際に嗅がされた体験はなく、坐ぶとん、パンティなどへの移り香によってなぐさめてしています。臭気を嗅がされる時、スカートの上から、そしてスカートのたくし上げられてスリッパの上から、更にスリッパもたくし上げられて、パンティ一枚を通して嗅がされるお尻の臭気はどんなに強烈でしよう。そのパンティが数日穿かれてひどく汚されていたとしたら、どんなにくさいでしよう。あまりのくさいに小生は気も遠くなりそうです。世の多くの若い女性の方で、小生のこの願いをきき入れ小生の顔を偉大なるお尻と股の下敷にし、その強烈な臭気をいやというほど嗅がせ、気も遠くなるほどくさい目に合わせて下さる方のおよびかけ、出現を切に願ってやみません。(京都市八嵯峨信也)

○ 残暑の頃となりました。奇ク愛読者の方々、毎日元気で頑張って

全裸の切腹悦楽

モデル 大塚啓子

△第一組V略号(ひと)

大手札印画紙焼付

四枚一組 四〇〇円

△第二組V略号(ひと)

大手札印画紙焼付

四枚一組 四〇〇円

下さいませ。この頃、私は、読者通信で知り合ったマゾヒストを飼っており。その男と、三回面接し四回目に主従の約束を致しました。テストの結果は、私にとって必ずしも、満足出来る迄のモノではありませんでしたが、あまりに哀願致しますので、段々に、馴らして行くのも、宣しかろうと、そのままにしてあります。仲々忠実でもあります。その男が自認する程の面では決してなく、少なからずガツカリしています。まあ、初めは仕方ないでしょうが、私の好みのムチ打ちには、ヒイヒイと誠に耳ざわりな哀願の声をおします。私をイライラさせます。サジスチンと自認する私。決して自惚れではないと信じております。いくら、名文を並べても、実行の時に必要以上の哀願を、

されたのでは、興ざめです。もっと強烈な、マゾヒストは実在しないものかと情なく思います。十月号に於いて、私に呼びかけた、

山崎文男。秀崎利幸。この文を読み返してみても、自信が、あるなら連絡先を明記の上書信を寄越なさい。どんなものか、面接位はし

て上げます。但し、自信が少しでも、ゆらぐ様なら止めなさい。私は、ソフトな、S・M・はきらいなのです。——では皆様、近況を

お知らせ旁々、残暑御見舞と致します。(東京都八東雪枝)

○

残暑はまだまだきびしい今日此頃編集部の皆様、愛読者の皆様お

元気ですか。十月号にて中川芳子様のお呼びかけを拝見し久し振りに筆を取りました。私も心の糧として奇クを愛読してより早や数年を経て参りました。其の間妻を相手に色々と緊縛ポーズを研究し、又お仕置プレイのアイデアを色々と考えては妻に施し訓練を行って来ました。近頃では相当きついお仕置にもよく耐える様になり妻はマゾとしてよく成長して参りました。又緊縛ポーズとか、お仕置のアイデアによいものが出来たと写真に撮し取り保存をして居ります。時折り、出して妻と見るのも楽しみなものです。女の人は肉体をお仕置等にてよく調教訓練をされることにより肌は非常に美しく強靱となり又、内面的にはよくマゾヒスティンとして成長することにより美しさが増し、どんな強烈な愛でもよく受け入れることが出来る可愛い女性になりうると確信

〔代理部新版分譲品一覧〕

全裸脚挙姿態 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (てい)	全裸アケラ縛り 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (てへ)	全裸屈伸縛り 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (てほ)	六尺禪の変形姿態 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (てに)	蹲踞と拍手 大手札二枚一組 略号 (二〇〇円) 長野良子 略号 (てり)	鬼面と接吻する 大手札二枚一組 略号 (二〇〇円) 長野良子 略号 (てち)	強烈エビ責め 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 松本アサ子 略号 (まと)	裸身に羞らう 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 松本アサ子 略号 (まつ)	女賊捕縛 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (へい)	女賊処刑 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (へい)
全裸緊縛姿態開陳 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 遠藤百合子 略号 (ゆり)	鼻をいたぶる 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 遠藤百合子 略号 (ゆは)	浣腸をする女 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 遠藤百合子 略号 (ゆか)	バンドを脱ぐ女 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 遠藤百合子 略号 (ゆお)	月経帯のまま縛り 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 遠藤百合子 略号 (ゆす)	豊満を切り裂く刃 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (ほふ)	鎌腹を切られる女 大手札二枚一組 略号 (三〇〇円) 愛川悦子、田中芳代 略号 (らく)	咽喉笛を刺される女 大手札二枚一組 略号 (三〇〇円) 愛川悦子、田中芳代 略号 (らみ)	血紅使用 斬られる女 大手札七枚一組 略号 (七〇〇円) 絹川文代 略号 (らふ)	雲霧の相撲フンドシ姿 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 東浦ひかる 略号 (ろみ)
凄んだ女賊スタイル 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (へに)	バンド、ゴム見せ 大手札五枚一組 略号 (五〇〇円) 東浦ひかる 略号 (へみ)	浣腸を施される女 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (ちら)	煙草責めの裸身 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (たく)	淫らな長髪の乱れ 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (ろも)	ふり乱す長髪の悶え 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (ろめ)	縄目に悶える夫人 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 関谷富佐子 略号 (ほく)	髪を引き回される夫人 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 関谷富佐子 略号 (ほむ)	自ら施す浣腸 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (ちぬ)	浣腸器を弄ぶ女 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (ちり)

して居ります。幸い中川様のお呼びかけを頂きまして文通が出来ました。私共の経験をお話しし写真をお譲りし乍らアドバイスをすることが出来ると思います。又実際のプレイにまで発展すれば貴女を立派なマゾヒスティンになる様訓練をして差上げます。よろしくお呼びかけの程お願いします。

(大阪市住吉区八益原駿夫)

残暑の季節とはいえ、うっとおしいことでございます。私事始めて読者通信に投こうさせて頂きました。実は先日社用にて京都に出張しまして、店頭にてよく貴誌を見ました。世間では、女を縛ったり、打ったりする事に興味ある人々が居るとは聞きました。実際に其のグラビヤを見まして、驚嘆し且つ、いやな気がいたしました。其のまま、外に出ようとしましたが、其の中で女相撲の絵を見し思い切つて、購入しました。私は数回、現実に女相撲を見たことが、あります。其の魅力は他の見世物には及びません。数年前女子プロレスが盛んになりましたが、女相撲の比ではありません。

しかし、何時とはなくこの女相撲興行もはい止され、はなはだ残念に思つて居りましたが、貴誌が女相撲を取り上げられ愛好者も読者の中にいらつしやる様で早速、仲間入りをさせて頂きます。又愛好者の方々と、せひ、文通させて頂き度いと思います。私の我ままなお願いですが、女を打ったり縛ったりする愛好者とは別に特殊な見世物とか女相撲文けの別雑誌を作つて下されば、大変ありがたいと思います。(浜松市浅田町八柳田重雄)

私はこの欄が好きである。最近のグラビヤページの低調もあってまずこの欄を覗く。公衆便所を覗く私を御想像ありたい。そして、読むのである。公衆便所の壁の落書きをにやにやしながら読んでいる私を御想像ありたい。つまり、この欄には読む方にも、そしてもちろん書く方にも「公衆便所の落書き」のたのしさがある。私も、今こうして、たのしみながら落書きを書いてゐる。何を書いたって許される。私が誰れであるかは編集部の方々以外にはわからないのだ。いや、編集部の方々だって私の正体については御存知ない。こうい

新しい分譲品

女子斗争場面写真

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

大塚啓子、玉田美佐子

略号(のわ)

フンドシ一丁の二女が豊麗な裸身を惜しげもなくむき出しにして組んずはぐれつの大格闘。若々しい肉体の躍動が手にとるように眺められる快心のフォト。

二女格闘場面写真

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

大塚啓子、玉田美佐子

略号(のか)

全身汗みどろとなつて、お互いに相手の乳房や鞭を掴みあつて必死になつて戦う女斗美のシーン。

全裸正面切腹姿態

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚啓子

略号(のみ)

今や身にまとう何もものもかなく、柱にもたせかけて、壮絶なる女体切腹を敢行する啓子の正面像。

切腹に悶える裸身

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚啓子

モデル 大塚啓子

略号(のそ)

柔肌をキリキリと切りさばく女体切腹の壮絶な雰囲気。苦痛に悶える裸身の美しい曲線。全裸になつて演ずる啓子の切腹シーン。

浣腸と便意の苦悶

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 遠藤百合子

略号(のけ)

一〇〇〇〇〇の浣腸器でパンティを押さげた百合子が自らの手で浣腸を施し、やがて押し寄せてくる激しい便意に、身をくねらせ、腹をおさえて苦しむ有様。

強烈エビ責め

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 玉田美佐子

略号(ねむ)

足の指が全部反りかえつてしまふほど厳しく縛りあげた足首を背中との後手首と連結して、ぐいぐいと締め上げれば、全裸の美佐子はう、う、う、う、と思わずうめいて全身を痊れんさすのだった。

後手首の高縛り

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 玉田美佐子

略号(ねへ)

きっちり合せて括りあげられ、た後手首が首筋近くへ高々と吊り

う場所が読者のために開放されているという事は全く素晴らしい。K誌をささえているのは実にこのペーじである、といっても過言ではなからう。こういう落書は余り面白くないでしょう。申し訳ない。読者各位の御健斗（お仕事もさる事ながら）を祈ります。（横浜市八畑好太郎）

長らく社務に追われど無沙汰いたしております。扱て、過日友人より昭和の初めから発行された女相模関係の雑誌類を二十冊ほど借用し読みあさっております。中には大変珍しい記事もあり、興味深く拝見しております。この辺で愛好者の集いなど開いていたければ大変楽しいひと時を過ごすことができましょう。女相模に興味をお持ちの方も大勢いらっしゃるようですが、文通、会合も仲々困難であり、何かよい方法はないものかと思案いたしております。甚だ勝手ながら在京中では雪崎京人氏がこの道の先輩であり出来ることならば我々愛好者のために女相模よもやま話など伺えればこれに過ぎる喜びはありません。分譲フォト申込み旁々希望意見を述べさせていただきます。（東京八岡平

吉夫）

横野千代子様。九月号の奇クサ

ロンのお塚本さんの記事で貴女のことを知りました。まだ見ぬ貴女ですが、僕は貴女に恋しました。塚本さんの筆による貴女の勇気あるしっかりした態度、素晴らしい理想の女性らしいイメージを受け、余り、半分は貴女が実在の人か疑っています。しかし、S道を歩む者にとってあらゆる機会を見逃すわけにはいきません。前に誌上を借りて呼びかけたこともありましたが反応はありませんでした。まだ実際にプレイしたことはありませんが貴女に負けないドライさと二重人格性をもっています。是非僕とプレイして下さい。もし貴女の呼びかけが誌上に載っていたなら、必ずかけつけたでしょう。（事情はわかりませんが、どうしても編集者がうらめしい気になります。是非ともこの通信は載せて下さいね）もう一度チャンスを与えて下さい。十月三日（土）一時半もう一度同じ服装、目印で浜寺公園（南海電鉄本線）において下さい。僕は黒シャツ、赤バンド、サングラスという服装で待っています。二十三才です。では会える

あげられて、身動きできない全裸の女体が、縄目の痛さに軋々として床の上をころがりまわる。

椅子またぎの責め

大手札印画紙焼付

モデル 三枚一組 玉田美佐子 三〇〇円 略号（ねと）

一糸まとわぬ肌をひしひしとまといつく高小手のきびしい縛し。無理矢理椅子をまたがせられ、佐子は白い肌を真赤に染めて素直に晒されるのであった。

血紅切腹決定版

大手札印画紙焼付

モデル 十枚一組 大塚啓子 一〇〇〇円 略号（れは）

女体切腹のポーズをとって既に定評のある大塚啓子が、今までの経験を活かして演ずる血紅切腹。その決定的な一組十枚の中、そのどれをとっても、悉く素晴らしい迫力をもつてマニヤの皆様の胸に飛び込んでくること必至の切腹。豊富な血紅を使用しました。

血紅切腹凄惨姿態

大手札印画紙焼付

モデル 十枚一組 大塚啓子 一〇〇〇円 略号（れみ）

短刀によって下腹を真一文字に切りさばいてゆく有様を血紅によって次々と経過をあらわし、全身

をうねらし、四肢を痙れんとして悶えるさまを刻々と描写した凄惨な女体血紅切腹の連続写真。

黒フンドシを誇る

大手札印画紙焼付

モデル 三枚一組 達藤百合子 三〇〇円 略号（くわ）

百合子の豊麗な裸身にきりりと美しいアクセントを添える黒フンドシ。臀部に喰い込む黒フン。

高压空気浣腸

大手札印画紙焼付

モデル 三枚一組 大塚啓子 三〇〇円 略号（むい）

高压空気ポンプによって、シューシューと送り込まれるエヤー。

浣腸場面大写真

大手札印画紙焼付

モデル 三枚一組 大塚啓子 三〇〇円 略号（むは）

臀部から三種の浣腸器に至るまで大写真で鮮明に捉えられました。

施される浣腸

大手札印画紙焼付

モデル 三枚一組 大塚啓子 三〇〇円 略号（むろ）

各種の浣腸器で他人から施される女体浣腸の大写真。フォト。

日を楽しみに、祈るような気持ちで筆をおきます。(大阪市住吉区八縦野千吉)

七、八月号が処刑、生首マニヤにとつて極めて満足すべきものだったのに、九月号はちよつともものたりなく、十月号も町中の書店をさがし歩いてようやく発見したのに、いざ買をめぐってみると、買うか買うまいかと考える程度でした。水野氏折角の生首フォトも、印刷不鮮明のため満足に至らず、新宮氏のお下げの少女も同様の成績。本文の方では「女斗美八景」でやっと生首がひとつ現われるだけ。「十三人の女死刑囚」も挨拶だけだし、せめてものと僅かに期待した「宇宙のどこかで」のシルヴィアの処刑模様もないのです。私の投稿が没になったのは云うまでもありませんが、しかし生首の有無とは別に何となく淋しい感じがするのはどういふわけでしょう。或は最悪の場合も近いのではないか、それならいっそ、ヤケのヤンパチ、思いきったすごいのを作って、発禁も廃刊も覚悟の上……こんなことも考えたくありません。さて、ますます強くなる風あつたりのため、書店入手が困難とな

り、予約しか方法はないのですが我々にとつて三百円は大金で果して希望しているものがあるかどうか、二の足をふむことになりました。そこで次号予告を毎月行つたら如何でしょう。七月号にちよつと出た時は私の作品も採用されているのがわかり、一日千秋の思いで待っていたものでした。二頁位割いて、小説には簡単なストーリーをつけたら良いと思います。もとより人それぞれで、却つて興味を失う場合もあるでしょうが、これにより読者の傾向を知ることにも出来るでしょう。注文をもうひとつ。「大奥裸女血斗」がしばしば引用されていますが、新しいファーンにはこれを知る手段がないのです。七十八頁には、絞首刑に処せられた女囚の足首の表情が何年か前にあったとありますが、これですでに売切でしょう。このようなものは是非リバイバルしてもらいたいもの。賛成者が多いようでしたら一考を願います。昨年十一月号は生首、処刑マニヤにとつて嬉しいものでしたが、今年もそれ以上であることを期待してペンをおきます。(黒田寿)

私は9月号の「奇クサロン」に

【最新版分譲品】

(解説は旧号に出ています。分譲中ですか。打切りにならないうちにお求め下さい。)

乳房しぼり

略号 (うは)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 長野 良子

鼻責と緊縛

略号 (うい)

大手札五枚一組 五〇〇円

モデル 大塚 啓子

木馬責三態

略号 (もく)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

椅子責の果

略号 (いす)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

血紅切腹

略号 (るな)

大手札五枚一組 五〇〇円

モデル 大塚 啓子

双胸の縛り

略号 (そう)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 長野 良子

動感海老責

略号 (とう)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

色禪開股縛

略号 (いふ)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 長野 良子

「横溝とみ子様に捧げるお願い」という一文を始めて掲載して頂いた額原実という名の一匹の犬でございませう。不遜にも文中では、一目でもお目にかかりたい一心から日時はおろか、場所までも御指定申し上げたのでございますが、ひとえに私奴の怠慢から、9月号発刊の日には既に過去の日付となつておりました。なんとも残念で毎夜、眠れない幾日かを送っております。とみ子女王様のお好みに合

つたこの小軀に一度でも御試乗頂き又この口をおトイレに御使用頂けたらと夢ははてなく拡がるばかりでございます。何卒このあわれな犬奴の痴夢をお叶え下さいませよう御足許にひれ伏した姿にて、お願い申し上げます。もとより、女王様のお好み次第でございますが、私奴はたとえ女王様がボーイフレンドと御一緒に私奴を馬になさるうと、はた又、気心の知れた女性のお友達と共にいたぶって下

さるうが、いやまさるばかりで、少しもおうらみ申し上げようとは存じません。唯、今私が抱いております痴夢は、ある週末に女王様お一人と私奴一匹だけで、どこか近郊の温泉場にでも行ったときのありさまなのでございます。即ちとみ子女王様は、始めて完全な遠騎りで私を調教なさるお気持ちから、このプランをお樹てになったと思し召し下さいませ。遠騎りは一般の人達の目に触れれば奇妙なものでございますから、夜を待って行われる御計画です。又それは残酷苛烈なものとなりましようから、瘦せ馬の私奴が吐気などを催さないようとお心遣いで半日の絶食が申し渡されて居りました。女王様はお浴衣に宿の半てん、私奴はランニングにショート・パンツという姿で食後（と申しまして、二人分の食事を上られるのは女王様お一人、馬奴には御慈悲でお神水だけが下しおかれます）の散歩の体にてホテルを出ます。道はなるべく人目に立たない山寄りか、海ぞいの小路が選ばれました。街中を少し出はすれたところで、いよいよ御騎乗です。女王様が心持ち開いてお立ちになった浴衣のお裾の方から、馬の私奴が細

首を差し入れ、徐々に頭をもちあげたとき、女王様はぎゅっと騎座をお締めになりました。勿論お手に持たれた小枝の鞭の一打ちもお忘れになりません。「はいどうとう、ピシッ、さあ、お歩き」のお声と共に往復二時間余。動物の馬でさえ、自分の体重の五分の一にも満たない主人を騎せるのに喘ぎ続けます。それなのに、人間馬の私奴は自分より上背もお目方も優る女王様の鞍下に呻吟しなればならないのです。普通なら十五分と保ちますまい。しかし、女王様のお鞭の威嚇と、それから首をお締めになる両のお太腿、浴衣の中でむせかえるような御体臭の刺戟のために、休むことが出来ないのです。もし、このような瘦馬でも御試乗下さいますならば、再度申し上げます。十月の第一と第二金曜日の午後六時、胸のポケットに鉛筆を三本差している男を日比谷の日活会館地下の千匹屋のフルーツ・パーラーでお探し下さい。一目御覧頂いて、もしお気に入りになりましたら、「横溝さんの馬を世話して下さいませんか」とお尋ね下さいませ。何卒あわれな犬奴に、貴いお神水の一滴をお恵み下さいませ。すよう。（東京八匹の犬、額原

実▽

八月下旬東京を離れて西下の途上、大阪にて十月号を手にしました。毎月のことながら新刊号を手に入れた時は、身中がどうなっているのか全く無我夢中です。更に汽車を乗り継いで西下の車中でゆっくり堪能させて頂きました。今月号は特に素晴らしく、美貌を汚されている絹川さんの姿を凝めている裡に、私の心身が呼吸と共に昂ぶってくるのを止められません。柔い黒髪をバックにして

瞳は既に被虐の世界にさ迷い初めている。ひん曲って引つった唇の辺には、これから痛められようとしている鼻責めの加虐に戦いて、無意味な抵抗を漂わせ、絹川被虐の開幕図を大胆に宣し、私を被虐絹川観賞の沼へ引づり込んで行きます。憶れの美しい鼻筋と鼻腔がグッと眼前に迫り、ジッと見ていると、私の方が辛抱出来なくなるのです。自分でも何うしてなのか判らぬ程、絹川被虐ポーズ以外の周囲が暗闇に閉ざされて、絹川の美鼻に私の神経が集中されて了うの

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号（はす）

膨満正面の縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号（へな）

血紅切腹絶命態

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号（ちの）

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号（ちた）

オムツ着用写真

大手札七枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号（むね）

バンド着用開股

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号（つん）

マニヤ全裸緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号（いな）

斬首処刑場面

大手札二枚一組 三〇〇円
新宮氏提供 略号（くし）

です。(日頃の仕事の上では、こんなな神経集中は出来ないくせに) 絹川さんの美鼻美腔に、何んな苛虐がこれから加えられるかと想像すると、次号が待ち遠くてなりません。昨年度の四馬孝先生傑作図「美の破壊」を、何卒絹川嬢の鼻頭に再現して次号を意義あらしめて下さい。勿論加虐行程の順を追って次々号となっても待つて居ります。ひん曲げられた唇の抵抗も緩み、白い歯列に唾液が光り、濡れた唇に諦めの情をただよわせ、突き上げた鼻頭の下に伸び切った黒く二条の線となった鼻腔と、それに連なる鼻中柱から唇にかけての起伏に胸ときめかす私の心の「ときめき」は、も早や心臓のダムを乗り越えて奔流しそうです。何卒次々と絹川被虐鼻の舞台をアップで演じ続けて本年度の圧巻として下さる様、お願い申し上げます。尚又特にヌメ／＼とした触感を示すコードに縛られている諦観の大塚さんの胸のそして顔の表情は、例月にも増して、被虐耽美を完全なまでに露呈し、責められている大塚さんの内部的心境を私に訴えているようです。私はこの大塚の被虐ポーズに鼻責めを加えたい。額側から人差指を鼻頭に当

てがって、グーッと引き上げると、大塚はアゴ突き出して、私の人差指に追従しようとするが、強力な私の人差指は大塚の意志にかまわず強引に、情の濃い、大塚の鼻翼も薄まらんばかりに力を加え、鼻粘膜をカメラレンズの正面に晒け出してしまいます。意志の制御力を失った大塚の唇は、一瞬わな／＼と震え乍らも、諦観の深淵に身も心も没入して、曾ってない大塚の放心放身図が衆目の前に現れて来ます。もう演出を越えた本質的な大塚を私共は初めて眼の前に行うことでしょうか。大胆なアップにして、今迄の大塚鼻責めシリーズのクライマックスとして下さい。絹川にしても大塚にしても、このポーズをどの位置から観賞するのが最もよいのか？ 私は貴誌を手にする毎に色々の角度から観賞するので、観賞角度によって意表をつく程激しく素晴らしい記憶は、昨年度第一位は四馬孝先生の「美の破壊」です。本年度は7月号の手摺に責められている美女梨花嬢です。本月号のグラビヤ夫々胸を高鳴らせるもの多々ありで、将に感激の余り、編集員各位に敬服の意を表明する次第であります。(旅先にて八湯谷照夫)

○ 大塚啓子さんの、浣腸フォート(るい・ほは・へき・へか)を拝見しました。「浣腸後排便・苦悶像べき・へか」はブリキ製のおまゐるではあまり感じがでないように思います。洋式トイレの方がびつたりだと思えます。便器の大きさが違いますし、変ったポーズがいろいろとれます。「エネマ・シリンジ」の「るい」の中の(お尻を高く持ち上げたポーズ)など背面のフォートが一枚欲しいところでした。二枚似たようなフォートでしたが一枚を少し斜めからの方が面白かったのではないのでしょうか。浣腸に一番肝心な、お尻を美しく強調したフォート程良いと思います。これら十四枚のフォートは部分的に不満はありましたが、印象に残りましたものが多く貴重な写真でした。「浣腸プレイ」は「ほは」の三枚は非常に良いできばえでした。大塚さんは「奇譚クラブ」のモデルさんの中では、私の最も好きな方で、その麗しい姿体は定評のとおりですが、特に腰部・臀部の素晴しさは形容以上のものです。大変によく浣腸寸前の実感がでていました。慾をいいますと握った浣腸器の嘴管をお尻の方に向けていた

女相撲と女斗美

女相撲組打ち

相撲マワシ着用
大手札印画紙焼付

八枚一組 八〇〇円
略号(すか)

女相撲投げ業

相撲マワシ着用
大手札印画紙焼付

八枚一組 八〇〇円
略号(すね)

禪裸女の争斗

白晒六尺フンドシ着用
大手札印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円
略号(めん)

禪裸女の寝業

白晒六尺フンドシ着用
大手札印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円
略号(めき)

裸女相搏つ

白晒六尺フンドシ着用
大手札印画紙焼付

八枚一組 八〇〇円
略号(えく)

だきたかったのと、パンティなど
とお尻の双丘をもっとみせて
もらいたかったのです。浣腸フ
ォートはやはりガラス製の一〇〇cc
浣腸器の大きいものの方が魅力が
あります。この三枚のフォートは
まさに圧巻でした。大塚さん及び
撮影にあたられた方の御苦心に感
謝いたします。大塚啓子さんは緊
縛・切腹・禪・女斗美・其他数多
くのフォートに活躍しておられま
すが、こと浣腸フォートに関する
限りナンバーワンと私は思ってい
ます。今後も浣腸スター大塚啓子
さんの新分野を開拓するような作

オシメ・フオート

・シリーズ

おしめ着用

連続写真

第一集

前開きゴム製カバー

大手札印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円

略号(しま)

第二集

前開き布製防水カバー

大手札印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円

略号(しな)

品を次々と発表して下さい。患者
と看護婦などを対象にして、大塚
さんと新人の遠藤百合子さんあた
りのコンビで病室浣腸フォートな
どうでしょう。 (大阪八赤木
三郎)

○

中川芳子様、貴女を十月号の読
者通信欄にてお便りを拝見しまし
た。そして小生は貴女の勇気ある
便りを見て、この筆をとりまし
た。貴女は飼育してもらいたい
書いておられましたね。そしてお
好みのアイデアで飼育されてもよ
いと書いておられた。小生は貴女
のために、一つのアイデアをここ
に書きます。それは貴女を洋服の
上から、まず高手小手又は乳房縛
りをしましょう。それからおもむ
ろに貴女の服をぬがしつつ、つま
り貴女に精神的苦痛を与えつつ、
肉体的苦痛も与えるのです。それ
から貴女をパンティだけにして、
エビ責め、股間縛りを始めつつ、
最後には貴女に精神的責めを行
います。どんな責めかは、小生が東
京時代の経験をかいて貴女を飼
育しましょう。ここに東京時代と
書きましたが、東京にいたころは
いろいろな女性を責めてきました
が、大阪に来てからは、さっぱり

駄目。小生が行動的に出ないせい
もあるが、気の合った女性がいな
いので、苦勞していたやさき、貴
女のことを知ったのです。ここに
書いた責めのアイデアは、あくま
でアイデアであって本当のプレイ
には、もっと違ったものが出てく
るであろう。小生は肉体的責めよ
り精神的責めの方が好きである。
貴女がもし小生のことを知っても
らって、文通でもと言って下され
ば、小生は喜んでそれに応ずるつ
もりです。最初からプレイする
ということ、相手の気持ちを十分に
知っていないので不可能でしょ
う。貴女と文通しあって意気投合
し合ったところで、その時は話を
しようではありませんか。それま
では奇巧の誌上を借りるか、文通
しあって個々の気持ちをたしかめあ
いましょう。貴女を飼育するアイ
デアはいくらでもあります。こ
こで終わります。大変一方的な意見
かもしれませんが、貴女と文通、
又逢える日を楽しみにしております。
(大阪府下八古田弘)

○

御誌を毎月楽しく拝見させてい
ただいております。私はオシメを
当てられている絵を見るの一番
楽しみにしておりますが、誌上で

は三月か四月に一回ぐらい出るか
出ないかで残念でなりません。分
譲品としてオシメを使用した写真
が出ておりますが、私はモデルを
使用した写真は好まないで、勝
手ながら分譲品としてオシメを使
用した絵を出して下さい。オシメ
カバーからオシメがはみ出ている
ところ、ネグリジェがまくれ上り
巻オシメカバーが見えている所、
派手な花模様のオシメカバーだけ
されているところ。オシメをされ
てムチで打たれているところ。い
ずれも縄をかける。以上のような
ものをお願いします。(名古屋八
オシメ生)

○

小島寿子様、貴女の御通信拝読
致しました。私は一目見て、自分
の今迄探し求めていた人にやっと
巡り合えたという感動を押さえる
事が出来ませんでした。私は心の
中で絶えず貴女のような人を捜し求
めていたのです。自分の生活に絶
えず忍びよる不安、それがつまり
自分の探し求める人が得られない
という寂しさだったと思つたので
す。私は貴女が御希望されている
様に、体を傷つけたり、ムードの
ないひどい事は絶対に致しませ
ん。お互いの興味、趣味を一致さ

せ、ある種の喜びが得られるなら、それに勝る幸福はないと信じます。私は現在大阪の或る商社に勤務する二十七才のサラリーマンです。土曜日、日曜日共、体は自由です。貴女との御交際はスムーズに行くと思います。もし御都合が悪ければ文通だけでも、心がなぐさめられ、何か得る所があると思うのです。貴女の御希望されている条件ですが、一度お会い出来れば、かならずや御満足していただけると思っております。とりあえず写真一枚（急ぎましたので学生時代ですが）同封しておきます。貴女との御交際を神に祈りつつ……返事を首をながくして待っております。サヨウナラ。詳しい住所は編集部におといあわせ下さい。（大阪市八木島一郎）

○ 残暑尚厳しき折柄貴社には益々御清栄御慶び申し上げます。扱奇ク十月号入手致し、いつも乍ら小生の感想を、のべさせていただきます。久方振り春川ナミオ先生のマゾ画を拝見。一段と腕の冴えにただただ感歎の外ありません。今少し大胆な構成を望みたいですが店頭販売誌の内容としては、この程

度が限度でしょうか。小生この画を何度くり返し拝見しては小生なりの見はてぬ夢を追いつづけています。マゾフォト分譲品に於きましてはマゾフォト再開第一作につづき第二作の発表を七月号にて拝見今月号にて新人モデルによる新作並に最新マゾフォトシリーズ決定版の登場となりました事は早速私達マゾファンの願いを聞きとどけていただいたものとして感謝の念に堪えません。この上は一作毎にリアルさが感じられる作品をどしどし分譲していただきます様お願申し上げます。松本市本町雪本氏より寄せられました読者通信小生も全く同感です。小生も当市でみました国映プロ作の「激しい女たち」の中でズベ公グループの女の一人が裏切ったチンピラ男を仰向に押し倒し胸の上の方に股を大きく開いて馬乗りに跨って股責めする大寫しのシーンに思わず息をのんだものでした。連続上映です。で此の場面をみる為一日中映画館の中でねばり三回もみたものでした。本当に此の様な場面ばかりのマニヤ向専門の映画フォトでも結構です。が作られたらなあとしみじみ思います。これにつきまして奇クにて最近臨時増刊文献誌

水野弘氏提供

女体切腹フォト

今般水野弘氏の御厚意により二十数葉の貴重なネガを拝借することが出来ました。その中、誌上公開を憚るものを特に分譲品として頒布することにいたしました。

女体切腹の介錯

大手札三枚一組 三〇〇円
略号（せは）

上半身肌ぬぎとなった豊麗な美女が、白布を敷きつめた上に正坐して覚悟の切腹を敢行する。背後にまわったフンドシ一本の介錯人、大刀一閃、女の細首に打ちおろされんとする介錯の瞬間を、三枚の連続写真にてごらんいただけます。

妻の切腹プレイ

大手札三枚一組 三〇〇円
略号（せは）

「写真と絵画」を発行しておられますが、おみかけしますにどうもサド系と存じますが小生等マゾファンの為にもオールマゾものを満載した写真と絵画の文献誌を御刊行下さいましてマゾファンの申込にに応じていただきます様切にお願申します。読者通信を拝見致します

首桶に落ちる首

大手札三枚一組 三〇〇円
略号（せは）

畳の上には白布を敷きつめ、傍には自分の生首を入れる首桶、前に三宝、白紙の上には短刀を置いて正坐した覚悟の切腹の座。いとし妻の最期を飾るべく、涙をふるって背後にまわって介錯の刃をふるう夫。果ては苦しむ妻の手に介添えして、ジリジリとその真白にも豊かな下腹を鋭い短刀の刃先で切りさばいてゆくさま。

大きく八首桶と書いた桶を前にして、いさぎよく死の坐についた美女。この豊満な裸身も幾許もなくして、身首を異にして果てるのである。介錯人の大刀はか細い首に押し当てられ、女は健気にも自らの下腹に刃を押し当てる。うう、と苦痛にあえいで、前に首をさし伸べるや、白刃は首筋に振り下ろされ、哀れ美女の生首は首桶の中へ……

と最近東雪枝様、横溝とみ子様、原田康子様、高木紀久枝様、川田幸子様等女性サジスチンの方々からのマゾ男性への呼びかけが多くなりましたが、これ等の方々におかれまして若し適当なマゾ男を得たならば如何にプレイしてやろうかと云った様な告白、手記を募っ

て奇ク誌上に発表していただけないものでしょうか。勿論体験された事がありであれば尚更結構ですが、そうした体験、告白、手記を我々マゾ男の為に是非御披露下さいませ様お願い致します。かつての長瀬昭子様、三隅千恵子様とか野めぐみ様方(対象はマゾ女性ではありませんが)最近に於ては高木紀久技様の様にそれから最後にもう一つのお願は我々田舎のへき地に住む者の為に出張撮影、

出張プレイ等を行っていただきたのですが、勿論通信申込によるもので申込者より場所日時を指定し旅費等も負担してもよろしいですかから秘密厳守の上で行えば我々日常にだいてはかない夢も現実となつて現わされる事が出来、我々自身の幸福はもとよりひいては奇ク永遠の発展進歩となる事うけ合いと存じます。又マゾ同志、サド同志男女を問わず志を同じくする者が集つて会員組織を全国を拡

処刑場面写真

新宮明夫氏提供

絞首刑

大手札印画紙焼付

二枚一組 三〇〇円
略号(るく)

引廻しと晒

大手札印画紙焼付

二枚一組 三〇〇円
略号(るに)

絞首刑

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円
略号(うけ)

磔

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円
略号(はみ)

生首の晒

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円
略号(さら)

晒台の生首

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円
略号(のく)

斬首の瞬間

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円
略号(のき)

めお互の通信により夢と理想を實現し合えたなら、どんなにか楽しい事でしょう。長長と申し上げましたが奇クが近い将来発行毎に小生等マゾマニアの描く夢を現実に近づけていただきます様切望し一日千秋の思いで発刊又は分譲品の発行の日を待ち望んでおります。(米子のマゾ男八見上伏男)

小島寿子様、誌上にて失礼でございませうが初めましてどうぞよろしくお願い致します。小生、本誌の二、三年来の愛読者ですが投稿は今回が最初です。と申しますのも、小生の理想とする女性の出現(投稿)が少なかったこと、及び小生自身が投稿に対する勇氣に欠けていたのが主因と想います。しかしながら貴女の様な立派な御職業をお持ちの女性が勇氣を以て投稿なされた事に敬意を表しますと共に、小生も大いに元気づけられてこの投稿に至ったような次第です。小生、勿論、S的傾向を持つものですが、縛るのは好きでも肌を傷のつくような責めは絶対に嫌いです。この点、貴女と同感で大いに共鳴致すところです。又、文面にありました「芦屋附近の方で」という御希望には残念ながら

自宅が布施市ですので、不都合とは存じますが、しかし勤務先(会社)が大阪市北区ですので梅田へ出るのには便利が良く、一度お逢い下さい。お互に理想とする相手か否かを知る為には一度お逢いした上で種々とお話をしなければ判らない事と存じます。それでお待合せの方法ですが日時及び場所を甚だ勝手ながら次の通り決めさせていただきます。9月30日(水曜日)午後6時30分場所は大阪駅中央口の地下鉄階段の上、小生は眼鏡をしてねずみ色に霜降り入りの背広上下、蝶ネクタイを着用、手に新聞を持って居ります。谷口さんですかと声をかけて下さい。尚ほ交通関係で万一遅れる事があつたらいけませんから、その場合、お互に7時までお待ちするように致します。小生、自分で言うのはおかしいですが32才の絶対なる紳士ですから御休心下さい。次に小生の一端を知っていたくべく敢てお知らせ致しますが、週に二度大阪では有名な或る歌謡学院の夜間部教師もしております。(ピアノ伴奏で歌謡曲歌唱法指導)次号(11月号)が9月25日発売される関係上、日時を右の通り決めさせ

ていただきました。では、くれぐれもよろしくお願い致します。(布施市八谷口生V)

○ 奇ク愛読者の皆様、並びにゴムマニヤの皆様、九月号、「私のゴムプレイ」の梅川幸子でございませう。今年は雨が少く、私のプレイも雨の夜の戸外とはいかず専らお部屋とお風呂の中に限られてしまいい、やるせない日々を送っています。今日は皆様に見て頂こうと思ひまして、拙い画を書いてみました。私のアイデアともいえるSMプレイの場面ですが、例によって説明させて頂きますと、(画は二人共女性に画きましたが、一方が男性でも構いません)用意するものは、ゴム手袋、ゴム長靴(腰まで届く農家の人がはいている茶色い地下足袋のようになったもの)ゴム引レインコート、ゴムマントそれにゴムマスク。これらを二着ずつ用意します。それから二人共裸になって画のようにこれらのゴム引雨具をまとい、二人共同じ姿になってプレイを楽しむ訳です。図はそのプレイの一例を画いたもので(1)は椅子に縛られたM女性にS女性がマントをかけている所(2)はマントにくるまったM女性浣腸

プレイをまさに行おうとしている所です。この他に色々なプレイがある事と思いますが、何かアイデアはないものでしょうか?近頃ではゴム引レインコートが手に入りませんので、津田亜矢子様の文章によく出て来る男物の黒いゴム引きの合羽(表黒、裏茶色の総ゴム製)でもよいでしょう。お部屋の途中で、お風呂の中で雨の降りしきる夜の田圃の小川の中で、どなたか私とプレイをして下さる方は男女を問わずいらっしゃいませんか?どうか?編集部の皆様、私達ゴムマニアを喜ばせるような口絵写真なりグラビア写真なりを是非載せて下さいませ六月号の四馬孝様の口絵「泥貴め」は本当に気に入りました。ゴム合羽(画から受ける印象では)を着てフードをまぶかにかぶりマスクをはめて縛られた女が二人、一人は首迄、一人は胸まで泥田の中につかっている所は圧巻でした。まるで私のプレイをまのあたりに見るようで昼だというのに雨戸を閉めきつてはやる心にあせりながら、例の如くゴムづくめの姿になって水風呂の中に入って目を閉じ息をはずませながら首迄水につかり泥貴めの画と雨の夜のプレイを想い浮べながらプ

レイをしました。では、皆様今日はこれ迄(京都市右京区西院八梅川幸子V)

○ 昭和三十三年十月発行の臨時増刊号、SADO特集号から私は時々愛読している奇譚クラブの一ファンです。私たちマゾヒストの女性には全国にも友がありながら知られていませんし、誌上の方も住所がありませんので、貴社で内緒にマゾヒスト女性の便りの交換とか写真の交換とかをゆるしていただいて、同じ友を私の方へお知らせ下さったり、各地の皆様にも知らせて下さいませ。近県内又近くの人々があれば話合して、本誌にも何かと小説などで発表出来ると考えます。読者通信や皆様発表の小説を読み返えしています。私はマゾヒスト女性で(緊縛、浣腸、つり責め、鞭などを好みます)相手の男性は筋肉のもりあがった男性的な青年を好みます。同じ友をみつけ、意見や文や写真を交換しあいたくよろしく願います。又東京の春村玲子様、上原由紀子様、九仁子様、愛知の河村由美子様、長野の伊那紫子様、川崎の奥山照代様、大阪の川端多奈子様はじめ本社から浣腸責めの写真を買われ

新作マゾ・フォト

(新人モデル)

人間馬の調教プレイ

大手札三枚一組 五〇〇円 略号(まの)

足舐めの奉仕と強制

大手札三枚一組 五〇〇円 略号(まわ)

股責めにあう顔面

大手札三枚一組 五〇〇円 略号(また)

縛られて翻弄される

大手札三枚一組 五〇〇円 略号(まひ)

踏みにじられる顔面

大手札三枚一組 五〇〇円 略号(まな)

肩車に奉仕する青年

大手札三枚一組 五〇〇円 略号(まは)

玩具にする縛り人形

大手札三枚一組 五〇〇円 略号(まて)

首を太股にて絞あげる

大手札三枚一組 五〇〇円 略号(まや)

たAM子様、山岸悠子、春日ルミ、羽村京子、花房孝子の皆様、お便り下さるようお願いします。私も出来るだけ文にして本社へ送りたいと考え同好の良き友を見つげるためお願いします。便り下さい。
(三重県八橋本和江)

迷った末、初めて手紙を出します。今年二十三才になる男性です。
女性禪マニヤ(愛読者)

禪美フォト 分譲

フンドシ姿の魅力

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号(ふの)

フンドシ姿の羞らい

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号(ふへ)

フンドシの前後左右

大手札四枚一組 四〇〇円
栗本 ミチ 略号(ふな)

フンドシの変った姿

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号(ふに)

が、二年前ある本屋でふと奇クが目にとまり、それ以来裏窓と共にやっかいになっていきます。映画などで女性が縛られて責められている場面などを見るとたまらなくなります。私は女性の縛られている姿こそ、女性の一番美しい姿だと思います。絵が好きなので、いろいろな絵をかいていますが、モデルがありませんので、写真を見てそれを手本に描いています。今では習作画も大分たまりましたが、自分で女性を縛って責めることができたなら、もっと素晴らしい絵が描けるのに、と毎日悩んでおります。こんな僕のためにモデルになって下さる女性の方はいませんか。奇クファンの人で、二人仲よく一生くらせることが出来る人があれば幸いです。僕は只今居候ですが、二年後には店を出すことが出来ます。同じ気持の人、店のため僕のため人生を楽しくすごせる人、友達になって下さい。サケ、タバコなどのめない僕ですが、映画など見ながら一緒に語りあえたらと思います。(岐阜市八加藤盛夫)

その後、永らく御無沙汰致します。最近鼻隔壁に穿孔される人

が、二、三人ふえたので大変嬉しく、東京の湯谷氏、名古屋のM七〇氏外に奈良の三隅氏に穿孔をすすめて居られる東京の関氏御夫妻は、お二人共穿孔されて居られますか。一度御体験談を発表願えません。小生の知るだけでは古田吉郎氏、名古屋の犬丸氏、千葉の橋本氏、尼崎の某氏の妻女と美加輪氏、小生の九名になります。が誌上に発表せずに、ひそかに鼻環の被加虐を楽しみにして居る方も相当あると思います。本文が誌上に掲載されたら未発表の方も、ほとんど体験を発表して下さい。小生の鼻隔壁の孔は三十六年十二月号の時は十七ミリでしたが、今は拡大に努力に努力をかかえて十九ミリの棒が通ります。これは鼻の高低に依るので、高ければ高いほど大きくなると思います。名古屋のM七〇氏は十二ミリとのことですが、大分差があります。それから鼻翼穿孔のことを投稿しましたが、これは没になり発表されませんでした。三十七年の春から穿孔しはじめて左右鼻翼に三個宛の孔が完成、目下鼻稜の中央に穿孔中です。耳環の孔も映画の「世界残酷物語」の世界結婚奇習、「世界女族物語」「空と泥」「夜の夜」

雑誌「世界の秘境シリーズ」などに刺戟されて、耳環だけでも、現在七個宛計十四個穿孔しました。まだ、これから耳の上部から外心の方へ五個宛とアフリカのマサイ族のように中央も穿孔する予定です。奈良の三隅氏は身体を損傷するとてちゅうちよなされて居られますが、少しもこわがることはありません。大胆に穿孔されることをおすすめ致します。小生は耳は十四才から、鼻は三十才より、今は六十才です。尚KKにお願いしたいことは、耳環、鼻環の小説、読者通信を詳しく御採用下さい。とにかく、孔のふえるのはとても楽しみです。外人(エトランゼ)の耳環に孔のあるのを見ると、ふるいつきたい程魅力を感じます。二十日程前にめずらしく日本の老婦人が耳環に孔をあけてあるのを見て、暫くあとをつけて歩きました。それから毎日、老婦人の耳環の孔を想い出しております。日本婦人のは、これで戦後四人目です。(京都市北区八佐々木耳環鼻環生)

読者の皆様、お元気ですか。僕は今度初めてお便りさせていただきます。埼玉県に住む二十才を越

〔今月の新版〕

写真の中に悶える

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚啓子、略号（けよ）

責写真、縛り写真の中に悶えて全裸のまま悶える大塚啓子の縛られポーズ。きりきりと厳しく縛しめられた苦痛の表情は、最近益々円熟してきた同嬢の真に迫った素晴らしいもの。その姿態と表情はきつとSマニヤの琴線に触れることでしょう。

写真に埋れた女

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚啓子、略号（けよ）

前集と同じくこれ又一糸まとわぬ大塚啓子嬢が、前集は苦痛の表情を主とした対して、これは哀婉の肢体を中心として、責写真の中に縛られた女の感情を描き出しました。今月発表のこの二集は、特にライトの配光を変えて、写真としての効果を發揮することに努めました。

したばかりの青年です。ところで早速ですが、読者の女性の方（ゴムマニヤ）で、おしめを使用されておられる方がありましたら、一枚おゆずり下さないでしようか。申しおくれましたが、僕はゴムマニヤの一人です。今までもおしめを使用していましたが、何だ

か物足らず、今度は女性の方に譲っていただこうと思って、読者の方々にお呼びかけした次第です。もしゆずってやってもいいと言われる方がありましたら、ぜひお願いします。（埼玉県大和町八鬼頭竜二）

初めてペンをとります。いつの間にか奇巧の愛好者の一人となつて、毎月楽しく読んでいます。特に私の好むものは、女性に肉体的な苦痛を与えるよりも、むしろ精神的な苦痛を与える小説を好みます。最近の「花と蛇」の面白味は空前絶後といえます。若い女性が多く、野卑な男女の目前で、全裸にされたり、恥しい思いにさせられたりするのには、精神的苦痛のベクトル・ツーンに入るべきものだと思います。たとえ女性が始めに苦痛と感ずるも後には蕩然の感になるでしょう。このように若い女性が恥かしがる姿は、芸術的で男性にとつては非常に美しく見えるものです。こういう事を書くのも、私は男兄弟ばかりの中で育ち、男子高校、大学というコースを辿ったため、女性との交際が殆どなく、女性に対する憧れが変型していったのではないかと考えています。

それで、職場や家で働いておられる若い女性との文通を望んでおります。文通の内容としては、お互いにはげまし合い、又、奇巧の批評や自作の責絵の貸借などもしたいと思います。誌上でよりも、むしろ他人に文通の内容を、第三者に秘密にした方が興味があります。（東京都八金井一郎）

愛読者の皆さん、お元気ですか。私もここ数年來の読者です。皆さんとはまだ一度も顔を合せたこともない私ですが、この通信欄を読んでみると、なんだか沢山のお友達が身近かにいるようで、心丈夫です。私もどうかお仲間入りさせて下さい。それから、毎月のグラビヤを飾って下さるモデルの方々と並に誌上に素晴らしい文章を発表して下さる方々、今日は、芳野眉美様。悩ましのサディズム、濡れにぞ濡れし、愛読しています。好きな文章の一つです。一度お便りしようと思いつつ、生來の引込み思案と貴方がなにか大先生のようないました。これから麗筆で誌上を賑やかにして下さい。万田不仁さんの悦庵絵灯籠も毎月愛読しています。十月号には休載になっ

ていて淋しかったです。誌上で拝見しておりますと、いろいろの傾向の方々がいらっしゃるようです。が、みんなて手を携えてゆきましよう。私はやはりマゾヒスティクなものに、ロマンチックなものを感ずりますが、それでいて、モデル嬢の緊縛フットを見るのも楽しいです。切腹の小説でも、浣腸でも、そういったムードが好きなので、隅から隅まで拝見しています。私も一つのツムジマガリかもしれない。平常は至極おとなしい、ありふれたサラリーマンなのですが。（大阪八坂口徳雄）

物心のついた頃、そう、小学校へ通いだして間もなく、隣に住んでいる同じ年の少女に対して、なよなよとしたか弱くて美しいものを虐めて、みたいという気持ちが起ったのが、僕の異性に対して関心を持った初めてでした。その少女は、色が白くて身体全体がほっそりとしていて、いつも泣き顔のような顔つきで、氣立てもやさしかったので、僕のそんな曲った気持ちを起させたのかとも思っていました。でも、小学校の六年生になつて、僕が男の組の級長で、女の組の級長が活発なよく生長した子供

でしたが、その子のすらりと伸びた白い足を見ると、こんな奇麗な脚をいじめてみたいという気持ちが起きました。しかし実際の僕は模範生で中学も一番で入学し、以来そんな気持が常に僕を苦しめ思春期と共に、かえって僕をフェミニストに追いやりました。戦時中、

将校として従軍した僕は、常に弱い者の味方でしたが、心の中ではか弱い女性をいじめている部下を羨ましく思っていました。心の中の葛藤に苦しみながらも、僕はずっと仮面をかぶりつつづけてきました。そして現在は或る中小企業の経営者として、依然、人に命令するような立場に立っています。僕の心を本当に満足させハダの僕にかえしてくるのは、貴誌をおいてありません。僕は未だに一度も女性を縛ったり虐めたりしたことはありませんが、既に学令期の頃から不惑を越した現在まで心の中では激しい嗜虐の念を燃しつつづけていたのです。その意味で貴誌をこよなきものと珍重しています。編集子におかれては、広い読者層の意図を察せられて、特に

御自重下さるようお願いしておきます。(広島市八中間盛和)

○

突然の御手紙おゆるし下さい。

私はキクの愛読者ですが、一度私をいじめて下さる人をショウカイして下さいませんか。私は二十五才の時、或る事情で家に居づらくなり、単身家出のようなかつこうで大阪へ出て、ある男にだまされさんざん苦勞をさせられました。人生のドン底の生活をなめ、客をとらないからといって、フンダリケツタリ、マッパダカでガンジガラメにくくられて、ひどい目にあわされたりしました。その時はその男をひどくうらんだものですが私をいじめぬいた男は、食当りで突然死にました。それから国へ帰って暮していますが、未だにその頃のことを忘れられずに、悩んでおります。お恥しい話ですが、ならず者で遊んで暮して女を喰いものにしたあの男のことが忘れられないのです。毎日淋しく過しております。こんな私をいじめて下さる人って、いないでしょうか。今の私はどんな苦しい事でもしんば

う致します故、どうか私をよんで下さい。どんな人でもかまいません。男の方でありましたら。お願いします。かきたい事はまだ有ますけれど、そちらの返事次第でまた書きます。では、くれぐれもよろしく。(北九州市八門田澄子)

○

残暑きびしい折柄、編集部の皆様お変わり無く、お仕事におはげみの段、お伺い致します。私は貸本屋で貴誌を見つけ、それ以来十余年、様々な知識を貴誌によって、吸収する事が出来ました。又生活に多大なるおいを与えて戴きました。書面ではございますが心より感謝致します。毎月に発行される貴誌が、私の様な趣味の持主にとつて、どれ程大きな喜びであるか……。それだけに一度でよいから夢がかなえられたらと思つて、此度のおしつけなるお手紙をお出しした次第です。貴誌の書面で住所・氏名・職業等をお知らせすれば出来る限り、努力してあげようと言う文章を見つけ、それこそ天にも上る気持で今此の手紙を書いておるのです。私は今日思い切って小島寿子様に呼びかけの手紙を出したので。どうか小島寿子様との交際をお許し願えないでし

ようか。今迄の人間生活で、幸か不幸か(不幸にきまっています)私と性質が一致する女性に巡り合えず、毎日みたされぬ日々を、悶々として送っております。ただ月に一度発行される貴誌を、本屋で求める事によって、自分自身をなぐさめているのです。どうか私を救って戴けないでしょうか。私は大学を出たサラリーマンです。知識と理性は持っているつもりです。又両親にもめぐまれ、なに不自由なく過しております。唯みたされぬのが女性なのです。私は小島寿子様に対する手紙を読者通信欄に送りましたが、どうしても不安です。誠に厚かましいと思ひながら、此の様なおしつけなるお手紙を差し上げた次第です。私にはもし交際が許されるなら、出来るだけの事はする覚悟です。私だけの様な人間かお逢いしていただけにはわかと存じます。或る程度容姿には自信を持っています。是非是非は小島寿子様をがっかりさせる事はないと信じます。是非是非とも交際をお許し下さいませ。あの程度のお金銭の出費も、誠に失礼ですが覚悟致しております。どの様な犠牲を払おうとも交際致したいのです。(大阪八森川守)

次号(十二月号)は十月二十五日に発売いたします

五十万円懸賞原稿募集

先月号で五十万円懸賞の原稿を募集しましたところ、いち早く数篇の応募原稿が送稿されてまいりましたが、残念ながら入選作品として掲載するに耐えるものは見当りませんのでした。引続いて募集を継続いたします故、秋の増刊にふさわしい佳作をお寄せ下さるようお願いいたします。

賞　金

一	席	各	拾	万	円	一	名
二	席	各	五	万	円	二	名
三	席	各	参	万	円	五	名
四	席	各	壹	万	円	十	名
五	席	各	五	千	円	十	名

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記△

どなたにも一つや二つの思い出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるものたえどうか皆様の真実の叫びを、しどし文字にしてお寄せ下さい。採用篇には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語△

御自分の描く夢をまとめて

規　定

- 一、本誌の読者に提供するに適當したS・Mを中心とした創作、小説などのフィクション。告白、体験、手記、或は論説、意見など形式は問いません。S・Mの他、フェチ切腹、浣腸その他特異な趣向のものも大いに歓迎いたします。
- 一、すべて未発表の自作に限ります。
- 一、枚数は原稿用紙五十枚以上のこと。
- 一、締切は別に定めませんが、入選作品は翌月号に発表の上、賞金を呈します。
- 一、応募原稿には「懸賞作品」と赤エンピツにて肩書きして下さい。

天星社編集部

下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

△(映画、雑誌)通信△

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下さるようお願いいたします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポートマニヤ通信△

新聞記事等で関心をお持ちの事項或はマニヤ各傾向の本誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。

◎尚、以上の五項目の採用原

稿には御希望により編集部作成の各種フォトを贈呈いたします。

△読者通信△

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、思い出話、或いは読者相互の交歓文通、応答などをお寄せ下さい。

△奇クサロン△

奇クサロン向きの短文、マニヤ通信、写真絵画などを募ります。文章は原稿用紙三枚まで。採用篇には薄謝進呈します。

☆本誌御購読の榮☆

- 一月分(1冊) 三〇〇円△送共▽
- 三月分(3冊) 九〇〇円△送共▽
- 半年分(6冊) 一八〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価三〇〇円

十一月号

(第十八巻第十二号)
(通刊第一九六号)

昭和三十九年十月二十日 印刷
昭和三十九年十一月一日 発行

編集印刷兼発行人 箕田京二

大阪阿倍野局私書函第十四号

発行所 天星社

(振替口座大阪五〇〇四二番)
(昭和三年四月三日第三種郵便物認可)
(国鉄大局特別扱承認雑誌第一二二二号)

☆代理部分譲品について☆

○代理部分譲品は本誌に広告してある分は全部在庫しておりますから、略号明記の上お申込み下さい。尚、分譲品の詳細は、目錄を御請求の上ごらん願います。
○既刊雑誌の旧号は別項の通り在庫してありますから、売切れぬ中御注文願います。
○口絵写真の複写転載は固く禁じます。